
附属資料編

目次（附属資料編）

第 1 章 証券監視委の組織・事務概要	56
1 組織及び事務概要	57
2 証券監視委の機能強化	74
3 証券監視委及び財務局等監視官部門の定員の推移	77
4 組織・事務に係る法令の概要	78
第 2 章 証券監視委の基本指針等	98
1 証券取引等監視委員会 中期活動方針（第 11 期：2023 年～2025 年）	99
2 -1 今後の証券モニタリングの基本的な考え方	104
-2 証券モニタリングに関する基本指針	112
-3 令和 5 事務年度 証券モニタリング基本方針	139
3 取引調査に関する基本指針	147
4 開示検査に関する基本指針	151
第 3 章 証券監視委の活動実績等	158
1 証券監視委の活動状況	159
2 市場分析審査実施状況	161
3 勧告等実施状況	164
4 証券検査実施状況	168
5 勧告等事案の概要一覧表	171
6 裁判所への申立て実施状況	209
7 犯則事件の調査・告発等	211
8 建議実施状況等	231
9 海外当局との連携	242
10 講演会等の開催状況	246
11 各種広報媒体への寄稿	250
第 4 章 情報の受付について	254

掲載図表

附属資料編

第1章 証券監視委の組織・事務概要

監視体制の概念図	59
証券監視委の機構図	60
財務局の機構図	61
自主規制機関との協働	66
海外当局との連携	67
証券監視委及び財務局等監視官部門の定員の推移	77
証券監視委と内閣総理大臣、金融庁長官及び財務局長等の関係の概念図	78

第3章 証券監視委の活動実績等

1 証券監視委の活動状況

総括表	159
-----	-----

2 市場分析審査実施状況

取引審査実施状況	161
情報の受付状況	162
情報の内容別受付状況	163

3 勧告等実施状況

勧告実施件数一覧表	164
課徴金納付命令に関する勧告件数及び課徴金額	166

4 証券検査実施状況

検査実施状況一覧表	168
1 検査対象当たりの平均延べ検査投入人員	169
検査終了件数	170
問題点が認められた業者等の数	170

第1章

証券監視委の 組織・事務概要

1-1 組織及び事務概要

1. 組織及び事務概要

(1) 証券監視委設置の経緯

平成3(1991)年夏の一連のいわゆる証券不祥事を契機に、証券行政のあり方、特に証券会社及び証券市場に対する検査・監視体制のあり方について、種々の議論が行われた。

こうした状況を踏まえ、同年7月、内閣総理大臣から臨時行政改革推進審議会(以下「行革審」という。)に対して、証券市場の監視・適正化のための是正策について諮問がされ、審議の結果、同年9月に「証券・金融の不公正取引の基本的是正策に関する答申」が取りまとめられた。この答申においては、「自由、公正で透明、健全な証券市場の実現」を基本的目標として、証券行政に係る提言等と併せ、新たな検査・監視機関として、大蔵省に行政部門から独立した国家行政組織法第8条に基づく委員会(八条委員会)を設置すべきであるとの提言が盛り込まれた。

大蔵省においては、行革審答申を踏まえつつ、更に各方面の意見も聴取するなど、広範な視点から証券取引等における検査・監視体制のあり方について検討を重ねた末、平成4(1992)年2月、証券監視委の設置を柱とする「証券取引等の公正を確保するための証券取引法等の一部を改正する法律」案を取りまとめた。

同法案は、第123回通常国会に提出され、衆・参両議院での審議を経て同年5月29日に成立し、同年6月5日に法律第73号として公布、同年7月20日に施行され、同日、国家行政組織法第8条及び大蔵省設置法第7条に基づき大蔵省に置かれる合議制の機関(八条委員会)として証券監視委が発足した。

(2) 金融庁(金融監督庁・金融再生委員会)への移管

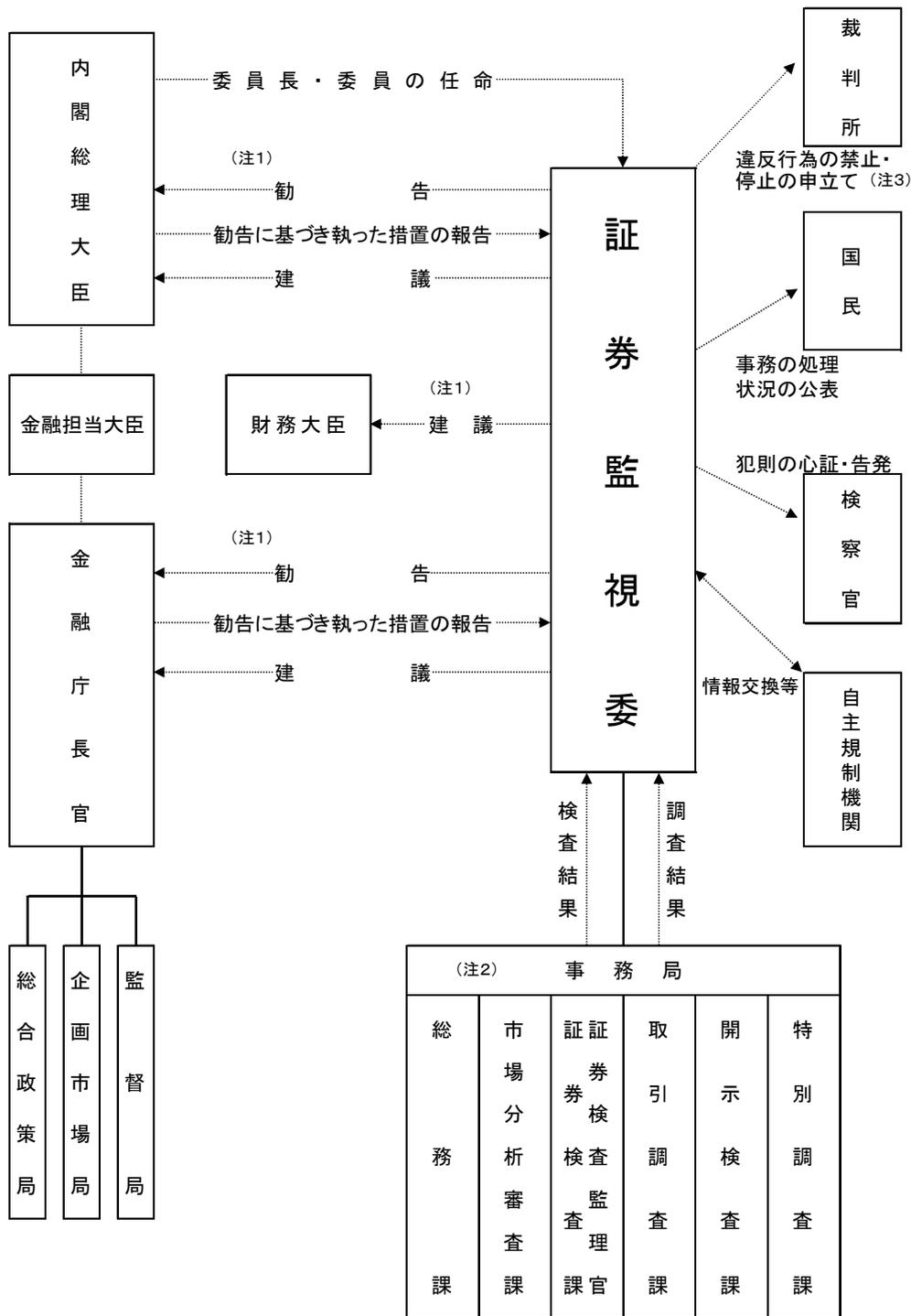
民間金融機関等に対する検査・監督機能と金融制度等の企画・立案機能とを分離し、透明かつ公正な金融行政への転換を図るため、平成10(1998)年6月22日、総理府の外局として金融監督庁が設置されたが、同時に、証券監視委の果たす中立的・客観的な役割が引き続き重要であるとの観点から、証券監視委は、従前の体制(国家行政組織法第8条及び金融監督庁設置法第7条に基づき設置された合議制の機関(八条委員会))のまま金融監督庁に移管された。

さらに、同年12月15日には、我が国の金融機能の安定及びその再生を図り、金融システムに対する内外の信頼を回復し、金融機能の早期健全化を図ることを主たる任務として、金融再生委員会が発足したが、これに伴い、金融監督庁とともに証券監視委は、従前の体制(国家行政組織法第8条及び金融再生委員会設置法第21条に基づき設置された合議制の機関)のまま金融再生委員会に移管された。

その後、平成12(2000)年7月1日には、大蔵省金融企画局が担ってきた金融制度の企画・立案に関する事務が金融監督庁に移管されて、新たに金融庁が発足し、証券監視委は、従前の体制(国家行政組織法第8条及び金融再生委員会設置法第21条に基づき設置された合議制の機関)のまま金融庁に移管された。

なお、平成13(2001)年1月6日には、中央省庁等改革に際して、金融再生委員会が廃止され、証券監視委は、内閣府の外局として設置された金融庁に移管され、内閣府設置法第54条及び金融庁設置法第6条に基づき設置された合議制の機関(いわゆる八条委員会((注)国家行政組織法第8条に基づき設置される「八条委員会」に相当するもの。)としての位置づけ)として、現在に至っている。

監視体制の概念図



(注1) 勧告については内閣総理大臣及び金融庁長官に対して、建議については内閣総理大臣、金融庁長官又は財務大臣に対して行うことができる(設置法第20条、第21条)。

(注2) 平成18(2006)年7月に総務検査課、特別調査課の2課体制から、総務課、市場分析審査課、証券検査課、課徴金・開示検査課、特別調査課の5課体制に再編。さらに、平成23(2011)年7月に、現行の6課体制に強化された。

(注3) 金商法改正(平成20(2008)年12月施行)により、同法第192条に基づく当該申立ての権限等が金融庁より委任された。

証券監視委の機構図



1-1

第2節

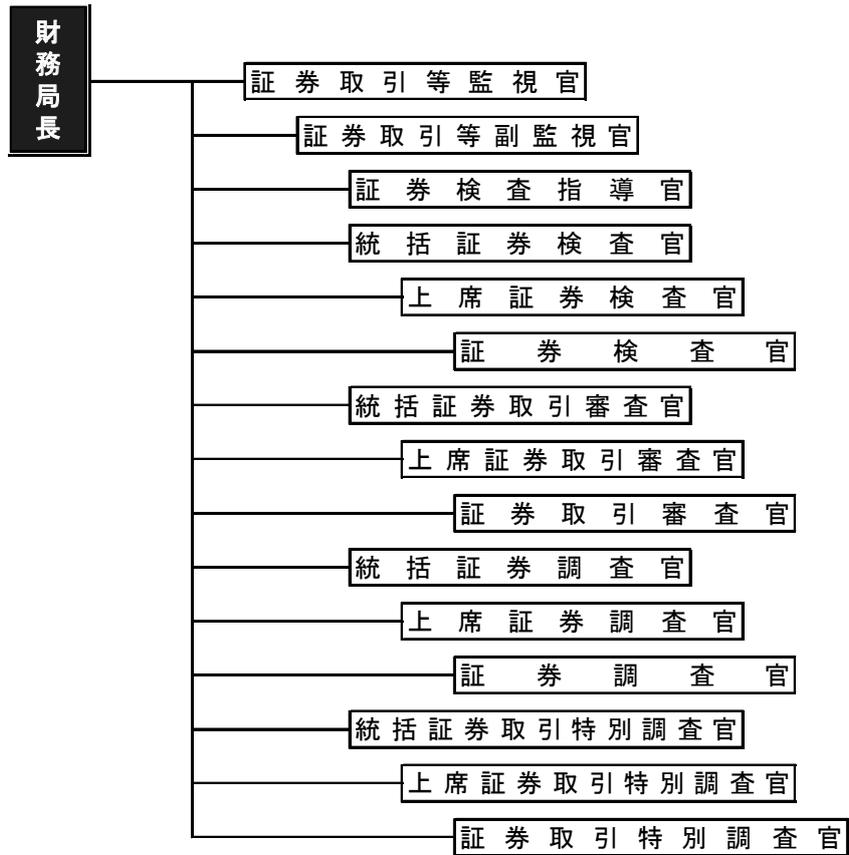
第3節

第4節

(注)平成18(2006)年7月に5課体制に再編。さらに、平成23(2011)年7月に6課体制に再編。

財務局の機構図

1-1
第2節
第3節
第4節



(3) 事務概要

① 監視のための5つの事務

証券監視委が行う監視事務は、市場分析審査、証券モニタリング、取引調査、開示検査及び犯則事件の調査の5つに分かれる。

イ. 市場分析審査

金商法等によって内閣総理大臣及び金融庁長官から委任された権限に基づいて、金商業者、登録金融機関、金融商品取引業協会及び金融商品取引所等に対して有価証券の売買取引等に関する報告を求め、又は資料を徴取し、取引の内容を審査することにより、日常的な市場監視を行う。

ロ. 証券モニタリング

金商法等によって内閣総理大臣及び金融庁長官から委任された権限に基づいて、金商業者等に対して検査を行うほか、無登録で金融商品取引業を行う者による詐欺的行為に伴う被害の拡大防止のための調査を行う。

犯収法によって内閣総理大臣及び金融庁長官から委任された権限に基づいて、金商業者等による顧客等に係る本人確認及び取引記録の保存義務等の遵守状況の検査を行う。

ハ. 取引調査

金商法によって内閣総理大臣及び金融庁長官から委任された権限に基づいて、風説の流布・偽計、相場操縦、内部者取引といった不公正取引の課徴金に係る事件の調査を行う。

二. 開示検査

金商法によって内閣総理大臣及び金融庁長官から委任された権限に基づいて、開示の適正性を確保するため、有価証券届出書の届出者、発行登録書の提出者、有価証券報告書の提出者、公開買付者、大量保有報告書の提出者等に対して検査を行う。

ホ. 犯則事件の調査

金商法、金サ法又は犯収法に基づき、犯則事件を調査するため必要があるときは、質問、検査、領置等の任意調査を行うほか、裁判官の発する許可状による臨検、搜索及び差押え等といった強制調査を行うことができる。

金商法等においては、犯則事件の範囲は、具体的には、取引の公正を害するものとして関係する政令において定められており、主なものとしては、重要な事項につき虚偽記載のある有

価証券届出書・有価証券報告書等の提出、損失保証・損失補填、相場操縦、内部者取引などがある。

また、犯収法では、金商業者等が本人確認を行う場合における顧客等による氏名・住所等の隠ぺい行為が犯則事件とされている。

② 調査・検査後の対応

イ. 勧告

証券監視委は、証券モニタリング、取引調査、開示検査又は犯則事件の調査を行った場合において、必要があると認めるときは、その結果に基づき、金融商品取引等の公正を確保するため、又は投資者の保護その他の公益を確保するため、開示書類の訂正報告書等の提出命令や課徴金納付命令の発出、その他必要な行政処分等を行うよう、内閣総理大臣及び金融庁長官に勧告することができる。

また、証券監視委は、内閣総理大臣及び金融庁長官に対し、勧告に基づいて執った措置について報告を求めることができる。

ロ. 建議

証券監視委は、証券モニタリング、取引調査、開示検査又は犯則事件の調査の結果に基づき、必要があると認めるときは、金融商品取引等の公正を確保するため、又は投資者の保護その他の公益を確保するために必要と認められる施策について、内閣総理大臣、金融庁長官又は財務大臣に建議することができる。

ハ. 告発

証券監視委は、犯則事件の調査により犯則の心証を得たときは、検察官に告発を行う。

二. 金商法違反行為に対する裁判所への禁止・停止命令発出の申立て

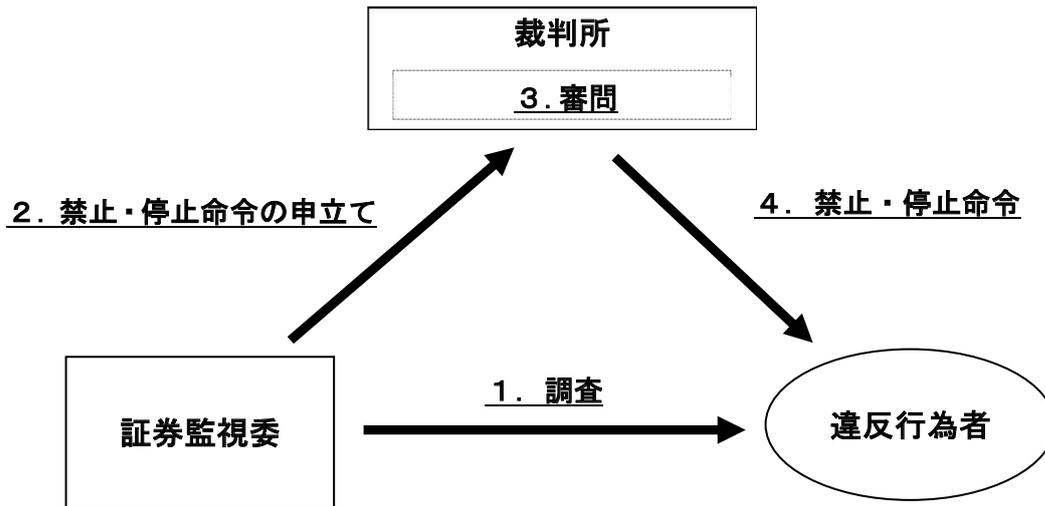
証券監視委は、無登録業者による未公開株式やファンドの販売・勧誘等の重大な金商法違反行為に対して、裁判所への禁止・停止命令発出の申立てを行うことができる。

③ 事務の処理状況の公表

証券監視委は、設置法第22条の規定に基づき、毎年、その事務の処理状況の公表を行う。

金商法違反行為に対する裁判所への禁止・停止命令発出の申立て

- ・捜査当局等と連携し、無登録で金融商品取引業を行う者等による詐欺的行為に伴う被害の拡大防止のための調査を実施。
- ・調査の結果を踏まえ、裁判所に対して法令違反行為の禁止・停止命令発出を申立て。
- ・必要に応じて違反行為者の名称等を公表。



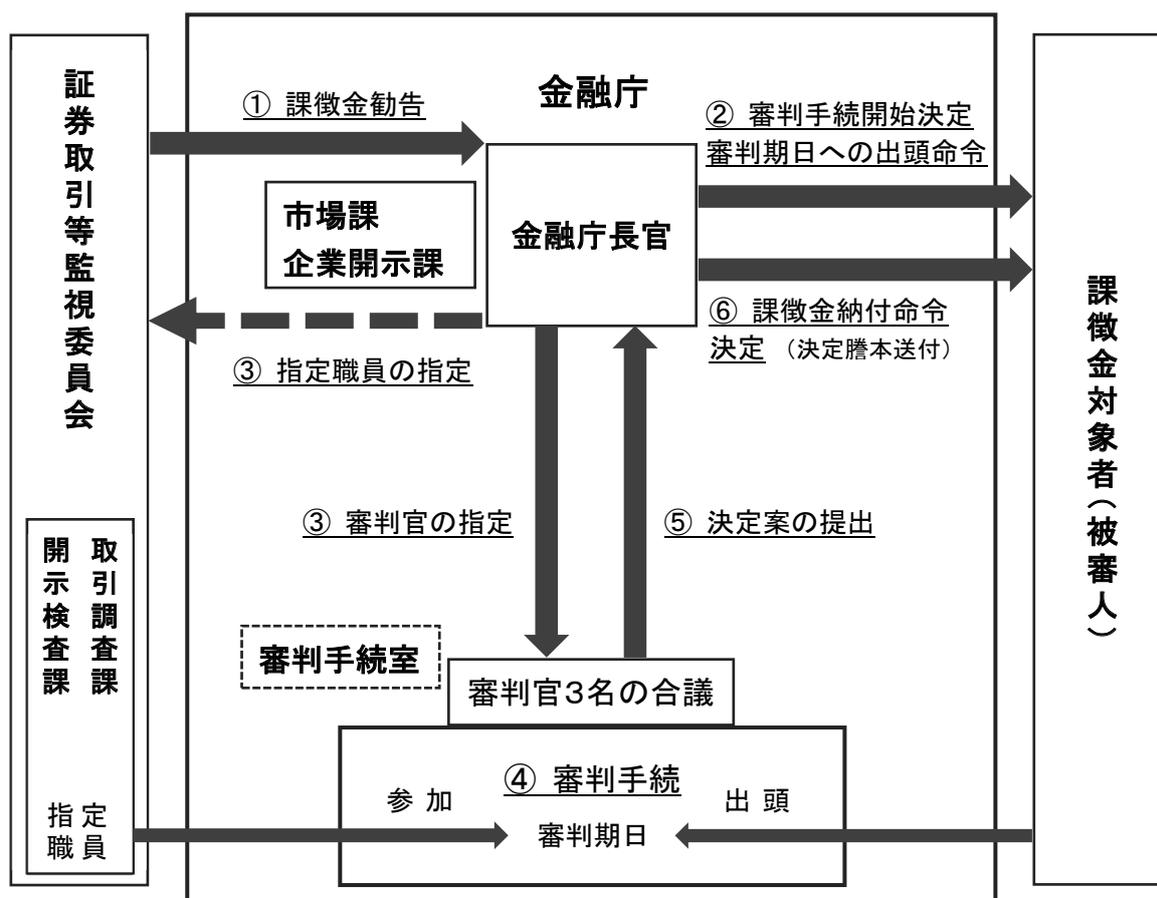
(参考) 課徴金制度

課徴金制度は、違反行為を抑止し、規制の実効性を確保するという行政目的を達成するため、金商法の一定の規定に違反した者に対して金銭的負担を課すための行政上の措置である。

対象となる行為は、有価証券届出書・有価証券報告書の虚偽記載、風説の流布・偽計、相場操縦及び内部者取引等であり、証券監視委は、取引調査及び開示検査を実施し、その結果、課徴金の対象となる違反行為が認められた場合には、内閣総理大臣及び金融庁長官に対して課徴金納付命令を発出するよう勧告する。

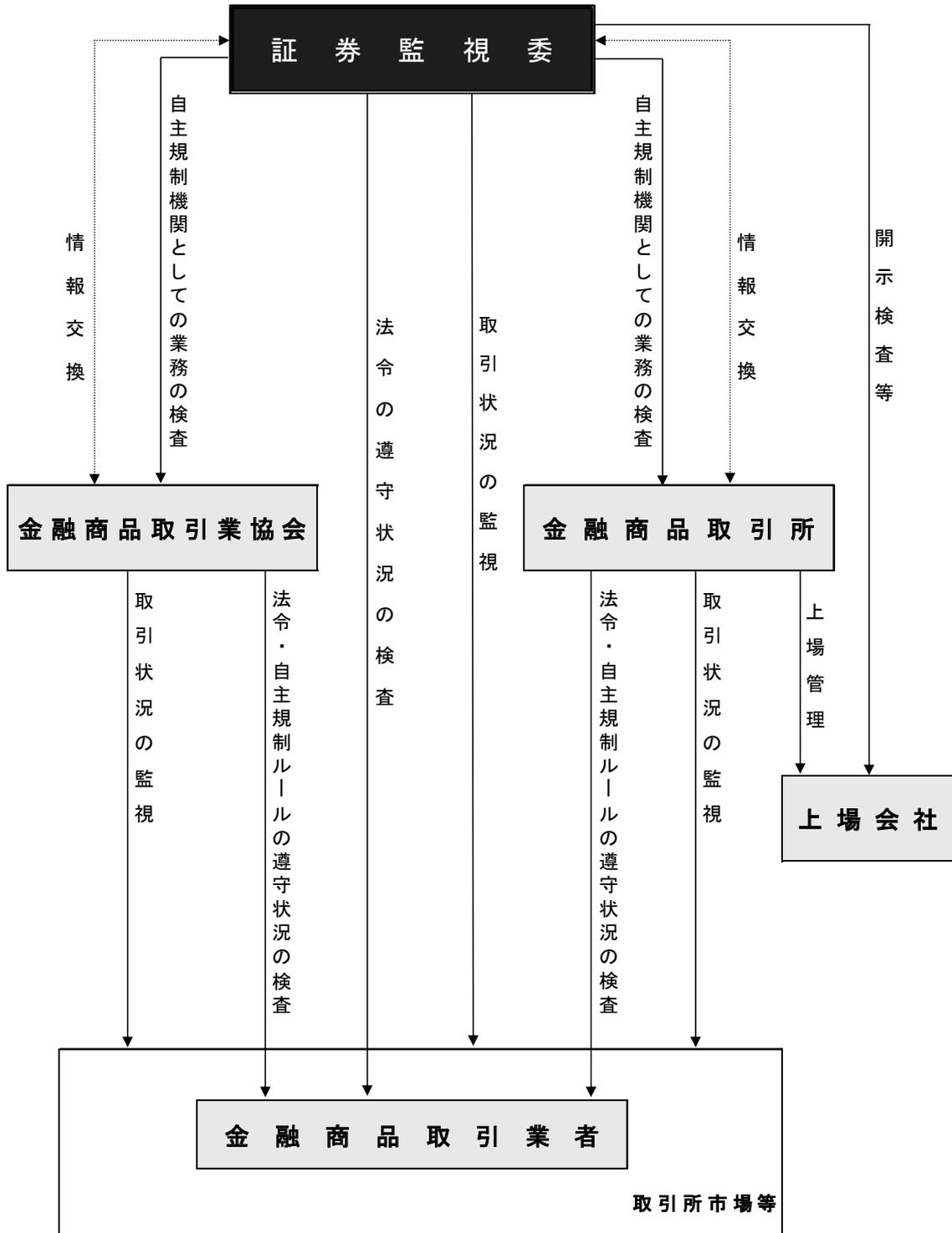
勧告を受け、金融庁長官は、審判官が行う審判手続を経て作成された決定案に基づき、課徴金の納付を命ずるか否かを決定する。

<課徴金制度概念図>



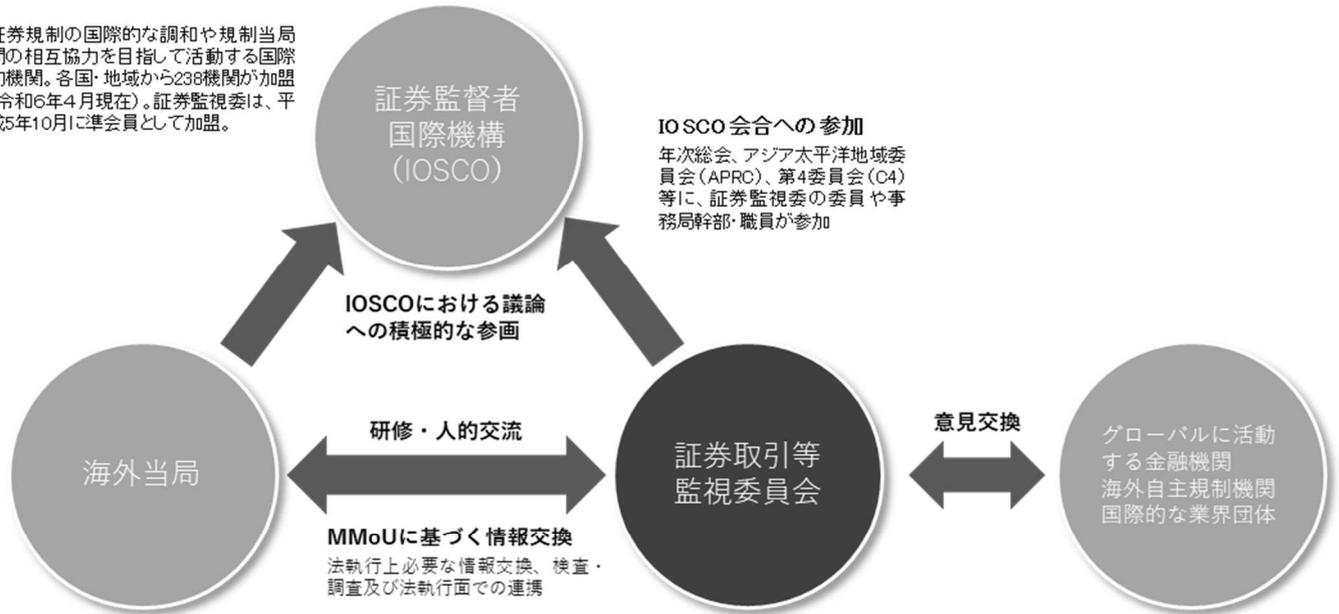
④ 自主規制機関との協働

自主規制機関は、日常的な市場監視活動を行っており、証券監視委は、これら自主規制機関と緊密な連携を図っている。



⑤ 海外当局との連携

証券規制の国際的な調和や規制当局間の相互協力を目指して活動する国際的機関。各国・地域から238機関が加盟（令和6年4月現在）。証券監視委は、平成5年10月に準会員として加盟。



IOSCO等が主催する国際会議等への参加

- ・アジアの市場監視当局が実務レベルの諸問題について意見交換を行う、アジア太平洋市場監視当局者の会合に参加

海外当局等への職員派遣及び短期研修への参加

- ・海外当局における監視や調査・検査手法の把握・分析や、我が国の調査・検査手法・ノウハウの海外当局への紹介のため、これまで、米国SEC、米国CFTC、英国FCA、香港SFC、タイSEC、マレーシアSC、シンガポールMASに職員を派遣
- ・IOSCOや各国証券規制当局等が主催する短期研修等にも、職員を積極的に派遣

海外当局やグローバルに活動する金融機関等との意見交換

- ・IOSCO会合等の機会を捉え、米国・欧州・アジアの海外証券規制当局やグローバルに活動する金融機関、国際的な業界団体等との意見交換を、幹部及び実務レベル双方で実施

2. 市場分析審査

(1) 取引審査について

1) 取引審査の目的

取引審査の目的は、日常の市場動向の監視や各種情報に基づいて、不公正取引の疑いのある取引等の端緒を適時・適切に把握することである。審査の結果、問題が把握された取引については、証券監視委内の担当部門において一層の実態解明を行うことになるため、的確かつ迅速な審査を行う必要がある。

2) 法令上の根拠

取引審査においては、金融商品取引等の公正を確保し、投資者の保護を図るため必要かつ適当であると認める場合は、金商業者等から有価証券の売買取引等に関する報告を求め、又は資料の徴取を行っている。これらの報告・資料徴取の権限は、金商法等において規定されている（附属資料1-4 3. (1) 証券モニタリングの検査又は報告・資料の徴取の権限（80ページ）を参照）。

3) 審査の実施

取引審査においては、まず、日常の市場動向の監視や各種情報に基づいて、例えば、①新聞、雑誌及びインターネットの掲示板等で話題になっている銘柄、②一般から寄せられた情報において取り上げられている銘柄、③株価が急騰・急落するなど不自然な動きが見られた銘柄、④投資者の投資判断に影響を及ぼす「重要事実」が公表された銘柄を抽出し、金商業者等から有価証券の売買取引等に関する詳細な報告を求め、又は資料を徴取している。

次に、これらの報告・資料に基づいて、市場の公正性を害する相場操縦や内部者取引、偽計等の疑いのある取引について審査を行っている。併せて、こうした取引に関与していた金商業者に行為規制違反等の問題のある行為がなかったかについても審査を行っている。

審査の結果、問題が把握された取引については、証券監視委内の担当部門において一層の実態解明を行うことになる。

なお、証券監視委では、不公正取引に関連して行われるインターネット掲示板やSNS等インターネット上の書込みに対する監視のため、インターネット巡回監視システムを導入し、過去の（削除された）書込みも含めて情報収集を行っている。

4) クロスボーダー取引への対応

我が国の株式市場においては、海外投資家による委託取引の売買金額が7割以上を占めるなど、クロスボーダー取引が活発に行われている。このため、証券監視委は、取引審査の段階に

においても、クロスボーダー取引について金商業者等から情報を収集するとともに、必要に応じ、MMoUの活用により海外当局の協力も得つつ、市場監視の空白が生じないように努めている。

(2) 市場モニタリングについて

経済情勢や経済動向等を踏まえつつ、発行市場、流通市場と個別企業の動向を把握して市場における課題を抽出し、調査担当課等の関係先へ共有する等、市場モニタリング機能を充実・強化するため、平成28(2016)年6月に市場分析審査課内に「市場モニタリング室」を設置した。

市場モニタリング室では、インターネット上のサイト、マスコミ、雑誌等の記事をはじめ、市場関係者や個別企業といった、幅広い先から情報を収集し、分析を行っている。

(3) 情報提供に関する各種窓口について

一般投資家や市場関係者等からの情報は、市場における様々な出来事について、投資者等が発する生の声であり、それらの情報には、証券監視委による証券モニタリング、取引調査、国際取引等調査、開示検査及び犯則事件の調査等の権限を行使する際の端緒となる場合があるなど、重要性・有用性の高いものが含まれていることから、証券監視委では、できるだけ多くの方から多数の情報が寄せられることが重要であると考えている。

そこで、以下のとおり各種窓口を設置し、幅広い情報提供を呼びかけている(各種窓口の連絡先は、附属資料4 情報の受付について(255ページ)を参照)。

1) 情報提供窓口

インターネット(証券監視委ウェブサイト)、電話及び郵送などの方法により、粉飾決算(架空売上・架空利益の計上等)、投資者保護上の問題(著しい高利回りを明示する金融商品等)、市場における不正取引(内部者取引、相場操縦等)などの情報を幅広く受け付けている。

2) 公益通報窓口

公益通報及び公益通報に準ずる通報の受けのほか、電話による相談対応も行っている。その際、通報に関する秘密保持について、特に留意して対応している。

公益通報者保護法(平成18(2006)年4月施行)により、公益通報をした労働者は、公益通報したことを理由とした解雇等の不利益な取扱いから保護されるとともに、公益通報を受けた行政機関には、必要な調査や適切な措置をとる義務が課されている。

3) 年金運用ホットライン

年金運用に関する有用性の高い情報を収集するため、投資一任業者の業務運営の実態等についての情報を受け付けている。

〔情報提供に当たっての留意事項〕

- ・ 有用性の高い情報を得る観点から、「実名」の方を対象。

証券監視委に寄せられたこれらの情報は、その内容を精査した上で速やかに関係部署へ回付され、それらの部署において、内容、重要性及び有用性等が勘案された上で、証券監視委の行う証券モニタリング、取引審査、取引調査、国際取引等調査、開示検査及び犯則事件の調査等に活用されている。

3. 証券モニタリング

(1) 証券監視委における検査対象先

証券監視委は、平成4(1992)年の発足以降、証券会社等に対し取引の公正を確保するための検査を行ってきたが、平成17(2005)年7月、市場監視機能の強化を図る観点から整備された改正証取法等が施行され、それまで金融庁検査局が行ってきた証券会社や金融先物取引業者等の財務の健全性等に関する検査や投資信託委託会社等の検査対象先に対する検査の権限が、証券監視委に委任された。併せて、改正金融先物取引法が施行され、外国為替証拠金(FX)取引を取り扱う業者が金融先物取引業者として規制の対象となり、証券監視委の検査対象となった。

平成19(2007)年9月には、金商法が全面施行され、集団投資スキーム(ファンド)持分の販売・勧誘行為や集団投資スキーム形態で主として有価証券又はデリバティブ取引に対する投資運用(自己運用)を行う者などが新たに検査の対象となり、また、金商業者、金融商品取引業協会、金融商品取引所等から業務の委託を受けた者についても検査対象となった。

その後も所要の法令改正により証券監視委による検査の範囲は拡大しており、近年、有価証券等仲介業務を行う金融サービス仲介業者や海外投資家等特例業務届出者等が令和3(2021)年11月から証券監視委の検査対象となっている(検査対象等の範囲については附属資料1-4 3. (1) 証券モニタリングの検査又は報告・資料の徴取の権限(80ページ)を参照)。

(2) 金商業者等に対する証券モニタリング等

1) 効果的・効率的な証券モニタリングの実施

- ① 約8,500者に及ぶ金商業者等に対し、効果的・効率的に証券モニタリングを実施するため、金融庁関連部局等と連携し、継続的に証券モニタリングを実施している。
- ② モニタリングにおいては、ビジネスモデルの分析、それを支えるリスク管理の適切性等に着目したリスクアセスメントを実施し、リスクベースで検査の対象先を選定する。

2) 検査の実施

- ① 商品内容や取引スキームについて深度ある分析を行った上で業務運営の適切性等について検証を行う。
- ② 問題が認められた場合には、法令違反行為等の指摘にとどまらず、経営方針、ガバナンス、人事・報酬体系等の観点からも検証し、問題の根本原因を究明する。

※ 平成19(2007)年の金商法の全面施行に伴い新設された同法第51条において、金商業者に対し、公益又は投資者保護のため必要かつ適当であると認めるときは、業務の方法の変更等を命ずることができるようになったことも踏まえ、個別の法令違反のみならず、内部管理態勢等の業務の運営状況にも着目した検査を実施することとしている。

※ 証券監視委では、犯収法により内閣総理大臣及び金融庁長官から委任された権限に基づく検査についても実施している。この検査は、検査対象先の顧客管理態勢の整備を促進させることで、検査対象先がマネー・ローンダリング等に利用されることを防ぐことを目的としている。

3) 行政処分等勧告

- ① 検査の結果、重大な法令違反等が認められた場合は、内閣総理大臣及び金融庁長官に対し、行政処分等を求める勧告を実施している。
- ② 証券監視委が行った行政処分等の勧告を踏まえ、検査対象先の監督権限を有する内閣総理大臣、金融庁長官又は財務局長等は、勧告の対象となった検査対象先に対して聴聞等を行った上、相当と認める場合には、登録の取消し、業務停止や業務改善命令の発出などの行政処分等を行う。

4. 取引調査

取引調査は、金商法が定める課徴金制度において、風説の流布・偽計や相場操縦、内部者取引といった不公正取引について、金商法第177条の権限に基づき、事件関係人や参考人に対する質問調査、物件提出命令、事件関係人の営業所やその他必要な場所への立入検査等を行う（附属資料1-4 3. (2) 取引調査の権限及び課徴金の対象範囲(86ページ)を参照)ほか、海外規制当局と連携を図りつつ、クロスボーダー取引による不公正取引の調査も行っている。取引調査の結果、違反行為が認められた場合には、内閣総理大臣及び金融庁長官に対して課徴金納付命令を発出するよう勧告を実施している。

市場を取り巻く状況の変化に対応した機動性・戦略性の高い市場監視が求められる中、取引調査は、不公正取引に対して迅速かつ効率的に臨むことによって違反行為を抑止し、もって市場の公正性・透明性の確保を図り、投資者を保護することを目的としている。

5. 開示検査

わが国の市場においては、金商法の規定に基づき、上場会社をはじめとする有価証券報告書の提出義務を負う発行者等から開示書類が提出されている。

証券監視委では、情報提供窓口等、様々なチャネルを通じた情報の収集・分析を行い、開示書類(有価証券届出書・有価証券報告書・大量保有報告書等)の虚偽記載等の開示規制違反が疑われる上場会社等に対する検査を実施している。検査の結果、開示書類における重要な事項についての虚偽記載等の開示規制違反が認められた場合には、当該上場会社等に対する課徴金納付命令を求める「勧告」を行っている。また、こうした開示規制違反の再発防止や未然防止のための様々な取組みを行っている。

これらの開示書類に対する開示検査の具体的な権限は、附属資料1-4 3. (3) 開示検査及び報告・資料の徴取の権限並びに課徴金の対象範囲(88ページ)を参照。

6. 犯則事件の調査・告発

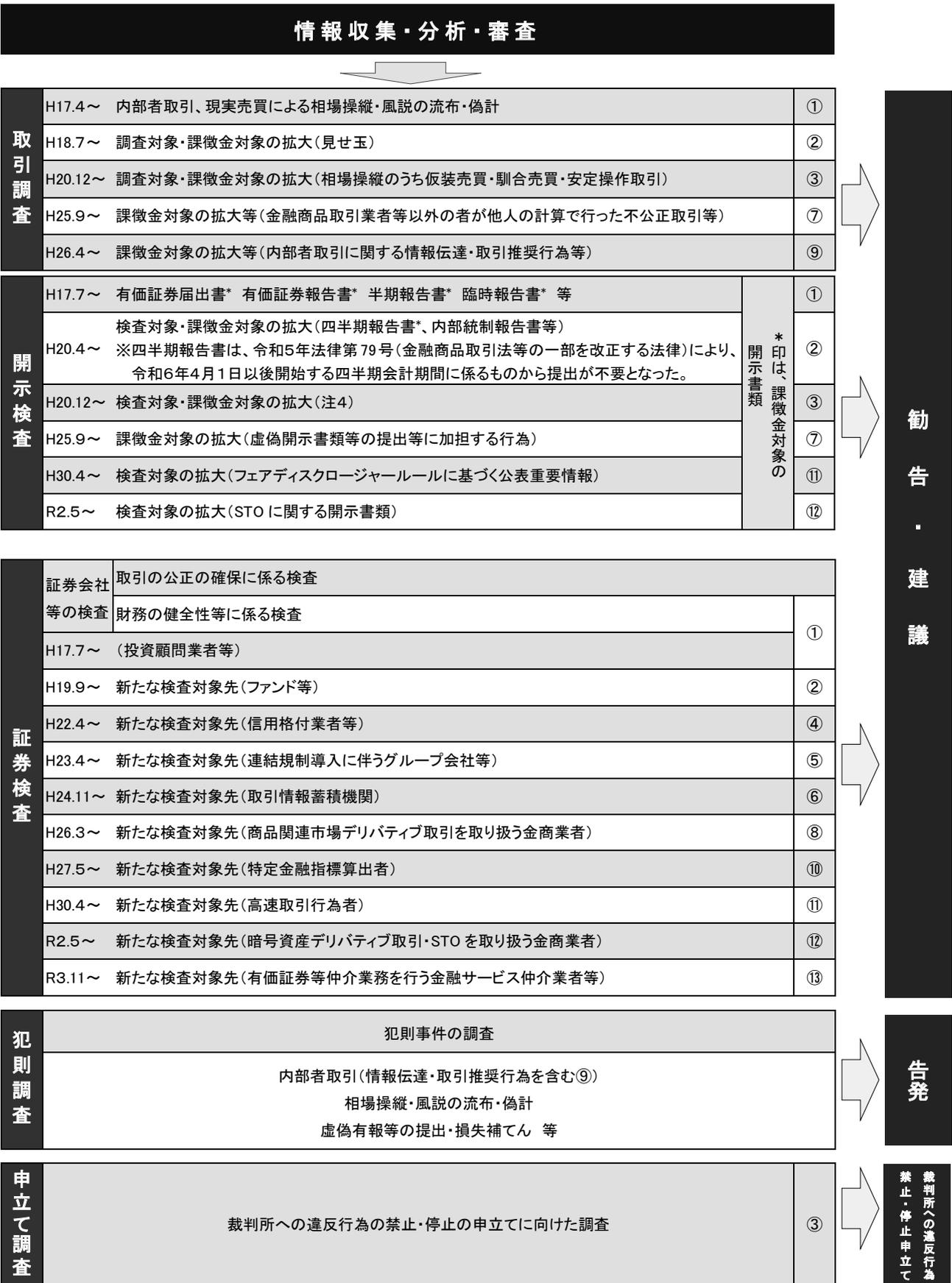
犯則事件の調査に係る権限として、金商法において、任意調査権限(金商法第210条)と強制調査権限(金商法第211条等)が規定されている。任意調査として、犯則疑い者又は参考人(以下「犯則疑い者等」という。)に対する質問、犯則疑い者等が所持し又は置き去った物件の検査、犯則疑い者等が任意に提出し又は置き去った物件の領置をすることができ、強制調査として、裁判官の発する許可状により行う臨検、搜索及び差押え等を行うことができる。

犯則事件の範囲は、取引の公正を害するものとして政令（金商法施行令第45条）で規定されている。主なものとしては、発行会社を対象とする虚偽有価証券報告書等提出のほか、会社関係者等を対象とする内部者取引、何人をも対象とする風説の流布、偽計、相場操縦等がある（附属資料1-4 3.（4）犯則事件の調査の権限及び範囲（92ページ）参照）。

また、金サ法では、投資顧問契約等に関する偽計、暴行、脅迫行為のほか、損失保証、損失補填等が犯則事件の調査対象と政令（金サ法施行令第50条）で規定されており、犯収法では、金商業者等が本人確認を行う場合において、顧客等による氏名・住所等の隠ぺい行為が調査対象と規定されている（犯収法第32条）。

証券監視委職員は、犯則事件の調査を終えたときは、調査結果を証券監視委に報告する（金商法第223条、金サ法第161条、犯収法第32条）。証券監視委は、その調査によって犯則の心証を得たときは、検察官に告発し、領置・差押物件があるときは、領置・差押目録とともに引き継ぐ（金商法第226条、金サ法第161条、犯収法第32条）。

1-2 証券監視委の機能強化



※ 証券監視委は、金商法、SPC法、投信法、社債等振替法、犯収法、預金保険法、景品表示法、個人情報保護法、金サ法に基づき、権限を行使。

(注1) 「①」部分が「証券取引法等の一部を改正する法律(平成16年改正)」の施行(平成17年4月1日 他)に伴い調査・検査の対象となった部分。

(注2) 「②」部分が「金融商品取引法」の施行(平成19年9月30日 他)に伴い調査・検査の対象となった部分。

(注3) 「③」部分が「金融商品取引法等の一部を改正する法律(平成20年改正)」の施行(平成20年12月12日)に伴い調査・検査等の対象となった部分。

(注4) 開示検査対象の拡大の内容については、以下のとおり。

- ・ 特定投資家向け有価証券に係る情報。

課徴金対象の拡大の内容については、以下のとおり。

- ・ 公開買付届出書・大量保有報告書の虚偽記載・不提出。
- ・ 発行開示書類・継続開示書類の不提出。(平成20年12月までは、虚偽記載が課徴金の対象となっていた。)
- ・ 特定投資家向け有価証券に係る情報の虚偽等。

(注5) 「④」部分が「金融商品取引法等の一部を改正する法律(平成21年改正)」の施行(平成22年4月1日)に伴い検査の対象となった部分。

(注6) 「⑤」部分が「金融商品取引法等の一部を改正する法律(平成22年改正)」の施行(平成23年4月1日)に伴い検査の対象となった部分。

(注7) 「⑥」部分が「金融商品取引法等の一部を改正する法律(平成22年改正)」の施行(平成24年11月1日)に伴い検査の対象となった部分。

(注8) 「⑦」部分が「金融商品取引法等の一部を改正する法律(平成24年改正)」の施行(平成25年9月6日)に伴い調査・検査の対象となった部分。

(注9) 「⑧」部分が「金融商品取引法等の一部を改正する法律(平成24年改正)」の施行(平成26年3月11日)に伴い検査の対象となった部分。

(注10) 「⑨」部分が「金融商品取引法等の一部を改正する法律(平成25年改正)」の施行(平成26年4月1日)に伴い調査の対象となった部分。

(注11) 「⑩」部分が「金融商品取引法等の一部を改正する法律(平成26年改正)」の施行(平成27年5月29日)に伴い検査の対象となった部分。

- (注12) 「⑪」部分が「金融商品取引法等の一部を改正する法律(平成29年改正)」の施行(平成30年4月1日)に伴い検査の対象となった部分。
- (注13) 「⑫」部分が「金融商品取引法」の一部改正を含む「情報通信技術の進展に伴う金融取引の多様化に対応するための資金決済に関する法律等の一部を改正する法律(令和元年改正)」の施行(令和2年5月1日)に伴い検査の対象となった部分。
- (注14) 「⑬」部分が「金融サービスの利用者の利便の向上及び保護を図るための金融商品の販売等に関する法律等の一部を改正する法律(令和2年改正)」の施行(令和3年11月1日)及び「金融商品取引法」の一部改正を含む「新型コロナウイルス感染症等の影響による社会経済情勢の変化に対応して金融の機能の強化及び安定の確保を図るための銀行法等の一部を改正する法律(令和3年改正)」の施行(令和3年11月22日)に伴い検査の対象となった部分。

1-3 証券監視委及び財務局等監視官部門の定員の推移

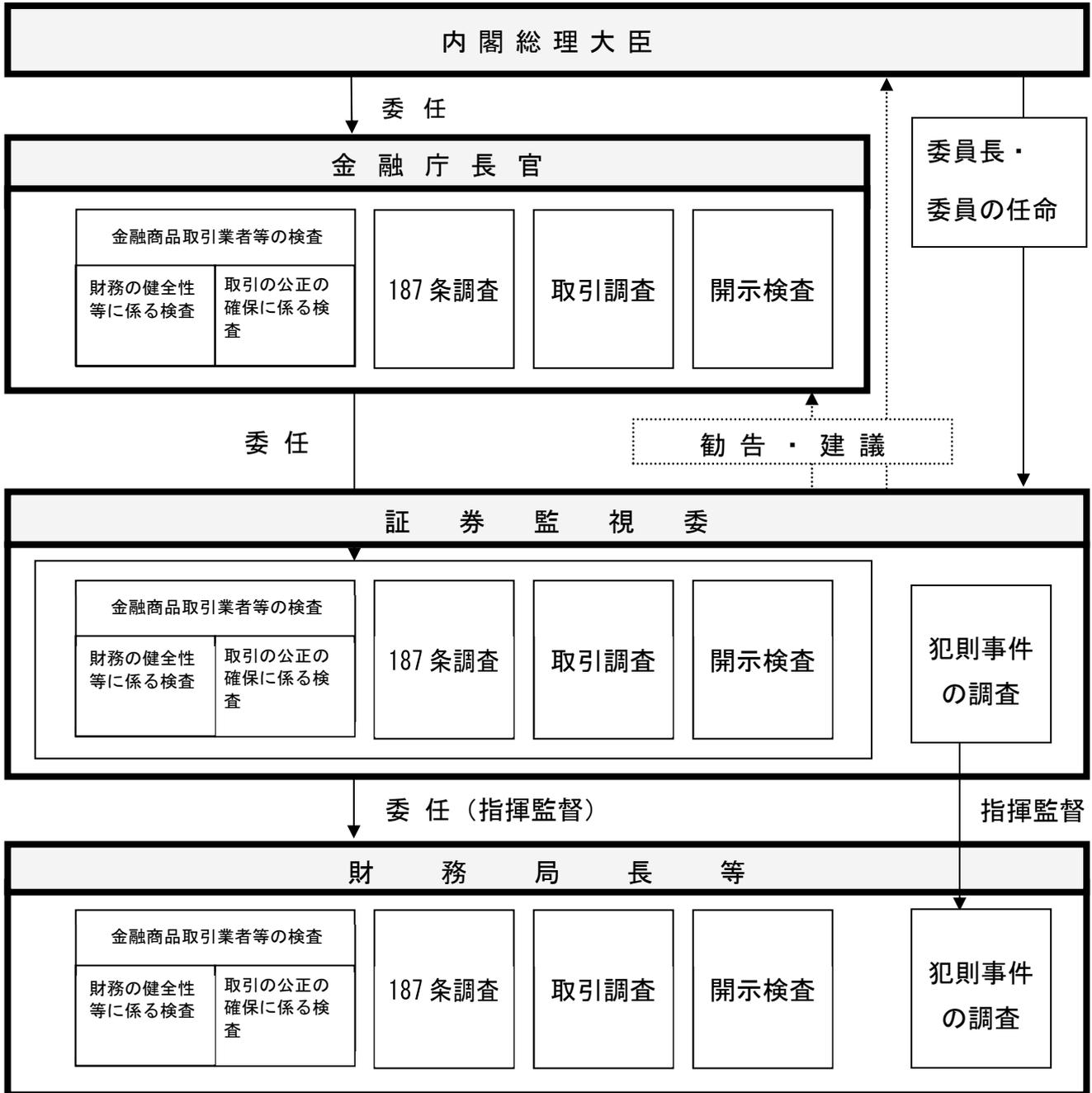
年 度	予 算 定 員		
	証券監視委	財務局等	合 計
平成4年度	84人	118人	202人
平成5年度	84人	118人	202人
平成6年度	86人	118人	204人
平成7年度	88人	118人	206人
平成8年度	89人	118人	207人
平成9年度	91人	118人	209人
平成10年度	98人	126人	224人
平成11年度	106人	133人	239人
平成12年度	112人	139人	251人
平成13年度	122人	144人	266人
平成14年度	182人	183人	365人
平成15年度	217人	199人	416人
平成16年度	237人	204人	441人
平成17年度	307人	245人	552人
平成18年度	318人	246人	564人
平成19年度	341人	268人	609人
平成20年度	358人	282人	640人
平成21年度	374人	300人	674人
平成22年度	384人	313人	697人
平成23年度	392人	312人	704人
平成24年度	392人	322人	714人
平成25年度	400人	339人	739人
平成26年度	409人	354人	763人
平成27年度	410人	354人	764人
平成28年度	411人	352人	763人
平成29年度	406人	342人	748人
平成30年度	402人	338人	740人
令和元年度	400人	331人	731人
令和2年度	401人	336人	737人
令和3年度	397人	328人	725人
令和4年度	392人	320人	712人
令和5年度	389人	313人	702人
令和6年度	385人	302人	687人

(注) 財務局等には、福岡財務支局、沖縄総合事務局財務部を含む(令和6年度は福岡財務支局のみを含む)。

第1節
第2節
1-3
第4節

1-4 組織・事務に係る法令の概要

1. 証券監視委と内閣総理大臣、金融庁長官及び財務局長等の関係の概念図



(注1) 証券監視委が財務局長等に委任した権限については、証券監視委が財務局長等を指揮監督する(金商法第194条の7第8項等)。

(注2) 犯則事件の調査については、証券監視委が財務局長等を指揮監督し、必要があると認めるときは、財務局等職員を直接指揮監督することができる(金商法第224条第4項、第5項等)。

(注3) 証券監視委は、以下の公示で指定する金融商品取引業者等に関する権限については、財務局長等への委任を行っていない。

- ・金融商品取引法施行令第四十四条第五項並びに投資信託及び投資法人に関する法律施行令百三十六条第二項の規定に基づき金融商品取引業者等を指定する公示
- ・犯罪による収益の移転防止に関する法律施行令第二十八条第六項の規定に基づき金融商品取引業者等を指定する公示

2. 証券監視委の組織・権限等

証券監視委の組織・権限等は、設置法の以下の条項により規定されている。

〔設置法〕

条 項	規 定 の 概 要
第4条	金融庁の事務
第6条	証券監視委の設置
第8条	証券監視委の所掌事務
第9条	委員長及び委員の職権の行使
第10条	証券監視委の組織
第11条	委員長
第12条	委員長及び委員の任命
第13条	委員長及び委員の任期
第14条	委員長及び委員の身分保障
第15条	委員長及び委員の罷免
第16条	委員長及び委員の服務等
第17条	委員長及び委員の給与
第18条	会議
第19条	事務局
第20条	勧告
第21条	建議
第22条	事務の処理状況の公表

第1節

第2節

第3節

1-4

3. 権限及び範囲に係る規定

(1) 証券モニタリングの検査又は報告・資料の徴取の権限

証券監視委は、金商業者等に対する検査又は報告・資料の徴取権限を内閣総理大臣及び金融庁長官から委任されている。

具体的な権限の規定は、以下のとおりである。

[金商法]

検査又は報告・資料の徴取の権限規定	証券監視委への権限委任規定	検査又は報告・資料の徴取の対象
第56条の2第1項(第65条の3第3項において準用する場合を含む。)から第4項まで	第194条の7第2項第1号及び第3項	金融商品取引業者等、金融商品取引業者等と取引をする者、金融商品取引業者等(登録金融機関を除く。)がその総株主等の議決権の過半数を保有する銀行等、金融商品取引業者等を子会社とする持株会社、金融商品取引業者等から業務の委託を受けた者、金融商品取引業者の主要株主、金融商品取引業者を子会社とする持株会社の主要株主、特定金融商品取引業者等の親金融機関等、特定金融商品取引業者等の子金融機関等、金融商品取引業者の親銀行等、金融商品取引業者の子銀行等
第57条の10第1項	第194条の7第3項	特別金融商品取引業者の子会社等
第57条の23	第194条の7第3項	指定親会社、指定親会社と取引をする者、指定親会社の子会社等、指定親会社から業務の委託を受けた者
第57条の26第2項	第194条の7第3項	指定親会社の主要株主
第60条の11(第60条の12第3項において準用する場合を含む。)	第194条の7第2項第2号及び第3項	取引所取引許可業者、取引所取引許可業者と取引を行う者、取引所取引許可業者から業務の委託を受けた者
第60条の14第2項において準用する第60条の11	第194条の7第2項第2号及び第3項	電子店頭デリバティブ取引等許可業者、電子店頭デリバティブ取引等許可業者と取引を行う者、電子店頭デリバティブ取引等許可業者から業務の委託を受けた者
第63条の6	第194条の7第2項第2号の2及び第3項	特例業務届出者、特例業務届出者と取引を行う者、特例業務届出者から業務の委託を受けた者
第63条の3第2項において準用する第63条の	第194条の7第2項第2号の2及び	特例業務に係る届出をした金融商品取引業者等、当該金融商品取引業者等と取引を行う者、当該金融商品取引業者等から業務の委託を受

検査又は報告・資料の徴取の権限規定	証券監視委への権限委任規定	検査又は報告・資料の徴取の対象
6	第3項	けた者
第63条の14	第194条の7第2項第2号の3及び第3項	海外投資家等特例業務届出者(海外投資家等特例業務届出者とみなされる移行期間特例業務を行う外国投資運用業者を含む。)、海外投資家等特例業務届出者と取引をする者、海外投資家等特例業務届出者から業務の委託を受けた者
第66条の22	第194条の7第2項第3号及び第3項	金融商品仲介業者、金融商品仲介業者と取引をする者
第66条の45第1項	第194条の7第2項第3号の2及び第3項	信用格付業者、信用格付業者と取引をする者、信用格付業者から業務の委託を受けた者、信用格付業者の関係法人
第66条の67	第194条の7第2項第3号の3及び第3項	高速取引行為者、高速取引行為者と取引する者、高速取引行為者から業務の委託を受けた者
第75条	第194条の7第2項第4号及び第3項	認可金融商品取引業協会、店頭売買有価証券の発行者、取扱有価証券の発行者、認可金融商品取引業協会から業務の委託を受けた者
第79条の4	第194条の7第2項第5号及び第3項	認定金融商品取引業協会、認定金融商品取引業協会から業務の委託を受けた者
第79条の77	第194条の7第3項	投資者保護基金、投資者保護基金から業務の委託を受けた者
第103条の4	第194条の7第3項	株式会社金融商品取引所の対象議決権保有届出書の提出者(株式会社金融商品取引所の総株主の議決権の百分の五を超える対象議決権の保有者)
第106条の6第1項(同条第2項において準用する場合を含む。)	第194条の7第3項	株式会社金融商品取引所の主要株主、株式会社金融商品取引所の保有基準割合以上の数の対象議決権を保有する商品取引所、株式会社金融商品取引所の保有基準割合以上の数の対象議決権を保有する商品取引所持株会社
第106条の16	第194条の7第3項	金融商品取引所持株会社の対象議決権保有届出書の提出者(金融商品取引所持株会社の総株主の議決権の百分の五を超える対象議決権の保有者)
第106条の20第1項(同条第2項において準用する場合を含む。)	第194条の7第3項	金融商品取引所持株会社の主要株主、金融商品取引所持株会社の保有基準割合以上の数の対象議決権を保有する商品取引所

検査又は報告・資料の徴取の権限規定	証券監視委への権限委任規定	検査又は報告・資料の徴取の対象
第106条の27	第194条の7第3項	金融商品取引所持株会社、金融商品取引所持株会社の子会社
第109条において準用する第106条の27	第194条の7第3項	親商品取引所等、金融商品取引所持株会社を子会社とする商品取引所
第151条	第194条の7第2項第6号及び第3項	金融商品取引所、金融商品取引所の子会社、金融商品取引所の商品取引参加者、金融商品取引所に上場されている有価証券の発行者、金融商品取引所から業務の委託を受けた者
第153条の4において準用する第151条	第194条の7第2項第6号及び第3項	自主規制法人
第155条の9	第194条の7第2項第7号及び第3項	外国金融商品取引所、外国金融商品取引所参加者、外国金融商品取引所から業務の委託を受けた者
第156条の5の4	第194条の7第3項	金融商品取引清算機関の対象議決権保有届出書の提出者（金融商品取引清算機関の総株主の議決権の百分の五を超える対象議決権の保有者）
第156条の5の8	第194条の7第3項	金融商品取引清算機関の主要株主
第156条の15	第194条の7第3項	金融商品取引清算機関、金融商品取引清算機関の清算参加者、金融商品取引清算機関から業務の委託を受けた者
第156条の20の12	第194条の7第3項	外国金融商品取引清算機関、外国金融商品取引清算機関の清算参加者、外国金融商品取引清算機関から業務の委託を受けた者
第156条の34	第194条の7第3項	証券金融会社、証券金融会社から業務の委託を受けた者
第156条の58	第194条の7第3項	指定紛争解決機関、指定紛争解決機関の加入金融商品取引関係業者、指定紛争解決機関から業務の委託を受けた者
第156条の80	第194条の7第3項	取引情報蓄積機関、取引情報蓄積機関と取引情報収集契約を締結した者、取引情報蓄積機関から業務の委託を受けた者（委託を受けた者から委託を受けた者を含む。）
第156条の89	第194条の7第3項	特定金融指標算出者、特定金融指標算出者から特定金融指標算出業務の委託を受けた者、特定金融指標算出者に対して算出基礎情報を提供した情報提供者

第1節

第2節

第3節

1-4

※ 報告又は資料の提出を命ずる権限は、金融庁長官が自ら行うことを妨げない(取引等の公正の確保に係る検査以外の検査の権限については、公益又は投資者保護のため緊急の必要があると認められる場合及び検査の効果的かつ効率的な実施に特に資すると認められる場合は、金融庁長官が自ら行うことを妨げない。)

〔投信法〕

検査又は報告・資料の徴取の権限規定	証券監視委への権限委任規定	検査又は報告・資料の徴取の対象
第22条第1項	第225条第3項	投資信託委託会社等、受託会社等、受託会社等と当該受託会社等に係る投資信託に係る業務に関して取引する者
第213条第1項から第5項まで	第225条第2項及び第3項	設立中の投資法人の設立企画人等、投資法人、投資法人の資産保管会社等、投資法人の執行役員等、投資法人又は当該投資法人の資産保管会社等と当該投資法人に係る業務に関して取引する者

(注) 報告又は資料の提出を命ずる権限は、金融庁長官が自ら行うことを妨げない(取引等の公正の確保に係る検査以外の検査の権限については、公益又は投資者保護のため緊急の必要があると認められる場合及び検査の効果的かつ効率的な実施に特に資すると認められる場合は、金融庁長官が自ら行うことを妨げない。)

〔SPC法〕

検査又は報告・資料の徴取の権限規定	証券監視委への権限委任規定	検査又は報告・資料の徴取の対象
第209条第2項において準用する第217条第1項	第290条第2項第1号及び第3項	資産対応証券の募集等の取扱いを行う特定譲渡人
第217条第1項	第290条第3項	特定目的会社
第286条第1項において準用する第209条第2項において準用する第217条第1項	第290条第2項第2号及び第3項	特定目的信託の原委託者

(注) 報告又は資料の提出を命ずる権限は、金融庁長官が自ら行うことを妨げない(取引等の公正の確保に係る検査以外の検査の権限については、公益又は投資者保護のため緊急の必要があると認められる場合及び検査の効果的かつ効率的な実施に特に資すると認められる場合は、金融庁長官が自ら行うことを妨げない。)

〔社債等振替法〕

検査又は報告・資料の徴取の権限規定	証券監視委への権限委任規定	検査又は報告・資料の徴取の対象
第20条第1項(第43条第3項において準用する場合を含む。)	第286条第2項	振替機関

(注)報告又は資料の提出を命ずる権限は、金融庁長官が自ら行うことを妨げない。

[金サ法]

検査又は報告・資料の徴取の権限規定	証券監視委への権限委任規定	検査又は報告・資料の徴取の対象
第35条第1項及び第2項並びに第36条第1項及び第2項	第137条第2項第1号及び第2号並びに第3項	金融サービス仲介業者、金融サービス仲介業者と金融サービス仲介業務に関して取引する者、金融サービス仲介業者から業務の委託を受けた者
第48条第1項及び第2項並びに第49条第1項及び第2項	第137条第2項第3号及び第4号並びに第3項	認定金融サービス仲介業協会、認定金融サービス仲介業協会から業務の委託を受けた者

(注)証券監視委への権限委任は、金融サービス仲介業のうち有価証券等仲介業務に係るものに限る。報告又は資料の提出を命ずる権限は、金融庁長官が自ら行うことを妨げない。

[犯収法]

検査又は報告・資料の徴取の権限規定	証券監視委への権限委任規定	検査又は報告・資料の徴取の対象
第15条及び第16条第1項	第22条第6項及び第7項	金融商品取引業者、特例業務届出者、海外投資家等特例業務届出者(移行期間特例業務を行う外国投資運用業者を含む)、登録金融機関、証券金融会社、振替機関、口座管理機関

(注)報告又は資料の提出を命ずる権限は、金融庁長官が自ら行うことを妨げない。

[預金保険法]

検査又は報告・資料の徴取の権限規定	証券監視委への権限委任規定	検査又は報告・資料の徴取の対象
第136条第1項及び第2項並びに第137条第1項及び第2項	第139条第2項	金融商品取引業者等(金融商品取引業者(第一種金融商品取引業者のうち有価証券関連業に該当するものを行う者に限る。)、指定親会社、金融商品取引業者子特定法人、指定親会社子会社等、証券金融会社)、金融商品仲介業者、登録金融機関、金融商品取引業者等の子会社、金融商品取引業者等から業務の委託を受けた者

(注) 報告又は資料の提出を命ずる権限並びに預金保険法の円滑な実施を確保するため緊急の必要があると認められる場合及び検査の効果的かつ効率的な実施に特に資すると認められる場合における検査の権限は、金融庁長官が自ら行うことを妨げない。

〔景品表示法〕

検査又は報告・資料の徴取の権限規定	証券監視委への権限委任規定	検査又は報告・資料の徴取の対象
第29条第1項	第33条第6項	金融商品取引業者、金融商品仲介業者、登録金融機関、金融サービス仲介業者

(注) 金融庁長官が自らその権限を行使することを妨げない。

〔個人情報保護法〕

検査又は報告・資料の徴取の権限規定	証券監視委への権限委任規定	検査又は報告・資料の徴取の対象
第146条第1項	第150条第5項	金融庁長官が所管する個人情報取扱事業者等

(注) 金融庁長官が自らその権限を行使することを妨げない。

第1節

第2節

第3節

1-4

(2) 取引調査の権限及び課徴金の対象範囲

① 取引調査の権限

不公正取引規制等の実効性を確保し、違反行為を抑止するため、新たな行政上の措置として金銭的な負担を課する制度(課徴金制度)が導入されたことにより、証券監視委は、課徴金に係る事件について必要な調査をするため、事件関係人等に対する質問又は報告等の徴取及び検査の権限を内閣総理大臣及び金融庁長官から委任されている。

具体的な権限の規定は、以下のとおりである。

[金商法]

質問・報告等の徴取、検査の権限規定	証券監視委への権限委任規定	質問・報告等の徴取及び検査の対象
第177条	第194条の7第2項第8号	事件関係人、参考人、事件関係人の営業所その他必要な場所

(注)報告を徴する権限は、金融庁長官が自ら行うことを妨げない。

② 課徴金の対象範囲及び課徴金額

課徴金の対象範囲及び課徴金額は、金商法において定められており、個別的に掲げると以下のとおりである。

[金商法]

条 項	対象範囲	課徴金額
第173条	風説の流布等により有価証券等の価格に影響を与えた者	違反行為(風説の流布・偽計)終了時点で自己の計算において生じている売り(買い)ポジションについて、当該ポジションに係る売付け等(買付け等)の価額と当該ポジションを違反行為後1月間の最安値(最高値)で評価した価額との差額等 (注)金商業者等が顧客等の計算において不公正取引を行った場合、それがファンドの運用として行われた場合には運用の対価の額を3倍した額を、その他の場合には、手数料、報酬その他の対価の額を課徴金額として賦課。(以下同じ。)
第174条	仮装・馴合売買をした者	違反行為(仮装・馴合売買)終了時点で自己の計算において生じている売り(買い)ポジションについて、当該ポジションに係る売付け等(買付け等)の価額と当該ポジションを違反行為後1月間の最安値(最高値)で評価した価額との差額等
第174条の2	相場を変動させるべき一連の有価証	違反行為(現実売買による相場操縦)期間中に自己の計算において確定した損益と、違反行為終了時点で自己の

第1節

第2節

第3節

1-4

	券売買等をした者	計算において生じている売り(買い)ポジションについて、当該ポジションに係る売付け等(買付け等)の価額と当該ポジションを違反行為後1月間の最安値(最高値)で評価した価額との差額との合計額等
第174条の3	安定操作取引等の禁止に違反した者	違反行為(違法な安定操作取引)に係る損益と、違反行為開始時点で自己の計算において生じているポジションについて、違反行為後1月間の平均価格と違反行為期間中の平均価格の差額に当該ポジションの数量を乗じた額との合計額等
第175条	内部者取引をした者	違反行為(内部者取引)に係る売付け等(買付け等)(重要事実の公表前6月以内に行われたものに限る。)の価額と、重要事実公表後2週間の最安値(最高値)に当該売付け等(買付け等)の数量を乗じた額との差額等
第175条の2	未公表の重要事実の伝達等の禁止に違反した者	違反行為(情報伝達・取引推奨行為)により、情報受領者等が行った売買等によって得た利得相当額に2分の1を乗じて得た額等

(注1)違反者が過去5年以内に課徴金納付命令等を受けたことがある場合には、課徴金の額は1.5倍となる。

(注2)上場会社等による自己株取得に係る内部者取引について、違反者が当局による調査前に申告を行った場合には、課徴金の額は半額となる。

(3) 開示検査及び報告・資料の徴取の権限並びに課徴金の対象範囲

① 開示検査及び報告・資料の徴取の権限

行政命令発出のための事実認定としてのディスクロージャー関係規定の遵守状況に関する検査については、証券監視委が担った方が違反行為の摘発を有効に行えと考えられることから、報告若しくは資料の提出を命じる権限及び検査の権限を内閣総理大臣及び金融庁長官から委任されている。

具体的な権限の規定は、以下のとおりである。

[金商法]

報告・資料の徴取、検査の権限規定	証券監視委への権限委任規定	報告・資料の徴取及び検査の対象
第26条 (第27条において準用する場合を含む。)	第194条の7第3項	有価証券届出書・有価証券報告書等の縦覧書類(注1)を提出した者又は提出すべきであると認められる者、有価証券の引受人その他の関係者、参考人
第27条の22第1項 (第27条の22の2第2項において準用する場合を含む。)	第194条の7第3項	公開買付者、公開買付けによって株券等の買付け等を行うべきであると認められる者、これらの特別関係者その他の関係者、参考人
第27条の22第2項	第194条の7第3項	意見表明報告書を提出した者又は提出すべきであると認められる者、これらの関係者、参考人
第27条の30第1項	第194条の7第3項	大量保有報告書を提出した者又は提出すべきであると認められる者、これらの共同保有者その他の関係者、参考人
第27条の30第2項 (報告・資料の徴取のみ)	第194条の7第3項	大量保有報告書に係る株券等の発行者である会社、参考人
第27条の35	第194条の7第3項	特定情報を提供若しくは公表した発行者、特定情報を提供若しくは公表すべきであると認められる発行者、特定情報に係る有価証券の引受人その他の関係者、参考人
第27条の37	第194条の7第3項	重要情報を公表した者若しくは公表すべきであると認められる者、参考人
第177条	第194条の7第2項第8号	事件関係人、参考人、事件関係人の営業所その他必要な場所

第193条の2第6項 (報告・資料の徴取のみ)	第194条の7第3項	監査証明を行った公認会計士又は監査法人
----------------------------	------------	---------------------

(注1) 開示検査の対象となる縦覧書類は、以下のとおり(第25条第1項)。

- ・有価証券届出書及びその添付書類並びにこれらの訂正届出書
- ・発行登録書及びその添付書類、発行登録追補書類及びその添付書類並びにこれらの訂正発行登録書
- ・有価証券報告書及びその添付書類並びにこれらの訂正報告書
- ・有価証券報告書の記載内容に係る確認書及びその訂正確認書
- ・内部統制報告書及びその添付書類並びにこれらの訂正報告書
- ・四半期報告書[※]、半期報告書及びこれらの訂正報告書
- ・四半期報告書[※]及び半期報告書の記載内容に係る確認書及びこれらの訂正確認書
- ・臨時報告書及びその訂正報告書
- ・自己株券買付状況報告書及びその訂正報告書
- ・親会社等状況報告書及びその訂正報告書

※ 四半期報告書は、令和5年法律第79号(金融商品取引法等の一部を改正する法律)により、令和6年4月1日以後開始する四半期会計期間に係るものから提出が不要となった。

(注2) 有価証券届出書等の効力発生前における届出者等に対する検査等の権限及び公開買付期間中の公開買付者等に対する検査等の権限については、課徴金に係る事件についての検査に係るものを除き、証券監視委に委任されていない。

② 課徴金の対象範囲及び課徴金額

課徴金の対象範囲は、金商法において定められており、個別的に掲げると以下のとおりである。

[金商法]

条 項	対象範囲	課徴金額
第172条	有価証券届出書(募集・売出しの発行開示)が受理されていないのに有価証券の募集等をした者等	募集・売出総額の100分の4.5(株券等以外は100分の2.25)
第172条の2	虚偽記載のある有価証券届出書(募集・売出しの発行開示)等の	募集・売出総額の100分の4.5(株券等以外は100分の2.25)

第172条の3	提出により、有価証券を取得させ、又は売り付けた者等	
第172条の3	有価証券報告書等を提出しない発行者	直前事業年度の監査報酬額(監査証明を受けるべき直前事業年度がない場合等は400万円) (四半期報告書 ^{注1} ・半期報告書の場合はその2分の1)
第172条の4	虚偽記載のある有価証券報告書等を提出した発行者	600万円又は発行者の時価総額の10万分の6のいずれか大きい額 (四半期報告書 ^{注1} ・半期報告書・臨時報告書等の場合はその2分の1)
第172条の5	公開買付開始公告を行わないで株券等の買付け等をした者	買付総額の100分の25
第172条の6	虚偽表示のある公開買付開始公告等を行った者等	買付株券等の時価合計額の100分の25
第172条の7	大量保有報告書等を提出しない者	対象株券等の発行者の時価総額の10万分の1
第172条の8	虚偽記載のある大量保有報告書等を提出した者	対象株券等の発行者の時価総額の10万分の1
第172条の9	特定証券情報の提供又は公表がされていないのに特定勧誘等をした者	募集・売出総額の100分の4.5(株券等以外は100分の2.25)
第172条の10	虚偽のある特定証券等情報の提供又は公表をし、有価証券を取得させ、又は売り付けた発行者等	イ. 当該特定証券等情報が公表されている場合 募集・売出総額の100分の4.5(株券等以外は100分の2.25) ロ. 当該特定証券等情報が公表されていない場合 イ. の額に、 $\frac{\text{当該特定証券等情報の提供を受けた者の数}}{\text{当該特定勧誘等の相手方の数}}$ を乗じて得た額
第172条の11	虚偽のある発行者等情報の提供	イ. 当該発行者等情報が公表されている場合 600万円又は発行者の時価総額の10万分の6のいずれ

第1節
第2節
第3節
1-4

第1節
第2節
第3節
1-4

<p>第172条の12</p>	<p>又は公表をした発行者</p> <p>虚偽開示書類等の提出等を容易にすべき行為又は唆す行為をした者</p>	<p>れか大きい額</p> <p>ロ. 当該発行者等情報が公表されていない場合</p> <p>イ. の額に、</p> $\frac{\text{当該発行者等情報の提供を受けた者の数}}{\text{発行者等情報の提供を受けるべき相手方の数}}$ <p>を乗じて得た額</p> <p>特定関与行為を行った者に対し、手数料、報酬その他の対価として支払われ、又は支払われるべき金銭その他の財産の価額に相当する額</p>
-----------------	---	--

(注1) 四半期報告書は、令和5年法律第 79 号(金融商品取引法等の一部を改正する法律)により、令和6年4月1日以後開始する四半期会計期間に係るものから提出が不要となった。

(注2) 第 172 条の2、第 172 条の4、第 172 条の7、第 172 条の 10、第 172 条の 11 及び第 172 条の 12 の違反行為について、違反者が当局による調査前に違反事実に関する報告を行った場合には、直近の違反事実に係る課徴金の額が半額となる(金商法第 185 条の7第 14 項)。

(注3) 違反者が過去5年以内に課徴金納付命令等を受けたことがある場合には、課徴金の額は 1.5 倍となる(金商法第 185 条の7第 15 項)。

(4) 犯則事件の調査の権限及び範囲

① 犯則事件の調査の権限

犯則事件の調査は、内閣総理大臣及び金融庁長官から委任を受けた権限に基づいて行う検査及び報告・資料の徴取とは異なり、証券監視委職員の固有の権限として規定されている。

具体的な権限は、以下のとおりである。

根拠規定	犯則事件の調査の権限
金商法第210条 金サ法第161条 犯収法第32条	犯則嫌疑者等に対する出頭の求め、質問、犯則嫌疑者等が所持し又は置き去った物件の検査、犯則嫌疑者等が任意に提出し又は置き去った物件の領置等の任意調査権限
金商法第211条、第211条の2 金サ法第161条 犯収法第32条	裁判官の発する許可状により行う臨検、搜索又は差押え等の強制調査権限

② 犯則事件の範囲

犯則事件の範囲は、取引の公正を害するものとして金商法施行令第45条、金サ法施行令第50条及び犯収法第32条において定められており、個別的に掲げると以下のとおりである。

[金商法]

条 項	行為者	規定の概要
第5条、第24条等 第15条等	発行者 発行者、売出しをする者、引受人、金融商品取引業者等	有価証券届出書、有価証券報告書等の提出義務等 有価証券届出書の効力発生前の募集、売出し又は売付けの禁止等
第23条の3等 第27条の3等 第27条の23等	発行登録者 公開買付者 大量保有者等	発行登録書等の提出義務等 公開買付届出書等の提出義務等 大量保有報告書等の提出義務等
第30条の2等	金融商品取引業者等	金融商品取引業者等に対する認可の条件
第37条等	金融商品取引業者等	広告等の規制
第37条の3	金融商品取引業者等	契約締結前の書面の交付

条 項	行為者	規定の概要
第37条の4	金融商品取引業者等	契約締結時等の書面の交付
第37条の5	金融商品取引業者等	保証金の受領に係る書面の交付
第38条等	金融商品取引業者等	契約の締結又はその勧誘に関して、顧客に対し虚偽のことを告げる行為の禁止
第38条の2	金融商品取引業者等	投資顧問契約等に関し、偽計、暴行、脅迫の禁止等
第39条第1項	金融商品取引業者等	損失保証・損失補填等の禁止
第40条の4	金融商品取引業者等	特定投資家向け有価証券の売買等の制限
第41条の2	金融商品取引業者等	投資助言業務に関する禁止行為
第42条の2	金融商品取引業者等	投資運用業に関する禁止行為
第42条の7	金融商品取引業者等	運用報告書の交付
第43条の6第2項	金融商品取引業者等	暗号等資産関連業務において、契約の締結又はその勧誘に関して、顧客を誤認させるような表示の禁止
第157条	何人も	有価証券の売買等について、不正の手段・計画等の禁止
第158条	何人も	風説の流布、偽計、暴行又は脅迫の禁止
第159条	何人も	相場操縦行為等の禁止
第161条第1項	金融商品取引業者等	金融商品取引業者等の自己計算取引等の制限
第163条等	会社役員等	役員・主要株主の特定有価証券等の売買等に関する報告書の提出義務等
第165条	会社役員等	役員・主要株主の禁止行為
第166条	会社関係者等	会社関係者等による内部者取引の禁止
第167条	公開買付者等関係者等	公開買付者等関係者等による内部者取引の禁止
第167条の2	会社関係者等	未公表の重要事実の伝達等の禁止
第168条	何人も	虚偽の相場の公示等の禁止
第169条	何人も	対価を受けて行う新聞等への意見表示の制限

条 項	行為者	規定の概要
第170条	何人も	有利買付け等の表示の禁止
第171条	有価証券の不特定多数者向け勧誘等をする者等	一定の配当等の表示の禁止

〔金サ法〕

条 項	行為者	規定の概要
第31条第1項	金融サービス仲介業者	投資顧問契約等に関し、偽計、暴行、脅迫の禁止等
第31条第2項	金融サービス仲介業者	損失保証・損失補填等の禁止等

〔犯収法〕

条 項	行為者	規定の概要
第4条第6項	顧客等 代表者等	本人特定事項の虚偽申告の禁止

(5) 裁判所への禁止・停止命令の申立て及びそのための調査の権限

証券監視委は、金商法違反行為等を行う者に対する裁判所への禁止・停止命令の申立て及びそのための調査の権限を内閣総理大臣及び金融庁長官から委任されている。

具体的な権限の規定は、以下のとおりである。

〔金商法〕

申立て、報告等の徴取・検査等の権限	証券監視委への権限委任規定	申立て、報告等の徴取・検査等の対象
第187条	第194条の7第4項第1号	関係人、参考人、鑑定人
第192条第1項	第194条の7第4項第2号	<p>下記に定める行為を行い、又は行おうとする者。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・緊急の必要があり、かつ、公益及び投資者保護のため必要かつ適当であるときで、金商法又は同法に基づく命令に違反する行為。 ・金商法第二条第二項第五号若しくは第六号に掲げる権利等に関し出資され、又は拠出された金銭等を充てて行われる事業に係る業務執行が著しく適正を欠き、かつ、現に投資者の利益が著しく害されている場合等において、投資者の損害の拡大を防止する緊急の必要があるときで、これらの権利に係る同条第八項第七号から第九号までに掲げる行為。

(注) 金商法違反行為を行う者に対する裁判所への禁止命令等の申立て及びそのための調査の権限は、金融庁長官が自ら行うことを妨げない。

〔投信法〕

申立て、報告等の徴取・検査等の権限	証券監視委への権限委任規定	申立て、報告等の徴取・検査等の対象
第26条第1項(第54条第1項において準用する場合を含む。)、第219条第1項	第225条第4項第1号	<p>受益証券の募集の取扱い等を現に行い、又は行おうとする者について、以下に該当するとき。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・投信法若しくは同法に基づく命令等に違反している場合で、投資者の損害の拡大を防止する緊急の必要があるとき。 ・受益証券を発行する投資信託委託会社の運用の指図等が著しく適正を欠き、かつ、現に投資者の利益が著しく害されている場合等で、投資者の損害の拡大を防止する緊急の必要があるとき等。

申立て、報告等の 徴取・検査等の権限	証券監視委への 権限委任規定	申立て、報告等の徴取・検査等の対象
<p>第26条第7項(第54条第1項において準用する場合を含む。)、第60条第3項、第219条第3項、第223条第3項において準用する金商法第187条の規定による権限</p> <p>第60条第1項、第223条第1項</p>	<p>第225条第4項第2号</p> <p>第225条第4項第1号</p>	<p>関係人、参考人、鑑定人</p> <p>外国投資信託等の受益証券の募集の取扱い等を現に行い、又は行おうとする者について、以下に該当するとき。</p> <p>・受益証券に係る外国投資信託の資産の運用の指図等が著しく適正を欠き、かつ、現に投資者の利益が著しく害されている場合等で、投資者の損害の拡大を防止する緊急の必要があるとき等。</p>

(注) 投信法違反行為等を行う者に対する裁判所への禁止命令等の申立て及びそのための調査の権限は、金融庁長官が自ら行うことを妨げない。

第1節

第2節

第3節

1-4

第2章

証券監視委の 基本指針等



証券取引等監視委員会 中期活動方針

（第11期：2023年～2025年）

～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～

2023（令和5）年1月27日
証券取引等監視委員会

証券監視委の使命

的確・適切な市場監視¹による

1. 市場の公正性・透明性の確保及び投資者保護の実現
2. 資本市場の健全な発展への貢献
3. 国民経済の持続的な成長への貢献

証券監視委は、取引の公正を図り、市場に対する投資者の信頼を保持することを目的として平成4年に設置され、今般、節目となる30周年を迎えるとともに、第11期²が発足しました。

この間、累次の制度改正等により、市場監視権限の充実・強化が図られるとともに、新たな商品・取引等の出現により、市場監視対象の拡大・複雑化・高度化・グローバル化が進展しました。加えて、足下、新型コロナウイルス感染症や地政学リスクの高まり、経済安全保障を巡る情勢等により、市場を取り巻く環境は大きく変化しているほか、第11期の期間中においても、新たな環境変化が生じる可能性もあります。

証券監視委は、こうした大きな環境変化の中で、市場に対する幅広い監視、課徴金調査・検査や証券検査といった行政機能の迅速な発揮、重大・悪質な事案に対する厳正な対処、といった機能を引き続き適時適切に活用することで、自らの使命を果たしてまいります。

具体的には、以下のとおり、「Ⅰ. 網羅的な市場監視に向けた情報収集・分析」「Ⅱ. 効果的・効率的な調査・検査」「Ⅲ. 市場規律強化に向けた実効的な取組み」の好循環の実現に努めてまいります。また、市場監視の専門機関としての能力を向上させ、市場監視の好循環の礎とします。

¹ 市場監視とは、市場モニタリング、取引審査、証券検査、取引調査、開示検査、犯則調査等を含む、証券監視委の活動全般を指す。

² 証券監視委の委員長及び委員の任期は3年とされており（金融庁設置法第13条第1項）、この3年の期間を「1期」と呼んでいる。



具体的な施策

I. 網羅的な市場監視に向けた情報収集・分析

(1) 有用情報の収集

- 証券監視委の市場監視業務にとって「情報」は要であり、情報提供窓口・自主規制機関等を通じて、市場全体について幅広く有用な情報を収集し、活用します。
- 市場監視の過程で得られた有用な情報や知見を集約・分析・蓄積し、必要に応じ金融庁・財務局等とも共有するなど、市場監視全般に多面的・複線的に活用します。

(2) 市場の変化等の適切な把握・分析

- 株式市場と債券市場、現物市場とデリバティブ市場、発行市場と流通市場等の市場全体に日常的に目を向けるとともに、国内外の市場環境の変化を適時に把握・分析することで、問題の未然防止・早期発見につなげます。
- 市場・上場企業を取り巻く環境変化や制度見直しの進展等を踏まえつつ、新たな商品・取引や監視の目の行き届きにくい商品・取引、上場企業による開示の充実に向けた取組み等へ的確に対応し、市場監視の空白を作らない取組みを行います。

(3) 国際連携の強化

- 証券監督者国際機構（IOSCO）等の国際的な枠組みを通じた情報共有を進め、グローバルな市場監視を強化するとともに、海外当局との積極的な連携を通じて、法執行事例等の情報や市場監視に係る問題意識等を交換し、市場監視に活用します。

II. 効果的・効率的な調査・検査

(4) リスクベースアプローチに基づく証券検査

- 金融商品取引業者等について、監督部局や財務局等と連携しつつ、リスクベースで検査先を選定し、実質的に意味のある検証や問題点の指摘に努めます。問題が認められた場合、事案の全体像を把握し、その根本原因を究明することにより、自主的な改善の促進を通じて、再発防止・未然防止につなげます。

(5) 不公正取引や開示規制違反への迅速な対応

- 課徴金納付命令勧告を視野に入れた調査・検査の迅速な実施により、不公正取引や開示規制違反の実態を解明します。事案の全体像を把握し、根本原因を究明した上で、当事者等との深度ある議論を通じて、再発防止・未然防止につなげます。



- クロスボーダーの法令違反行為やグローバル企業の開示規制違反に対しては、海外当局と連携しつつ、事案の特質に応じた調査・検査を行います。

(6) 重大・悪質事案への告発等による厳正な対応

- 違反行為のうち重大で悪質なものについては、犯則調査の権限を行使し、厳正に対応します。その際、捜査・訴追当局や海外当局等の関係機関と連携し、実態の解明や責任追及を効果的に行います。

(7) 投資者被害事案に対する積極的な取組み

- 顧客本位の業務運営の確保等を通じた多様な投資者の保護の観点から、金融商品の不適切な販売・勧誘等に対する証券検査や、国内外に拠点を有し無登録で金融商品取引業を行う者及び無届で有価証券の募集等を行う者に対する裁判所への禁止命令等の申立て等、投資者被害事案に対して積極的に取り組みます。

(8) 非定型・新類型の事案等に対する対応力強化

- 証券監視委として過去に勧告・告発等した類型にも引き続き対応しつつ、市場を取り巻く環境変化等も踏まえ、市場の公正性を脅かしかねない非定型・新類型の事案等（例えば、潜脱的な大量保有・買付け、新たな類型の偽計等）についても、積極的に対応します。

Ⅲ. 市場規律強化に向けた実効的な取組み

(9) 情報発信の強化

- 投資者被害の未然防止等に資するよう、投資者への注意喚起等の情報発信を充実させます。
- 個別事案や事例集の公表等において、事案の意義、内容及び問題点を明確にした、具体的で分かりやすい情報発信を行います。これにより、意図せざるものを含む法令違反・不適切行為の未然防止や、情報提供窓口・自主規制機関等を通じた一層の情報収集につなげます。

(10) 関係機関との更なる連携強化

- 市場の構造的な問題を把握した場合には、より良い市場環境の整備に向け、積極的な貢献を行います。
- 共通の目的を有する自主規制機関等が一層主体的な役割を果たせるよう、情報・問題意識を適時に共有するなど連携を強化し、市場監視の実効性を高めていきます。



市場監視の専門機関としての能力向上

○ デジタル技術を活用した市場監視業務の高度化・効率化

- 市場監視業務の高度化・効率化を図るため、取引監視システム等における一層のデジタル化やデータ処理力の更なる向上を図るとともに、デジタルフォレンジック技術の一層の向上及び情報システムの高度化を推進します。

○ 職員の戦略的な育成・活用等

- 市場監視の力の源泉は職員であり、職員誰もがいきいきと働き、全ての職員が能力を最大限に発揮できるよう環境整備を進めます。
- 証券監視委の使命を適切に果たしていくため、高度な専門性と幅広い視点を持った職員の育成に引き続き取り組みます。
- その上で、こうした職員の能力と、法律、会計、システム、不動産、金融工学等の多様な専門家の知見とを結集し、関係機関とも連携して、複雑化・高度化する市場に対応していきます。

○ 財務局との協働・連携の推進

- 市場の公正性・透明性の確保や投資者保護の実現には、各地において市場監視機能の一翼を担う財務局との協働・連携が不可欠であり、証券検査をはじめとする様々な分野において更なる情報共有を進め意思疎通をしっかりと確保し、一体的な業務運営を図っていきます。

証券取引等監視委員会 情報提供窓口

<https://www.fsa.go.jp/sesc/watch/>

<電話・FAXによる情報提供先>

直通電話：0570-00-3581（一部のIP電話等からは03-3581-9909）におかけください。

FAX【高齢者・障がい者専用】：03-3506-6699（「証券取引等監視委員会 情報提供窓口」と明記して下さい。）

SESC 情報提供

検索



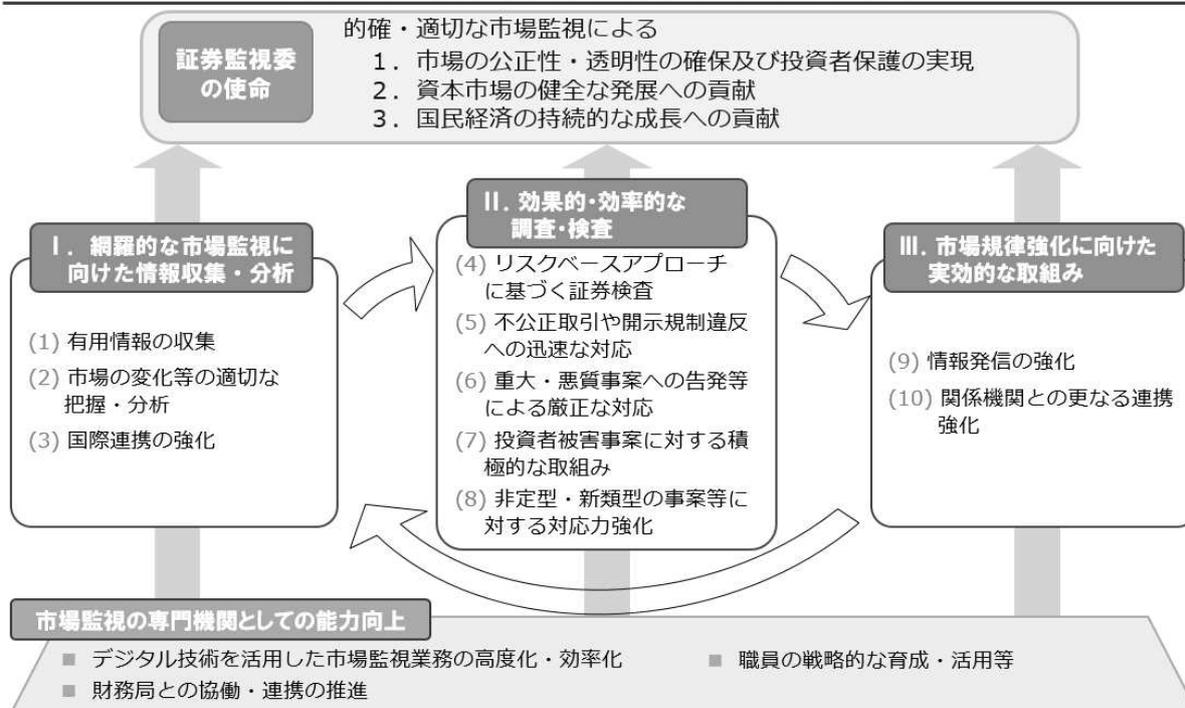
- ◆ 証券監視委では、「粉飾決算（架空売上・架空利益の計上等）」、「投資者保護上の問題（著しい高利回りを明示する金融商品等）」、「市場における不正取引（インサイダー取引、相場操縦等）」などの情報を幅広く受け付けています。

証券取引等監視委員会 中期活動方針

（第11期：2023年～2025年）



～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～



今後の証券モニタリングの基本的な考え方

令和2年6月

証券取引等監視委員会

今後の証券モニタリングの基本的な考え方

本文書は、金融商品取引業者等に対するモニタリング(証券モニタリング)に関し、証券取引等監視委員会(証券監視委)がオン・オフ一体のモニタリング¹に取り組む中、金融庁から先に公表された方針・指針等を踏まえつつ、今後の証券モニタリングの基本的な考え方を、関連文書も含めて整理したものである。

I. 証券モニタリングの現状と課題

1. 証券監視委のこれまでの取組

(1) リスクベースに基づくオン・オフ一体のモニタリング

証券監視委では、監督部局との連携を通じて、金融商品取引業者等の経営管理(ガバナンス)の有効性、取扱金融商品や取引等のビジネスの特性、リスク管理の適切性や財務の状況等を的確に把握し、延べ7千を超える金融商品取引業者等が抱えるリスクの特性に応じた、オン・オフ一体のモニタリングを行っている。

特にオンサイト・モニタリングにおいては、問題の全体像を把握したうえで、根本的な原因を究明し、再発防止につながる深度のある検証に取り組んでいる。

(2) 証券監視委で策定した方針等

これまで証券監視委では、上記(1)のオン・オフ一体のモニタリングを行うために、金融商品取引法を始めとする関連法令に基づくほか、以下の方針及び指針等を策定・公表し、これらを踏まえた証券モニタリングに取り組んでいる。

① 証券取引等監視委員会 中期活動方針

証券監視委を取り巻く環境を踏まえた3年ごとの活動方針

② 証券モニタリング基本方針

時々の経済・市場環境等を踏まえた、証券モニタリングに関する事務年度ごとの重点的な取組事項等

③ 金融商品取引業者等検査マニュアル(証券検査マニュアル)

オンサイト・モニタリングの着眼点や留意点を例示した検査官向けの手引

④ 証券モニタリングに関する基本指針

主としてオンサイト・モニタリングの手続

2. 証券監視委の証券モニタリングにおける今後の課題

上述のとおり、証券監視委では、監督部局との連携の下、オン・オフ一体のモニタリ

¹ 証券モニタリングは、オンサイトとオフサイトのモニタリング双方を包含している。このうち、オンサイト・モニタリングとは、オンサイトによる検査を示し、オフサイト・モニタリングとは、オンサイトによる検査以外で、金融商品取引業者等に対する報告徴取及びヒアリング等を通じた情報収集等を幅広く行う活動であり、主として監督部局と連携して行う活動を示す。

ングを行っているが、金融庁において、平成30年6月以来、全ての金融機関等の検査・監督をスコープに入れて、基本的な考え方の整理が行われている(注)。こうした中、証券監視委の証券モニタリングを一層効果的・効率的に行うためには、検査・監督の着眼点や留意点の共通化や明確化を図ることが重要な課題となっている。

以下は、証券監視委の方針及び指針等と、金融庁から公表されている検査・監督基本方針、監督指針及びディスカッション・ペーパー等との関係を含め、証券監視委の今後の証券モニタリングにおける基本的な考え方及び進め方を示すものである。

(注) 金融庁における検査・監督の考え方

金融庁においては、平成30年6月に、検査・監督対象となる全ての金融機関等の検査・監督全般に共通する基本的な考え方と進め方を定めた、「金融検査・監督の考え方と進め方」(検査・監督基本方針)を策定・公表し、以下の考え方を示している。

- 従来の定期検査だけでは、前回検査以降の環境変化や新たな課題の発生に機動的に対応できないこと等から、継続的な情報収集と対話の下に各金融機関等の特性を把握し、課題の性質に応じてオンサイトとオフサイトのモニタリングを機動的に使い分け、改善状況をフォローアップする、オン・オフ一体の継続的なモニタリングへの転換
- 今後の検査・監督の進め方として、最低基準の遵守状況を確認する「最低基準検証²」、持続的な最低基準充足を確保するための「動的な監督」、ベスト・プラクティスのための「見える化と探求型対話」の3つの手法の使い分け
- 個別のテーマ・分野(コンプライアンス・リスク管理、顧客本位の業務運営、ITガバナンス、健全性政策等)については、監督指針とともにプリンシプルや金融機関との対話のための材料であるディスカッション・ペーパー等の活用

II. 今後の証券モニタリングについて

1. 基本的な考え方

証券監視委では、今後とも、金融商品取引業者等が法令等に基づき適正に業務を行っているか、引き続き厳正に検証していく。

その際、法令違反行為等の検証のみにとどまらず、将来の最低基準抵触の蓋然性も含めた問題の全体像の把握を行い、根本原因の究明やフォワード・ルッキングな視点からの検証に際しては、引き続き、業務運営態勢(経営管理態勢、内部管理態勢・法令等遵守態勢、リスク管理態勢、内部(外部)監査態勢、危機管理態勢)の整備状況に着眼する³。

² 最低基準の中には、利用者保護、市場の公正性・透明性の確保を目的として制定された諸法令や、経営管理・顧客保護・リスク管理のために最低限必要とされる態勢等が含まれている。

³ 証券検査マニュアルに記載のある上記5つの業務運営態勢の整備については、根本原因の究明や将来の最低基準抵触の蓋然性の評価のため引き続き重要であることから、今後も証券モニタリングの着眼点としていく。

特に、金融グループ等に属する金融商品取引業者等のモニタリングに当たっては、監督部局等と連携し、当該金融商品取引業者等が属する金融グループ全体のビジネスモデルや経営方針等を含めた多角的な観点からモニタリングを行う。

2. モニタリングの進め方

(1) ルールベースの検証

金融商品取引法及び関連法令においては、金融商品取引業者等が市場の公正性・透明性の確保及び投資者保護等を図るうえで遵守すべき最低限度のルールが規定されている。今後も、金融商品取引法及び関連法令等の規定に基づき、金融商品取引業者等の業務が適正に行われているか、引き続き厳正に検証を行っていく。その際、個別の規定の適用に当たっては、法令の趣旨・目的に遡って保護すべき重要な法益等を踏まえた検証を行う。

(2) 根本原因の究明や将来の最低基準抵触の蓋然性の評価のための業務運営態勢

検知された法令違反行為等の根本原因の究明や将来の最低基準抵触の蓋然性の評価に当たっては、金融庁から公表されている監督指針⁴を踏まえ業務運営態勢の適切性を検証するほか、検査・監督基本方針、プリンシプルや分野ごとのディスカッション・ペーパー等の考え方・進め方も踏まえながら取り組む。

例えば検査・監督基本方針に関しては、事案の内容に応じて、以下の考え方を踏まえることとする。

- 問題事象の根本原因の追究を通じて将来に向けた実効性ある改善策を議論することや、ガバナンス・企業文化・内部管理態勢が全体として必要な実効性を有しているかを評価することが重要であること
- 足元で利用者保護や不公正取引に関する問題事象が生じていなくても、金融機関のビジネスモデル、社会経済環境、規制動向、社会的な期待目線の高まり等から将来において問題事象が発生する蓋然性が高まっている場合、将来的に最低基準に抵触する蓋然性が高いこと

(3) 事務年度ごとの重点的なモニタリング方針

金融商品取引業者等を取り巻く経済環境等の変化を踏まえたフォワード・ルッキングな視点からのモニタリングの方針や重点事項等は、金融庁から公表される金融行政の方針⁵等を踏まえつつ、中期活動方針や証券モニタリング基本方針において定める。

⁴ その他監督指針等としては、信用格付業者向け、高速取引行為者向け、清算・振替機関等向けや「マネー・ローンダリング及びテロ資金供与対策に関するガイドライン」がある。

⁵ 例えば令和元事務年度の場合、「金融行政のこれまでの実践と今後の方針」(令和元年8月28日策定)を示す。

(4) 検査手続

検査の実施手続は、引き続き証券モニタリングに関する基本指針を使用していく。

3. 証券検査マニュアルの取扱い

(1) 現状⁶

平成 13 年に策定した証券検査マニュアル⁷は、金融商品取引業者等の業務運営態勢に着眼した態勢編及び金融商品取引業者等の業務プロセスに沿って法令等遵守の確認項目を例示した業務編から構成されているところ、証券監視委においては、これまで主として検査官の手引書として活用してきた。

こうした中、現状において、態勢編は、その大部分において監督指針と内容が重複している。また、業務編は、金融商品取引業者等の取引やそのビジネスモデル等の複雑化・多様化が急速に進む環境下において、個々の金融商品取引業者等が抱えるリスクに応じた検証が求められている中、証券検査マニュアルのチェックリスト形式による一律の検証を行う意義は薄れてきたと考えられる。

(2) 証券検査マニュアルの廃止等

上記を踏まえ、証券検査マニュアルの態勢編については、オン・オフ一体のモニタリングの下、金融商品取引業者等の業務の検証において必要となる考え方も含めて、監督指針へ引き継ぐ。

また、業務編については、こうした記載項目に依拠した業務プロセスの構築が、形式面のみを重視することにつながるおそれがあり、また、本来、金融商品取引業者等がそれぞれの業務の規模や特性に応じて自ら実効性ある事務手続の方法を策定すべきものであるとの観点から、廃止⁸する。

証券検査マニュアルの態勢編及び業務編に関する上記措置は、本文書の策定と同時に実施する。

なお、証券検査マニュアル廃止後の証券モニタリングに係る方針・指針等については、別紙のとおりとなっている。

以上

⁶ 金融庁においては、令和元年 12 月に預金取引等金融機関や保険等の検査マニュアルを廃止した。

⁷ 元々、「証券会社に係る検査マニュアル」として平成 13 年 6 月に策定・公表。その後、「証券検査マニュアル」、「金融商品取引業者等検査マニュアル」に改名して存続してきた。

⁸ 「金融商品取引業者等検査マニュアル」の別冊である「信用格付業者検査マニュアル」も併せて廃止する。

施行日

令和2年6月26日 策定

第1節

2-2

第3節

第4節

(別紙)

令和4年3月31日現在

証券検査マニュアル廃止後における 証券モニタリング関係の方針・指針等⁹

【証券監視委公表分】

- 今後の証券モニタリングの基本的な考え方（令和2年6月26日策定）
- 証券モニタリングに関する基本指針
（平成17年7月14日策定 直近改正：令和4年3月31日）
- 証券取引等監視委員会 中期活動方針(第10期)（令和2年1月24日公表）
- 令和3事務年度 証券モニタリング基本方針（令和3年8月6日策定）

【金融庁公表分】

- 金融検査・監督の考え方と進め方(検査・監督基本方針)
（平成30年6月29日策定）

(監督指針等)

- 金融商品取引業者等向けの総合的な監督指針
（平成19年9月30日策定）
- 信用格付業者向けの監督指針
（平成22年4月1日策定）
- 高速取引行為者向けの監督指針
（平成29年12月27日策定）
- 金融サービス仲介業者向けの総合的な監督指針
（令和3年11月1日策定）
- 清算・振替機関等向けの総合的な監督指針
（平成25年12月10日策定）
- 指定紛争解決機関向けの総合的な監督指針
（平成25年8月2日策定）
- マネー・ローンダリング及びテロ資金供与対策に関するガイドライン
（平成30年2月6日制定）

※上記監督指針等は、[金融庁ウェブサイト](#)を参照

(ディスカッション・ペーパー等)

- コンプライアンス・リスク管理に関する検査・監督の考え方と進め方(コンプライアンス・リスク管理基本方針)（平成30年10月15日策定）
- 金融システムの安定を目標とする検査・監督の考え方と進め方(健全性政策基本方針)
（平成31年3月29日策定）
- 金融機関のITガバナンスに関する対話のための論点・プラクティスの整理
（令和元年6月21日策定）
- 金融機関の内部監査の高度化に向けた現状と課題
（令和元年6月28日公表）

⁹ これらの方針・指針等が改定・実施された場合、特に別段の定めがある場合を除き、改定後の方針・指針等に基づくものとする。

- 顧客本位の業務運営に関する原則（平成29年3月30日公表、令和3年1月15日改訂）
- 2021事務年度 金融行政方針（令和3年8月31日策定）

証券モニタリングに関する基本指針

令和6年4月

証券取引等監視委員会

本指針は、証券モニタリングの過程において、証券取引等監視委員会（以下「証券監視委」という。）及び財務局等（財務局、財務支局及び沖縄総合事務局をいう。以下同じ。）が実施する検査に係る基本的な手続を示したものである。

検査は、リスクベースに基づく証券モニタリングを実施する上での一手段であり、ルールベースの検証のみにとどまらず、根本原因の究明や、フォワードルッキングな観点からの検証も行う。他方で、検査は検査対象先に相応の負担等をもたらすおそれがあり、検査対象先の理解と協力を得ることも重要である。

そのため、検査官及び検査対象先双方が、検査の実施手続を理解し、適正なプロセスに則って、円滑かつ効果的な検査を実施することが重要である。

したがって、本指針について検査対象先が理解していることを確認するとともに、本指針に規定のない取扱いを行う際には、随時、検査対象先へ説明する等の配慮が必要である。

（注1）証券モニタリングとは、検査とモニタリングの双方を包含している。

また、検査は、法令の検査権限に基づく検査を指し、モニタリングは、検査以外で証券監視委、監督部局（検査対象先に対する監督権限を有する部局をいう。以下同じ。）、検査部局、財務局等が連携し、あるいは必要に応じて直接に、金融商品取引業者等に対する報告徴取、ヒアリング、関係先（証券監視委、金融庁の関係部署等及び必要に応じて、自主規制機関（金融商品取引業協会並びに金融商品取引所及び自主規制法人をいう。以下同じ。）等）との意見交換等を通じた情報収集等を幅広く行うことを指す。

（注2）本指針において、金融商品取引業者等とは、金融商品取引業者、登録金融機関のほか、適格機関投資家等特例業務届出者、金融商品仲介業者、信用格付業者、自主規制機関等法令に基づいて行う検査対象先を指す。

I 検査の準備

1. 検査官の心構え

検査官は、以下の心構えを持って業務を遂行するものとする。

(1) 綱紀・品位・秘密の保持

検査官は、国民の信用・信頼を確保するため、常に綱紀・品位の保持に努めるとともに、証券モニタリングの遂行に当たって知り得た秘密を漏らしてはならない。

(2) 適正な手続の遵守

検査官は、金融商品取引法（以下「金商法」という。）等の規定の趣旨を十分に理解した上で、証券モニタリングが私企業又は個人に対するものであることを自覚し、常に適正な手続に基づいて実施しなければならない。

(3) 効率的・効果的な証券モニタリングによる実態の把握と根本原因の究明

検査官は、証券モニタリング対象先と接する際には、常に穏健、冷静な態度を保ち、相手方の説明を慎重に聴取しなければならない。また、検査官は、不断に証券モニタリングに必要な情報の収集・分析に努めるとともに、フォワードルッキングな観点を持ち、様々な情報を幅広い視点で検証することに努めるものとする。さらに、検査官は、創意工夫を通じて、効率的・効果的な証券モニタリングを行うことで、証券モニタリング対象先のビジネスモデル（業務の実態、取扱商品、収益構造等を指す。以下同じ。）や業務等の正確な実態を把握するとともに、問題点を把握したときは、その根本原因（例えば、企業文化、経営方針、ガバナンス（経営管理態勢を指す。以下同じ。）等）の究明に努めなければならない。

(4) 自己研さんと能力の発揮

検査官は、金融・証券に関する法令・諸規則等を正しく理解し、新たな金融商品、取引手法等の習得に努めるとともに、金融商品市場等の動向に広く目を向けるなど、常に自己研さんに努めなければならない。また、全ての検査官が、持てる能力を最大限発揮して業務を遂行するように努め

なければならない。

2. 検査実施の検討

検査は、原則として、検査対象先の本店、支店又はその他の営業所等を訪問して、モニタリングで把握した課題について、帳簿書類その他の物件を検査する方法（以下「臨店検査」という。）により行うものとする。

（1）検査対象先の選定

検査の実施に当たり、モニタリングにおけるリスクアセスメントの結果等を総合的に勘案した上で、リスクベースでその対象先を選定する。

（2）検査の種類

検査の種類は、次のとおりとする。

- ① 一般検査
検査対象先に係る業務運営等の全般について行う検査をいう。
- ② 特別検査
検査対象先に係る業務運営等の一部について行う検査をいう。

（3）検査の方法

一般検査及び特別検査は、証券監視委又は財務局等が、単独で担当する検査対象先に対して行うほか、次の方法により行うものとする。

- ① 合同検査
証券監視委又は財務局等が担当する検査対象先に対して行う検査のうち、担当以外の財務局等又は証券監視委が、合同して当該検査対象先に対して行う検査をいう。
- ② 支店単独検査
証券監視委又は財務局等が担当する検査対象先の支店等のみに対して行う検査（①に掲げるものを除く。）をいう。
- ③ グループ等一体型検査
証券監視委又は財務局等が担当する検査対象先の親子法人や契約先など、グループ等に対して必要に応じて一体的に行う検査をいう。
- ④ 同時検査
効率的・効果的な検査の実施に資するため、金融庁の検査部局と時期を同じくして行う検査をいう。

（注）留意事項

合同検査の実施に当たっては、合同して行う証券監視委、財務局等の間で、十分調整の上行うものとする。

支店単独検査は、当該支店独自の問題点の検証に加え、本店等検査の際に指摘した事項の支店等における改善状況及び次回の本店等検査の参考となる事項を検証する。

また、同時検査の実施に当たっては、金融庁の検査部局との間で、十分調整の上行うものとする。

3. 検査命令書の作成

検査命令書（別紙様式1）は、証券監視委においては委員長名、財務局等においては財務局長等（財務局にあつては「財務局長」、財務支局にあつては「財務支局長」、沖縄総合事務局にあつては「沖縄総合事務局長」。以下同じ。）名で作成する。

4. 検査基準日

検査基準日は、検査実施の基準となる特定の日であり、原則として、臨店検査着手日の前営業日とする（予告検査を行う場合については、検査予告日の前営業日とする。）。

（注）財務数値や営業の状況等については、必ずしも検査基準日時点での検証を要するというものではない。

5. 予告検査

（1）予告検査

臨店検査については、原則、無予告検査とするが、検査対象先の業務の特性、検査の重点事項、検査の効率性、検査対象先の受検負担の軽減等を総合的に勘案し、必要に応じて、予告検査とする。

（2）検査予告時期

検査予告は臨店検査着手日のおおむね1週間から2週間前に主任検査官が検査対象先の責任者に対して行うものとし、臨店検査着手日等必要な事項を伝えるものとする（Ⅱ1.（1）口参照）。

6. 検査の実施

検査においては、金融商品取引業者等が取り扱う商品の内容や取引スキームについて深度ある分析を行った上で、業務運営の適切性等について検証を行い、問題が認められた場合には、法令等違反行為等の指摘にとどめることなく、その問題の根本原因を究明するように努めるものとする。

II 検査の手順等

1. 臨店検査

(1) 検査命令書等の提示及び説明事項

イ. 主任検査官は、臨店検査着手時に検査対象先の責任者に対し、検査命令書及び検査証票を提示し、原則として、以下の事項について説明を行うものとする。

- ① 検査の権限及び目的（一般検査・特別検査の別を含む。また、検査の実効性の確保に支障が生じない範囲で、検査の重点分野にも言及する。）
- ② 検査への協力依頼（検査を受けて（予告検査の場合は、検査予告後）、書類や電子メールの破棄等が認められた場合には、検査忌避行為として厳格に対処する旨も併せて伝達する。）
- ③ 検査のプロセス（初回検査先以外は省略可。）
- ④ 検査関係情報（Ⅱ 1.（2）①参照）の第三者への開示制限の概要
- ⑤ 意見申出制度の概要（Ⅲ 1.「意見申出制度」参照）
- ⑥ 検査モニターの概要（Ⅲ 2.「検査モニター」参照）
- ⑦ 必要な提出資料の提示（Ⅶ 2.「提出資料一覧」参照）
- ⑧ その他必要な事項

なお、検査官は、相手方に検査証票を提示できるよう、常に携帯する必要がある。

- ロ. 予告検査の場合には、検査予告時に、
- i. 上記①及び②の項目の説明、
 - ii. 臨店検査着手日の伝達並びに
 - iii. これ以降の資料保存等の要請をするとともに、その後速やかに必要な提出資料の提示をするものとする。
- また、それ以外の項目については、臨店検査初日までに提示及び説明す

るものとする。

(2) 検査関係情報の第三者への開示制限

① 臨店検査着手時の説明事項

主任検査官は、臨店検査着手時（予告検査の場合は、予告後速やかに）に検査対象先の責任者に対して、検査関係情報（検査を受けている事実、検査中の検査官からの質問、指摘、要請その他検査官と検査対象先の役員等とのやりとりの内容及び検査終了通知書をいう。以下同じ。）の第三者への開示制限の概要を説明するに当たっては、以下の事項を説明するものとする。

- ・ 検査関係情報は、検査対象先の顧客、取引先等に係る保秘性の高い情報、更には検査の具体的な手法等に関わる情報が含まれていること。
- ・ 適切な情報管理を行い、検査の円滑な実行を阻害しないため、検査関係情報を証券監視委事務局証券検査課長（以下「証券検査課長」という。財務局等にあつては、証券取引等監視官）又は主任検査官の事前の承諾なく第三者に開示しないこと。
- ・ 上記を理解の上、検査関係情報を証券検査課長（財務局等にあつては、証券取引等監視官）又は主任検査官の事前の承諾なく第三者に開示しないことの承諾書（以下「第三者非開示承諾書」という。（別紙様式2））に記名すること。

② 第三者非開示承諾書の提出

検査関係情報は、その取扱いに慎重を期す観点から、以下のとおり取り扱うものとする。

- イ. 主任検査官は、臨店検査着手時（予告検査の場合は、予告後速やかに）に、検査終了通知書交付前であれば主任検査官（検査終了通知書交付後であれば証券検査課長（財務局等にあつては、証券取引等監視官））の事前の承諾なく、検査関係情報を第三者に開示してはならない旨を記載した第三者非開示承諾書に検査対象先の責任者から記名を受けるものとする。
- ロ. ただし、検査・監督部局、自主規制機関及びこれらに準ずると認められる者並びに検査対象先の組織内に設置された内部管理を目的とした委員会等の構成員となっている外部の弁護士、公認会計士、不動産鑑定士等の専門家については、開示制限の対象となる第三者に該当しないものとする。

③ 検査関係情報開示承諾申請書の提出

- イ. 主任検査官（検査終了通知書交付後であれば証券検査課長（財務局

等にあつては、証券取引等監視官))は、検査対象先から第三者への開示の申出があつた場合には、当該検査対象先から書面による申請(以下「開示承諾申請」という。(別紙様式3))を求めるものとする。

検査対象先から開示承諾申請が行われることが想定される事例としては、以下のとおり。

- ・ 検査対象先の経営管理会社その他の親法人等への開示
- ・ 検査対象先又は検査対象先の経営管理会社の適切な業務運営に資するとの観点から行われる弁護士、外部監査人、業務委託先等への開示
- ・ 検査対象先に係るデュー・ディリジェンスの目的で行われる企業結合等の当事者への開示
- ・ 検査対象先に係る破産手続又は民事再生手続が開始された場合における管財人又は監督委員への開示

ただし、以下の場合には開示承諾申請を要しないものとする。

- ・ 検査対象先の経営管理会社への開示であつて、過去の検査において、当該経営管理会社に対する開示承諾を受けている場合(当該経営管理会社に変更がない場合に限る。)
- ・ 検査期間中に主任検査官の求めにより、検査対象先が、第三者(例えば、業務委託先)に検査に係る事項について確認をするため当該第三者に対して行う開示であつて、当該確認のため必要な限度内で検査関係情報を開示する場合
- ・ 検査対象先が、検査期間中に、当該検査対象先と契約関係にある外部の弁護士、公認会計士、不動産鑑定士等の専門家に対して相談のために行う開示であつて、当該開示について事前に主任検査官に報告が行われ、主任検査官が検査の実行性及び保秘の観点から支障がないと判断した場合

- ロ. 検査対象先から開示承諾申請があつた場合、主任検査官(検査終了通知書交付後であれば証券検査課長(財務局等にあつては、証券取引等監視官))は、i. 開示の必要性、ii. 開示対象者における保秘義務の状況(守秘義務契約の締結等)、iii. 検査の実効性への影響等を総合的に勘案して承諾の可否を判断し、書面で回答するものとする。

(3) 検査資料の徴求

① 既存資料の有効活用

検査官は、原則として、検査対象先の既存資料等を活用するものとし、検査対象先の負担軽減に努めるものとする。なお、既存資料以外の資料を求める場合には、当該資料の必要性等を十分検討するものとする。

② 資料徴求の迅速化

検査官は、検査対象先に対し資料の提出を依頼する場合には、原則として、内部管理部門等を通じて一元的に行うよう努めるとともに、依頼の趣旨を明確に説明するものとする。

検査官は、徴求する資料について、臨店検査における優先順位や検査対象先への負担等を考慮し、必要に応じて、書面を取り交わすなどして迅速かつ正確に処理するものとする。

主任検査官は、各検査官の検査対象先に対する資料徴求の状況を常時把握し、徴求する資料の重複等がないように努めるものとする。

③ 資料の借用

検査官は、的確かつ効率的な実態把握のため必要な場合には、検査対象先より、資料等の現物を借り受けるものとする。

その際、主任検査官は、原則として、検査対象先に対して借用書を交付するものとし、借り受けた資料等については、適切な管理を行うとともに、早期の返却に努めるものとする。

④ 資料の返却等

検査官は、臨店検査期間中、検査対象先から業務に必要な資料等として検査会場からの持出しや返却等の要求があった場合には、検査に支障が生じない範囲内で検査会場からの持出しや返却等を認めるものとする。

(4) 現物検査

① 検査対象先の実態把握やその業務の適切性の検証を効果的に行うため、主任検査官が必要と判断した場合、検査官が検査対象先の役職員が現に業務を行っている事務室、資料保管場所等に直接赴き、原資料等を適宜抽出・閲覧する現物検査を行うものとする。

② 検査官は、現物検査の実施に際しては次の点に留意し、特に慎重に行うものとする。

イ. 検査対象先の責任者等1名以上を立ち合わせ、的確かつ迅速に行うとともに書類の紛失等の事故がないように留意する。

ロ. 検査対象先の役職員から私物である旨の申出があった場合であっても、必要かつ適当と認められる場合には現物検査を行うものとするが、相手方の承諾を得て現物検査を実施するよう努める。

(5) 検査対象先の業務等への配慮

主任検査官は、検査対象先の業務等に支障が生じないように以下の点に留意するものとする。

- ① 小規模な検査対象先に対する臨店検査に当たっては、その対応能力を踏まえ、業務の円滑な遂行に支障が生じないように配慮する。
- ② 臨店検査は、検査対象先の就業時間内に実施することを原則とし、やむを得ない事情により就業時間外に行おうとするときは、検査対象先の承諾を得るものとするが、合理的な理由なく恒常的に就業時間外に臨店検査を行うことのないように配慮するものとする。

(6) 双方向の対話を重視した検査の実施

主任検査官は、効率的・効果的な臨店検査を実施する観点から、下記のとおり経営陣と意見交換を行うなど、臨店検査の目的や状況等を総合的に勘案しつつ、検査対象先との双方向の対話を重視した臨店検査の実施に努めるものとする。

- ① 臨店検査初日（初日に実施できない場合には、可能な限り速やかに）に意見交換を行い、経営陣の内部管理やリスク管理に対する認識等の把握に努める。
- ② 臨店検査期間中は、検査対象先との双方向の対話を重視し、検査対象先のビジネスモデル、ガバナンス、内部管理態勢等のほか、個別の問題点等について、深度ある議論に努める。

また、主任検査官と検査対象先との間で認識の相違する事実が認められた場合は、双方向の対話を通じ、深度ある議論を行った上で、問題点・相違点等の認識の共有を図るよう努める。

主任検査官は、臨店検査先店舗が複数ある場合には、必要に応じ店舗を巡回し、当該店舗の責任者等と面談を行うことにより業務の実情を把握し、もって当該検査対象先全体の業務の動向等を把握するよう努める。

- ③ 臨店検査終了時に意見交換を行い、臨店検査期間中に議論してきた事実関係に係る認識を最終的に確認するものとする。
- ④ 主任検査官は上記以外にも、必要に応じて、臨店検査の進捗状況や、検査対象先の臨店検査への対応、検査官の検査手法等について経営陣

と意見交換を行うものとする。また、検査対象先が初回検査である場合は、意見交換によりその業務内容や特性等の把握に努めるものとする。

(7) 事実の解明又は認定

検査官は、臨店検査期間中、事実の解明又は認定に努めるものとし、その解明又は認定した事実に基づき、検査官の私見により断定的にその是非を述べる事又は是正措置を指示すること等のないよう留意する。ただし、これは事実認定の一環として検査対象先の自主的な改善に向けた取組みを聴取することを妨げるものではない。

(8) 計数等による実態把握

臨店検査に当たっては、検査対象先からの口頭説明等のみに依存することなく、経営管理の状況、業務運営等の状況及びそれらに関する法令等の遵守状況について、計数等の客観的資料に基づいて実態を的確に把握するよう努めるものとする。

(9) 事実及び経緯の記録

検査官は、ヒアリングや帳簿その他の証書類の調査・検討を行うことにより問題点等を的確に把握し、主任検査官に報告後、検査対象先の役職員から書面の提出を求める等の方法により、事実関係の確認を得るものとする。

事実関係の確認のため、検査対象先の役職員から書面の提出を求める際には、主任検査官はその必要性を十分考慮した上で行うものとし、以下の方法によるものとする。

① 整理票（別紙様式4）

検査官が問題点として指摘する可能性のある事実関係及び当該事実関係に対する検査対象先の認識を確認するため、必要に応じて、整理票を作成する。

② 質問票（別紙様式5）

事実関係について検査対象先の担当者等に回答を求めるため、必要に応じて、質問票を作成する。

③ モニタリング確認票（別紙様式6）

検査基準日現在で具体的な問題は生じていないものの、ビジネスモデルの変化等に応じ、フォワードルッキングな観点からガバナンスや内部管理態勢上の課題と考えられる事項を把握・認識共有するために、検査対象先と認識共有ができた事項（以下「留意すべき事項」という。）

について、必要に応じて、モニタリング確認票を作成する。

なお、主任検査官は、モニタリング確認票で確認した内容については、深度ある議論により検査対象先との間で課題として認識共有ができたものに限ることから、検査対象先に意見申出の対象とはならないこと、検査終了通知書に記載することを前提としていることを伝える。

(10) 業務運営等の基本的な問題の把握

検査官は、臨店検査において認められた業務運営上の問題及び課題について、事実関係や経緯等を詳細に分析することにより、法令等に抵触するか否かの検証にとどまらず、内部管理やリスク管理などの管理上の問題との関連性を検討し、業務運営上の問題の根本原因を追究するものとする。更に、ビジネスモデルや業務運営状況、経営方針等との関連性を検証することにより、経営管理上の基本的問題点の把握に努めるものとし、必要に応じ、整理票及びモニタリング確認票を作成するものとする。

(11) 臨店検査におけるその他の留意事項

① ヒアリングへの他の役職員の同席

検査官は、役職員に対するヒアリングの際、検査対象先から他の役職員の同席を依頼された場合は、臨店検査に支障が生じない範囲内で、これを認めるものとする。

同席を認めない場合は、その合理的な理由を検査対象先に対して説明するものとする。

② 検査対象先からの申入れ等

検査官は、検査対象先から臨店検査に関する申入れ等があった場合には、主任検査官に報告するものとする。主任検査官は、当該申入れ等について慎重な取扱いが必要であると判断した場合には、証券取引等監視委員会事務局証券検査課証券検査指導官（以下「証券検査指導官」という。）と対応について協議を行った上、証券検査課長へ報告（財務局等にあつては、財務局等の定めるところにより、証券取引等監視官へ協議ないし報告）し、必要な指示を受けるものとする。

③ 反面調査

主任検査官は、顧客等から検査対象先との取引状況等の確認（反面調査）を行う必要があると判断した場合には、証券検査指導官と協議した上、証券検査課長へ報告（財務局等にあつては、財務局等の定めるところにより、証券取引等監視官へ協議ないし報告）し、指示を受けて反面調査を行うものとする。

④ 業務委託先等に対する検査が必要な場合の対応

主任検査官は、業務委託先、主要株主、金融商品取引業者を子会社とする持株会社等への検査を行う必要があると判断した場合には、証券検査指導官と協議した上、証券検査課長へ報告（財務局等にあつては、財務局等の定めるところにより、証券取引等監視官へ協議ないし報告）する。当該検査については、証券検査課長（財務局等にあつては、証券取引等監視官）がこれらの者に対して検査を行う必要があると認めた場合に、必要な手続を経て、これを実施するものとする。

⑤ 問題発生時の対応

主任検査官は、臨店検査の拒否、妨害、忌避その他重大な事故等（以下「検査拒否等」という。）により臨店検査の実施が困難な状況になったときは、検査対象先に対して受検等の説得に努めるとともに、検査拒否等の経緯、理由、検査対象先の言動その他の事実関係を詳細に記録し、直ちに証券検査指導官へ連絡するものとする。証券検査指導官は、速やかに主任検査官とその対応策を協議し、証券検査課長へ報告を行い、指示を受け、これを主任検査官へ連絡するものとする（財務局等にあつては、財務局等の定めるところにより、証券取引等監視官へ協議ないし報告し、指示を受けるものとする。）。

この際、主任検査官は、検査対象先の責任者に対し、事実確認を行うとともに、検査拒否等に係る理由書を求める等適切な措置を講ずるものとする。

⑥ 災害発生時等の対応

イ. 主任検査官は、災害発生により検査対象先が被災した場合には、直ちに証券検査課長（財務局等にあつては、証券取引等監視官）にその旨を報告し、指示を受けるものとする。証券検査課長（財務局等にあつては、証券取引等監視官）は、検査対象先における復旧業務を優先すべき観点から、主任検査官を通じた検査対象先との協議を可能な限り経た上で、検査を一時的に中断又は中止することを検討するものとする。

また、検査対象先が被災していない場合においても、証券検査課長（財務局等にあつては、証券取引等監視官）は、必要に応じて主任検査官を通じた検査対象先との協議を可能な限り経た上で、検査を継続するか否かを検討するものとする。

上記検討の結果、検査を継続、中断又は中止する場合は、主任検査官は、検査対象先の責任者に対して、その旨を口頭により伝達するものとする。

ロ. 主任検査官は、災害以外にも、以下の場合等においては、証券検査指導官と相談を行った上、証券検査指導官が証券検査課長へその旨報告（財務局等にあつては、財務局等の定めるところにより、証券取引等監視官へ相談ないし報告）し、指示を受けるものとする。検査の一時的な中断又は中止の検討、検討の結果については、上記と同様の取扱いとする。

a. 一時的な中断の検討

- ・ 検査対象先の作業に長時間を要する場合
- ・ 検査対象先との間で重大な問題点等について認識の相違がある場合

b. 一時的な中断又は中止の検討

- ・ 会社の消滅、重大なシステム障害等の特別な事情により、検査の継続が困難であると考えられる場合

2. 臨店検査終了後

（1）検査結果の取りまとめ

主任検査官は、臨店検査終了後の検査結果の取りまとめに当たっては、個々の事案の事実を的確に把握するとともに、事案の特徴及び現象がどのような根本原因によるものかを正確に把握し、問題点等として抽出するものとする。

また、上記の結果、抽出された問題点等については、必要に応じて、証券取引等監視委員会事務局証券検査課審査担当係（財務局等にあつては、審査担当係等を経由。）と密接な連携を図りつつ、取りまとめるものとする。

（2）講評等

- ① 主任検査官は、臨店検査終了後、指摘事項や留意すべき事項を整理し、（指摘事項がない場合は可能な限り速やかに）、検査対象先の責任者に対し、以下の方法により、当該検査の講評を行うものとする。

ただし、証券検査課長（財務局等にあつては、証券取引等監視官）が公益又は投資者保護上緊急を要すると判断した場合等については、講評を行わない場合もある。

（注）指摘とは、検査により検査対象先の問題点と判断した事項を、当該検査対象先に検査結果として通知する事実行為をいう。

- イ. 検査で認められた法令等違反行為等及び留意すべき事項を伝達す

る。また、問題が認められない場合にはその旨を伝達する。

ロ. 上記イ. のうち法令等違反行為等については、検査対象先と認識が相違した事項（以下「意見相違事項」という。）を確認する。

② 主任検査官は、講評内容に変更が生じた場合は、必要に応じて、改めて講評を行う旨を説明するものとする。

③ 講評の際の出席者

イ. 証券監視委又は財務局等

原則として、主任検査官のほか担当検査官1名以上とする。

ロ. 検査対象先

検査対象先の責任者の出席を必須とする。当該責任者が検査対象先の他の役職員の出席を要望した場合は、特段の支障がない限りこれを認めるものとする。

④ 講評方法

講評は、主任検査官が、検査対象先の責任者に対して、原則として、口頭により伝達（証券検査課長（財務局等にあつては、証券取引等監視官）が効率性等の観点からその他の手段による伝達が適当と判断した場合は、その他の手段により伝達）する。なお、講評（留意すべき事項を除く）は、意見申出の前提となるものであること等を踏まえ、その実施に際しては、検査対象先に十分内容を伝えるものとする。

また、主任検査官は必要に応じて、検査対象先の監査関係者に対しても検査結果を講評時等において共有する等、改善に向けた自主的な取り組みの促進に資するよう努めるものとする。

（3）検査終了の通知

検査終了通知書は、証券監視委の議決後（財務局等にあつては、財務局長等説明等の後）速やかに証券監視委委員長名（財務局等にあつては財務局長等名）において、検査対象先の責任者に対して交付するものとする（別紙様式7）。

なお、検査終了通知書の交付に当たっては、検査対象先の責任者に対して、証券検査課長（財務局等にあつては、証券取引等監視官）の事前の承諾なく、第三者に開示してはならないことを伝えるものとする。

また、検査を中止した場合その他の特段の事情が認められる場合については、検査終了通知書の交付を行わないものとし、主任検査官は、検査対象先の責任者に対して、その旨を口頭等適宜の方法により伝達するものとする。

検査終了通知書の交付は、臨店検査終了後、3か月以内を目途に行うよ

う努めるものとする。

(4) 勧告

検査の結果、必要があると認められた場合は、勧告書（案）を作成し、証券監視委に付議するものとする。

なお、勧告書（案）が証券監視委において議決された場合は、証券監視委事務局から監督部局に対して勧告書を交付するものとする。

(5) 検査結果の公表等

証券監視委の事務運営の透明性を確保し、公正な事務執行を図るとともに、投資者保護に資するため、証券監視委及び財務局等の行った検査事務の処理状況については、国家公務員の守秘義務の観点から慎重な検討を行った上で、以下のとおり、証券監視委のウェブサイト上等で公表するものとする。

- ① 勧告に至った事案については、検査終了後、速やかに公表する。この際、原則として、検査対象先の名称又は商号等を公表する。
- ② 勧告に至らない事案については、必要と認められる場合に、適宜、公表する。この際、原則として、検査対象先の名称又は商号等の公表は控えるものとする。
- ③ 適格機関投資家等特例業務届出者に対する検査においては、当面の間、平成27年金商法改正以前の法令等違反行為等について、行為の重大性・悪質性に鑑み、証券監視委が投資者保護上広く周知することが適当であると認める事案については、上記①に準じて、検査対象先の名称又は商号等について公表する。
- ④ 証券監視委が行った検査事務の処理状況について、1年分ごとに取りまとめて公表する。

なお、公益又は投資者への影響等から、公表が不相当と判断される事案については、公表を控える等の措置を講ずるものとする。

(6) 検査後のフィードバック等

証券監視委及び財務局等は検査の結果について、今後のモニタリング等に適切に反映させるとともに、証券モニタリングで検証した事項の内容及び問題点が的確に伝わるよう、毎年公表する金融商品取引業者等に対する証券モニタリング概要・事例集の内容を充実させるなど、証券モニタリングの結果をフィードバックしていくことで、証券モニタリングのPDCAサイクルを有効に機能させるよう努めるものとする。

Ⅲ 意見申出制度・検査モニター

1. 意見申出制度

意見申出制度は、証券監視委及び財務局等の検査水準の維持・向上並びに手続の透明性及び公正性確保を図る目的から、以下のとおり取り扱うものとする。

(1) 検査対象先への説明

主任検査官は、原則として、以下の意見申出制度の概要を臨店検査着手時及び講評時に、検査対象先の責任者に対して説明するものとする。(Ⅱ

1. (1) イ. ⑤参照)

(2) 意見申出制度の概要

① 意見申出書の提出等

イ. 申出者(検査対象先の代表者)は、確認された意見相違事項について、事実関係及び申出者の意見を意見申出書(別紙様式8)に記載し、必要な説明資料を添付した上で、申出者名による発出文書により、証券監視委事務局長宛てとして、証券監視委に直接又は主任検査官経由で提出する。

また、認識の相違に至った経緯を明らかにするため、意見相違事項についての検査官との議論の経緯についても書面で提出する。

ロ. 意見申出は、原則として、検査で認められた法令等違反行為等の事実関係に関する意見相違事項に限る。

(注) 上記意見相違事項以外の申出内容(法令解釈、新たな論点、新たな主張等)は対象外となる。

ハ. 意見申出書の提出期間は、検査対象先の責任者に対する検査の講評が終わった日から3日間(講評が終わった日の翌日から起算し、行政機関の休日を除く。)とする。ただし、検査対象先から上記期間内に提出期間延長の要請があった場合、上記期間から、更に2日間(行政機関の休日を除く。)を限度として、提出期間を延長することができる。意見申出書が郵送により提出された場合、消印が提出期間内(提出期間を延長した場合は、延長した提出期間内)のものを有効とする。

ニ. 意見申出書に添付する説明資料の提出が提出期間内に間に合わない場合は、提出期間内に意見申出書のみを提出すれば足り、後日、説明資料を提出することができる。その場合、申請者は、速やかに説明資料を提出するものとする。

ホ. 申出者は、提出した意見申出書を取り下げる場合は、取下書（別紙様式9）を提出した上で意見申出書の返却を求めることができる。

ヘ. 証券監視委事務局長は、提出された意見申出書が下記に該当する場合、速やかに申出者に対して意見申出書の受付日及び不受理の理由を記載した意見申出不受理決定通知書（別紙様式10）を申出者に送付することとし、申出者の求めに応じて、意見申出書及び説明書類を返却することができる。

- ・意見相違事項が上記ロ.（注）に該当する場合
- ・上記ハ. に定める期限を超えて提出された場合

② 審理手続等

イ. 意見申出事項は、証券監視委事務局（証券検査課以外の課）が作成した審理結果（案）に基づいて、証券監視委において審理を行う。

ロ. 審理結果については、検査終了通知書（案）に反映させる。

③ 審理結果の回答方法

申出者（検査対象先）に対する審理結果の回答については、検査終了通知書に別添として添付する形で行う。

2. 検査モニター

検査モニターは、検査対象先からの意見を受け付け、臨店検査の実態を把握することにより、証券監視委及び財務局等による適切な臨店検査の実施を確保するとともに、効率性・実効性の高い検査の実施に資する目的から、検査の目的、期間等を総合的に勘案しつつ、以下のとおり取り扱うものとする。

（1）検査対象先への説明

主任検査官は、原則として、臨店検査着手日において検査モニターの概要を検査対象先の責任者に対して説明する。（Ⅱ 1.（1）イ. ⑥参照）

（2）検査モニターの概要

検査モニターは、「意見受付（アンケート方式）」の方法により実施することとし、必要に応じて、「意見聴取」の方法を併せて実施する。

なお、意見の対象は検査官の検査手法に限る。

① 意見受付（アンケート方式）

イ. 意見提出方法

証券監視委ウェブサイトに掲載された所定のアンケート用紙（別紙様式11）に記入し、電子情報処理組織を使用する方法又は郵送に

より送付する。

ロ. 提出先

提出先は、証券監視委の検査においては証券検査課長宛てとする。財務局等の検査においては証券取引等監視官宛てを原則とするが、証券検査課長宛てに提出することもできる。

ハ. 受付期間

臨店検査終了日から検査終了通知書交付後 10 日目（行政機関の休日を除く。）までを目安とする。

② 意見聴取

イ. 実施者

実施者は、証券監視委事務局においては、事務局長、次長（証券検査課担当）、総務課長又は証券検査課長とする。

財務局等においては、原則として、証券取引等監視官又は証券取引等監視官が指名する者（必要に応じ、証券監視委事務局の実施者）とする。

ロ. 実施方法

実施者は、検査の適切性を確保するため必要と判断した場合には、臨店検査開始から検査終了通知書交付前までの間に検査対象先を訪問し、検査官の検査手法について検査対象先の責任者から意見聴取を行う。

（注）実施者は、検査の実効性をモニターする観点から、実施前に（必要があれば実施後も）検査チームとの面談を行うものとする。

③ 処理

検査対象先からの意見は、適切かつ効率性・実効性の高い検査の実施に資するための実態把握として役立たせるものとし、実施者は、必要に応じ、主任検査官に指示するなどの措置をとる。

IV 書類の作成等に関する特例及び留意点

1. 英語による提出書類の作成等に関する特例

下記（１）又は（２）に該当する者は、（３）に掲げる書類（③から⑤までの書類は、当該書類において指定する記載欄）について、英語で作成（記載）し、提出することができる。この場合においては、①から⑧までに掲げる書類は、当該書類の様式に準じて英語で作成（記載）するものとする。

（１）金融商品取引業等に関する内閣府令第二条第一項の規定に基づき金融庁長官が定める書類を定める件（令和４年金融庁告示第13号）第1号又は第2号の規定の適用を受けて金商法第29条の登録、同法第30条第1項の認可又は同法第31条第4項の変更登録を受けた者（ただし、同告示第3号に規定されている業務範囲に限る。）

（２）海外投資家等特例業務届出者

（３）英語で作成（記載）し、提出することができる書類

- ① 第三者非開示承諾書 別紙様式2
- ② 検査関係情報開示承諾申請書 別紙様式3-1、3-2
- ③ 整理票「事実関係に対する認識」欄 別紙様式4
- ④ 質問票「質問事項に対する回答」欄 別紙様式5
- ⑤ モニタリング確認票「モニタリング評価に対する認識」欄 別紙様式6
- ⑥ 意見申出書 別紙様式8
- ⑦ 意見申出書の取下げについて 別紙様式9
- ⑧ 検査モニター【アンケート方式】 別紙様式11
- ⑨ 臨店当初等に依頼することとなる必要な提出資料（Ⅶ2.「提出資料一覧」参照）

なお、証券検査課長（財務局等にあつては、証券取引等監視官）は、公益又は投資者保護のため必要かつ適当であると認めるときは、上記（１）又は（２）に該当する者に対し、上記の書類又は記載欄の全部若しくは一部について、その概要の訳文を付すことを求めることができるものとする。

2. 検査対象先が提出する書類における記載上の留意点

別紙様式における役員等の氏名の記載については、法令の手續に従い、登録の申請等の際に旧氏（住民基本台帳法施行令（昭和42年政令第292号）第30条の13に規定する旧氏をいう。以下同じ。）及び名を申請者の氏名に併記した申請書等を提出した者の場合は、旧氏及び名を括弧書で併せて記載し、又は氏名に代えて旧氏及び名を記載することができることに留意する。

3. 書類の提出方法等の留意点

検査対象先から証券監視委又は財務局等への書類の提出及び証券監視委又は財務局等から検査対象先への書類の交付については、それぞれ電子情報処理組織を使用する方法その他の情報通信の技術を利用する方法により行うことができるものとする。

V 関係部局・自主規制機関等との連携等

1. 関係部局との連携等

(1) 財務局等

証券監視委は、証券モニタリングの手法や情報の共有化、検査対象先の選定や検査結果の処理等において、財務局等を支援し、一体的に証券モニタリングに取り組むものとする。

また、検査の実施に際しては、証券監視委と財務局等との間で、合同検査の積極的活用、検査官の相互派遣等により、効率的・効果的な検査の実施に努めるものとする。

(2) 監督部局等

金融庁及び財務局等の監督部局との間では、証券モニタリングを通じて把握された情報をタイムリーに交換すること等によって情報を共有し、相互の問題意識を共有するなど、連携を図るものとする。また、検査とモニタリングの一体化など、監督部局と切れ目のない連携を図るものとする。

金融庁の検査部局との間では、問題意識等を共有し、金融グループ内の証券モニタリング対象先に対するモニタリングを連携して実施するほか、検証項目の設定や検査の時期・方法等に関し、連携を一層強化するものとする。

2. 自主規制機関等との連携等

(1) 自主規制機関

自主規制機関が実施する所属会員等に対する監査・考査等と、証券監視委が実施する証券モニタリングとの連携を一層強化し、金融商品取引業者等に対する監視機能の総体としての向上を図るものとする。

こうした観点から、自主規制機関との間では、情報交換及び検査官の研修における連携を推進するとともに、自主規制機関の業務の状況等を把握し、必要に応じて、自主規制機関に対して検査を実施するなど、自主規制機能の強化に資するものとする。

(2) 他省庁

証券モニタリングの実施に当たっては、関係する他省庁の検査部局等との情報交換等を行うなど連携の強化に努めるものとする。

(3) 捜査当局等

悪質性の高い業者による詐欺的な営業や無登録業者によるファンドの販売等に対応するため、捜査当局等との連携を強化するものとする。

(4) 海外証券規制当局等

海外証券規制当局等との間では、海外・クロスボーダー業務の拡大等に対応するため、IOSCOに加盟する証券規制当局間の多国間情報交換枠組み(MMOU)等を活用した情報交換や検査の実施における協力などを通じて、連携を強化するものとする。

(5) その他

日本銀行では、業務の相手方となる金融機関等(金融商品取引業者等を含む。)に対する考査を実施していることから、日本銀行の検査部局等との情報交換等を行うなど連携の強化に努めるものとする。

VI 施行日

本指針は、平成17年7月14日を検査基準日とする検査から実施する。

(改正)

本指針は、平成18年7月3日から適用する。

(改正)

本指針は、平成19年9月30日から適用する。

(改正)

本指針は、平成20年8月11日から適用する。

(改正)

本指針は、平成21年6月29日から適用する。

(改正)

- 本指針は、平成 22 年 7 月 29 日から適用する。
(改正)
- 本指針は、平成 22 年 11 月 10 日から適用する。
(改正)
- 本指針は、平成 23 年 7 月 4 日から適用する。
(改正)
- 本指針は、平成 24 年 7 月 23 日から適用する。
(改正)
- 本指針は、平成 25 年 8 月 8 日から適用する。
(改正)
- 本指針は、平成 27 年 4 月 3 日から適用する。
(改正)
- 本指針は、平成 29 年 4 月 3 日から適用する。
(改正)
- 本指針は、令和元年 5 月 7 日から適用する。
(改正)
- 本指針は、令和 2 年 9 月 17 日から適用する。
(改正)
- 本指針は、令和 2 年 12 月 23 日から適用する。
(改正)
- 本指針は、令和 3 年 1 月 12 日から適用する。
(改正)
- 本指針は、令和 3 年 6 月 30 日から適用する。
(改正)
- 本指針は、令和 3 年 11 月 22 日から適用する。
(改正)
- 本指針は、令和 4 年 3 月 31 日から適用する。
(改正)
- 本指針は、令和 6 年 4 月 11 日から適用する。

Ⅶ 参考

1. 検査のイメージ図
2. 提出資料一覧

(別紙)

- ・ 様式 1 検査命令書
- ・ 様式 2 第三者非開示承諾書
- ・ 様式 3-1 検査関係情報 開示承諾申請書(経営管理会社用)
- ・ 様式 3-2 検査関係情報 開示承諾申請書(経営管理会社以外用)
- ・ 様式 4 整理票
- ・ 様式 5 質問票
- ・ 様式 6 モニタリング確認票
- ・ 様式 7 検査終了通知書
- ・ 様式 8 意見申出書
- ・ 様式 9 意見申出取下書
- ・ 様式10 意見申出不受理決定通知書
- ・ 様式11 検査モニター用紙

※ 上記については、予告なく変更する場合がある。

- ・ 検査対象先
 - (1) 金融商品取引業者等(金商法第 56 条の 2 第 1 項、第 194 条の 7 第 2 項第 1 号及び第 3 項。なお、適格機関投資家等特例業務に係る届出をしている場合には、金商法第 63 条の 3 第 2 項において準用する第 63 条の 6、第 194 条の 7 第 2 項第 2 号の 2 及び第 3 項を含む。また、海外投資家等特例業務に係る届出をしている場合には、法第 63 条の 11 第 2 項において準用する法第 63 条の 14、法第 194 条の 7 第 2 項第 2 号の 3 及び第 3 項を含む。)
 - (2) 金融商品取引業者の主要株主等(金商法第 56 条の 2 第 2 項から第 4 項まで、第 194 条の 7 第 2 項第 1 号及び第 3 項)
 - (3) 特別金融商品取引業者の子会社等(金商法第 57 条の 10 第 1 項、第 194 条の 7 第 3 項)
 - (4) 指定親会社(金商法第 57 条の 23、第 194 条の 7 第 3 項)
 - (5) 指定親会社の主要株主(金商法第 57 条の 26 第 2 項、第 194 条の 7 第 3 項)
 - (6) 取引所取引許可業者(金商法第 60 条の 11、第 194 条の 7 第 2 項第 2

- 号及び第3項)
- (7) 電子店頭デリバティブ取引等許可業者(金商法第60条の14第2項において準用する第60条の11、第194条の7第2項第2号及び第3項)
 - (8) 適格機関投資家等特例業務届出者(金商法第63条の6、第194条の7第2項第2号の2及び第3項)
 - (9) 海外投資家等特例業務届出者(金商法第63条の14、第194条の7第2項第2号の3及び第3項。また、海外投資家等特例業務届出者とみなされる移行期間特例業務を行う外国投資運用業者を含む。)
 - (10) 金融商品仲介業者(金商法第66条の22、第194条の7第2項第3号及び第3項)
 - (11) 信用格付業者(金商法第66条の45第1項、第194条の7第2項第3号の2及び第3項)
 - (12) 高速取引行為者(金商法第66条の67、第194条の7第2項第3号の3及び第3項)
 - (13) 認可金融商品取引業協会(金商法第75条、第194条の7第2項第4号及び第3項)
 - (14) 認定金融商品取引業協会(金商法第79条の4、第194条の7第2項第5号及び第3項)
 - (15) 投資者保護基金(金商法第79条の77、第194条の7第3項)
 - (16) 株式会社金融商品取引所の対象議決権保有届出書の提出者(金商法第103条の4、第194条の7第3項)
 - (17) 株式会社金融商品取引所の主要株主等(金商法第106条の6第1項(同条第2項において準用する場合を含む)、第194条の7第3項)
 - (18) 金融商品取引所持株会社の対象議決権保有届出書の提出者(金商法第106条の16、第194条の7第3項)
 - (19) 金融商品取引所持株会社の主要株主等(金商法第106条の20第1項(同条第2項において準用する場合を含む)、第194条の7第3項)
 - (20) 金融商品取引所持株会社等(金商法第106条の27(第109条において準用する場合を含む)、第194条の7第3項)
 - (21) 金融商品取引所(金商法第151条、第194条の7第2項第6号及び第3項)
 - (22) 自主規制法人(金商法第153条の4において準用する第151条、第194条の7第2項第6号及び第3項)
 - (23) 外国金融商品取引所(金商法第155条の9、第194条の7第2項第7号及び第3項)

- (24) 金融商品取引清算機関の対象議決権保有届出書の提出者(金商法第156条の5の4、第194条の7第3項)
- (25) 金融商品取引清算機関の主要株主(金商法第156条の5の8、第194条の7第3項)
- (26) 金融商品取引清算機関(金商法第156条の15、第194条の7第3項)
- (27) 外国金融商品取引清算機関(金商法第156条の20の12、第194条の7第3項)
- (28) 証券金融会社(金商法第156条の34、第194条の7第3項)
- (29) 指定紛争解決機関(金商法第156条の58、第194条の7第3項)
- (30) 取引情報蓄積機関等(金商法第156条の80、第194条の7第3項)
- (31) 特定金融指標算出者等(金商法第156条の89、第194条の7第3項)
- (32) 投資信託委託会社等(投資信託及び投資法人に関する法律(以下「投信法」という。))第22条第1項、第225条第3項)
- (33) 投資法人の設立企画人等(投信法第213条第1項、第225条第2項及び第3項)
- (34) 投資法人(投信法第213条第2項、第225条第3項)
- (35) 投資法人の資産保管会社等(投信法第213条第3項、第225条第3項)
- (36) 投資法人の執行役員等(投信法第213条第4項、第225条第3項)
- (37) 特定譲渡人(資産の流動化に関する法律(以下「SPC法」という。))第209条第2項において準用する第217条第1項、第290条第2項第1号及び第3項)
- (38) 特定目的会社(SPC法第217条第1項、第290条第3項)
- (39) 特定目的信託の原委託者(SPC法第286条第1項において準用する第209条第2項において準用する第217条第1項、第290条第2項第2号及び第3項)
- (40) 振替機関(社債、株式等の振替に関する法律第20条第1項、第286条第2項)
- (41) 金融サービス仲介業者(金融サービスの提供及び利用環境の整備等に関する法律第36条第1項及び第2項、第137条第2項第1号及び第2号並びに第3項)
- (42) 認定金融サービス仲介業協会(金融サービスの提供及び利用環境の整備等に関する法律第49条第1項及び第2項、第137条第2項第3号及び第4号並びに第3項)
- (43) その他、上記(1)から(42)までに掲げる法律の規定により証券検査の対象とされている者

なお、次に掲げる者が検査対象先の場合には、犯罪収益移転防止法

により証券監視委に委任された権限に基づく検査を同時に実施するものとするので留意する。

- イ. 金融商品取引業者（法令により規制対象とならない業者を除く。）、適格機関投資家等特例業務届出者、海外投資家等特例業務届出者（移行期間特例業務を行う外国投資運用業者を含む。）（犯罪収益移転防止法第16条第1項、第22条第6項第1号）
 - ロ. 登録金融機関（犯罪収益移転防止法第16条第1項、第22条第6項第2号）
 - ハ. 証券金融会社、振替機関、口座管理機関（犯罪収益移転防止法第16条第1項、第22条第7項）
- （注）（ ）書きは、検査権限及び証券監視委への委任規定。

令和5年8月1日

証券取引等監視委員会

令和5事務年度¹ 証券モニタリング基本方針

証券取引等監視委員会（以下「証券監視委」という。）は、近年の金融商品取引業者等（以下「金商業者等」という。）を取り巻く環境等及び令和5年1月27日に公表した第11期中期活動方針において、リスクベースアプローチに基づく証券検査の継続や投資者被害事案に対する積極的な取組を掲げていることを踏まえ、令和5事務年度における、金商業者等に対する証券モニタリング²の主な検証事項等について取りまとめた。

1. 金商業者等を取り巻く環境等

（1）金商業者等を取り巻く環境

令和5年6月に策定された「経済財政運営と改革の基本方針 2023」においては、NISA（少額投資非課税制度）の抜本的な拡充・恒久化、金融経済教育推進機構の設立、顧客本位の業務運営の推進等、「資産所得倍増プラン」を実行すること及び資産運用業等の抜本的な改革に関する政策プランを年内に策定することが盛り込まれている。家計の安定的な資産形成を図るためには、経済や企業の成長の果実が家計に分配される資金の好循環を実現することが重要であり、そのためには、金商業者等が、金融商品の組成・販売・管理等の各段階において顧客本位の業務運営を適切に確保し、期待される役割を十二分に発揮していくことが引き続き重要となっている。

また、デジタル化の進展等に伴い、ビジネス環境が大きく変化する中、他の証券会社や金融機関との業務提携、市場環境や顧客ニーズの変化に則したサービスの提供等による持続可能なビジネスモデルの構築に向けた動きが見られる。

さらに、サイバー攻撃被害のリスクは年々高まっており、金融機関に対しては、経営陣のリーダーシップの下、サイバーセキュリティ対策を強化するよう累次の注意喚起が発出されるなど、引き続きサイバーセキュリティを含むシステムリスク管理態勢の強化が求められている。

マネー・ローンダリング及びテロ資金供与対策（以下「AML/CFT」という。）に対する国際的な関心は引き続き高く、FATF 第4次対日相互審査結果のフォローアップ状況及び第5次対日相互審査を見据え、金商業者等においては、引き続き、

¹ 令和5事務年度は令和5年7月から同6年6月までを指す。

² 本方針において証券モニタリングとは、検査とモニタリングの双方を指している。「検査」とは、金融商品取引法第56条の2等の検査権限に基づくものを指し、「モニタリング」とは、検査以外のものを指す。

同対策への取組が求められることとなる。

(2) 金商業者等を取り巻く規制の枠組み等の変更

昨事務年度より、以下のとおり、金商業者等を取り巻く規制の枠組み等の見直しの動きが見られる。こうした動きも踏まえ、金商業者等は、顧客本位の業務運営の徹底や、投資者保護を強化するための対応が求められている。

① 顧客本位の業務運営の確保に向けた対応

金融審議会市場制度ワーキング・グループ「顧客本位タスクフォース」における議論を踏まえ、顧客等の最善の利益を考えた業務運営の確保、顧客への情報提供の充実を図るための制度整備に向けた動きがあるほか、複雑な仕組債等について顧客に対する適切な販売勧誘を実現するため、自主規制機関が自主規制ガイドラインを改正するとともに、組成コスト（理論価格）の開示及びリスク・リターンの開示・分析等のあり方について周知した。

② デジタル化の進展等への対応

金融審議会市場制度ワーキング・グループにおける議論を踏まえ、ソーシャルレンディング等を行う第二種金融商品取引業者に対して、運用報告書の交付が担保されていないファンドの募集等を禁止するほか、トークン化された不動産特定共同事業契約に基づく権利について、金商法の販売勧誘規制を適用する等の制度整備に向けた動きがある。また、非上場有価証券やセキュリティトークンの取引プラットフォームの環境整備が進められる中、PTS においてセキュリティトークンの取り扱い開始に向けた動きも見られる。

③ ESG 投資信託に係る規定の整備

近年、世界的に「グリーンウォッシング問題」が指摘されていること等を踏まえ、金融商品取引業者等向けの総合的な監督指針を一部改正し、ESG に関する公募投資信託の情報開示などについて、具体的な検証項目が規定された。

④ 投資運用業者等の受託者責任の明確化

金融審議会市場制度ワーキング・グループにおける議論を踏まえ、ファンド・オブ・ファンズ形式等により、実質的に外部の運用会社が運用する投資信託について、投資運用業者等の受託者責任の明確化を図るため、自主規制機関が、自主規制ルールを改正し、投資信託証券の組入れや投資信託の運用指図に係る外部委託を行う際の遵守及び留意すべき事項等を規定した。

(3) 昨事務年度の証券モニタリングを通じて判明した事項

昨事務年度の証券モニタリングを通じ、金商業者等の中に、金商業者等を取り巻く環境等の変化を受け、ビジネスモデルや内部管理態勢の変更といった動きが見られた。

① 第一種金融商品取引業者、登録金融機関、金融商品仲介業者

顧客本位の業務運営の取組状況については、銀証連携による金融商品の販売に関し、地域銀行系証券会社において、適合性原則を遵守するための態勢整備が不十分であり、適合性原則に抵触する不適切な勧誘販売が認められたほか、登録金融機関においても、金融商品仲介業を行うための適切な態勢整備が行われておらず、投資者保護上問題のある行為が行われ、結果として、地域銀行系証券会社の適合性原則に抵触する業務運営にも繋がっている状況が認められた。さらに、金融商品仲介業者への業務委託を通じた金融商品の販売において、不適切な勧誘行為が認められるとともに、所属金融商品取引業者による仲介業務委託先の管理態勢が不十分な状況が認められた。

大手証券会社においては、ブロック取引に係る相場操縦行為や売買審査態勢の不備、銀行と連携して行う業務の運営が不適切な状況が認められた。

② 投資運用業者

運用の外部委託を行う投資運用業者において、自社が設定したファンド・オブ・ファンズ形式で運用する投資信託に関し、商品特性に応じた調査を十分に行っていないなど、運用財産の運用・管理を適切に行っていない事例が認められた。

また、REIT やインフラファンド等の投資法人の運用を行う資産運用業者において、物件取得に係る調査が不適切な状況や、保有物件の収益管理が適切に行われていない状況という善管注意義務違反や、利害関係者との取引の適切性について事後検証が行えない状況等の利益相反管理態勢に不備が認められた。

③ 投資助言・代理業者

無料で会員登録を行った見込み顧客に対して配信したメールマガジンにおいて、虚偽の内容を告げて投資顧問契約の締結の勧誘を行う等の法令違反行為が認められた。

④ 第二種金融商品取引業者

金銭の貸付けを出資対象事業とするファンドの募集ページにおいて、担保の状況及び貸付先の財務状況に関し、虚偽の内容を告げて当該ファンドの出資持分の取得勧誘を行っている状況が認められた。

⑤ 無登録業者

金融商品取引業の登録を受けずに、店頭デリバティブ取引又は外国社債の募集若しくは私募の取扱いを行っている業者が認められた。

2. 業態横断的な検証事項

金商業者等を取り巻く環境等を踏まえつつ、また、金融庁の「金融行政方針」等も念頭に置きながら、金融庁関連部局等と連携し、業態横断的な検証事項として、以下の項目について検証を行う。

- ① 適合性原則を踏まえた適正な投資勧誘等に重点を置いた内部管理態勢の構築や、顧客本位の業務運営を踏まえた販売状況

例えば、仕組債に限らず、複雑又はリスクが高い商品の販売については、販売対象顧客の設定や顧客説明に関する社内ルールを整備し適切に実施しているか、その遵守状況を適切にモニタリングしているか、顧客本位の業務運営に関する原則に基づいた取組方針の内容と販売実態が整合しているか等について検証を行う。

- ② デジタル化の進展等を踏まえたビジネスモデルの変化と、それに対応した内部管理態勢の構築

例えば、非対面営業の拡大、新たな商品やサービスの提供といったビジネスモデルの変化による金商業者等の経営に与える影響や、それらを踏まえた内部管理態勢の構築について検証を行う。

他方で、従来型の対面営業に依存したビジネスモデルが継続されている場合は、その持続可能性など、市場環境や顧客ニーズの変化等が財務面を含む経営に与える影響等についても検証を行う。

- ③ サイバーセキュリティ対策（インターネット取引における不正アクセス対策を含む）の十分性やデジタル化の進展に伴うシステムリスク管理（システム開発・運用管理や外部委託先の管理を含む）の対応状況

- ④ AML/CFTに係る内部管理態勢の定着状況

- ⑤ 内部監査の結果及び自主規制機関の監査等で指摘された事項に係る改善策及び再発防止策の取組状況

上記のほか、「資産所得倍増プラン」や資産運用業等の抜本的な改革等の金商業者等を取り巻く環境を踏まえた具体的な取組やその環境の変化等に応じて、機動的にその他の事項の検証についても取り組んでいく。

3. 規模・業態別の主な検証事項

金商業者等を取り巻く環境等を踏まえつつ、金商業者等の規模や業務内容等に応じて、個別の法令違反事項の発生や分別管理の状況等投資者保護上懸念がある先等に対して、以下の事項を中心に検証を行っていく。

(1) 大手証券会社グループ³

引き続き、各グループを取り巻く経営環境を念頭に置きつつ、国内外の業務展開を支えるガバナンスやリスク管理態勢の整備状況、持続可能なビジネスモデルの構築に向けた取組状況について検証する。

また、売買審査態勢を含む業務運営態勢に不備が認められたことを踏まえ、不公正取引等の検知・防止のための態勢整備を始めとした内部管理態勢の整備状況について検証する。

さらに、営業店における営業実態を確認する必要がある場合には、機動的に営業店に対し、検査を実施する。

3メガバンクグループの証券会社に対しては、上記に加え、関係部署と連携し、銀証連携ビジネスの推進を踏まえた顧客情報管理態勢等の整備状況についても検証を行う。

(2) 外国証券会社

グループ戦略の一環としてのバックオフィス業務の海外委託の進展等に対応した内部管理態勢や、システムリスク管理態勢の整備状況等の検証を行う。また、我が国金融機関等向けに提供する金融商品の販売管理態勢の整備状況について検証を行う。

(3) ネット系証券会社

昨今のサイバー攻撃被害のリスクの高まりを踏まえ、サイバーセキュリティ対策を含むシステムリスク管理態勢の整備状況について検証を行う。

また、金融商品仲介業者を活用した対面営業の拡大等のビジネスモデルを踏まえた外部委託先の管理態勢や、委託手数料無料化等の動きもある中、新規口座開設数の急増や取引量に応じた実効的な売買管理態勢を始めとした内部管理態勢の整備状況について検証を行う。

(4) 準大手証券、地域証券会社（地域銀行系証券会社を含む）

顧客の高齢化や相続による顧客資産の流出、手数料競争の激化やデジタル化の推進による影響などによって経営環境が厳しい中、これまでの検査において、不適切な投資勧誘等、投資者保護の観点から問題のある行為が認められていることから、適合性原則への対応等が図られているかについて検証を行う。

また、主要株主や経営体制が変更された証券会社について、ビジネスモデルやガバナンスの観点から内部管理態勢が機能しているかについて検証を行う。

³ 大手証券会社グループ：グローバルに活動する国内証券会社

(5) 外国為替証拠金取引業者

昨今のサイバー攻撃被害のリスクの高まりを踏まえ、サイバーセキュリティ対策を含むシステムリスク管理態勢の整備状況について検証を行う。

また、広告規制違反、販売・勧誘における適正な内部管理態勢の整備状況について検証を行う。

(6) 投資運用業者

運用の実態把握、運用管理態勢（外部委託運用に対するものを含む）、利益相反管理態勢の整備状況等について検証を行う。

(7) 投資助言・代理業者

顧客に誤解を生じさせる広告手法や、虚偽の説明による勧誘行為などの投資者保護上問題のある行為の有無について検証を行う。

(8) 第二種金融商品取引業者、適格機関投資家等特例業務届出者

高利回りを掲げたファンドや出資対象事業の実在性等に着目し、投資者等から寄せられた情報の分析等を通じた検証を行う。

(9) 金融商品仲介業者・その他の証券モニタリング対象先

金融商品仲介業者については、ネット系証券会社等において金融商品仲介業者を活用した対面営業への拡大等が認められることから、投資勧誘等の適正性のほか、所属金融商品取引業者による管理態勢の十分性について検証を行う。

登録金融機関、信用格付業者、証券金融会社、自主規制機関等については、各業態の特性を踏まえて証券モニタリングを実施する。

(10) 無登録業者

無登録業者による投資者被害の拡大を防止するため、裁判所への違反行為の禁止命令等の申立てに係る調査権限を積極的に活用するとともに、無登録業者の名称・代表者名・法令違反行為等の公表、無登録業者との取引に係る注意喚起や投資家へのメッセージの掲載等を含めた情報発信を強化するほか、金融庁関連部局、各財務局等、捜査当局及び消費者庁等との連携を積極的に進めていく。

なお、上記の他、1.(2)に掲げた各種の規制の枠組み等の変更を踏まえた各社の対応状況等についてもあわせて検証を行う。

4. 証券モニタリングの進め方

(1) 検査

証券モニタリングの対象業者数は、延べ約 8,200 者となっており、その規模、業務内容や取扱金融商品は多岐にわたっているほか、中には依然として基本的な法令等遵守、投資者保護の態勢が十分でない業者も存在している。このため、証券モニタリングにおいては、限られた人員等の下で、「今後の証券モニタリングの基本的な考え方」を踏まえながら、金商業者等のリスク特性に応じた効果的・効率的な証券モニタリングに努め、リスクの所在を早期に把握することが重要となっている。

そのため、証券モニタリングの対象業者について、金融庁関連部局等と連携して、金商業者等におけるリスクの特定・評価を行い、リスクベースで検査対象先を選定する取組を継続し、以下のような場合を中心に、検査による実態把握を引き続き積極的に進めていく。また、必要に応じて検証事項を絞り込む等、機動的に検査を実施するものとする。

- ① 個別の法令違反事項の発生や業務運営態勢に懸念があり、早期に深度ある検証が必要な状況
- ② リスクの所在が不明確な金融商品を取り扱い、その勧誘実態等の検証が必要な状況
- ③ モニタリングによる情報分析だけでは業務運営等の実態が必ずしも把握できない状況（検査未実施期間が長期化している場合を含む）
- ④ 分別管理が適切に行われていないなど、投資者保護上、重大な問題が懸念される状況

検査においては、実質的に意味のある検証や問題点の指摘に努めるほか、個々の金商業者等の特性や検証事項に応じて、デジタルフォレンジックを実施することにより、深度ある検証を行うこととする。

また、単に問題点を指摘し行政処分勧告等を行うにとどまらず、問題の全体像を把握し、問題が発生した原因を究明することにより、実効性のある再発防止策の策定につながるよう取り組んでいく。さらに、問題が顕在化していないものの、業務運営態勢等について改善が必要であると認められた場合には、検査終了通知書等に「留意すべき事項」として記載して、証券監視委の問題意識を検査対象先と共有し、実効性ある内部管理態勢の構築等を促していくこととする。

(2) 関係機関との連携

証券監視委と各財務局等は、それぞれが持つ機能を最大限発揮していくために、モニタリングや検査の計画策定から、情報共有、意見交換等も含めて緊密に連携

していくとともに、必要に応じて合同検査を実施する。

また、暗号資産関連店頭デリバティブ取引業等を行う暗号資産交換業者や金融サービス仲介業者に対する検査において、証券監視委、金融庁検査部局、各財務局等との間で、情報共有、同時検査の実施等の連携を図っていく。

なお、セキュリティトークンについて、金融庁関連部局等と連携しながら、発行・流通の状況も踏まえた情報分析等を行う。

自主規制機関と引き続き緊密に連携し、タイムリーな情報共有により、検知した内容やその時々の問題意識を随時共有することで、証券モニタリングを効果的・効率的に進めながら、市場の公正性・透明性の確保及び投資者保護を図っていく。

5. 検査結果の情報発信・その他の取組

検査を通じて把握した問題点や究明した根本原因等については、必要に応じて、金融庁関連部局等と連携して金商業者等に対してフィードバックを行い、これらの監査関係者及び社外取締役に対しても、検査結果を講評時等において共有する等により、改善に向けた自主的な取組を促す。

また、証券監視委の問題意識等が対外的にも的確に伝わるよう、「証券モニタリング概要・事例集」等により、具体的で分かりやすい情報発信に努めていく。

取引調査に関する基本指針

I. 基本的考え方

1. 取引調査の目的等

取引調査とは、金融商品取引法（以下「金商法」という。）が定める課徴金制度において、風説の流布・偽計や相場操縦、内部者取引といった不公正取引について、金商法第177条の権限に基づき、事件関係人や参考人に対する質問調査や立入検査等を行うものである。

取引調査は、市場を取り巻く状況の変化に対応した機動性・戦略性の高い市場監視が求められる中、不公正取引の可能性がある場合に、迅速・効率的に実施することにより、違反行為を抑止し、もって市場の公正性・透明性の確保を図り、投資者を保護することを目的とする。

2. 取引調査に携わる職員の心構え

取引調査に携わる職員（以下「調査官」という。）は、取引調査（以下「調査」という。）の目的を意識しつつ、以下の心構えを持って業務を遂行するものとする。

（1）証券取引等監視委員会の使命

調査官は、証券取引等監視委員会（以下「証券監視委」という。）が、市場の公正性・透明性を確保し、投資者を保護することを使命としていることを常に自覚し、調査を実施するように努めなければならない。

（2）綱紀・品位・秘密の保持

調査官は、国民の信用・信頼を確保するため、常に綱紀・品位の保持に努めるとともに、業務の遂行に当たって知り得た秘密を漏らしてはならない。

（3）適正な手続の遵守

調査官は、金商法の規定及び課徴金制度の趣旨を十分に理解した上で、私企業又は個人に対して法令上の権限を行使する立場にあることを自覚し、常に適正な手続に基づいてその権限を行使しなければならない。

（4）効率的・効果的な調査による事案の解明

調査官は、常に穏健、冷静な態度を保ち、相手方の説明及び答弁を慎重かつ十分に聴取するとともに、創意工夫を通じて、効率的・効果的な調査を行い、事案の実態を解明するように努めなければならない。

（5）自己研鑽と能力の発揮

調査官は、金融・証券に係る法令・諸規制等を正しく理解し、新たな金融商品、取引手法等の習得に努めるとともに、金融・証券市場等の動向に広く目を向け、常に自己研鑽に努めなければならない。また、全ての調査官が、持てる能力を最大限発揮して業務を遂行するように努めなければならない。

II. 取引調査の実施手続等

1. 調査の実施

金商法第173条、第174条、第174条の2、第174条の3、第175条又は第175条の2に定められる違反行為が疑われる取引（以下「事案」という。）について、事実を解明するために調査を行う。

2. 調査対象者等に対する立入検査又は質問調査の実施

立入検査又は質問調査を行うに当たっては、対象者・法人等（以下「対象先」という。）に配慮し、効率的・効果的なものとするよう努めるものとする。

（1）立入検査

① 証票の提示及び説明

立入検査（以下「検査」という。）を行うに際しては、調査官は、証票を携帯し、検査着手時には対象先に対して証票を提示し、自らが証券監視委の職員であることを伝えるとともに、以下の事項について説明し、協力を得て行うものとする。

イ 検査の権限（金商法第177条）及び目的

ロ 検査の事実及び内容にかかる情報を適切に管理すること

② 留意事項等

検査を行うに際して、調査官は以下の事項に十分に留意するものとする。

イ 検査の権限は金商法第177条を根拠とし、検査は対象とする物件又は場所の所有者若しくは管理者の同意を得たうえで行うものとする。

ロ 対象先の資料等を閲覧するに当たっては、対象先（対象先が法人等の団体である場合は当該資料等の管理者等）を立ち合わせるものとする。

ハ 対象先の状況等を踏まえ、対象先の業務遂行等への支障が最小限となるよう配慮するものとする。なお、法人等の就業時間内に実施することを原則とする。

ニ 閲覧や提出を求める資料等は予め、その必要性について十分に検証を行い、必要最小限のものとする。

ホ 検査で求めた資料等の個人情報や機密性等に配慮し、紛失、置き忘れ、第三者が閲覧可能な状況にするといったことがないよう留意するものとする。

③ 資料等の借用

的確かつ効率的な実態把握のために必要な場合、調査官は、物件の所有者又は管理者の同意を得たうえで、資料等を一時的に借り受けるものとする。その際には、借用書を交付し、借り受けた資料等については、紛失・毀損することがないように適切な管理を行うとともに、早期の返却に努めるものとする。

（2）質問調査

① 証票の提示及び説明

質問調査を行うに際しては、調査官は、証票を携帯し、質問調査着手時には対象者に対して証票を提示し、自らが証券監視委の職員であることを伝えるとともに、以下の事項について説明し、協力を得て行うものとする。

イ 質問調査の権限（金商法第177条）及び目的

ロ 質問調査の事実及び内容にかかる情報を適切に管理すること

② 留意事項等

質問調査を行うに際して、調査官は以下の事項に十分に留意するものとする。

イ 質問調査の権限は金商法第177条を根拠とし、質問調査は対象者の同意を得たうえで行うものとする。

ロ 法令違反が疑われる事項については、対象者に対して十分な説明を求め、対象者の意見又は主張についても十分に聴取するものとする。

ハ 質問調査で知り得た内容については秘密として厳守する。

ニ 質問調書を作成した場合は、供述人に調書の内容を読み聞かせ、又は閲覧させて誤りがないかを問い、供述人が調書の修正を申し立てたときは、必要な修正を加え、あらためて供述人に内容の確認を求めるものとする。

ホ 質問調査は、公務所等、調査内容の秘密が保たれる場所において行うものとする。

ヘ 対象先の状況等を踏まえ、対象先の業務遂行等への支障が最小限となるよう配慮する。なお、法人等の就業時間内に実施することを原則とする。

ト 質問調査が長時間となる場合は、対象者の休憩時間を適切に確保するものとする。

3. 調査対象先からの申入れ等

対象先からの調査に関する申入れ等について、慎重な取扱いが必要であると判断した場合には、主任証券調査官等は、速やかに統括調査官又は証券調査指導官にその旨を報告し、指示を受けるものとする。

4. 問題発生時の対応

主任証券調査官等は、調査の拒否、妨害、忌避、その他重大な事故等により、調査の実施が困難な状況になったときは、法令に基づく調査であることをあらためて説明するとともに、経緯及び事実関係を詳細に記録し、直ちに統括調査官又は証券調査指導官に報告し、指示を受けるものとする。報告を受けた統括調査官又は証券調査指導官は、速やかに取引調査課長に報告し、その対応について協議するものとする。

5. 災害発生時の対応

調査中に予期せぬ災害が発生し、対象者又は調査官の生命・身体に危害が及ぶ可能性がある場合には、調査官は調査を中断し、直ちに取引調査課長又は統括調査官にその旨を報告し、指示を受けるとともに、対象者及び自らの生命・身体の安全の確保と書類等の滅失・情報漏洩の防止に努めるものとする。

Ⅲ. 勧告

調査の結果、金商法に定められる違反行為が認められた場合は、法令等違反の事実関係並びに内閣総理大臣及び金融庁長官に対して課徴金納付命令を行うことを勧告

する旨を記載した勧告書(案)を作成し、証券監視委に付議するものとする。付議の結果、議決された場合には、証券監視委事務局から金融庁に対して勧告書を交付するものとする。

IV. 公表

勧告を行った際は、原則として記者レクを行い、勧告事案の概要を公表する。また、記者レク後の同日に証券監視委ウェブサイトにおいても勧告事案の概要を掲載、公表を行う。

V. 情報管理

1. 情報管理上の留意点

調査官は、調査で得られた情報を、行政機関の保有する個人情報の保護に関する法律等の法令、一般的な行政文書の管理に関する規定等に即して、適切に管理する。その際、特に以下の点に配慮する。

- イ 調査の実施により知り得た秘密を漏らしてはならない。
- ロ 調査に関する情報は、不公正取引の抑止及び投資者の保護という目的以外には使用してはならない(ただし、法令上の正当行為に該当する際の使用を除く。)
- ハ とりわけ、対象先の秘密事項及びプライバシー等に係る情報の取扱いについては、細心の注意を払う。

2. 主任文書管理者等による実態把握等

主任文書管理者等及び主任証券調査官等は、調査官が上記の点を含め、適切に情報を管理しているかを把握し、必要に応じて、適切な措置を講ずる。

(注) 主任文書管理者等とは、金融庁行政文書管理規則で定める主任文書管理者、文書管理者をいう。

VI. 関係課との連携

市場監視機能の維持・強化のため、証券監視委内の関係課との緊密な連携と情報共有に努める。

VII. 施行日

本基本指針は平成25年8月30日から施行する。

(改正)

本基本指針は平成26年4月1日から適用する。

開示検査に関する基本指針

I 基本的考え方

1. 開示検査の基本的考え方

金融商品取引法（以下「金商法」という。）における開示制度とは、有価証券の発行・流通市場において、投資者が十分に投資判断を行うことができるような資料を提供するため、有価証券届出書をはじめとする各種開示書類の提出を有価証券の発行者等に義務付け、これらを公衆縦覧に供することにより、有価証券の発行者の事業内容、財務内容等を正確、迅速かつ公平に開示し、もって証券市場の機能の十全な発揮と、投資者保護を図ろうとする制度である。

金商法第 26 条その他の法令に基づき実施する開示検査等に携わる調査官は、このような制度の趣旨を踏まえ、

- ① 正確な企業情報が迅速かつ公平に市場に提供されるようにすること
- ② 開示規制の違反行為を適切に抑止すること

を目的として開示検査等を行わなければならない。有価証券の発行者等に法令違反等が認められる場合には、その法令違反等の事実関係並びに課徴金納付命令その他の措置の内閣総理大臣及び金融庁長官への勧告について、証券取引等監視委員会（以下「証券監視委」という。）に付議する。こうした活動を通じて、証券監視委の使命である市場の公正性・透明性の確保と投資者保護の実現に資するよう努めるものとする。

2. 調査官の心構え

調査官は、上記開示制度の趣旨と開示検査等の目的を意識しつつ、以下の心構えを持って業務を遂行するものとする。

（1）綱紀・品位・秘密の保持

調査官は、開示検査行政の担い手として、国民の信用・信頼を確保するため、常に綱紀・品位の保持に努めるとともに、業務の遂行に当たって知り得た秘密を漏らしてはならない。

（2）適正な手続の遵守

調査官は、報告の徴取及び検査等において、金商法の規定及び課徴金制度の趣旨を十分に理解した上で、私企業等又は個人に対して法令上の権限を行使する立場にあることを自覚し、常に適正な手続に基づいてその権限を行使しなければならない。

（3）効率的・効果的な事案の解明

調査官は、不断に必要な情報の収集・分析に努め、また検査対象先と接する際には、常に穏健、冷静な態度を保ち、相手方の説明を慎重に聴取するとともに、有益な資料を確保すること等、効率的・効果的に事案の実態を解明するよう努めなければならない。

(4) 自己研鑽と能力の発揮

調査官は、金融・証券・会計等に係る法令・諸規則等を正しく理解するとともに、金融・証券市場や会計実務等の動向に広く目を向け、常に自己研鑽に努めなければならない。また、全ての調査官が、持てる能力を最大限発揮して業務を遂行するように努めなければならない。

II 開示検査等の実施手続等

検査対象先に対する報告の徴取及び検査等は、法令に定められた正当な権限の行使であるが、検査対象先に大きな負担等をもたらすおそれがあり、検査対象先の理解と協力があってはじめて実施できるものである。このため、手続の透明性及び検査対象先の予見可能性を高め、調査に当たって検査対象先の協力を促すことで、より円滑かつ効果的な調査が実施されることをねらいとして、以下に、開示検査等の実施に際して、その基本となる上場企業に対する標準的な実施手続等を示す。

なお、本基本指針で定める実施手続等は、機械的・画一的な運用に陥らないよう配慮する必要があるとともに、開示検査等の状況等により、主任証券調査官と開示検査課長との間で協議等のうえ、機動的な対応を行うことを妨げない。

1. 実施手続

1-1. 情報収集・分析

調査官は、有価証券の発行者が提出した各種開示書類、関係政府機関等が把握した情報、一般投資家等から証券監視委に寄せられた情報や公益通報者保護法に基づく公益通報を通じて提供された情報等を幅広く収集するとともに平素から蓄積し、培ってきた知識や手法等を用いて様々な角度から分析し、開示検査を実施する必要性について検討する。

(注) 有価証券の発行者より過年度決算の訂正に係る適時開示が行われた場合や開示書類の訂正報告書が提出された場合等には、必要に応じて、当該発行者に対してヒアリング等を実施する。

1-2. 開示検査

(1) 報告又は資料の徴取

調査官は、有価証券の発行者が提出した又は提出すべき開示書類の記載内容等に関する的確な実態把握及びその適切性の検証を行う観点から、当該発

行者その他参考人等の検査対象先に対して、報告又は資料を徴取することができる。

資料等を求めるに当たっては、検査遂行に支障が生じない限り、原則として検査対象先の既存資料等を活用することとし、また、電子媒体による受渡し又は提出を認めるなど、検査対象先の事務負担に留意する。

検査対象先の担当者等が、合理的な理由なく資料等の提出を遅延していると認められる等の場合は、主任証券調査官は、この旨を検査対象先の役員その他の責任者に告げ、改善を求める。

(2) 立入検査

調査官は、有価証券の発行者が提出した又は提出すべき開示書類の記載内容等に関する的確な実態把握及びその適切性の検証を効果的に行うため、開示検査課長の承認を得て、当該発行者その他参考人等の検査対象先に対して立入検査を行うことができる。

調査官は、立入検査の実施に際しては次の点に留意し、特に慎重に行うものとする。

① 予告

検査の効率性の観点から、原則として、検査対象先に対して立入開始前に予告を行う。ただし、実効性のある実態把握の確保の観点から、必要と認める場合には、無予告で立入検査を実施することができる。

② 証票等の提示及び説明事項

調査官は、立入検査の開始に際しては、検査対象先の役員その他の責任者に対して、証票及び法令の規定に基づき報告を求める旨の書面を提示するとともに、原則として、以下の事項について説明を行うものとする。

- イ. 検査の権限、目的及び主な検証範囲
- ロ. 検査への協力依頼
- ハ. 検査関係情報の適切な情報管理を行うこと
- ニ. 必要な提出資料の提示
- ホ. その他必要な事項

③ 現物検査

調査官は、検査対象先の役職員が現に業務を行っている事務室、資料保管場所等に直接赴き、原資料等を適宜抽出・閲覧する必要があると判断した場合には、次の点に留意の上、現物検査を行うものとする。

- イ. 検査対象先の責任者等1名以上を立ち合わせ、的確かつ迅速に行うとともに書類の紛失等の事故がないように留意する。
- ロ. 検査対象先の役職員から私物である旨の申出があった場合であっても、的確な実態把握のため必要な場合、相手方の了解を得て現物検査を実施

するよう努める。

④ その他の留意事項

- イ. 検査対象先からの申出による立入検査への第三者立会いについては、検査の円滑な実施に支障がないと主任証券調査官が判断する場合を除き、これを認めない。
- ロ. 調査官は、的確かつ効率的な実態把握のため必要な場合、資料等の現物を借り受けるものとする。その際、借用書を交付するものとし、借り受けた資料等については、適切な管理を行うとともに、早期の返却に努める。

(3) 証拠の収集・保全と的確な事実認定

- ① 調査官は、開示検査の過程において、開示書類の重要な事項につき虚偽の記載等の法令違反が疑われる事項を把握した場合には、必要な証拠の収集・保全を行った上で、検査対象先にその事項について十分な説明を求め、その意見又は主張を十分聴取して内容等を整理し、的確な事実認定を行う。なお、調査官は、開示検査の必要に応じ、検査対象先の監査人（公認会計士又は監査法人をいう。以下同じ。）の意見等を聴取する。
- ② 検査対象先が、不適正な会計処理等の疑義について、検査対象先と利害関係のない外部の専門家によって構成される委員会（以下「外部調査委員会」という。）を設置して調査を実施した場合は、その調査資料や調査結果等を開示検査の事実認定において判断材料とすることができる。ただし、外部調査委員会の独立性、中立性、専門性及び調査手法の有用性・客観性を十分検証した上で、合理性が認められた場合に限る。
- ③ 法令違反が疑われる事項がある開示書類について訂正報告書等が提出されていない場合は、訂正報告書等の自発的提出の必要性に関する検査対象先の意見又は主張を十分聴取する。訂正報告書等が自発的に提出された場合は、提出に至った経緯や訂正内容の妥当性等を検証する。

(4) その他の留意事項

① 証票の携帯及び提示

調査官は、その身分を示す証票を携帯し、検査を実施するに当たっては検査対象先に提示しなければならない。

② 検査対象先の業務等への配慮

- イ. 調査官は、銀行等金融機関、監査人、情報提供者、検査対象先の取引先等の参考人や公務所等に対して報告又は資料の徴取及び立入検査を実施するに当たっては、その必要性を十分検討する。

- ロ. 検査対象先の役職員等に対し、質問調査を行う場合又は資料等の提出を求める場合には、検査対象先の就業時間内に行うことを原則とする。
- ハ. 調査官は、開示検査による的確かつ効率的な実態把握や検査対象先の担当者等の事務負担の軽減の観点を考慮し、資料等の提出範囲・方法について適時・適切な見直しに努める。

③ 検査対象先からの申入れ等

主任証券調査官は、検査対象先からの立入検査等に関する申入れ等について、慎重な取扱いが必要であると判断した場合には、速やかに統括調査官又は総括証券調査官にその旨を報告し、指示を受けるものとする。

④ 問題発生時の対応

主任証券調査官は、報告若しくは資料の不提出、虚偽の報告若しくは資料の提出、検査拒否、検査妨害又は検査忌避に該当するおそれがある行為が見出された場合には、相手方の説得に努めるとともに事実関係を詳細に記録した上で、速やかに統括調査官又は総括証券調査官にその旨を報告し、指示を受けるものとする。

⑤ 災害発生時等の対応

主任証券調査官は、災害発生により検査対象先が被災した場合は検査を休止し、直ちに統括調査官又は総括証券調査官にその旨を報告するとともに、検査対象先の職員等の生命・身体の安全の確保に配慮し、書類等の滅失・情報漏洩の防止に努めるものとする。

⑥ 開示検査の中止

主任証券調査官は、災害・システム障害等の特別な事情や、開示書類の記載内容等に関する適切な実態把握が著しく困難なときその他の検査の継続が困難になった場合には、検査全体の効率性を考慮して開示検査を中止することができる。

1-3. 開示検査等の終了

(1) 勧告

開示検査等の結果、開示書類の重要な事項につき虚偽の記載等の法令違反が認められる場合には、法令違反等の事実関係並びに内閣総理大臣及び金融庁長官に対して課徴金納付命令その他の措置を行うことを勧告する旨を記載した勧告書（案）を作成し、証券監視委に付議するものとする。

勧告書（案）が証券監視委において議決された場合は、証券監視委事務局から金融庁に対して勧告書を交付するものとする。

(2) 検査終了通知書の交付

開示書類の提出者に対して報告の徴取及び検査を行った場合で、内閣総理大臣及び金融庁長官に対して課徴金納付命令等の勧告を行わない場合は、証券監視委の議決後速やかに証券監視委名において、検査対象先の責任者に対して検査終了通知書を交付するものとする。

(注) 開示検査を中止した場合は、検査終了通知書の交付を行わないものとする。

(3) 検査結果の公表

証券監視委の事務運営の透明性を確保し、公正な事務執行を図るとともに、投資者保護に資するため、開示検査等の結果、証券監視委が課徴金納付命令等の勧告を行った事案については、検査終了後、証券監視委のウェブサイト上等で勧告の概要等を公表するものとする。

2. 情報管理

(1) 検査等情報管理上の留意点

調査官は、開示検査等に関する情報を、行政機関の保有する個人情報の保護に関する法律等の法令、一般的な行政文書の管理に関する規定等に即して、適切に管理する。その際、特に、以下の点に配慮する。

- イ. 開示検査等の実施により知った秘密を漏らしてはならない。
- ロ. 開示検査等に関する情報は、適正な開示の確保及び開示規制違反の抑止という目的以外には使用してはならない（ただし、法令上の正当行為に該当する際の使用を除く。）。
- ハ. とりわけ、検査対象先の秘密事項等に係る情報の取扱いについては、細心の注意を払う。

(2) 主任文書管理者等による実態把握等

主任文書管理者等及び主任証券調査官は、調査官が上記の点を含め、適切に情報を管理しているかを把握し、必要に応じて、適切な措置を講ずる。

(注) 主任文書管理者等とは、金融庁行政文書管理規則で定める主任文書管理者、文書管理者をいう。

(3) 検査関係情報の取扱い

主任証券調査官は、立入検査着手時に検査対象先の責任者に対して、検査関係情報（開示検査中の調査官からの質問、指摘、要請その他調査官と検査対象先の役職員等とのやりとりの内容及び検査終了通知書をいう。以下同じ）には開示検査の端緒や具体的な検査手法に関わる情報、開示検査の過程で第三者から入手した保秘性の高い情報が含まれていることから、検査関係情報につき適切な情報管理を行わなければならない旨を説明し、この旨の承諾を得るものとする。

3. 関係部局等との連携

- (1) 金融庁及び財務局（福岡財務支局及び沖縄総合事務局を含む。）との間において、有価証券の発行者による適切な開示を確保する観点から、適切な連携を図るものとする。
- (2) 公認会計士・監査審査会事務局との間において、公認会計士・監査審査会、証券監視委のそれぞれの独立性を尊重しつつ、適切な連携を図るものとする。
- (3) 金融商品取引所との間において、市場の公正性及び透明性を確保する観点から、適切な連携を図るものとする。

Ⅲ その他

1. 金商法上の関連規定

金商法第 27 条の 22 第 1 項に基づく公開買付者等に対する報告・資料の徴取及び検査、同法第 27 条の 22 の 2 第 2 項により準用される同法第 27 条の 22 第 1 項に基づく公開買付者等に対する報告・資料の徴取及び検査、同条第 2 項に基づく意見表明報告書の提出者等に対する報告・資料の徴取及び検査、同法第 27 条の 30 第 1 項に基づく大量保有報告書の提出者等に対する報告・資料の徴取及び検査、同条第 2 項に基づく大量保有報告書に係る株券等の発行者である会社等に対する報告・資料の徴取、同法第 27 条の 35 に基づく特定情報の提供者等に対する報告・資料の徴取及び検査、同法第 177 条に基づく調査（金融商品取引法等の一部を改正する法律（平成 24 年法律第 86 号）の施行後）並びに金商法第 193 条の 2 第 6 項に基づく監査人に対する報告・資料の徴取に当たっては、本指針に示された基本的な考え方を踏まえつつ、事案の実態に即して検査を実施するものとする。

2. 施行日

本基本指針は、平成 25 年 8 月 30 日から施行する。

第3章

証券監視委の 活動実績等

3-1 証券監視委の活動状況

総括表

(単位:件数)

区 分		年 度		平成 4~30	令和 元	令和 2	令和 3	令和 4	令和 5	合 計
犯則事件の告発				200	3	2	8	8	4	225
勸 告				1,082	49	29	20	26	33	1,239
	証券検査結果等に基づく勸告			570	14	5	2	5	8	604
	課徴金納付命令に関する勸告 (不公正取引)			397	29	14	12	14	17	483
	課徴金納付命令に関する勸告 (開示書類の虚偽記載等)			111	6	10	5	7	8	147
	訂正報告書等の提出命令に関する勸告			4	0	0	1	0	0	5
適格機関投資家等特例業務届出者等に対する検査結果等に基づく公表				86	2	0	0	1	0	89
無登録業者・無届募集等に対する裁判所への禁止命令等の申立て				22	3	1	1	2	1	30
建 議				26	0	0	0	1	0	27
証 券 検 査				3,800	73	47	46	59	65	4,090
	金融商品取引業者			3,133	64	41	37	42	56	3,373
	第一種金融商品取引業者			2,265	44	34	28	23	34	2,428
	第二種金融商品取引業者			294	4	1	1	3	6	309
	投資運用業者、投資助言・代理業者			574	16	6	8	16	16	636
	登録金融機関			349	2	0	2	6	6	365
	適格機関投資家等特例業務届出者			138	0	2	0	3	1	144
	金融商品仲介業者			74	2	2	2	4	1	85
	信用格付業者			9	1	1	0	0	0	11
	自主規制機関等			32	2	0	2	0	0	36
	投資法人			50	1	0	2	2	1	56
	その他			15	1	1	1	2	0	20
取引審査				18,109	1,061	965	969	1,065	1,183	23,352

(注)

1. 「証券検査」の計数は、着手ベースの実施件数である。
2. 「課徴金納付命令に関する勧告(不公正取引)」の計数は、命令対象者ベースの件数である。
3. 上記の第一種金融商品取引業者(旧国内証券会社)に対する検査のほか、財務局等において証券監視委担当第一種金融商品取引業者(旧国内証券会社)の支店単独検査を実施している。
4. 平成18年度以前は、「投資運用業者」は「旧投資信託委託業者」、「投資助言・代理業者」は「旧投資顧問業者」である。
5. 平成24年度及び26年度における「適格機関投資家等特例業務届出者等に対する検査結果等に基づく公表」の件数には、金商法第187条に基づく調査結果の公表がそれぞれ1件含まれている。
6. 平成28年度、29年度、令和元年度及び令和4年度の「証券検査結果等に基づく勧告」には、「適格機関投資家等特例業務届出者等に対する検査結果等に基づく公表」と併せて勧告を行ったものがあり、これについては両方に計上している。

3-1

第2節

第3節

第4節

第5節

第6節

第7節

第8節

第9節

第10節

第11節

3-2 市場分析審査実施状況

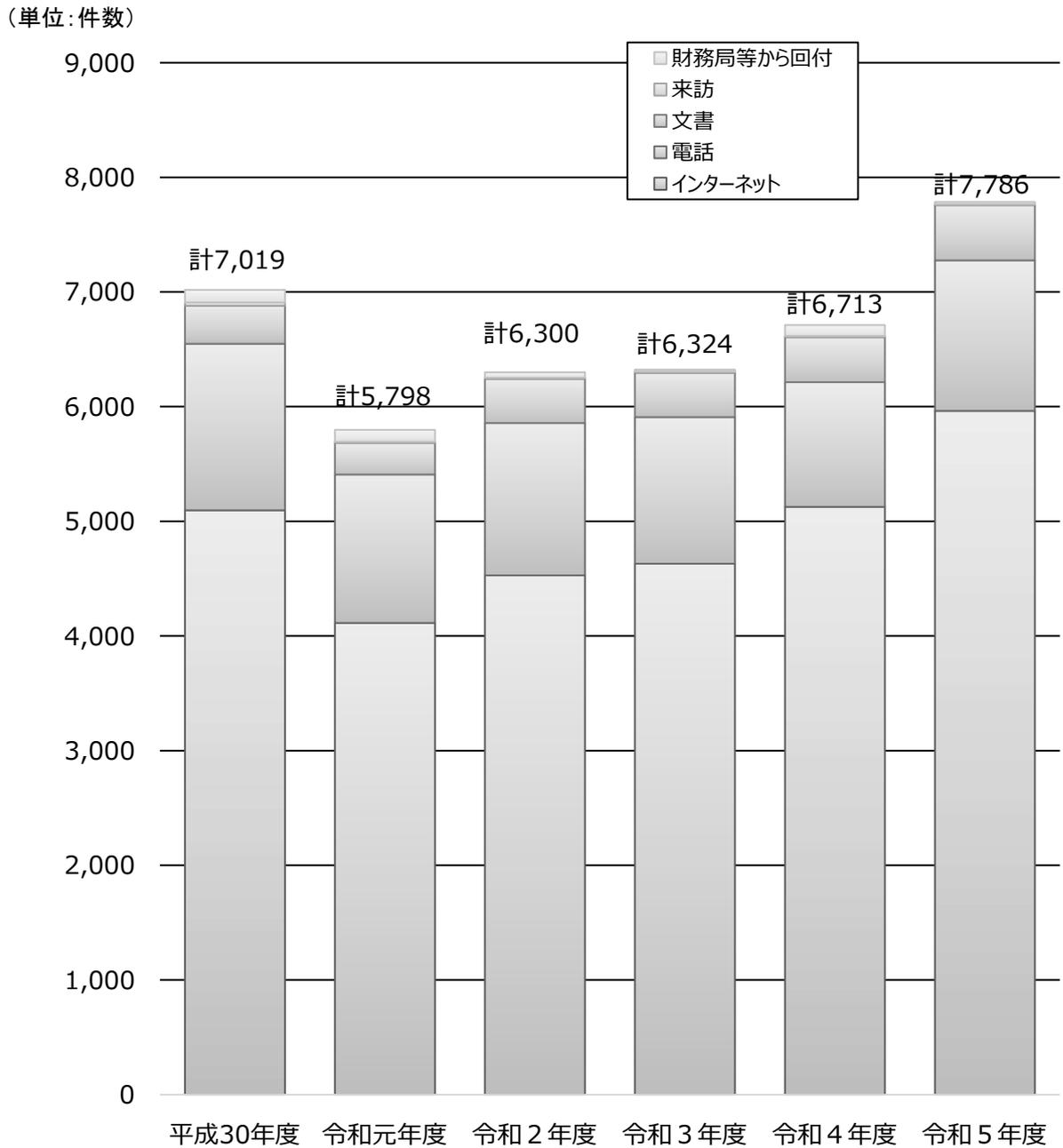
1. 取引審査実施状況

(単位:件数)

区 分	年 度				
	令和元	令和2	令和3	令和4	令和5
価格形成に関するもの	78	60	43	29	26
内部者取引に関するもの	976	900	922	1,024	1,147
そ の 他	7	5	4	12	10
合 計	1,061	965	969	1,065	1,183
(証券監視委)	453	429	377	448	478
(財務局等)	608	536	592	617	705

(注)会計年度(4月1日~翌年3月31日)ベース。

2. 情報の受付状況



	平成 30 年度	令和元年度	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度	
受付件数の推移 (うち年金運用ホットライン)	7,019 (0)	5,798 (0)	6,300 (0)	6,324 (0)	6,713 (0)	7,786 (0)	
媒体の種類別の内訳	インターネット	5,097	4,114	4,529	4,630	5,127	5,964
	電話	1,452	1,295	1,328	1,279	1,087	1,312
	文書	332	275	385	386	392	482
	来訪	28	10	11	12	11	8
	財務局等から回付	110	104	47	17	96	20

3. 情報の内容別受付状況

(単位:件数)

区分	年度	平成30	令和元	令和2	令和3	令和4	令和5
A. 個別銘柄							
a. 取引規制							
1.	風説の流布・偽計	1	1	0	0	1	1
2.	相場操縦	3,194	2,574	2,764	2,421	2,829	3,515
3.	内部者取引	355	278	361	353	271	340
0.	その他	1,866	1,220	1,559	2,131	1,932	2,033
b. 開示							
1.	大量保有報告書の虚偽記載	11	4	0	10	2	3
2.	大量保有報告書の未提出	16	16	19	7	24	30
0.	その他	5	2	0	5	2	10
(小計)		5,448	4,095	4,703	4,927	5,061	5,932
B. 発行体							
a. 法定開示							
1.	無届募集	5	2	0	0	2	4
2.	ファイナンス	8	0	2	2	0	1
3.	有価証券報告書等の虚偽記載	92	69	83	75	63	101
4.	有価証券報告書等の未提出	2	2	1	1	3	0
5.	内部統制報告	0	0	0	1	1	1
6.	無届公開買付	0	0	0	0	0	0
0.	その他	12	16	8	9	20	17
b. 協会・取引所ルール							
1.	適時開示	8	25	22	24	14	55
0.	その他	11	25	52	49	28	18
c. その他							
1.	ガバナンス等	13	5	0	10	5	36
0.	その他	49	89	102	90	114	77
(小計)		200	233	270	261	250	310
C. 金融商品取引業者等							
a. 禁止行為等							
1.	断定的判断を提供した勧誘	0	1	0	0	1	3
2.	無断売買	8	5	5	0	1	2
3.	損失保証・補てん	8	3	2	1	1	0
4.	虚偽告知	0	0	0	0	1	0
5.	無登録での募集・私募の取扱い	1	0	0	0	1	0
0.	その他法令違反	54	30	49	16	44	48
b. 業務の運営状況							
1.	顧客の知識等に照らした不当な勧誘	4	6	0	4	0	4
2.	システム関連	18	15	13	9	18	10
3.	投資運用関連	0	1	6	4	3	3
0.	その他営業姿勢に関するもの	277	272	185	161	268	309
c. 経理							
1.	法定帳簿に関する不正	0	0	0	0	0	2
2.	財務の健全性・リスク管理	0	0	0	2	1	0
d. 協会・取引所ルール							
1.	自主ルール違反	2	0	2	0	1	1
e. その他							
0.	その他	188	164	146	161	223	198
(小計)		560	497	408	358	563	580
D. その他							
a. 意見・要望等							
1.	委員会に対する意見等	101	159	157	211	120	145
2.	証券行政・政策に対する意見等	47	24	36	97	84	61
b. その他							
1.	無登録業者	232	171	211	229	330	452
2.	未公開株	17	4	15	5	4	2
3.	適格機関投資家等特例業者等	16	6	3	0	5	8
0.	その他	398	609	497	236	296	296
(小計)		811	973	919	778	839	964
合計		7,019	5,798	6,300	6,324	6,713	7,786

3-3 勧告等実施状況

1. 勧告実施件数一覧表

(単位:件数)

区 分	年 度	平成 4~30	令和 元	令和 2	令和 3	令和 4	令和 5	合計
勧告件数		1,082	49	29	20	26	33	1,239
行政処分に関する勧告		570	14	5	2	5	8	604
証券検査の結果に基づく勧告		557	14	5	2	5	8	591
証券監視委の行った検査等にかかるもの		174	3	1	1	2	1	182
財務局長等の行った検査等にかかるもの		384	11	4	1	3	7	410
取引調査、犯則事件の調査に基づく勧告		17	0	0	0	0	0	17
課徴金納付命令に関する勧告		508	35	24	17	21	25	630
取引調査の結果に基づく勧告		365	28	14	10	13	14	444
国際取引等調査の結果に基づく勧告		32	1	0	2	1	3	39
開示検査の結果に基づく勧告		111	6	10	5	7	8	147
訂正報告書等の提出命令に関する勧告		4	0	0	1	0	0	5

- ・ 行政処分に関する勧告のうち、平成9・平成15・平成16・平成26年度の勧告には、証券検査の結果及び取引調査・犯則事件の調査に基づくものを一つの勧告として行っていたものがあり、これについては両方に計上したため、合計数と一致しない。
- ・ 平成25年度の証券検査の結果に基づく勧告には、証券監視委及び財務局が実施した検査に基づくものを一つの勧告として行っていたものがあり、これについては内訳として証券監視委及び財務局にそれぞれ計上したため、合計数と一致しない。
- ・ 課徴金納付命令に関する勧告のうち、取引調査の結果に基づく勧告及び国際取引等調査の結果に基づく勧告については、課徴金納付命令対象者ベースで計上。

2. 金商業者等に対する行政処分等に係る勧告実績 ～令和5年度～

	担当	被検査法人	勧告日	勧告の原因となった法令違反行為等
1	関東	(株)ユニオン証券アドバイザーズ	令和5年5月26日	無登録で集団投資スキーム持分の募集又は私募の取扱い等を行っている状況
2	四国	ロンナル・フォレックス(株)	令和5年5月26日	虚偽の事業報告書等の提出等 純財産額及び自己資本規制比率が法定の基準を下回っている状況等 第一種金融商品取引業を適確に遂行するに足りる人的構成を有していない状況及び第一種金融商品取引業を適確に遂行するための必要な体制が整備されていない状況
3	関東	ちばぎん証券(株)	令和5年6月9日	適合性原則に抵触する業務運営の状況
4	関東	(株)千葉銀行	令和5年6月9日	金融商品仲介業務に関し、投資者保護上の問題が認められる状況
5	関東	(株)武蔵野銀行	令和5年6月9日	金融商品仲介業務に関し、投資者保護上の問題が認められる状況
6	関東	三木証券(株)	令和5年9月15日	適合性原則に抵触する業務運営の状況
7	関東	(株)ストックジャパン	令和5年12月5日	著しく事実に相違する表示のある広告をする行為等
8	証券監視委	(株)SBI証券	令和5年12月15日	取引所金融商品市場における上場金融商品の相場を変動等させることにより実勢を反映しない作為的なものとなることを知りながら、当該上場金融商品に係る買付けの受託等をする行為

	令和5年度
証券監視委	1
財務局	7
関東	6
四国	1
合計	8

第1節
第2節
3-3
第4節
第5節
第6節
第7節
第8節
第9節
第10節
第11節

3. 課徴金納付命令に関する勧告件数及び課徴金額

不公正取引

年度	勧告件数(件)・課徴金額(円)							
			内部者取引		相場操縦		偽計	
	件数	課徴金額	件数	課徴金額	件数	課徴金額	件数	課徴金額
平成17	4	1,660,000	4	1,660,000	0	0	0	0
平成18	11	49,150,000	11	49,150,000	0	0	0	0
平成19	16	39,600,000	16	39,600,000	0	0	0	0
平成20	18	66,610,000	17	59,160,000	1	7,450,000	0	0
平成21	43	55,480,000	38	49,220,000	5	6,260,000	0	0
平成22	26	63,940,000	20	42,680,000	6	21,260,000	0	0
平成23	18	31,690,000	15	26,300,000	3	5,390,000	0	0
平成24	32	135,720,000	19	35,150,000	13	100,570,000	0	0
平成25	42	4,608,060,000	32	50,960,000	9	461,050,000	1	4,096,050,000
平成26	42	563,342,935	31	38,820,000	11	524,522,935	0	0
平成27	35	191,835,000	22	75,500,000	12	104,095,000	1	12,240,000
平成28	51	371,400,000	43	89,790,000	8	281,610,000	0	0
平成29	26	168,960,000	21	60,830,000	5	108,130,000	0	0
平成30	33	412,105,000	23	36,650,000	7	373,405,000	3	2,050,000
令和元	29	280,085,000	24	240,730,000	5	39,355,000	0	0
令和2	14	430,440,000	8	41,610,000	6	388,830,000	0	0
令和3	12	102,870,000	6	55,570,000	6	47,300,000	0	0
令和4	14	68,910,000	8	8,090,000	6	60,820,000	0	0
令和5	17	49,200,000	13	35,270,000	3	6,030,000	1	7,900,000
合計	483	7,691,057,935	371	1,036,740,000	106	2,536,077,935	6	4,118,240,000

開示規制違反等

年度	勧告件数(件)・課徴金額(円)					
			開示規制		その他	
	件数	課徴金額	件数	課徴金額	件数	課徴金額
平成17	0	0	0	0	0	0
平成18	3	633,330,000	3	633,330,000	0	0
平成19	8	66,849,997	8	66,849,997	0	0
平成20	11	1,913,909,997	11	1,913,909,997	0	0
平成21	10	711,479,998	9	703,979,998	1	7,500,000
平成22	19	1,879,819,994	19	1,879,819,994	0	0
平成23	11	569,250,000	11	569,250,000	0	0
平成24	9	721,749,994	9	721,749,994	0	0
平成25	9	1,048,369,999	9	1,048,369,999	0	0
平成26	8	604,640,000	8	604,640,000	0	0
平成27	6	7,800,120,000	6	7,800,120,000	0	0
平成28	5	425,780,000	5	425,780,000	0	0
平成29	2	12,000,000	2	12,000,000	0	0
平成30	10	393,430,000	10	393,430,000	0	0
令和元	6	2,746,955,000	6	2,746,955,000	0	0
令和2	10	2,746,854,996	10	2,746,854,996	0	0
令和3	5	397,199,997	5	397,199,997	0	0
令和4	7	362,190,000	7	362,190,000	0	0
令和5	8	451,845,000	8	451,845,000	0	0
合計	147	23,485,774,972	146	23,478,274,972	1	7,500,000

(注)

- 1 年度とは当年4月～翌年3月をいう。
- 2 課徴金額は勧告時点のもの。
- 3 その他の1件は、公開買付開始公告実施義務違反である。

3-4 証券検査実施状況

1. 検査実施状況一覧表

(単位:件数)

区分	年度	平成30	令和元	令和2	令和3	令和4	令和5
合 計		68	73	47	46	59	65
(証券監視委)		(17)	(20)	(8)	(12)	(12)	(9)
(財務局長等)		(51)	(53)	(39)	(34)	(47)	(56)
金融商品取引業者		55	64	41	37	42	56
(証券監視委)		(14)	(15)	(6)	(6)	(8)	(6)
(財務局長等)		(41)	(49)	(35)	(31)	(34)	(50)
第一種金融商品取引業者		35	44	34	28	23	34
(証券監視委)		(10)	(9)	(4)	(2)	(5)	(3)
(財務局長等)		(25)	(35)	(30)	(26)	(18)	(31)
第二種金融商品取引業者		7	4	1	1	3	6
(証券監視委)		(2)	(2)	(0)	(0)	(0)	(0)
(財務局長等)		(5)	(2)	(1)	(1)	(3)	(6)
投資助言・代理業者		8	10	2	3	10	10
(証券監視委)		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
(財務局長等)		(8)	(10)	(2)	(3)	(10)	(10)
投資運用業者		5	6	4	5	6	6
(証券監視委)		(2)	(4)	(2)	(4)	(3)	(3)
(財務局長等)		(3)	(2)	(2)	(1)	(3)	(3)
登録金融機関		3	2	0	2	6	6
(証券監視委)		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(1)
(財務局長等)		(3)	(2)	(0)	(2)	(6)	(5)
適格機関投資家等特例業務届出者		4	0	2	0	3	1
(証券監視委)		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(1)
(財務局長等)		(4)	(0)	(2)	(0)	(3)	(0)
金融商品仲介業者		4	2	2	2	4	1
(証券監視委)		(1)	(0)	(0)	(1)	(0)	(0)
(財務局長等)		(3)	(2)	(2)	(1)	(4)	(1)
信用格付業者		0	1	1	0	0	0
(証券監視委)		(0)	(1)	(1)	(0)	(0)	(0)
(財務局長等)		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
自主規制機関等		0	2	0	2	0	0
(証券監視委)		(0)	(2)	(0)	(2)	(0)	(0)
(財務局長等)		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
投資法人		1	1	0	2	2	1
(証券監視委)		(1)	(1)	(0)	(2)	(2)	(1)
(財務局長等)		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
その他		1	1	1	1	2	0
(証券監視委)		(1)	(1)	(1)	(1)	(2)	(0)
(財務局長等)		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)

2. 1 検査対象当たりの平均延べ検査投入人員

(単位:人・日)

区分		年度	平成30	令和元	令和2	令和3	令和4	令和5
金融商品取引業者	第一種金融商品取引業者		179	169	175	326	485	384
	第二種金融商品取引業者		161	83	89	0	1031	317
	投資助言・代理業者		155	113	168	351	116	196
	投資運用業者		123	136	195	557	257	137
登録金融機関			58	39	0	87	56	257
適格機関投資家等特例業務届出者			34	51	0	0	1528	0
金融商品仲介業者			103	32	105	0	232	443
信用格付業者			0	0	210	0	0	0
自主規制機関等			0	132	0	220	0	0

(注)上記各期間中に検査を終了したものについて、臨店期間分を算出したものである。

3. 検査結果の状況

(1) 検査終了件数

(単位:件数)

区分 \ 年度	平成30	令和元	令和2	令和3	令和4	令和5
検査終了件数	56	76	53	32	48	63
金融商品取引業者	49	66	44	28	39	49
第一種金融商品取引業者	31	46	35	22	24	27
第二種金融商品取引業者	7	4	2	0	3	5
投資助言・代理業者	7	11	3	2	5	13
投資運用業者	4	5	4	4	7	4
登録金融機関	2	3	0	2	1	9
適格機関投資家等特例業務届出者	2	2	0	0	2	0
金融商品仲介業者	3	1	4	0	2	4
信用格付業者	0	0	2	0	0	0
自主規制機関等	0	2	0	2	0	0
投資法人	0	1	1	0	4	0
その他	0	1	2	0	0	1

(2) 問題点が認められた業者等の数

区分 \ 年度	平成30	令和元	令和2	令和3	令和4	令和5
問題点が認められた業者等の数	40	51	21	13	34	31
不公正取引に関するもの	4	4	2	1	6	3
投資者保護に関するもの	18	23	10	8	34	28
財産・経理等に関するもの	2	2	0	2	0	3
その他業務運営に関するもの	25	38	12	10	27	13

(注1)「問題点が認められた業者等の数」とは、検査終了通知書において問題点(留意すべき事項を含む)を指摘した会社等の数をいう。

(注2)「不公正取引に関するもの」、「投資者保護に関するもの」、「財産・経理等に関するもの」及び「その他業務運営に関するもの」は、各項目で問題点が認められた業者等の数をいう。従って、各項目で重複する会社等があるため、各項目の合計と「問題点が認められた業者等の数」の数値とは一致しない。

3-5 勧告等事案の概要一覧表

1. 金商業者等に対する検査の結果に基づく勧告

(令和5年4月～令和6年3月)

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容 (業者名欄に検査を実施した証券監視委又は財務局等名を付記)	行政処分等の内容
1	令和5年5月26日	<p>【株式会社ユニオン証券アドバイザーズ(関東)】</p> <p>○ 無登録で集団投資スキーム持分の募集又は私募の取扱い等を行っている状況</p> <p>当社は、特定の民法上の任意組合(以下「本件任意組合」という。)について、令和3年12月から令和4年8月までの間、A前代表取締役(同3年12月31日付退任。以下「A前代表」という。)が中心となって、少なくとも56名(延べ134名)の顧客に対し、出資持分の取得勧誘を行った。</p> <p>その結果、当該56名の顧客から、本件任意組合に対し、12億2700万円が出資されている。</p> <p>本件任意組合の出資持分は金融商品取引法(以下「金商法」という。)第2条第2項第5号に定める集団投資スキーム持分に該当すると認められるものであり、当社は、本件任意組合の業務執行組合員(以下「本件業務執行組合員」という。)のために、本件任意組合の出資持分の取得勧誘を行っていることから、集団投資スキーム持分について、金商法第2条第8項第9号に規定する募集又は私募の取扱いを行ったものと認められる。</p> <p>また、当社は、顧客から出資される金銭について、当社の銀行口座を經由して本件業務執行組合員に送金していることから、当社は、集団投資スキーム持分の募集又は私募の取扱いに関して、金商法第2条第8項第16号に規定する金銭の預託を顧客から受けたものと認められる。</p> <p>上記行為は、本件任意組合の出資持分の取得勧誘を行うことを検討したA前代表において、法令に対する理解が不足したまま取得勧誘を開始していたこと、また、B代表取締役において、A前代表の指示に従うままとり、当社の経営管理を積極的に行う意識が欠如していたため、A前代表の行為を看過していたことに起因して発生したものと認められる。</p> <p>当社が上記取得勧誘行為を行っている状況は金商法第28条第2項に規定する「第二種金融商品取引業」に該当し、また、上記金銭の預託を受ける行為を行っている状況は同条第1項に規定する「第一種金融商品取引業」に該当するものであり、当社が同法第29条に基づく登録を受けることなく、これらの業務を行うことは、同条に違反するものと認められる。</p>	<p>行政処分日 令和5年6月9日</p> <p>○ 登録取消し 関東財務局長(金仲)第824号の登録を取り消す。</p> <p>○ 業務改善命令</p> <p>① 無登録金融商品取引業務に該当する行為を直ちに取り止めること。</p> <p>② 当社が募集又は私募の取扱いを行ったすべての集団投資スキーム持分について、取扱い状況(顧客ごとの属性、出資日、出資金額、償還日、償還金額等)を早急に把握し報告すること。</p> <p>③ すべての顧客に対し、今回の行政処分の内容を説明し、適切な対応を行うなど、投資者保護に万全の措置を講じること。</p> <p>④ 上記①から③の対応・実施状況について、令和5年7月10日(月曜日)までに書面により報告するとともに、以降、そのすべてが完了するまでの間、随時書面により報告すること。</p>
2	令和5年5月26日	<p>【ロンナル・フォレックス株式会社(四国)】</p> <p>(1) 虚偽の事業報告書等の提出等</p> <p>当社は、店頭デリバティブ取引の媒介業務の専門業者であるが、当該業務に係る収益は僅少(令和2年3月期から令和4年3月期までの直近3期合計で約4万円)となっている中、当社が付随業務として行っているとされるコンサルティング業務に係る収益(直近3期合計で約42百万円)が、当社の収益の大宗(99.9%)を占めている状況にある。</p>	<p>行政処分日 令和5年6月16日</p> <p>○ 登録取消し 四国財務局長(金商)第28号の登録を取り消す。</p>

<p>2 つづき</p>	<p>そして、当社は、当社の代表取締役であるA(以下「A代表」という。)の母親及び中国在住のA代表の知人の2名が代表取締役を務める法人との間で締結した経営コンサルティング契約に基づくコンサルティング収益として、直近3期合計で約29百万円を売上げとして計上し、当該売上げを売上高に含めて記載した事業報告書を四国財務局長に提出しているほか、当該事業報告書の写しを備え置く方法により説明書類を公衆の縦覧に供している。</p> <p>しかしながら、検査において、当該法人の事業実態が確認できなかったほか、当社が当該法人に対して報酬額に見合うようなコンサルティング業務を行ったことを示す証拠も何ら提出されていない。他方、当該法人から当社に支払われるコンサルティング報酬の大部分(約19百万円)を、当該法人の業務に一切関与していないと説明していたA代表が、自己の個人名義の預金口座から当該法人名義に振込人名義の変更をした上で当社名義の預金口座に送金している状況が認められた。</p> <p>以上によれば、当該法人から得たとするコンサルティング業務に係る収益のうち、少なくともA代表が送金した約19百万円は、A代表が、自己の個人名義の預金口座から拠出した資金をもって当社が行ったコンサルティング業務に係る収益と見せかけているにすぎないものと認められ、当社は、当該コンサルティング業務に係る収益(売上げ)を架空計上したものと認められる。</p> <p>当社による上記の行為は、虚偽の記載をした事業報告書を提出したもとして金融商品取引法第46条の3第1項に違反するほか、虚偽の記載をした説明書類を公衆の縦覧に供したもとして同法第46条の4に違反するものと認められる。</p> <p>(2) 純財産額及び自己資本規制比率が法定の基準を下回っている状況等</p> <p>当社の貸借対照表、決算報告資料等によると、当社は、直近3期(令和2年3月期から令和4年3月期)及び令和4年8月末のいずれの時点においても、その総資産のうち大半が現金(例えば、令和4年8月末現在、総資産約71百万円のうち約65百万円(91.3%)が現金)で占められている状況にある。一方で、令和2年1月1日から令和4年12月31日までの間における当社の預金残高の状況は、そのほとんどの期間で数万円から数十万円程度で推移している。</p> <p>そのような中、当社の唯一の拠点である高松本社には上記金額に相当する現金は存在せず、検査の過程でもそのような大口の現金の存在は確認できなかった。</p> <p>A代表によると、当社が保有する現金はA代表の自宅等に保管しているとのことであるが、総資産の大半に当たる金銭をあえて現金で保管する理由や当社の事務所内ではなくA代表個人の自宅等で保管する理由について、A代表は、保管方法は経営者による経営判断で決めるものであるなどといった説明を行うのみで、何ら合理的な説明がなされていない。また、当社は、四国財務局による監督対応等のため保有現金の実在を示す必要が生じた都度、A代表の知人等が経営する他社から一時的にA代表個人名義の預金口座を介して当社名義の預金口座に入金を受け、銀行から預金残高証明書の発行を受けて四国財務局に提出するなどの対応をとった後、当該他社に返金を行っている状況が認められた。</p> <p>上記のとおり、検査において上記金額に相当する現金の存在は確認できていない上、総資産の大半に当たる金銭をあえて現金保有とする理由や保管場所をあえてA代表個人の自宅等とする理由について何ら合理的な説明もなく、かえって、真にそのような額の現金を当社が保有しているのであれば行う必要のない資金移動が行われていることからすれば、当社が保有しているとする現金相当額(令和4年8月末現在で約65百万円)は、実際には存在していないものと認められる。</p> <p>そうすると、当社の純財産額については、少なくとも令和2年1月1日から検査基準日現在(令和4年9月2日)に至るまで、金融商品取引法第29条の4第1項第5号口に基づく金融商品取引法施行令第15条の9第1項に定める金額(50百万円)を下回っているものと認められ、加えて、当社の自己資本規制比率についても、金融商品取引法第46条の6第2項において下回ることはないようにしなければならぬとされる比率(120%)を下回り、更に100%を著しく下回る状況にあると認められる。</p> <p>当社による上記の状況は、金融商品取引法第29条の4第1項第5号口に規定する「純財産額が、公益又は投資者保護のため必要かつ適当なものとして政令で定める金額に満たない者」に該当し、</p>	
------------------	---	--

第1節

第2節

第3節

第4節

3-5

第6節

第7節

第8節

第9節

第10節

第11節

第1節	第2節	第3節	第4節	3-5	第6節	第7節	第8節	第9節	第10節	第11節	
	2	つづき									
<p>同法第52条第1項第3号に該当するものと認められる。また、当社は、自己資本規制比率が120%を下回っていることから、金融商品取引法第46条の6第2項に違反するものと認められ、加えて、当社の自己資本規制比率は100%を著しく下回っていることから、同法第53条第2項に該当するものと認められる。</p> <p>(3) 第一種金融商品取引業を適確に遂行するに足りる人的構成を有していない状況及び第一種金融商品取引業を適確に遂行するための必要な体制が整備されていない状況</p> <p>当社の業務運営は、当社の発行済株式の9割超を保有し、かつ、当社の代表取締役であるA代表が実質的に一人で行っているほか、会社全体の財務管理及び資金繰り等も一手に担っており、業務運営の適切性の確保等は同人に委ねられている状況にある。</p> <p>こうした状況において、当社は、第一種金融商品取引業を適切に行うに当たり当該業務に関する十分な知識及び経験を有する役員又は使用人を確保していなければならないところ、A代表は、上記(1)及び(2)の法令違反行為を自ら主導して行っていたほか、今回検査において、当社の主要株主としてのA代表個人への報告徴取命令に対して虚偽の報告を行っているなど、同人の業務運営の適切性の確保等に対する意識及び法令等遵守意識は著しく欠如しているものと認められることから、当社は、第一種金融商品取引業を適確に遂行するに足りる人的構成を有していないものと認められる。</p> <p>また、当社において、A代表以外の役職員によりA代表の当該法令違反行為等をけん制・抑止する態勢となっていないことから、当社は、第一種金融商品取引業を適確に遂行するための必要な体制が整備されていない状況にあるものと認められる。</p> <p>当社における上記の状況は、金融商品取引法第29条の4第1項第1号ホに規定する「金融商品取引業を適確に遂行するに足りる人的構成を有しない者」及び同号ヘに規定する「金融商品取引業を適確に遂行するための必要な体制が整備されていると認められない者」に該当し、同法第52条第1項第1号に該当するものと認められる。</p>											
	3	令和5年6月9日	【ちばぎん証券株式会社(関東)】								
<p>○ 適合性原則に抵触する業務運営の状況</p> <p>当社は、当社の親会社である株式会社千葉銀行(千葉市中央区、法人番号2040001000019、以下「千葉銀行」という。)、及び千葉銀行とアライアンス契約を締結している株式会社武蔵野銀行(さいたま市大宮区、法人番号6030001002490、以下「武蔵野銀行」という。)との間で各々金融商品仲介業務に係る提携契約を締結し、千葉銀行及び武蔵野銀行に対し、金融商品仲介業務として当社に顧客を紹介する業務(以下「紹介型仲介」という。)(注1)を行わせている。当社全体の収益額における銀行からの紹介顧客に係る収益額の割合は高く、銀証連携に係る収益が当社の中心的な収益源となっている。</p> <p>(注1)千葉銀行及び武蔵野銀行は、顧客を紹介する際、当社の取扱商品の概要説明のみを行い、個別商品の具体的な特性・条件等に言及した説明を禁止している。</p> <p>こうした状況を踏まえ、当社の業務運営状況を検証したところ、以下の問題が認められた。</p> <p>(1) 適合性原則に抵触する勧誘が長期的・継続的に発生している状況</p> <p>① 当社は、以下のとおり、顧客の投資方針や投資経験等の顧客属性を適時適切に把握しないまま、多数の顧客に対し、複雑な仕組債の勧誘を長期的・継続的にしている状況が認められた。</p> <p>ア. 顧客の投資方針と当社が把握している投資方針が異なっている事例</p> <p>個人の仕組債保有先(令和4年6月末時点で仕組債を保有していた8,424顧客)のうち、2,424顧客は、最もリスク許容度が高く、当社において複雑な仕組債を購入することが可能となる投資方針の「積極的値上り益重視」ではなく、これよりもリスク許容度の低い投資方針を有する顧客であった。</p>											
							行政処分日				
							令和5年6月23日				
							○ 業務改善命令				
							(1) 本件に係る根本的な原因の分析に基づき、再発防止に向けて、以下の点を含む実効性のある業務改善計画を速やかに策定し、着実に実施すること。				
							① 適合性原則を踏まえた顧客への勧誘及び説明が適切に行われる業務運営態勢の構築、並びに、経営管理態勢及び内部管理態勢の強化				
							② 法令等の遵守及び適正かつ健全な業務運営を前提としたビジネスモデルの構築				
							③ 今回の処分を踏まえた本件に係る経営陣を含む責任の所在の明確化				

<p>3 つづき</p>	<p>イ. 顧客の投資経験と当社が把握している投資経験が異なっている事例 銀行で投資経験を把握されずに紹介され、当社が投資経験を確認した上で仕組債の購入に至ったとしている80顧客のうち、34顧客は、金融商品の投資経験を全く有していない顧客や当社において複雑な仕組債を購入することが可能となる投資経験を有していない顧客であった。</p> <p>② 当社は、複雑な仕組債の勧誘に際し、少なくとも3顧客に対し、仕組債の参照指標に係る変動により損失が生ずるおそれがある理由等について、顧客属性に照らして当該顧客に理解されるために必要な方法及び程度による説明を行っていないことが顧客への説明状況の検証において認められた。</p> <p>(2) 適合性原則を遵守するための態勢が不十分な状況 当社は、銀行側において紹介型仲介契約で定めた業務を超えた商品説明がなされる等の適合性原則の遵守に支障を生じさせる要因が発生していたにもかかわらず、適切に実態把握するなどしてこれを解消しなかったほか、当社営業員に対して顧客の投資方針や投資経験等の適合性を適切に把握する方法を周知徹底しないまま、複雑な仕組債の勧誘販売を急拡大させた。 この結果、仕組債を購入した顧客からの苦情が多数寄せられるようになったが、その苦情の中には、当社が把握している投資方針と顧客が述べる投資方針が一致していないものなど、当社における適合性原則の遵守状況に問題があることを示唆するものが含まれていた。当社は、それらの苦情の大半を「一方的申出」として処理を完了したため、苦情の中に含まれる適合性原則の遵守に関わる問題点を適切に抽出分析することなく看過し、業務改善に向けて苦情を適切に活用できなかった。また、多数の苦情が継続的に発生する状況を自ら解消し切れず、自主規制機関である日本証券業協会から適合性原則の遵守状況に関して計3回に及び注意喚起を受けることにも繋がった。 日本証券業協会から適合性原則の遵守状況に関する懸念が示されたことを踏まえ、当社は全社的かつ抜本的に苦情対策に取り組むことを目的として、社長自らも参加する会議体を発足させたものの、適合性原則に抵触する勧誘販売状況の実態把握やこれに基づく実効性ある態勢整備を行わなかったことなど、適合性原則に抵触する勧誘販売を防止・改善するための取組が不十分であった。 以上のとおり、当社においては、適合性原則に対する理解やその遵守の重要性に対する意識の希薄さ等により、真の顧客利益を考えた投資勧誘ではなく、手数料収益を上げるためのツールとして仕組債の販売がなされ、適合性原則を遵守するための態勢整備も不十分であったため、適合性原則に抵触する不適切な勧誘販売を防ぐことができなかった。</p> <p>上記(1)②の行為は、金融商品取引法第38条第9号に基づく金融商品取引業等に関する内閣府令第117条第1項第1号の「契約締結前交付書面の交付に関し、顧客の知識、経験、財産の状況及び金融商品取引契約を締結する目的に照らして当該顧客に理解されるために必要な方法及び程度による説明をすることなく、金融商品取引契約を締結する行為」に該当すると認められる。</p> <p>上記(1)及び(2)の状況は、適合性原則に抵触する業務運営を継続的に行っていたものと認められ、当社における仕組債の勧誘販売状況は、金融商品取引法第40条第1号の「顧客の知識、経験、財産の状況及び金融商品取引契約を締結する目的に照らして不相当と認められる勧誘を行って投資者の保護に欠けることとなり、又は欠けることとなるおそれがあること」に該当すると認められる。</p> <p>なお、上記の状況は、当社経営陣において、銀証連携で生じていた問題を適切に把握していなかったこと、適合性原則に対する理解やその遵守の重要性に対する意識が希薄であったことにより発生したものであると認められる。</p>	<p>④ 千葉銀行又は武蔵野銀行と連携し、本件行政処分の内容についての顧客に対する適切な説明</p> <p>(2) 上記の対応・実施状況について、令和5年7月24日(月曜日)までに書面で報告するとともに、その後の進捗状況を四半期末経過後(初回を令和5年9月末基準とする。)15日以内を期限として当面の間、書面で報告すること。</p>
<p>4</p>	<p>令和5年6月9日 【株式会社千葉銀行(関東)】</p>	<p>行政処分日 令和5年6月23日</p>

第1節
第2節
第3節
第4節
3-5
第6節
第7節
第8節
第9節
第10節
第11節

第1節
第2節
第3節
第4節
3-5
第6節
第7節
第8節
第9節
第10節
第11節

4
つづき

○ 金融商品仲介業務に関し、投資者保護上の問題が認められる状況

当行は、ちばぎん証券株式会社(千葉市中央区、法人番号4040001034601、以下「ちばぎん証券」という。)との間で、金融商品仲介業務に係る提携契約を締結し、金融商品仲介業務として同証券に顧客を紹介する業務(以下「紹介型仲介」という。)を行っている。紹介型仲介では、顧客に対し、ちばぎん証券が扱う商品概要の説明のみを行うこととしている。また、同業務は顧客紹介のみを行うこととしていることから、当行において、顧客属性(知識、投資経験、財産の状況、投資目的)の確認を行っていない。

紹介型仲介による収益は、紹介顧客がちばぎん証券で取引をした際に支払った手数料等のうち、一定割合が当行に配分される仕組みとなっている。また、当行の行員は、個別商品に係る説明が禁止されているため、自らが直接収益を発生させることはできないにもかかわらず、行員の収益目標には、ちばぎん証券が紹介顧客から得る個別商品に係る収益(みなし評価)も含まれていることがあった。

今回検査において、当行が行う金融商品仲介業務の状況について検証したところ、以下のとおり問題が認められた。

(1) 顧客属性を確認及び検討しないまま、顧客を仕組債購入へ誘引している状況

紹介型仲介では、顧客に対し、ちばぎん証券が扱う商品概要の説明のみを行うこととしているところ、これに反し、仕組債に誘引している事例が認められた。

商品概要の説明のみにとどまらず、仕組債を提案するのであれば、顧客属性を十分確認し、どのような提案が適切であるか慎重に検討した上で行うべきところ、当行においては、顧客属性を確認しないまま、高金利等の優位性を強調して仕組債に誘引しており、投資者保護上問題のある行為であると認められる。

(2) 内部管理態勢が不十分な状況

当行は、ちばぎん証券が立ち上げた銀行紹介顧客への販売に係る苦情対策を議論する会議体にオブザーバーとして参加し、当行の紹介顧客に関する苦情が同証券に対して継続的に多数寄せられていること等を把握していたにもかかわらず、苦情の発生原因分析や改善策の立案等に十分に取り組んでおらず、苦情処理に関する内部管理態勢が不十分であると認められる。

また、当行では、顧客毎の交渉結果記録に紹介顧客に対する説明内容が詳細に記載されていない状況にあり、このため、営業部店、内部管理部門及び監査部門による確認も形式的なものにとどまっているなど、顧客への説明状況に関する実効性のあるモニタリング態勢も不十分であると認められる。

さらに、経営陣が、行員が顧客を仕組債購入へ誘引している状況を把握していないこと、行員が収益目標達成のために概要説明を超えた商品説明をして顧客を誘引する事象が発生しうる仕組みとなっていることを適切に認識していないこと、紹介顧客からの苦情が多数寄せられている実態を把握していたにもかかわらず、担当部署に任せきりにし、その取組内容が不十分なものとなっていることを看過しているなど、紹介型仲介に関し、経営陣のガバナンスが十分に発揮されていないことも要因となり、紹介型仲介に関する業務運営態勢の構築も不十分であると認められる。

登録金融機関が金融商品仲介業務を行うに際しては、金融商品取引法上、投資者保護の観点から、適切な態勢整備や業務運営が求められているところ、上記(1)及び(2)のとおり、当行においては、金融商品仲介業務を行うための適切な態勢整備が行われないうちで、顧客属性を確認しないまま、顧客を仕組債購入へ誘引している状況が認められており、投資者保護上、問題があるものと認められる。なお、これらの状況は、結果として、ちばぎん証券の適合性の原則に抵触する業務運営にも繋がっているものと認められる。

以上のことから、当行における紹介型仲介の業務運営は、投資者保護上重大な問題があり、金融商品取引法第51条の2に規定する「業務の運営に関し、公益又は投資者保護のため必要かつ適当であると認めるとき」に該当するものと認められる。

○ 業務改善命令

(1) 本件に係る根本的な原因の分析に基づき、再発防止に向けて、以下の点を含む実効性のある業務改善計画を速やかに策定し、着実に実施すること。

① 業容に応じた業務運営態勢の構築、並びに、経営管理態勢及び内部管理態勢の強化

② 法令等の遵守及び適正かつ健全な業務運営を前提とした、証券子会社を含むグループとしての銀証連携ビジネスモデルの構築

③ 今回の処分を踏まえた本件に係る経営陣を含む責任の所在の明確化

④ ちばぎん証券と連携し、本件行政処分の内容についての顧客に対する適切な説明

(2) 上記の対応・実施状況について、令和5年7月24日(月曜日)までに書面で報告するとともに、その後の進捗状況を四半期末経過後(初回を令和5年9月末基準とする。)15日以内を期限として当面の間、書面で報告すること。

5	令和5年 6月9日	<p>【株式会社武蔵野銀行(関東)】</p> <p>○ 金融商品仲介業務に関し、投資者保護上の問題が認められる状況</p> <p>当行は、株式会社千葉銀行(千葉市中央区、法人番号2040001000019)の子会社であるちばぎん証券株式会社(千葉市中央区、法人番号4040001034601、以下「ちばぎん証券」という。)との間で、金融商品仲介業務に係る提携契約を締結し、金融商品仲介業務として同証券に顧客を紹介する業務(以下「紹介型仲介」という。)を行っている。紹介型仲介では、顧客に対し、ちばぎん証券が扱う商品概要の説明のみを行うこととしている。また、同業務は顧客紹介のみを行うこととしていることから、当行において、顧客属性(知識、投資経験、財産の状況、投資目的)の確認を行っていない。</p> <p>紹介型仲介による収益は、紹介顧客がちばぎん証券で取引をした際に支払った手数料等のうち、一定割合が当行に配分される仕組みとなっている。また、当行の行員は、個別商品に係る説明が禁止されているため、自らが直接収益を発生させることはできないにもかかわらず、行員の収益目標には、ちばぎん証券が紹介顧客から得る個別商品に係る収益も含まれていることがあった。</p> <p>今回検査において、当行が行う金融商品仲介業務の状況について検証したところ、以下のとおり問題が認められた。</p> <p>(1) 顧客属性を確認及び検討しないまま、顧客を仕組債購入へ誘引している状況</p> <p>紹介型仲介では、顧客に対し、ちばぎん証券が扱う商品概要の説明のみを行うこととしているところ、これに反し、仕組債に誘引している事例が認められた。</p> <p>商品概要の説明のみにとどまらず、仕組債を提案するのであれば、顧客属性を十分確認し、どのような提案が適切であるか慎重に検討した上で行うべきところ、当行においては、顧客属性を確認しないまま、高金利や短期間といった優位性を強調して仕組債に誘引しており、投資者保護上問題のある行為であると認められる。</p> <p>(2) 内部管理態勢が不十分な状況</p> <p>当行は、ちばぎん証券と共同で研修等を複数開催している。研修計画の策定は当行関連部署が行っているものの、研修資料の作成及び講義の実施についてはちばぎん証券に一任していることなどから、研修等資料の内容が、投資者保護上問題がないかといった観点から確認を行っていない。このため、総じて仕組債に偏った研修が行われるなど仕組債を誘引させる内容の研修が実施されることになっており、研修態勢は不十分な状況と認められる。</p> <p>また、当行は、ちばぎん証券からの提案により、定期的に苦情事例等の情報連携を行う連絡会を開催し、当行の紹介顧客に関する苦情が同証券に対して継続的に多数寄せられていること等を把握していたにもかかわらず、原因分析も一切行わないまま、その後も、何ら検討することなく紹介を継続していると認められ、苦情の背景や要因について分析や検討が行われていない状況となっており、苦情処理に関する内部管理態勢が不十分であると認められる。</p> <p>さらに、当行では、顧客毎の交渉経緯記録に紹介顧客に対する説明内容が詳細に記載されていない状況にあり、このため、営業部店、内部管理部門及び監査部門による確認も形式的なものにとどまっており、顧客への説明状況に関する実効性のあるモニタリング態勢も不十分であると認められる。</p> <p>加えて、経営陣が、行員が仕組債購入へ誘引している状況を把握していないこと、行員が収益目標達成のために概要説明を超えた商品説明をして顧客を誘引する事象が発生しうる仕組みとなっていることを適切に認識していないこと、紹介顧客からの苦情が多数寄せられている実態を把握していたにもかかわらず、担当部署に任せきりにし、苦情対応が不十分であることを正確に把握していないなど、紹介型仲介に関し、経営陣のガバナ</p>	<p>行政処分日 令和5年6月23日</p> <p>○ 業務改善命令</p> <p>(1) 本件に係る根本的な原因の分析に基づき、再発防止に向けて、以下の点を含む実効性のある業務改善計画を速やかに策定し、着実に実施すること。</p> <p>① 業容に応じた業務運営態勢の構築、並びに、経営管理態勢及び内部管理態勢の強化</p> <p>② 法令等の遵守及び適正かつ健全な業務運営を前提とした、証券子会社を含むグループとしての銀証連携ビジネスモデルの構築</p> <p>③ 今回の処分を踏まえた本件に係る経営陣を含む責任の所在の明確化</p> <p>④ ちばぎん証券と連携し、本件行政処分の内容についての顧客に対する適切な説明</p> <p>(2) 上記の対応・実施状況について、令和5年7月24日(月曜日)までに書面で報告するとともに、その後の進捗状況を四半期末経過後(初回を令和5年9月末基準とする。)15日以内を期限として当面の間、書面で報告すること。</p>	<p>第1節</p> <p>第2節</p> <p>第3節</p> <p>第4節</p> <p>3-5</p> <p>第6節</p> <p>第7節</p> <p>第8節</p> <p>第9節</p> <p>第10節</p> <p>第11節</p>
---	--------------	--	---	--

第1節 第2節 第3節	5 つづき	<p>スが十分に発揮されていないことも要因となり、紹介型仲介に関する業務運営態勢の構築も不十分であると認められる。</p> <p>登録金融機関が金融商品仲介業務を行うに際しては、金融商品取引法上、投資者保護の観点から、適切な態勢整備や業務運営が求められているところ、上記(1)及び(2)のとおり、当行においては、金融商品仲介業務を行うための適切な態勢整備が行われていない中で、顧客属性を確認しないまま、顧客を仕組債購入へ誘引している状況が認められており、投資者保護上、問題があるものと認められる。なお、これらの状況は、結果として、ちばぎん証券の適合性の原則に抵触する業務運営にも繋がっているものと認められる。</p> <p>以上のことから、当行における紹介型仲介の業務運営は、投資者保護上重大な問題があり、金融商品取引法第51条の2に規定する「業務の運営に関し、公益又は投資者保護のため必要かつ適当であると認めるとき」に該当するものと認められる。</p>	
第4節 3-5 第6節 第7節 第8節 第9節 第10節 第11節	6 令和5年 9月15日	<p>【三木証券株式会社(関東)】</p> <p>○ 適合性原則に抵触する業務運営の状況</p> <p>当社は、顧客層の高齢化により口座数が減少傾向にあったことなどもあり、平成29年3月期から令和2年3月期まで4年連続の営業赤字となっていた。そのような中、米国市況が好調であったことを踏まえ、令和2年4月以降、経営陣主導の下、主に米国株式の販売に注力していた。</p> <p>こうした状況を踏まえ、当社の業務運営状況を検証したところ、以下の問題が認められた。</p> <p>(1) 適合性原則に抵触する勧誘が行われている状況</p> <p>当社は、少なくとも顧客18名に対し、会話がかみ合わない、数分前の会話を覚えていないなどといった顧客の様子から、顧客が少なくとも外国株式取引を行えるほどの認知判断能力を持ち合わせていないと認識していたにもかかわらず、外国株式のリスク等について、顧客属性に照らして顧客に理解されるために必要な方法及び程度による説明を行うことなく金融商品取引契約を締結する行為を行っていた。このような外国株式取引の勧誘を長期的・継続的に行っている状況が認められた。</p> <p>また、当社は新興国のテクノロジー関連企業へ投資する投資信託の勧誘に際し、少なくとも顧客1名に対し、当該商品の概要やリスク等について、顧客属性に照らして顧客に理解されるために必要な方法及び程度による説明を行うことなく金融商品取引契約を締結する行為を行っている状況が認められた。</p> <p>(2) 適合性原則を遵守するための態勢が不十分な状況</p> <p>① 営業推進態勢が不適切な状況</p> <p>当社は、令和元年6月に営業員評価制度の見直しを行い、当社の収益の向上に貢献した営業員をこれまで以上に高く評価する仕組みを導入して、手数料収入実績をダイレクトに評価に反映させ重視することとした。さらに令和4年1月には、評価項目から法令違反行為や顧客本位に欠ける営業を行った営業員の評価を下げるといったコンプライアンス項目を削除するなど、手数料収入額が多い営業員がさらに高く評価される報酬体系へと変更することで、手数料収入に偏った不適切な投資勧誘行為を助長するものになっていた。また、経営陣主導で主に米国株式の販売に注力する中で、取締役営業本部長を中心とした経営陣からは、各部支店長に対して、顧客の適合性を軽視した営業優先の指示が行われるなど、経営陣から収益達成への過剰な圧力がかけられていた。これらの結果、当社には顧客の適合性を軽視した極端な営業優先の企業風土が形成されており、営業推進態勢は不適切な状況であった。</p> <p>② 法令等遵守態勢が不適切な状況</p>	<p>行政処分日 令和5年10月6日</p> <p>○ 業務停止命令</p> <p>(1) 令和5年10月6日から同年11月5日までの間、外国株式の売買等業務のうち、新規の勧誘を伴う業務の停止。</p> <p>○ 業務改善命令</p> <p>(2) 本件に係る根本的な原因の分析に基づき、再発防止に向けて、以下の点を含む実効性のある業務改善計画を速やかに策定し、着実に実施すること。</p> <p>① 今回の処分を踏まえた本件に係る経営陣を含む責任の所在の明確化</p> <p>② 法令等遵守に取り組むよう経営姿勢を刷新し、適合性原則を踏まえた顧客への勧誘及び説明が適切に行われる業務運営態勢、経営管理態勢、並びに内部管理態勢の構築及び強化</p> <p>③ 法令等の遵守及び適正かつ健全な業務運営を前提としたビジネスモデルの構築</p> <p>④ 本件行政処分の内容についての顧客に対する適切な説明</p>

<p>6 つづき</p>	<p>当社では、極端な営業優先の企業風土のもと、営業部門に対し異論を述べた結果、営業本部が主導する形で就業規則に基づかずに降格させられた者がいるなど、コンプライアンス上の問題点を声に出しづらい社風となっていた。</p> <p>また、赤字体質からの脱却と継続的な黒字化を図るため、代表取締役社長自らが主導して、コンプライアンス部門の人員を削減しているところ、平成30年に行われた自主規制機関の検査においてコンプライアンス部門の人員不足を指摘されていたにもかかわらず、コンプライアンス部門の人員を平成30年当時と比較しても半数以下にまで削減しており、適切な人員の確保すら行われていない状況にあった。</p> <p>このような状況にあったため、自主規制機関が定める高齢顧客ガイドラインで求められている確認事項に関しても、役席者は挨拶程度の短い会話を行うのみで、高齢顧客の健康状態や商品の理解度などについてほとんど確認しておらず、承認手続きは形骸化していた。また、内部管理責任者によるモニタリングも営業を優先するあまり形式的な確認にとどまっており、さらに、内部監査によるモニタリングも、部支店に対し、指摘対象となった具体的な取引、営業員、役席者を特定して伝達することなく、指摘事例について今後は適切に面談を実施すべき旨を形式的に指導するにとどめているなど、不十分なものであった。</p> <p>内部管理統括責任者自身が、モニタリングや内部監査の実効性に疑問を持ちながらも、やらないよりはやった方が良い程度の認識でモニタリングや内部監査を続けていたと述べており、当社のモニタリング及び内部監査は形骸化しており、実効性のある検証は行われておらず、当社の法令等遵守態勢は不適切な状況であった。</p> <p>③ 経営管理態勢が不適切な状況</p> <p>金融商品取引業者は、法令等遵守態勢の整備に努め、投資者保護に欠けることのないように経営を行うことが求められているところ、代表取締役社長をはじめ経営陣は、極端な営業推進を行う中で、法令等遵守及び内部管理態勢の確立・整備が後回しとなり、営業に物が言えない、経営陣に実態を正確に報告できないといった脆弱な内部管理態勢を看過しているなど、当社の経営管理態勢は不適切な状況であった。</p> <p>上記(1)の行為は、金融商品取引法第38条第9号に基づく金融商品取引業等に関する内閣府令第117条第1項第1号の「顧客の知識、経験、財産の状況及び金融商品取引契約を締結する目的に照らして当該顧客に理解されるために必要な方法及び程度による説明をすることなく、金融商品取引契約を締結する行為」に該当すると認められる。</p> <p>上記(1)(2)の状況は、適合性原則に抵触する不適切な業務運営を継続的に行っていたものと認められ、当社における勧誘販売状況は、金融商品取引法第40条第1号の「顧客の知識、経験、財産の状況及び金融商品取引契約を締結する目的に照らして不適当と認められる勧誘を行って投資者の保護に欠けることとなり、又は欠けることとなるおそれがあること」に該当すると認められる。</p>	<p>(3) 上記(2)①から④の対応・実施状況について、令和5年11月6日までに書面で報告するとともに、その後の進捗状況を四半期末経過後(初回を令和5年12月末基準とする。)15日以内を期限として当面の間、書面で報告すること。</p>
<p>7</p>	<p>令和5年12月5日</p> <p>【株式会社ストックジャパン(関東)】</p> <p>○ 著しく事実に相違する表示のある広告をする行為等</p> <p>当社は、インターネット広告を通じて自社ウェブサイトへ一般投資家を誘導し、無料会員登録をさせた上で、当該無料会員に対し、勧誘メールの送信や営業員の架電により投資顧問契約の締結の勧誘を行っている。</p> <p>また、自社ウェブサイトには、「推奨銘柄の実績」として、当社が推奨した銘柄の「推奨日」、「推奨日始値」、「推奨後高値」、「株価変動率」を掲載している(掲載しているページを以下「本件推奨実績ページ」という)。</p>	<p>行政処分日 令和5年12月15日</p> <p>○ 業務停止命令</p> <p>新たな投資顧問契約(契約金額の増額を伴う変更契約を含む。)の締結に係る勧誘・契約締結を令和5年12月15日から令和6年1月14日まで停止すること。</p>

第1節
第2節
第3節
第4節
3-5
第6節
第7節
第8節
第9節
第10節
第11節

7
つづき

第1節
第2節
第3節
第4節
3-5
第6節
第7節
第8節
第9節
第10節
第11節

今回検査において、令和2年11月から令和5年3月までの間の当社の広告、本件推奨実績ページの記載内容及び勧誘状況を確認したところ、以下の法令違反行為が認められた。

① 著しく事実に相違する表示のある広告をする行為等

当社は、自社ウェブサイト上の広告において、以下のとおり、利益の見込みについて著しく事実に相違する表示を行ったほか、事実であるかのように装うため法定帳簿に虚偽の内容を記載するなどした。

ア. 当社と投資顧問契約を締結したという人物が、当社の助言により株で600万円以上の利益を得たという架空のエピソードを表示した。

イ. 上記ア. を記載しているページは当社の広告であるにもかかわらず、当社の商号や名称、登録番号が記載されていないなど、広告等における表示義務事項を表示していなかった。

ウ. 上記ア. の人物と投資顧問契約を締結した事実は一切ないにもかかわらず、当社営業部長は、上記ア. の人物と投資顧問契約を締結し、複数回にわたり、助言が行われたとの虚偽の内容を法定帳簿に記載した。

② 著しく人を誤認させるような表示のある広告をする行為

当社は、本件推奨実績ページに掲載している推奨実績のうち、少なくとも10銘柄について、顧客に売り推奨を行った日付及び株価ではなく、買い推奨後の最も高値を付けた日付及び株価（推奨後高値）、当該株価を元に計算した株価変動率を記載しているものの、その点について本件推奨実績ページには一切記載しておらず、あたかも推奨後高値が当社が顧客に売り推奨を行った日付及び株価であるかのように記載している。

なお、令和2年11月1日から令和5年3月31日までの間、延べ3,697名が本件推奨実績ページを閲覧した。

また、当社は、自主規制機関である日本投資顧問業協会が令和元年10月及び令和4年7月に行った監査において、本件推奨実績ページに関して、売り助言実績等を記載し、適正な表示を行うよう指導を受けていたにもかかわらず、何ら対応していない。

③ 顧客に対し虚偽のことを告げる行為

当社は、投資顧問契約の締結の勧誘を行う際、顧客に割安感を与えるため、当社助言商品の勧誘用ウェブサイトページに「本来の投資顧問料」を「割引後の価格」として記載し、営業員から架電することで、延べ257件の契約を締結した。

なお、当社の社内マニュアルには、実際には約定する意図のない価格を提示した上で値引きする旨のセールストークも記載されており、不適切な勧誘が組織的に行われていたと認められる。

上記①、②及び③の法令違反行為は、営業部門及びコンプライアンス部門のいずれも法令遵守意識が著しく欠如している中で、代表者が内部管理の有効性を主導的に確保しておらず、結果として顧客獲得を優先する営業部門に対する内部管理部门による内部牽制が十分に機能していなかったことにより発生したものと認められる。

当社の上記①ア. 及び②の行為は、金融商品取引業に関する広告において、利益の見込みについて著しく事実に相違する表示及び助言実績について著しく人を誤認させるような表示を行うものであり、金融商品取引法第37条第2項に違反し、上記①イ. の行為は、同法第37条第1項に違反する。

また、同ウ. の行為は、法令で定める帳簿書類に虚偽の記載を行ったものであり、同法第47条に違反する。

さらに、上記③の行為は、金融商品取引契約の締結又はその勧誘に関して、顧客に対し虚偽のことを告げる行為であり、同法第38条第1号に該当するものと認められる。

○ 業務改善命令

- ① 不適切な広告の掲載を直ちに停止すること。
- ② 本件の発生原因を分析し、適切な業務運営態勢及び内部管理態勢の構築を含む再発防止策を策定・実施すること。
- ③ 全ての顧客に対し、今回の行政処分の内容を説明し、適切な対応を行うこと。
- ④ 本件法令違反行為の責任の所在を明確にすること。
- ⑤ 上記①から④の対応状況について、令和6年1月15日までに書面により報告すること。

8	令和5年 12月15日	<p>【株式会社SBI証券(証券監視委)】</p> <p>○ 取引所金融商品市場における上場金融商品の相場を変動等させることにより実勢を反映しない作為的なものとなることを知りながら、当該上場金融商品に係る買付けの受託等をする行為</p> <p>当社執行役員兼機関投資家営業部長及びIFAビジネス部(当時)管掌執行役員らは、令和2年12月から令和3年9月までの間において、その業務に関し、新規上場の際の株式公募に当たり当社が引受主幹事会社を務めた3銘柄の新規上場株式について、当該株式の初値を公募価格以上に変動させ、若しくはくぎ付けし、固定し、若しくは安定(以下「変動等」という。)させるために、エクイティ・キャピタル・マーケット部(当時)管掌常務取締役や執行役員と相談し、上場日当日の寄付前までに出て来ると予想される売付注文数に見合う買付注文数を目標として設定するなどした上で、当社の香港現地法人の社員(機関投資家営業部員が兼務)及びIFAビジネス部員等に対し、顧客に公募価格と同価格の指値で当該株式の買付けを行うことを勧誘し、各銘柄の上場日当日の寄付前までに当該買付注文を受託するよう、各銘柄の上場日の遅くとも二営業日前までにかけて指示又は依頼を行った。</p> <p>これを受け、当該IFAビジネス部員は、当社を所属金融商品取引業者とする金融商品仲介業者に対して上記指示の内容を依頼し、上記指示又は依頼を受けた香港現地法人の社員及び金融商品仲介業者3社は、顧客に対し、公募価格と同価格の指値で当該株式の買付けを行うことを勧誘した。</p> <p>これにより、当社は、顧客(機関投資家9社及び一般投資家174者)から、当該株式の相場を変動等させることにより実勢を反映しない作為的なものとなることを知りながら、各銘柄の上場日当日の寄付前までに公募価格を指値とした買付注文(3銘柄合計225万6600株)を直接又は当社の香港現地法人経由で受託・執行した。</p> <p>上記行為は、金融商品取引法第38条第9号に基づく金融商品取引業等に関する内閣府令第117条第1項第20号に違反するものと認められる。</p>	<p>行政処分日 令和6年1月12日</p> <p>○ 業務停止命令 新規株式公開(IPO)銘柄に関し、勧誘を伴う上場日における売買の受託業務を令和6年1月12日から同年1月18日まで停止すること。</p> <p>○ 業務改善命令 (1) 本件に関して、業務の健全かつ適切な運営を確保するため、以下を実施すること。 ① 今回の処分を踏まえた経営陣を含む責任の所在の明確化を図ること。 ② 本件に係る根本的な発生原因の分析に基づき、経営管理態勢及び内部管理態勢(不公正取引を防止する態勢を含む)の強化を含む実効性のある業務改善計画を速やかに策定し、着実に実施・定着させること</p> <p>(2) 上記(1)に係る実施状況及び業務改善計画を令和6年2月13日までに書面で報告すること。</p> <p>(3) 上記(2)の実施状況について、3か月経過後毎に翌月15日を期限として当面の間、書面で報告すること(初回報告基準日を令和6年4月末とする)。</p>
---	----------------	--	--

※ 根拠条文は、勧告実施日時点において適用される法律を記載している。

第1節
第2節
第3節
第4節
3-5
第6節
第7節
第8節
第9節
第10節
第11節

2. 取引調査の結果に基づく勧告(不公正取引)

(令和5年4月～令和6年3月)

番号	勧告実施年月日	事案の内容	勧告後の経緯
1	令和5年 6月27日	<p>【違反行為】内部者取引(金商法第175条第2項)</p> <p>【銘柄名】東都水産(旧東証1部)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 東都水産株式会社役員から伝達を受けた者</p> <p>【違反行為の概要】 課徴金納付命令対象者は、東都水産株式会社(以下「東都水産」という。)の役員であった甲から、同人がその職務に関し知った、東都水産の役員らとその職務に関し合同会社ASTSホールディングス(令和3年2月9日商号変更により合同会社麻生東水ホールディングス)からの伝達により知った同社の業務執行を決定する機関が東都水産株式の公開買付けを行うことについての決定をした旨の公開買付けの実施に関する事実の伝達を受けながら、上記事実の公表がされた令和2年11月9日午後3時頃より前の同日午後2時34分頃、自己の計算において、東都水産株式合計500株を買付価額合計215万8,000円で買い付けたものである。</p> <p>【課徴金額】27万円</p>	<p>審判手続開始決定日 令和5年6月30日 課徴金納付命令決定日 令和5年8月7日</p> <p>なお、課徴金納付命令対象者から事実関係等を認める旨の答弁書の提出があったため、審判の期日は開かれなかった。</p>
2	令和5年 6月30日	<p>【違反行為】内部者取引(金商法第175条第1項)</p> <p>【銘柄名】セルソース(旧東証マザーズ)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 セルソース株式会社の社員</p> <p>【違反行為の概要】 課徴金納付命令対象者は、セルソース株式会社(以下「セルソース」という。)の社員であったが、その職務に関し、セルソースの令和2年11月1日から令和3年10月31日までの事業年度の経常利益について、令和3年6月14日に公表がされた直近の予想値(経常利益7億7,100万円)に比較して、同社が新たに算出した予想値(経常利益10億600万円)において、投資者の投資判断に及ぼす影響が重要なものとなる差異が生じた旨の重要事実を知りながら、同社において新たに算出した同事業年度の予想値の公表がされた令和3年12月8日より前の同月6日から同月7日までの間、第三者名義の証券口座で自己の計算において、セルソース株式合計300株を買付価額合計207万1,000円で買い付けたものである。</p> <p>【課徴金額】44万円</p>	<p>審判手続開始決定日 令和5年7月28日 課徴金納付命令決定日 令和5年9月14日</p> <p>なお、課徴金納付命令対象者から事実関係等を認める旨の答弁書の提出があったため、審判の期日は開かれなかった。</p>
3	令和5年 9月8日	<p>【違反行為】内部者取引(金商法第175条第2項)</p> <p>【銘柄名】ZOZO(旧東証1部)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 株式会社ZOZOの中国子会社の役職員</p> <p>【違反行為の概要】 課徴金納付命令対象者(中国居住)は、ZOZOの中国子会社の役職員であるが、ZOZO社員であった甲から、同人がその職務に関し知った、ZOZOの役員がその職務に関しヤフー株式会社(現LI</p>	<p>審判手続開始決定日 令和5年10月13日 審判手続中 (令和6年3月31日現在)</p>

3 つき		<p>NEヤフー株式会社)からの伝達により知った同社の業務執行を決定する機関がZOZO株式の公開買付けを行うことについての決定をした旨の公開買付けの実施に関する事実の伝達を受けながら、当該事実の公表がされた令和元年9月12日より前の同月10日、自己の計算において、ZOZO株式合計2万5,977株を買付価額合計5,489万5,128円で買い付けたものである。</p> <p>【課徴金額】1,303万円</p>	
4	令和5年 9月22日	<p>【違反行為】相場操縦(金商法第174条の2第1項)</p> <p>【銘柄名】ファルテック(旧東証1部) GMB(旧東証1部)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 会社員</p> <p>【違反行為の概要】 課徴金納付命令対象者は、 (1) 株式会社ファルテックの株式につき、同株式の売買を誘引する目的をもって、令和3年7月16日から同年8月20日までの間、自己名義及び親族名義で、上値に複数の売り注文を入れて売り板を厚くした上で、同株式を下値で買い付け、さらに、下値に複数の買い注文を入れて買い板を厚くした上で、同株式を上値で売り付けるなどの方法により、同株式合計22万900株の買付けの委託を行うとともに、同株式合計5万4,300株を買い付ける一方、同株式合計14万2,200株の売付けの委託を行うとともに、同株式合計6万3,800株を売り付け、 (2) GMB株式会社の株式につき、同株式の売買を誘引する目的をもって、令和3年8月19日から同年9月22日までの間、自己名義及び親族名義で、上値に複数の売り注文を入れて売り板を厚くした上で、同株式を下値で買い付け、さらに、下値に複数の買い注文を入れて買い板を厚くした上で、同株式を上値で売り付けるなどの方法により、同株式合計25万600株の買付けの委託を行うとともに、同株式合計4万8,400株を買い付ける一方、同株式合計17万2,800株の売付けの委託を行うとともに、同株式合計5万4,900株を売り付け、 もって、それぞれ、自己及び親族の計算において、上記各株式の売買が繁盛であると誤解させ、かつ、上記各株式の相場を変動させるべき一連の売買及び委託をしたものである。</p> <p>【課徴金額】94万円</p>	<p>審判手続開始決定日 令和5年9月29日 課徴金納付命令決定日 令和5年10月23日</p> <p>なお、課徴金納付命令対象者から事実関係等を認める旨の答弁書の提出があったため、審判の期日は開かれなかった。</p>
5・6 ・7	令和5年 10月27日	<p>【違反行為】内部者取引(金商法第175条第1項)</p> <p>【銘柄名】日本製鋼所(東証プライム)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 (1) 株式会社日本製鋼所の子会社との契約締結者の社員 (2) 株式会社日本製鋼所の子会社との契約締結者の社員 (3) 株式会社日本製鋼所の子会社との契約締結者から伝達を受けた者</p> <p>【違反行為の概要】 (1) 課徴金納付命令対象者(1)について 課徴金納付命令対象者(1)は、A社の社員であったが、同社の社員らが、株式会社日本製鋼所(以下「日本製鋼所」という。)の子会社である日本製鋼所M&E株式会社(以下「M&E社」という。)とA社との間で締結した取引基本契約の履行に関し知った、M&E社が製造及び販売していたタービン・発電機用ローターシャフト等の製品の一部で品質検査の数値の改ざんなどが判明した旨のM</p>	<p>審判手続開始決定日 令和5年11月6日 課徴金納付命令決定日 令和5年12月5日</p> <p>なお、課徴金納付命令対象者(1)ないし(3)から事実関係等を認める旨の答弁書の提出があったため、審判の期日は開かれなかった。</p>

第1節

第2節

第3節

第4節

3-5

第6節

第7節

第8節

第9節

第10節

第11節

第1節	5・6 ・7 つづき	<p>&E社の運営、業務又は財産に関する重要な事実であって投資者の投資判断に著しい影響を及ぼす事実を、その職務に関し知りながら、上記重要事実の公表がされた令和4年5月9日より前の同年4月15日から同月28日までの間、自己の計算において、日本製鋼所株式会社合計1,500株を、売付価額合計554万6,500円で売り付けたものである。</p> <p>(2)課徴金納付命令対象者(2)について 課徴金納付命令対象者(2)は、B社の社員であったが、同社の社員らが、M&E社とB社との間で締結した取引基本契約の履行に関し知った、M&E社が製造及び販売していたタービン・発電機用ローターシャフト等の製品の一部で品質検査の数値の改ざんなどが判明した旨のM&E社の運営、業務又は財産に関する重要な事実であって投資者の投資判断に著しい影響を及ぼす事実を、その職務に関し知りながら、上記重要事実の公表がされた令和4年5月9日より前の同年4月20日から同年5月6日までの間、自己の計算において、日本製鋼所株式会社合計600株を、売付価額合計220万6,100円で売り付けたものである。</p> <p>(3)課徴金納付命令対象者(3)について 課徴金納付命令対象者(3)は、D社の社員であったが、C社の社員及び役員らが、M&E社とC社との間で締結していた取引基本契約の履行に関し知り、その後、C社の役員からD社役員が職務上伝達を受けた、M&E社が製造及び販売していたタービン・発電機用ローターシャフト等の製品の一部で品質検査の数値の改ざんなどが判明した旨のM&E社の運営、業務又は財産に関する重要な事実であって投資者の投資判断に著しい影響を及ぼす事実を、その職務に関し知りながら、上記重要事実の公表がされた令和4年5月9日より前の同月6日、自己の計算において、日本製鋼所株式会社合計2,000株を、売付価額合計733万5,000円で売り付けたものである。</p>	
3-5		<p>【課徴金額】 課徴金納付命令対象者(1)185万円 課徴金納付命令対象者(2)72万円 課徴金納付命令対象者(3)241万円</p>	
第10節	8 令和5年 11月21日	<p>【違反行為】内部者取引(金商法第175条第1項)</p> <p>【銘柄名】エイチーム(旧東証1部)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 株式会社エイチームとの契約締結交渉者の社員から伝達を受けた者</p> <p>【違反行為の概要】 課徴金納付命令対象者は、株式会社スクウェア・エニックス(以下「スクエニ」という。)の社員らが、株式会社エイチーム(以下「エイチーム」という。)とスクエニが共同で進めていたゲームタイトル「FINAL FANTASY」の関連作品となるスマートデバイス向け新作ゲーム(以下「本件ゲーム」という。)の開発に係る業務提携契約の履行及び本件ゲームの配信開始後にその配信等を共同して運営していく旨の業務提携契約の交渉に関し知り、その後、スクエニの社員であった甲が職務に関し知った、(1)本件ゲームの共同開発が配信開始を見込める段階まで進捗したことなどのエイチームの運営、業務又は財産に関する重要な事実であって投資者の投資判断に著しい影響を及ぼす重要事実及び(2)エイチームの業務執行を決定する機関が前記交渉に係る業務上の提携を行うことについての決定をした旨のエイチームの業務等に関する重要事実の伝達を、知人であった甲から受けながら、前記各重要事実の公表がされた令和3年2月27日より前の同年1月14日から同年2月19日までの間、エイチーム株</p>	<p>審判手続開始決定日 令和5年11月29日 課徴金納付命令決定日 令和6年1月25日</p> <p>なお、課徴金納付命令対象者から事実関係等を認める旨の答弁書の提出があったため、審判の期日は開かれなかった。</p>

8 つき		<p>式合計1万株を、自己の計算において、買付価額合計1,186万560円で買い付けたものである。</p> <p>【課徴金額】492万円</p>	
9	<p>令和5年 12月8日</p>	<p>【違反行為】相場操縦(金商法第174条の2第1項)</p> <p>【銘柄名】大平洋金属(旧東証1部) ノーリツ鋼機(旧東証1部)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 無職の者</p> <p>【違反行為の概要】 課徴金納付命令対象者(中国居住)は、海外銀行甲との間で、日本株式を原資産とする店頭デリバティブ取引である証券CFD取引を行い、同取引の注文を受けた海外銀行甲において、証券会社グループ乙を介して、証券CFD取引に係る注文と同内容の日本株式の売買の注文を即時に株式会社東京証券取引所(以下「東京証券取引所」という。)が開設する金融商品市場(市場第一部)等に発注していたものであるが、</p> <p>(1) 東京証券取引所市場第一部に上場されていた大平洋金属株式会社(以下「大平洋金属」という。)の株式につき、同株式の売買を誘引する目的をもって、令和元年9月4日午前10時16分40秒頃から同月5日午後1時35分27秒頃までの間、合計2取引日にわたり、海外銀行甲に対して大平洋金属株式を原資産とする証券CFD取引の申込みを行い、海外銀行甲等を介して、最良売り気配付近に複数の売り注文を重層的に入れて売り板を厚くした上で、同株式を下値で買い付けた後、最良売り気配付近に発注していた複数の売り注文を取り消して売り板を薄くするとともに、最良買い気配付近に複数の買い注文を重層的に入れて買い板を厚くした上で、同株式を上値で売り付けることを交互に繰り返すなどの方法により、同株式合計4万2,500株の買い注文に係る証券CFD取引の申込みを行うとともに、同株式合計4万4,900株の売り注文に係る証券CFD取引を行う一方、同株式合計3万8,700株の売り注文に係る証券CFD取引の申込みを行うとともに、同株式合計5万5,100株の買い注文に係る証券CFD取引を行い、</p> <p>(2) 東京証券取引所市場第一部に上場されていたノーリツ鋼機株式会社(以下「ノーリツ鋼機」という。)の株式につき、同株式の売買を誘引する目的をもって、令和元年9月6日午前9時50分45秒頃から同日午後1時5分17秒頃までの間、海外銀行甲に対してノーリツ鋼機株式を原資産とする証券CFD取引の申込みを行い、海外銀行甲等を介して、最良売り気配付近に複数の売り注文を重層的に入れて売り板を厚くした上で、同株式を下値で買い付けた後、最良売り気配付近に発注していた複数の売り注文を取り消して売り板を薄くするとともに、最良買い気配付近に複数の買い注文を重層的に入れて買い板を厚くした上で、同株式を上値で売り付けることを交互に繰り返すなどの方法により、同株式合計5万9,600株の買い注文に係る証券CFD取引の申込みを行うとともに、同株式合計4万5,200株の売り注文に係る証券CFD取引を行う一方、同株式合計9,000株の売り注文に係る証券CFD取引の申込みを行うとともに、同株式合計4万3,200株の買い注文に係る証券CFD取引を行い、</p> <p>もって、自己の計算において、上記各株式の売買が繁盛であると誤解させ、かつ、上記各株式の相場を変動させるべき一連の店頭デリバティブ取引及びその申込みをしたものである。</p> <p>【課徴金額】281万円</p>	<p>審判手続開始決定日 令和6年1月19日 審判手続中 (令和6年3月31日現在)</p>

第1節
第2節
第3節
第4節
3-5
第6節
第7節
第8節
第9節
第10節
第11節

10・11 ・12・13	令和6年 2月16日	<p>【違反行為】情報伝達・取引推奨(金商法第175条の2第2項) 内部者取引(金商法第175条第2項)</p> <p>【銘柄名】コンテック(旧東証2部)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 (1)株式会社コンテックの役員 (2)課徴金納付命令対象者(1)から伝達を受けた者 (3)課徴金納付命令対象者(1)から伝達を受けた者 (4)課徴金納付命令対象者(1)から伝達を受けた者</p> <p>【違反行為の概要】 (1)課徴金納付命令対象者(1)について 課徴金納付命令対象者(1)は、株式会社コンテック(以下「コンテック」という。令和4年4月28日上場廃止。)の役員を務めていた者であるが、コンテックの役員らとその職務に関し株式会社ダイフク(以下「ダイフク」という。)からの伝達により知った、同社の業務執行を決定する機関がコンテック株式の公開買付けを行うことについての決定をした旨の公開買付けの実施に関する事実を、その職務に関し知りながら、</p> <p>ア. 違反行為事実A 知人である課徴金納付命令対象者(2)に対し、上記事実の公表がされる前にコンテック株式の買付けをさせることにより同人に利益を得させる目的をもって、上記事実を伝達したものであり、これにより伝達を受けた同人が、上記事実の公表がされた令和4年2月4日より前の同年1月27日から同月28日までの間、コンテック株式合計2,500株を買付価額合計440万5,700円で買い付けたものである。</p> <p>イ. 違反行為事実B 知人である課徴金納付命令対象者(3)に対し、上記事実の公表がされる前にコンテック株式の買付けをさせることにより同人に利益を得させる目的をもって、上記事実を伝達したものであり、これにより伝達を受けた同人が、上記事実の公表がされた令和4年2月4日午後4時頃より前の同年1月28日から同年2月4日午前9時22分頃までの間、コンテック株式合計1,000株を、買付価額合計175万3,400円で買い付けたものである。</p> <p>ウ. 違反行為事実C 知人である課徴金納付命令対象者(4)に対し、上記事実の公表がされる前にコンテック株式の買付けをさせることにより同人に利益を得させる目的をもって、上記事実を伝達したものであり、これにより伝達を受けた同人が、上記事実の公表がされた令和4年2月4日より前の同年1月25日、コンテック株式合計900株を買付価額合計157万500円で買い付けたものである。</p> <p>エ. 違反行為事実D 知人である被推奨者甲に対し、上記事実の公表がされる前にコンテック株式の買付けをさせることにより同人に利益を得させる目的をもって、コンテック株式の買付けをすることを勧めたものであり、これにより買付けを勧められた同人が、上記事実の公表がされた令和4年2月4日午後4時頃より前の令和3年12月17日から令和4年2月4日午後0時44分頃までの間、コンテック株式合計3,300株を買付価額合計576万5,900円で買い付けたものである。</p> <p>オ. 違反行為事実E 知人である被推奨者乙に対し、上記事実の公表がされる前にコンテック株式の買付けをさせることにより同人に利益を得させる目的をもって、コンテック株式の買付けをすることを勧めたものであり、これにより買付けを勧められた同人が、上記事実の公表がされた令和4年2月4日午後4時頃より前の同日午前9時10分頃から同日午前10時15分頃までの間、コンテック株式合計2,000株を買付価額合計341万8,700円で買い付けたものである。</p>	<p>審判手続開始決定日 令和6年2月26日 課徴金納付命令決定日 令和6年3月28日</p> <p>なお、課徴金納付命令対象者(1)ないし(4)から事実関係等を認める旨の答弁書の提出があったため、審判の期日は開かれなかった。</p>
-----------------	---------------	--	---

第1節
第2節
第3節
第4節
3-5
第6節
第7節
第8節
第9節
第10節
第11節

<p>10・11 ・12・13 つづき</p>	<p>(2)課徴金納付命令対象者(2)について 課徴金納付命令対象者(2)は、コンテックの役員であった課徴金納付命令対象者(1)から、同人がその職務に関し知った、コンテックの役員らとその職務に関しダイフクからの伝達により知った同社の業務執行を決定する機関がコンテック株式の公開買付けを行うことについての決定をした旨の公開買付けの実施に関する事実の伝達を受けながら、上記事実の公表がされた令和4年2月4日より前の同年1月27日から同月28日までの間、コンテック株式合計2,500株を、自己の計算において、買付価額合計440万5,700円で買い付けたものである。</p> <p>(3)課徴金納付命令対象者(3)について 課徴金納付命令対象者(3)は、コンテックの役員であった課徴金納付命令対象者(1)から、同人がその職務に関し知った、コンテックの役員らとその職務に関しダイフクからの伝達により知った同社の業務執行を決定する機関がコンテック株式の公開買付けを行うことについての決定をした旨の公開買付けの実施に関する事実の伝達を受けながら、上記事実の公表がされた令和4年2月4日午後4時頃より前の同年1月28日から同年2月4日午前9時22分頃までの間、コンテック株式合計1,000株を、自己の計算において、買付価額合計175万3,400円で買い付けたものである。</p> <p>(4)課徴金納付命令対象者(4)について 課徴金納付命令対象者(4)は、コンテックの役員であった課徴金納付命令対象者(1)から、同人がその職務に関し知った、コンテックの役員らとその職務に関しダイフクからの伝達により知った同社の業務執行を決定する機関がコンテック株式の公開買付けを行うことについての決定をした旨の公開買付けの実施に関する事実の伝達を受けながら、上記事実の公表がされた令和4年2月4日より前の同年1月25日、コンテック株式合計900株を、自己の計算において、買付価額合計157万500円で買い付けたものである。</p> <p>【課徴金額】 課徴金納付命令対象者(1)477万円 課徴金納付命令対象者(2)242万円 課徴金納付命令対象者(3) 97万円 課徴金納付命令対象者(4) 88万円</p>	<p>審判手続開始決定前 (令和6年3月31日現在)</p>
<p>14</p>	<p>令和6年 3月22日</p> <p>【違反行為】相場操縦(金商法第174条の3第1項)</p> <p>【銘柄名】大盛工業(東証スタンダード)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 無職の者</p> <p>【違反行為の概要】 課徴金納付命令対象者は、株式会社大盛工業の株式につき、同株式の相場を安定させる目的をもって、令和4年4月7日午後1時17分頃から同年7月7日午後3時までの間、62取引日にわたり、最良買い気配又はその下値に大量の買い注文を発注して買い板を厚くしたり、直前約定値又はその上値に自身の売り注文と買い注文を発注して対当させたり、直前約定値より上値に買い注文を発注して約定させて下落した株価を引き戻したりするなどの方法により株価の下落を阻止するなどし、同株式合計896万2,900株の買付けの委託を行うとともに、同株式合計91万5,600株を買い付ける一方、同株式合計48万6,400株を売り付け、もって、自己の計算において、同株式の相場を安定させる目的をもって、一連の売買及び委託をしたものである。</p> <p>【課徴金額】228万円</p>	

第1節
第2節
第3節
第4節
3-5
第6節
第7節
第8節
第9節
第10節
第11節

<p>第1節</p> <p>第2節</p> <p>第3節</p> <p>第4節</p> <p>3-5</p> <p>第6節</p> <p>第7節</p> <p>第8節</p> <p>第9節</p> <p>第10節</p> <p>第11節</p>	<p>15 令和6年 3月26日</p>	<p>【違反行為】偽計(金商法第173条第1項)</p> <p>【銘柄名】野村不動産マスターファンド投資法人(東証REIT) 日本新薬(旧東証1部) ディスコ(旧東証1部) ルネサスエレクトロニクス(旧東証1部) コーセー(旧東証1部) 任天堂(旧東証1部)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 Quadeye Trading LLC</p> <p>【違反行為の概要】 課徴金納付命令者 Quadeye Trading LLC(以下「クアッドアイ」という。)は、高速取引行為を行うことにつき関東財務局長の登録を受けた米国デラウェア州法に基づき設立された法人であり、英国領ケイマン諸島籍のリミテッド・パートナーシップであるダックス・パートナーズ・エルピー(以下「ダックス」という。)との間で締結した投資一任契約に基づき、ダックスの資産を運用していたものであるが、クアッドアイの高速取引事業取引管理担当者らにおいて、株式会社東京証券取引所に上場されている株式及び投資口(以下「株式等」という。)につき、立会時間中に引け条件付き注文の発注株数又は口数(以下「株数等」という。)が買い側又は売り側に偏っているために引値が上昇又は下落することが想定される状況において、引け条件付き注文の発注株数等の少ない側に引け条件付き注文を発注することにより、引け板に表示される引け条件付き注文の発注株数等の買い側と売り側の偏りが減少した状況を作成した上で、引けの直前に、自ら発注した引け条件付き注文と売買が反対となる側に、指定した値段がそれよりも有利な値段で、即時に一部あるいは全数量を約定させ、成立しなかった注文数量を失効させる条件付き注文(以下「IOC注文」という。)を発注して即時に約定させるとともに、同引け条件付き注文のうち、その発注株数等から同IOC注文の約定株数等を差し引いた株数等分の取消しない株数等を減少させる変更注文(以下「取消し等」という。)を行うことにより、引けにおいて残した引け条件付き注文を自らに有利な価格で約定させ、引け直前に約定させたIOC注文との価格差により利得を得るという有価証券の売買取引等を実行する電子情報処理組織を用いた高速取引行為により、自らに有利な株式等の売買を行うことを企て、上記記載の各株式等につき、前記電子情報処理組織を用いた高速取引行為により、その相当部分を引け直前に取消し等を行うことを予定した引け条件付き注文を発注することにより、引け板に表示される引け条件付き注文の発注株数等の偏りが減少した状況を作成し、第三者をして、同引け条件付き注文が約定を意図したものであるとの錯誤を生じさせ、同注文を反映した引け板の状況を前提にした投資判断をさせた上で、引け直前に、引け条件付き注文と売買が反対となる側でIOC注文を発注して即時に約定させるとともに、同引け条件付き注文のうち、その発注株数等から同IOC注文の約定株数等を差し引いた株数等分の取消し等を行い、もって、自己以外の者であるダックスの計算において、有価証券の売買のために偽計を用い、当該偽計により有価証券の価格に影響を与えたものである。</p> <p>【課徴金額】790万円</p>	<p>審判手続開始決定前 (令和6年3月31日現在)</p>
	<p>16・17 令和6年 3月29日</p>	<p>【違反行為】情報伝達(金商法第175条の2第2項) 内部者取引(金商法第175条第2項)</p> <p>【銘柄名】タツタ電線(東証プライム)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 (1)タツタ電線株式会社の社員 (2)課徴金納付命令対象者(1)から伝達を受けた者</p>	<p>審判手続開始決定前 (令和6年3月31日現在)</p>

<p>16・17 つき</p>	<p>【違反行為の概要】</p> <p>(1) 課徴金納付命令対象者(1)について 課徴金納付命令対象者(1)は、タツタ電線株式会社(以下「タツタ電線」という。)の社員であったが、タツタ電線の役員がその職務に関しJX金属株式会社(以下「JX金属」という。)からの伝達により知った、同社の業務執行を決定する機関がタツタ電線株式の公開買付けを行うことについての決定をした旨の公開買付けの実施に関する事実を、その職務に関し知りながら、</p> <p>ア. 違反行為事実A 親族である課徴金納付命令対象者(2)に対し、上記事実の公表がされる前にタツタ電線株式の買付けをさせることにより同人に利益を得させる目的をもって、上記事実を伝達したものであり、これにより伝達を受けた同人が、上記事実の公表がされた令和4年12月22日より前の同月21日、タツタ電線株式合計4,400株を買付価額合計183万8,500円で買い付けたものである。</p> <p>イ. 違反行為事実B 上記事実の公表がされた令和4年12月22日より前の同月21日、課徴金納付命令対象者(2)名義で、タツタ電線株式合計2,000株を、自己の計算において、買付価額合計84万円で買い付けたものである。</p> <p>(2) 課徴金納付命令対象者(2)について 課徴金納付命令対象者(2)は、タツタ電線の社員であった課徴金納付命令対象者(1)から、同人がその職務に関し知った、タツタ電線の役員がその職務に関しJX金属からの伝達により知った同社の業務執行を決定する機関がタツタ電線株式の公開買付けを行うことについての決定をした旨の公開買付けの実施に関する事実の伝達を受けながら、上記事実の公表がされた令和4年12月22日より前の同月21日、タツタ電線株式合計4,400株を、自己の計算において、買付価額合計183万8,500円で買い付けたものである。</p> <p>【課徴金額】 課徴金納付命令対象者(1)126万円 課徴金納付命令対象者(2)133万円</p>	
---------------------	---	--

※ 根拠条文は、勧告実施日時点において適用される法律を記載している。

第1節

第2節

第3節

第4節

3-5

第6節

第7節

第8節

第9節

第10節

第11節

3. 開示検査の結果に基づく勧告(開示書類の虚偽記載等)

(令和5年4月～令和6年3月)

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容	勧告後の経緯
1	令和5年5月19日	<p>【違反行為】 有価証券報告書等の虚偽記載 (金商法第172条の4第1項及び第2項)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 株式会社東京衝機(東証スタンダード)</p> <p>【違反行為の概要】 当社は、売上の過大計上という不適正な会計処理を行った。この結果、当社は「重要な事項につき虚偽の記載」がある以下の有価証券報告書及び四半期報告書を提出した(「重要な事項につき虚偽の記載」の内容は下表【虚偽記載の内容】を参照)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和2年5月第1四半期四半期報告書(令和2年7月15日提出) ・令和2年8月第2四半期四半期報告書(令和2年10月15日提出) ・令和2年11月第3四半期四半期報告書(令和3年1月14日提出) ・令和3年2月期有価証券報告書(令和3年5月28日提出) ・令和3年5月第1四半期四半期報告書(令和3年7月15日提出) ・令和3年8月第2四半期四半期報告書(令和3年10月15日提出) ・令和3年11月第3四半期四半期報告書(令和4年1月14日提出) ・令和4年2月期有価証券報告書(令和4年5月27日提出) 	<p>審判手続開始決定日 令和5年5月26日 課徴金納付命令決定日 令和5年6月27日</p> <p>なお、課徴金納付命令対象者から事実関係等を認める旨の答弁書の提出があったため、審判の期日は開かれなかった。</p>

【虚偽記載の内容】

番号	対象書類		虚偽記載			
	提出日	書類	会計期間	記載項目	主な内容(注)	主な事由
1	令和2年7月15日	第115期第1四半期(令和2年3月1日～同年5月31日)に係る四半期報告書	令和2年3月1日～同年5月31日の第1四半期連結累計期間	四半期連結損益計算書	売上高が1,201百万円であるところを2,270百万円と記載	売上の過大計上
2	令和2年10月15日	第115期第2四半期(令和2年6月1日～同年8月31日)に係る四半期報告書	令和2年3月1日～同年8月31日の第2四半期連結累計期間	四半期連結損益計算書	売上高が2,051百万円であるところを4,110百万円と記載	売上の過大計上
3	令和3年1月14日	第115期第3四半期(令和2年9月1日～同年11月30日)に係る四半期報告書	令和2年3月1日～同年11月30日の第3四半期連結累計期間	四半期連結損益計算書	売上高が2,888百万円であるところを6,043百万円と記載	売上の過大計上
4	令和3年5月28日	第115期(令和2年3月1日～令和3年2月28日)に係る有価証券報告書	令和2年3月1日～令和3年2月28日の連結会計期間	連結損益計算書	売上高が3,920百万円であるところを8,321百万円と記載	売上の過大計上

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容				勧告後の経緯
1 つづき	5 令和3年 7月15日	第116期第1四半期 (令和3年3月1日～ 同年5月31日)に係る 四半期報告書	令和3年3月1日～同 年5月31日の第1四 半期連結累計期間	四半期連結 損益計算書	売上高が839百万円で あるところを1,561百万 円と記載	売上の過 大計上
	6 令和3年 10月15日	第116期第2四半期 (令和3年6月1日～ 同年8月31日)に係る 四半期報告書	令和3年3月1日～同 年8月31日の第2四 半期連結累計期間	四半期連結 損益計算書	売上高が1,839百万円で あるところを3,733百万 円と記載	売上の過 大計上
	7 令和4年 1月14日	第116期第3四半期 (令和3年9月1日～ 同年11月30日)に係る 四半期報告書	令和3年3月1日～同 年11月30日の第3四 半期連結累計期間	四半期連結 損益計算書	売上高が2,856百万円で あるところを5,663百万 円と記載	売上の過 大計上
	8 令和4年 5月27日	第116期(令和3年3月 1日～令和4年2月28 日)に係る有価証券報 告書	令和3年3月1日～令 和4年2月28日の連 結会計期間	連結 損益計算書	売上高が4,101百万円で あるところを7,449百万 円と記載	売上の過 大計上
(注)金額は百万円未満切捨てである。						
【課徴金額】1,200万円						

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容	勧告後の経緯
2	令和5年 6月6日	<p>【違反行為】 有価証券報告書等の虚偽記載 (金商法第172条の4第1項及び第2項)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 株式会社旅工房(東証グロース)</p> <p>【違反行為の概要】 当社は、資金循環取引による売上の過大計上等の不適正な会計処理を行った。 この結果、当社は、「重要な事項につき虚偽の記載」がある以下の有価証券報告書及び四半期報告書を提出した(「重要な事項につき虚偽の記載」の内容は下表【虚偽記載の内容】を参照)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和2年12月第3四半期四半期報告書(令和3年2月12日提出) ・令和3年3月期有価証券報告書(令和3年6月24日提出) ・令和3年6月第1四半期四半期報告書(令和3年8月13日提出) ・令和3年9月第2四半期四半期報告書(令和3年11月12日提出) 	<p>審判手続開始決定日 令和5年6月13日 課徴金納付命令決定日 令和5年8月7日</p> <p>なお、課徴金納付命令対象者から事実関係等を認める旨の答弁書の提出があったため、審判の期日は開かれなかった。</p>

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容				勧告後の経緯	
2 つづき	【虚偽記載の内容】						
	番号	対象書類		虚偽記載			
	提出日	書類	会計期間	記載項目	主な内容(注)	主な事由	
	1	令和3年2月12日	第27期第3四半期(令和2年10月1日～同年12月31日)に係る四半期報告書	令和2年4月1日～同年12月31日の第3四半期連結累計期間 令和2年10月1日～同年12月31日の第3四半期連結会計期間	四半期連結損益計算書	親会社株主に帰属する四半期純利益が▲1,525,552千円であるところを▲1,092,072千円と記載	売上及び売上原価の過大計上
					四半期連結貸借対照表	連結純資産額が9,144千円であるところを442,624千円と記載	
2	令和3年6月24日	第27期(令和2年4月1日～令和3年3月31日)に係る有価証券報告書	令和2年4月1日～令和3年3月31日の連結会計期間	連結損益計算書	親会社株主に帰属する当期純利益が▲1,808,806千円であるところを▲1,408,861千円と記載	売上及び売上原価の過大計上	
				連結貸借対照表	連結純資産額が108,071千円であるところを508,016千円と記載		
3	令和3年8月13日	第28期第1四半期(令和3年4月1日～同年6月30日)に係る四半期報告書	令和3年4月1日～同年6月30日の第1四半期連結会計期間	四半期連結貸借対照表	連結純資産額が87,808千円であるところを487,660千円と記載	当四半期前の売上及び売上原価の過大計上	
4	令和3年11月12日	第28期第2四半期(令和3年7月1日～同年9月30日)に係る四半期報告書	令和3年7月1日～同年9月30日の第2四半期連結会計期間	四半期連結貸借対照表	連結純資産額が237,456千円であるところを645,290千円と記載	当四半期前の売上及び売上原価の過大計上	
(注)金額は千円未満切捨てである。							
【課徴金額】1,200万円							

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容	勧告後の経緯
3	令和5年 8月4日	<p>【違反行為】 株式会社ディー・ディー・エスが提出した虚偽開示書類に係る特定関与行為 (金商法第172条の12第1項及び第2項)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 個人</p> <p>【違反行為の概要】 株式会社ディー・ディー・エス(以下「DDS」という。)は、平成30年12月に行った外国法人に対する売掛金の過大計上等の発覚を免れるため、令和2年7月から8月にかけて、過大に算定された同外国法人の株式価値を前提とした引受価額で当該株式を引き受け、前記売掛金の全額を現物出資するなどの取引により同外国法人を子会社化するなどの一連の行為を行った上で、これを基礎としたのれん等の過大計上等の不適正な会計処理を行い、金融商品取引法第172条の4第1項及び第2項に規定する「重要な事項につき虚偽の記載」がある以下の有価証券報告書及び四半期報告書(以下、併せて「本件虚偽開示書類」という。)を提出した(「重要な事項につき虚偽の記載」の内容は下表【DDSが提出した有価証券報告書等の虚偽記載の内容】を参照)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和2年9月第3四半期四半期報告書(令和2年11月13日提出) ・令和2年12月期有価証券報告書(令和3年3月26日提出) ・令和3年3月第1四半期四半期報告書(令和3年5月14日提出) <p>課徴金納付命令対象者は、DDSが前記一連の行為を行った際、引受価額が正当な根拠に基づくものであることを装うために利用されることを知りながら、令和2年7月27日、DDSから前記外国法人の株式価値算定業務の依頼を受け、同日以降、真実は同外国法人株式には引受価額に相当する価値がなかったにもかかわらず、引受価額以上となるように同外国法人株式の1株当たりの株式価値を過大に算定し、これに基づき、同年8月21日、同外国法人に係る株式価値算定書を作成してDDSに提出し、DDSによる前記一連の行為に利用させ、もって、本件虚偽開示書類を提出することを容易にすべき行為であって、本件虚偽開示書類の作成に必要な会計処理の基礎となるべき事実の一部を仮装するための一連の行為の一部であることを知りながら、当該仮装するための一連の行為の一部を行ったものである。</p>	<p>審判手続開始決定日 令和5年8月25日 課徴金納付命令決定日 令和5年9月28日</p> <p>なお、課徴金納付命令対象者から事実関係等を認める旨の答弁書の提出があったため、審判の期日は開かれなかった。</p>

【DDSが提出した有価証券報告書等の虚偽記載の内容】

番号	対象書類		虚偽記載			
	提出日	書類	会計期間	記載項目	主な内容(注)	主な事由
1	令和2年 11月13日	第26期第3四半期(令和2年7月1日～同年9月30日)に係る四半期報告書	令和2年7月1日～同年9月30日の第3四半期連結会計期間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が2,087,838千円であるところを2,756,914千円と記載	貸倒引当金の過少計上、のれんの過大計上
2	令和3年 3月26日	第26期(令和2年1月1日～同年12月31日)に係る有価証券報告書	令和2年1月1日～同年12月31日の連結会計期間	連結 貸借対照表	連結純資産額が2,258,912千円であるところを2,936,909千円と記載	貸倒引当金の過少計上、のれん等の過大計上

第1節
第2節
第3節
第4節
3-5
第6節
第7節
第8節
第9節
第10節
第11節

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容				勧告後の経緯
3 つづき	令和3年 5月14日	第27期第1四半期(令和3年1月1日～同年3月31日)に係る四半期報告書	令和3年1月1日～同年3月31日の第1四半期連結会計期間	四半期連結貸借対照表	連結純資産額が2,160,382千円であるところを2,805,842千円と記載	貸倒引当金の過少計上、のれん等の過大計上
(注)金額は千円未満切捨てである。						
【課徴金額】150万円						

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容	勧告後の経緯
4	令和5年 10月20日	<p>【違反行為】 有価証券報告書等の虚偽記載 (金商法第172条の2第1項並びに同法第172条の4第1項及び第2項)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 株式会社EduLab(東証グロース)</p> <p>【違反行為の概要】 (1)継続開示書類 当社の連結子会社は、売上の過大計上及び事業損失引当金の不計上等の不適正な会計処理を行った。 この結果、当社は、「重要な事項につき虚偽の記載」がある以下の有価証券報告書及び四半期報告書を提出した(「重要な事項につき虚偽の記載」の内容は下表【虚偽記載の内容】を参照)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成30年9月期有価証券報告書(平成30年12月28日提出) ・令和2年6月第3四半期四半期報告書(令和2年8月7日提出) ・令和2年9月期有価証券報告書(令和2年12月23日提出) <p>(2)発行開示書類 当社は、平成30年11月16日及び令和2年9月30日、「重要な事項につき虚偽の記載」がある有価証券届出書を提出し、当該有価証券届出書に基づく募集により、有価証券を取得させた(「重要な事項につき虚偽の記載」の内容は下表【虚偽記載の内容】を参照)。</p>	<p>審判手続開始決定日 令和5年10月27日 審判手続中 (令和6年3月31日現在)</p>

【虚偽記載の内容】

番号	対象書類		虚偽記載			
	提出日	書類	会計期間	記載項目	主な内容(注)	主な事由
1	平成30年 12月28日	第4期(平成29年10月1日～平成30年9月30日)に係る有価証券報告書	平成29年10月1日～平成30年9月30日の連結会計期間	連結 損益計算書	親会社株主に帰属する当期純利益が328,138千円であるところを549,366千円と記載	売上の過大計上

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容				勧告後の経緯	
4 つづき				連結 貸借対照表	連結純資産額が 1,863,655 千円であるところを 2,527,102千円と記載		
	2	令和2年 8月7日	第6期第3四半期(令和2年4月1日～同年6月30日)に係る四半期報告書	令和元年10月1日～令和2年6月30日の第3四半期連結累計期間	四半期連結 損益計算書	営業利益が 431,302 千円であるところを 705,319 千円と記載 親会社株主に帰属する 四半期純利益が 215,672 千円であるところを 387,024千円と記載	事業損失 引当金の 不計上
	3	令和2年 12月23日	第6期(令和元年10月1日～令和2年9月30日)に係る有価証券報告書	令和元年10月1日～令和2年9月30日の連結会計期間	連結 損益計算書	親会社株主に帰属する 当期純利益が 719,730 千円であるところを 1,118,249千円と記載	事業損失 引当金の 不計上
	4	平成30年 11月16日	有価証券届出書 (株式の募集)	平成27年10月1日～平成28年9月30日の連結会計期間	連結 損益計算書	親会社株主に帰属する 当期純利益が ▲17,304 千円であるところを 72,694千円と記載	売上の過 大計上
				平成28年10月1日～平成29年9月30日の連結会計期間	連結 損益計算書	親会社株主に帰属する 当期純利益が 12,727 千円であるところを 335,947千円と記載	売上の過 大計上
					連結 貸借対照表	連結純資産額が 1,049,873 千円であるところを 1,492,092千円と記載	
				平成29年10月1日～平成30年6月30日の第3四半期連結累計期間	四半期連結 損益計算書	親会社株主に帰属する 四半期純利益が ▲13,800 千円であるところを 197,438千円と記載	売上の過 大計上

第1節

第2節

第3節

第4節

3-5

第6節

第7節

第8節

第9節

第10節

第11節

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容				勧告後の経緯	
4 つづき			平成30年4月1日～ 同年6月30日の第3 四半期連結会計期間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が 1,523,211千円であると ころを 2,176,670千円と記載	売上の過 大計上	
5	令和2年 9月30日	有価証券届出書 (株式の募集)		「第三部 参照情報」	番号2に掲げる 第6期第3四半期に係 る四半期報告書を参照	番号2参照	
(注)金額は千円未満切捨てである。							
【課徴金額】2億3,705万5,000円							

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容				勧告後の経緯																												
5	令和5年 11月28日	<p>【違反行為】 有価証券報告書等の虚偽記載 (金商法第172条の4第1項及び第2項)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 株式会社フジオフードグループ本社(東証プライム)</p> <p>【違反行為の概要】 当社及び当社の連結子会社は、助成金収入の過大計上等の不適正な会計処理を行った。 この結果、当社は、「重要な事項につき虚偽の記載」がある以下の有価証券報告書、四半期報告書を提出した(「重要な事項につき虚偽の記載」の内容は下表【虚偽記載の内容】を参照)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和3年9月第3四半期四半期報告書(令和3年11月12日提出) ・令和3年12月期有価証券報告書(令和4年3月30日提出) ・令和4年3月第1四半期四半期報告書(令和4年5月13日提出) ・令和4年6月第2四半期四半期報告書(令和4年8月12日提出) 				<p>審判手続開始決定日 令和5年12月5日 課徴金納付命令決定日 令和5年12月26日</p> <p>なお、課徴金納付命令対象者から事実関係等を認める旨の答弁書の提出があったため、審判の期日は開かれなかった。</p>																												
<p>【虚偽記載の内容】</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">番 号</th> <th colspan="2">対象書類</th> <th colspan="4">虚偽記載</th> </tr> <tr> <th>提出日</th> <th>書類</th> <th>会計期間</th> <th>記載項目</th> <th>主な内容(注)</th> <th>主な事由</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>令和3年 11月12日</td> <td>第23期第3四半期 (令和3年7月1日～ 同年9月30日)に係 る四半期報告書</td> <td>令和3年1月1日～ 同年9月30日の第3 四半期連結累計期 間</td> <td>四半期連結 損益計算書</td> <td>親会社株主に帰属す る四半期純利益が 472百万円であるとこ ろを 944百万円と記載</td> <td>助成金収入の過 大計上</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>令和4年 3月30日</td> <td>第23期(令和3年1 月1日～同年12月31 日)に係る有価証券 報告書</td> <td>令和3年1月1日～ 同年12月31日の連 結会計期間</td> <td>連結 損益計算書</td> <td>親会社株主に帰属す る当期純利益が ▲489百万円であると ころを</td> <td>助成金収入の過 大計上</td> </tr> </tbody> </table>								番 号	対象書類		虚偽記載				提出日	書類	会計期間	記載項目	主な内容(注)	主な事由	1	令和3年 11月12日	第23期第3四半期 (令和3年7月1日～ 同年9月30日)に係 る四半期報告書	令和3年1月1日～ 同年9月30日の第3 四半期連結累計期 間	四半期連結 損益計算書	親会社株主に帰属す る四半期純利益が 472百万円であるとこ ろを 944百万円と記載	助成金収入の過 大計上	2	令和4年 3月30日	第23期(令和3年1 月1日～同年12月31 日)に係る有価証券 報告書	令和3年1月1日～ 同年12月31日の連 結会計期間	連結 損益計算書	親会社株主に帰属す る当期純利益が ▲489百万円であると ころを	助成金収入の過 大計上
番 号	対象書類		虚偽記載																															
	提出日	書類	会計期間	記載項目	主な内容(注)	主な事由																												
1	令和3年 11月12日	第23期第3四半期 (令和3年7月1日～ 同年9月30日)に係 る四半期報告書	令和3年1月1日～ 同年9月30日の第3 四半期連結累計期 間	四半期連結 損益計算書	親会社株主に帰属す る四半期純利益が 472百万円であるとこ ろを 944百万円と記載	助成金収入の過 大計上																												
2	令和4年 3月30日	第23期(令和3年1 月1日～同年12月31 日)に係る有価証券 報告書	令和3年1月1日～ 同年12月31日の連 結会計期間	連結 損益計算書	親会社株主に帰属す る当期純利益が ▲489百万円であると ころを	助成金収入の過 大計上																												

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容				勧告後の経緯
5 つづき					709百万円と記載	
				連結 貸借対照表	連結純資産額が 3,925百万円であると ころを 5,123百万円と記載	
	3	令和4年 5月13日	第24期第1四半期 (令和4年1月1日～ 同年3月31日)に係 る四半期報告書	令和4年1月1日～ 同年3月31日の第1 四半期連結会計期 間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が 3,408百万円であると ころを 4,598百万円と記載
4	令和4年 8月12日	第24期第2四半期 (令和4年4月1日～ 同年6月30日)に係 る四半期報告書	令和4年4月1日～ 同年6月30日の第2 四半期連結会計期 間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が 3,574百万円であると ころを 4,749百万円と記載	当四半期前の助 成金収入の過大 計上
(注)金額は千円未満切捨てである。						
【課徴金額】1,200万円						

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容	勧告後の経緯
6	令和5年 12月15日	<p>【違反行為】 有価証券報告書等の虚偽記載 (金商法第172条の4第1項及び第2項)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 株式会社アマナ(東証グロース)</p> <p>【違反行為の概要】 当社は、売上及び売上原価の過大計上の不適正な会計処理を行った。 この結果、当社は、「重要な事項につき虚偽の記載」がある以下の有価証券報告書、四半期報告書、有価証券報告書の訂正報告書及び四半期報告書の訂正報告書を提出した(「重要な事項につき虚偽の記載」の内容は下表【虚偽記載の内容】を参照)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成30年12月期有価証券報告書の訂正報告書(令和4年8月22日提出) ・令和元年12月期有価証券報告書(令和2年3月31日提出)※ ・令和元年12月期有価証券報告書の訂正報告書(令和4年8月22日提出) ・令和2年6月第2四半期四半期報告書の訂正報告書(令和4年8月22日提出) ・令和2年9月第3四半期四半期報告書(令和2年12月23日提出) ・令和2年9月第3四半期四半期報告書の訂正報告書(令和4年8月22日提出) ・令和2年12月期有価証券報告書(令和3年3月31日提出) 	<p>審判手続開始決定日 令和5年12月22日 課徴金納付命令決定日 令和6年2月8日</p> <p>なお、課徴金納付命令対象者から事実関係等を認める旨の答弁書の提出があったため、審判の期日は開かれなかった。</p>

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容	勧告後の経緯
6 つき		<ul style="list-style-type: none"> ・令和2年12月期有価証券報告書の訂正報告書(令和4年8月22日提出) ・令和3年3月第1四半期四半期報告書(令和3年5月14日提出) ・令和3年3月第1四半期四半期報告書の訂正報告書(令和4年8月22日提出) ・令和3年6月第2四半期四半期報告書(令和3年8月13日提出) ・令和3年6月第2四半期四半期報告書の訂正報告書(令和4年8月22日提出) ・令和3年9月第3四半期四半期報告書(令和3年11月12日提出) ・令和3年9月第3四半期四半期報告書の訂正報告書(令和4年8月22日提出) ・令和3年12月期有価証券報告書(令和4年3月30日提出) ・令和3年12月期有価証券報告書の訂正報告書(令和4年8月22日提出) ・令和4年3月第1四半期四半期報告書(令和4年5月13日提出) ・令和4年6月第2四半期四半期報告書(令和4年8月15日提出) ・令和4年9月第3四半期四半期報告書(令和4年11月11日提出) <p>なお、当社が提出した平成30年12月期有価証券報告書(平成31年3月25日提出)等、合計4通の有価証券報告書及び四半期報告書についても、重要な事項につき虚偽の記載があるものと認められたが、これらの継続開示書類は、令和4年12月12日付けで課徴金納付命令の決定がされているため、本件の課徴金納付命令勧告の対象とはならない。</p>	

【虚偽記載の内容】

番号	対象書類		虚偽記載			
	提出日	書類	会計期間	記載項目	主な内容(注)	主な事由
1	令和4年 8月22日	第49期(平成30年1月1日～同年12月31日)に係る有価証券報告書の訂正報告書	平成30年1月1日～ 同年12月31日の連結 会計期間	連結 損益計算書	親会社株主に帰属する当期純利益が ▲64,264千円で あるところを ▲6,995千円と記載	売上の過大 計上
2	令和2年 3月31日	第50期(平成31年1月1日～令和元年12月31日)に係る有価証券報告書	平成31年1月1日～ 令和元年12月31日の 連結会計期間	連結 損益計算書	親会社株主に帰属する当期純利益が ▲299,606千円で あるところを ▲223,806千円と 記載	売上及び売 上原価の過 大計上
3	令和4年 8月22日	第50期(平成31年1月1日～令和元年12月31日)に係る有価証券報告書の訂正報告書	平成31年1月1日～ 令和元年12月31日の 連結会計期間	連結 損益計算書	経常利益が ▲80,241千円で あるところを 14,323千円と記載	売上及び売 上原価の過 大計上

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容				勧告後の経緯	
6 つづき	4 令和4年 8月22日	第51期第2四半期 (令和2年4月1日～ 同年6月30日)に係る 四半期報告書の訂正 報告書	令和2年4月1日～同 年6月30日の第2四 半期連結会計期間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が ▲434,364千円で あるところを ▲276,299千円と 記載	当四半期前 の売上及び 売上原価の 過大計上	
	5 令和2年 12月23日	第51期第3四半期 (令和2年7月1日～ 同年9月30日)に係る 四半期報告書	令和2年7月1日～同 年9月30日の第3四 半期連結会計期間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が ▲930,214千円で あるところを ▲767,392千円と 記載	当四半期前 の売上及び 売上原価の 過大計上	
	6 令和4年 8月22日	第51期第3四半期 (令和2年7月1日～ 同年9月30日)に係る 四半期報告書の訂正 報告書	令和2年7月1日～同 年9月30日の第3四 半期連結会計期間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が ▲930,214千円で あるところを ▲767,392千円と 記載	当四半期前 の売上及び 売上原価の 過大計上	
	7 令和3年 3月31日	第51期(令和2年1月 1日～同年12月31 日)に係る有価証券 報告書	令和2年1月1日～同 年12月31日の連結会 計期間	連結 貸借対照表	連結純資産額が ▲983,606千円で あるところを ▲802,948千円と 記載	当期前の売 上及び売上 原価の過大 計上	
	8 令和4年 8月22日	第51期(令和2年1月 1日～同年12月31 日)に係る有価証券 報告書の訂正報告書	令和2年1月1日～同 年12月31日の連結会 計期間	連結 貸借対照表	連結純資産額が ▲983,606千円で あるところを ▲802,948千円と 記載	当期前の売 上及び売上 原価の過大 計上	
	9 令和3年 5月14日	第52期第1四半期 (令和3年1月1日～ 同年3月31日)に係る 四半期報告書	令和3年1月1日～同 年3月31日の第1四 半期連結会計期間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が ▲947,897千円 であるところを ▲761,221千円と 記載	当四半期前 の売上及び 売上原価の 過大計上	
	10 令和4年 8月22日	第52期第1四半期 (令和3年1月1日～ 同年3月31日)に係る 四半期報告書の訂正 報告書	令和3年1月1日～同 年3月31日の第1四 半期連結会計期間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が ▲947,897千円で あるところを ▲761,221千円と 記載	当四半期前 の売上及び 売上原価の 過大計上	

第1節

第2節

第3節

第4節

3-5

第6節

第7節

第8節

第9節

第10節

第11節

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容			勧告後の経緯		
6 つづき	11	令和3年 8月13日	第52期第2四半期 (令和3年4月1日～ 同年6月30日)に係る 四半期報告書	令和3年4月1日～同 年6月30日の第2四 半期連結会計期間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が ▲972,045千円で あるところを ▲772,547千円と 記載	当四半期前 の売上及び 売上原価の 過大計上
	12	令和4年 8月22日	第52期第2四半期 (令和3年4月1日～ 同年6月30日)に係る 四半期報告書の訂正 報告書	令和3年4月1日～同 年6月30日の第2四 半期連結会計期間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が ▲972,045千円で あるところを ▲772,547千円と 記載	当四半期前 の売上及び 売上原価の 過大計上
	13	令和3年 11月12日	第52期第3四半期 (令和3年7月1日～ 同年9月30日)に係る 四半期報告書	令和3年1月1日～同 年9月30日の第3四 半期連結累計期間	四半期連結 損益計算書	親会社株主に帰 属する四半期純 利益が ▲311,965千円で あるところを ▲260,755千円と 記載	売上及び売 上原価の過 大計上
				令和3年7月1日～同 年9月30日の第3四 半期連結会計期間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が ▲198,707千円で あるところを 33,159千円と記 載	
	14	令和4年 8月22日	第52期第3四半期 (令和3年7月1日～ 同年9月30日)に係る 四半期報告書の訂正 報告書	令和3年7月1日～同 年9月30日の第3四 半期連結会計期間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が ▲198,707千円で あるところを 33,159千円と記 載	当四半期前 の売上及び 売上原価の 過大計上
	15	令和4年 3月30日	第52期(令和3年1月 1日～同年12月31 日)に係る有価証券 報告書	令和3年1月1日～同 年12月31日の連結会 計期間	連結 損益計算書	親会社株主に帰 属する当期純利 益が ▲22,305千円で あるところを 82,507千円と記 載	売上及び売 上原価の過 大計上

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容				勧告後の経緯	
6 つづき				連結 貸借対照表	連結純資産額が 90,321 千円である ところを 375,791 千円と記載		
	16	令和4年 8月 22 日	第52期(令和3年1月 1日～同年12月31 日)に係る有価証券 報告書の訂正報告書	令和3年1月1日～同 年12月31日の連結会 計期間	連結 損益計算書	親会社株主に帰 属する当期純利 益が ▲22,305 千円で あるところを 82,507 千円と記 載	売上及び売 上原価の過 大計上
					連結 貸借対照表	連結純資産額が 90,321 千円であ る ところを 375,791 千円と記 載	
	17	令和4年 5月 13 日	第53期第1四半期 (令和4年1月1日～ 同年3月31日)に係る 四半期報告書	令和4年1月1日～同 年3月31日の第1四 半期連結会計期間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が ▲180,125 千円で あるところを 120,809 千円と記 載	当四半期前 の売上及び 売上原価の 過大計上
18	令和4年 8月 15 日	第53期第2四半期 (令和4年4月1日～ 同年6月30日)に係る 四半期報告書	令和4年1月1日～同 年6月30日の第2四 半期連結累計期間 令和4年4月1日～同 年6月30日の第2四 半期連結会計期間	四半期連結 損益計算書	親会社株主に帰 属する四半期純 利益が ▲208,754 千円で あるところを ▲157,159 千円と 記載	売上及び売 上原価の過 大計上	
				四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が ▲196,225 千円で あるところを 140,838 千円と記 載		

第1節

第2節

第3節

第4節

3-5

第6節

第7節

第8節

第9節

第10節

第11節

番号	勧告実施 年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容			勧告後の経緯
6 つき	19 令和4年 11月11日	第53期第3四半期 (令和4年7月1日～ 同年9月30日)に係る 四半期報告書	令和4年1月1日～同 年9月30日の第3四 半期連結累計期間 令和4年7月1日～同 年9月30日の第3四 半期連結会計期間	四半期連結 損益計算書 四半期連結 貸借対照表	親会社株主に帰 属する四半期純 利益が ▲591,818千円で あるところを ▲535,969千円と 記載 連結純資産額が ▲595,710千円で あるところを ▲254,391千円と 記載
(注)金額は千円未満切捨てである。					
【課徴金額】3,800万円					

番号	勧告実施 年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容		勧告後の経緯
7	令和6年 1月23日	<p>【違反行為】 有価証券報告書等の虚偽記載 (金商法第172条の2第1項並びに同法第172条の4第1項及び第2項)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 ITbookホールディングス株式会社(東証グロース)</p> <p>【違反行為の概要】 (1)継続開示書類 当社及び当社の連結子会社は、投資有価証券の過大計上及び売上の過大計上等の不適正な会計処理を行った。 この結果、当社は、「重要な事項につき虚偽の記載」がある以下の有価証券報告書及び四半期報告書を提出した(「重要な事項につき虚偽の記載」の内容は下表【虚偽記載の内容】を参照)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和2年9月第2四半期四半期報告書(令和2年11月16日提出) ・令和2年12月第3四半期四半期報告書(令和3年2月15日提出) ・令和3年3月期有価証券報告書(令和3年6月30日提出) ・令和3年9月第2四半期四半期報告書(令和3年11月15日提出) ・令和3年12月第3四半期四半期報告書(令和4年2月14日提出) <p>(2)発行開示書類 当社は、令和2年12月16日及び令和4年3月14日、「重要な事項につき虚偽の記載」がある有価証券届出書を提出し、当該有価証券届出書に基づく募集により、有価証券を取得させた(「重要な事項につき虚偽の記載」の内容は下表【虚偽記載の内容】を参照)。</p>	<p>審判手続開始決定日 令和6年1月30日 課徴金納付命令決定日 令和6年3月14日</p> <p>なお、課徴金納付命令対象者から事実関係等を認める旨の答弁書の提出があったため、審判の期日は開かれなかった。</p>	

番号	勧告実施 年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容				勧告後の経緯	
7 つき	【虚偽記載の内容】						
	番号	対象書類		虚偽記載			
	提出日	書類	会計期間	記載項目	主な内容(注)	主な事由	
	1	令和2年 11月16日	第3期第2四半期 (令和2年7月1日～ 同年9月30日)に係 る四半期報告書	令和2年4月1日～ 同年9月30日の第2 四半期連結累計期 間	四半期連結 損益計算書	親会社株主に帰属す る四半期純利益が ▲925,686 千円である ところを ▲793,936千円と記載	売上の前倒し計 上及び棚卸資産 の過大計上
	2	令和3年 2月15日	第3期第3四半期 (令和2年10月1日 ～同年12月31日)に 係る四半期報告書	令和2年4月1日～ 同年12月31日の第3 四半期連結累計期 間	四半期連結 損益計算書	親会社株主に帰属す る四半期純利益が ▲1,139,816 千円であ るところを ▲972,825千円と記載	売上の前倒し計 上及び棚卸資産 の過大計上
3	令和3年 6月30日	第3期(令和2年4月 1日～令和3年3月 31日)に係る有価証 券報告書	令和2年4月1日～ 令和3年3月31日の 連結会計期間	連結 損益計算書	営業利益が ▲252,854 千円である ところを 152,439 千円と記載 経常利益が ▲208,406 千円である ところを 196,887 千円と記載 親会社株主に帰属す る当期純利益が ▲843,457 千円である ところを ▲358,005千円と記載	売上の過大計 上、ソフトウェア 仮勘定の過大計 上及び棚卸資産 の過大計上	
4	令和3年 11月15日	第4期第2四半期 (令和3年7月1日～ 同年9月30日)に係 る四半期報告書	令和3年4月1日～ 同年9月30日の第2 四半期連結累計期 間 令和3年7月1日～ 同年9月30日の第2 四半期連結会計期 間	四半期連結 損益計算書 四半期連結 貸借対照表	親会社株主に帰属す る四半期純利益が ▲730,367 千円である ところを ▲563,656千円と記載 連結純資産額が 1,784,020 千円であると ころを 2,348,855千円と記載	投資有価証券の 過大計上及び関 係会社株式売却 益の過大計上	

第1節

第2節

第3節

第4節

3-5

第6節

第7節

第8節

第9節

第10節

第11節

番号	勧告実施 年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容				勧告後の経緯		
第1節 第2節 第3節 第4節 3-5 第6節 第7節 第8節 第9節	7 つづき	5	令和4年 2月14日	第4期第3四半期 (令和3年10月1日 ～同年12月31日)に 係る四半期報告書	令和3年4月1日～ 同年12月31日の第3 四半期連結累計期 間	四半期連結 損益計算書	親会社株主に帰属す る四半期純利益が ▲907,915 千円である ところを ▲654,121千円と記載	投資有価証券の 過大計上及び関 係会社株式売却 益の過大計上
	令和3年10月1日～ 同年12月31日の第3 四半期連結会計期 間				四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が 1,647,012 千円であると ころを 2,298,930千円と記載		
	6				令和2年 12月16日	有価証券届出書 (新株予約権証券の 募集)		
	7	令和4年 3月14日	有価証券届出書 (株式の募集)		「第三部 参照情報」	番号3～5に掲げる第 3期に係る有価証券報 告書並びに第4期第2 四半期及び第3四半 期に係る四半期報告 書を参照	番号3～5を参 照	
		(注)金額は千円未満切捨てである。						
		【課徴金額】1億929万円						

番号	勧告実施 年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容	勧告後の経緯
第10節 第11節	8 令和6年 3月26日	<p>【違反行為】 有価証券報告書等の虚偽記載 (金商法第172条の4第1項及び第2項)</p> <p>【課徴金納付命令対象者】 株式会社サカイホールディングス(東証スタンダード)</p> <p>【違反行為の概要】 当社の連結子会社は、売上の前倒しによる売掛金の過大計上及び 売上の架空計上の不適正な会計処理を行った。 この結果、当社は、「重要な事項につき虚偽の記載」がある以下の有 価証券報告書、四半期報告書、有価証券報告書の訂正報告書及び四 半期報告書の訂正報告書を提出した(「重要な事項につき虚偽の記 載」の内容は下表【虚偽記載の内容】を参照)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成30年12月第1四半期四半期報告書の訂正報告書 (令和4年3月31日提出) ・平成31年3月第2四半期四半期報告書(令和元年5月15日提出) ・平成31年3月第2四半期四半期報告書の訂正報告書 (令和4年3月31日提出) 	審判手続開始決定前 (令和6年3月31日現在)

番号	勧告実施年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容	勧告後の経緯
8 つき		<ul style="list-style-type: none"> ・令和元年6月第3四半期四半期報告書(令和元年8月9日提出) ・令和元年6月第3四半期四半期報告書の訂正報告書(令和4年3月31日提出) ・令和元年9月期有価証券報告書(令和元年12月25日提出) ・令和元年9月期有価証券報告書の訂正報告書(令和4年3月31日提出) ・令和元年12月第1四半期四半期報告書(令和2年2月14日提出) ・令和元年12月第1四半期四半期報告書の訂正報告書(令和4年3月31日提出) ・令和2年3月第2四半期四半期報告書(令和2年5月15日提出) ・令和2年3月第2四半期四半期報告書の訂正報告書(令和4年3月31日提出) ・令和2年6月第3四半期四半期報告書(令和2年8月14日提出) ・令和2年9月期有価証券報告書(令和2年12月28日提出) ・令和2年12月第1四半期四半期報告書(令和3年2月15日提出) ・令和3年3月第2四半期四半期報告書(令和3年5月17日提出) ・令和3年6月第3四半期四半期報告書(令和3年8月12日提出) ・令和3年9月期有価証券報告書(令和3年12月24日提出) 	

【虚偽記載の内容】

番号	対象書類		虚偽記載			
	提出日	書類	会計期間	記載項目	主な内容(注)	主な事由
1	令和4年3月31日	第29期第1四半期(平成30年10月1日～同年12月31日)に係る四半期報告書の訂正報告書	平成30年10月1日～同年12月31日の第1四半期連結会計期間	四半期連結貸借対照表	連結純資産額が1,914,421千円であるところを2,508,361千円と記載	売上の前倒しによる売掛金の過大計上
2	令和元年5月15日	第29期第2四半期(平成31年1月1日～同年3月31日)に係る四半期報告書	平成31年1月1日～同年3月31日の第2四半期連結会計期間	四半期連結貸借対照表	連結純資産額が2,057,229千円であるところを3,191,748千円と記載	売上の前倒しによる売掛金の過大計上及び当四半期前の売上の架空計上
3	令和4年3月31日	第29期第2四半期(平成31年1月1日～同年3月31日)に係る四半期報告書の訂正報告書	平成31年1月1日～同年3月31日の第2四半期連結会計期間	四半期連結貸借対照表	連結純資産額が2,057,229千円であるところを2,631,156千円と記載	売上の前倒しによる売掛金の過大計上
4	令和元年8月9日	第29期第3四半期(平成31年4月1日～令和元年6月30日)に係る四半期報告書	平成31年4月1日～令和元年6月30日の第3四半期連結会計期間	四半期連結貸借対照表	連結純資産額が1,972,257千円であるところを3,139,532千円と記載	売上の前倒しによる売掛金の過大計上及び当四半期前の売上の架空計上

第1節
第2節
第3節
第4節
3-5
第6節
第7節
第8節
第9節
第10節
第11節

番号	勧告実施 年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容				勧告後の経緯		
第1節	8 つづき	5	第29期第3四半期 (平成31年4月1日 ～令和元年6月30 日)に係る四半期報 告書の訂正報告書	平成31年4月1日～ 令和元年6月30日の 第3四半期連結会計 期間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が 1,972,257千円であると ころを 2,532,709千円と記載	売上の前倒しに よる売掛金の過 大計上	
第2節		6	令和元年 12月25日	第29期(平成30年10 月1日～令和元年9 月30日)に係る有価 証券報告書	平成30年10月1日～ 令和元年9月30日の 連結会計期間	連結 損益計算書	親会社株主に帰属す る当期純利益が 199,172千円であるとこ ろを 367,924千円と記載	売上の前倒しに よる売掛金の過 大計上及び売上 の架空計上
第3節						連結 貸借対照表	連結純資産額が 2,018,147千円である ところを 3,282,737千円と記載	
第4節		3-5	7	第29期(平成30年10 月1日～令和元年9 月30日)に係る有価 証券報告書の訂正 報告書	平成30年10月1日～ 令和元年9月30日の 連結会計期間	連結 貸借対照表	連結純資産額が 2,018,147千円である ところを 2,605,340千円と記載	売上の前倒しに よる売掛金の過 大計上
第5節								
第6節		9	令和4年 3月31日	第30期第1四半期 (令和元年10月1日 ～同年12月31日)に 係る四半期報告書 の訂正報告書	令和元年10月1日～ 同年12月31日の第1 四半期連結会計期 間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が 2,014,838千円であると ころを 2,596,075千円と記載	売上の前倒しに よる売掛金の過 大計上
第7節								

番号	勧告実施 年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容				勧告後の経緯
8 つづき	10 令和2年 5月15日	第30期第2四半期 (令和2年1月1日～ 同年3月31日)に係 る四半期報告書	令和2年1月1日～ 同年3月31日の第2 四半期連結会計期 間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が 2,020,331千円であると ころを 3,201,683千円と記載	売上の前倒しに よる売掛金の過 大計上及び当四 半期前の売上の 架空計上
	11 令和4年 3月31日	第30期第2四半期 (令和2年1月1日～ 同年3月31日)に係 る四半期報告書の 訂正報告書	令和2年1月1日～ 同年3月31日の第2 四半期連結会計期 間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が 2,020,331千円であると ころを 2,577,922千円と記載	売上の前倒しに よる売掛金の過 大計上
	12 令和2年 8月14日	第30期第3四半期 (令和2年4月1日～ 同年6月30日)に係 る四半期報告書	令和2年4月1日～ 同年6月30日の第3 四半期連結会計期 間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が 2,194,958千円であると ころを 3,318,763千円と記載	売上の前倒しに よる売掛金の過 大計上及び当四 半期前の売上の 架空計上
	13 令和2年 12月28日	第30期(令和元年10 月1日～令和2年9 月30日)に係る有価 証券報告書	令和元年10月1日～ 令和2年9月30日の 連結会計期間	連結 貸借対照表	連結純資産額が 2,546,476千円である ところを 3,748,893千円と記載	売上の前倒しに よる売掛金の過 大計上及び当期 前の売上の架空 計上
	14 令和3年 2月15日	第31期第1四半期 (令和2年10月1日 ～同年12月31日)に 係る四半期報告書	令和2年10月1日～ 同年12月31日の第1 四半期連結会計期 間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が 2,536,679千円であると ころを 3,774,652千円と記載	売上の前倒しに よる売掛金の過 大計上及び当四 半期前の売上の 架空計上
	15 令和3年 5月17日	第31期第2四半期 (令和3年1月1日～ 同年3月31日)に係 る四半期報告書	令和3年1月1日～ 同年3月31日の第2 四半期連結会計期 間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が 2,905,974千円であると ころを 4,100,733千円と記載	売上の前倒しに よる売掛金の過 大計上及び当四 半期前の売上の 架空計上

第1節

第2節

第3節

第4節

3-5

第6節

第7節

第8節

第9節

第10節

第11節

番号	勧告実施 年月日	勧告の対象となった法令違反等の内容				勧告後の経緯
8 つづき	令和3年 8月12日	第31期第3四半期 (令和3年4月1日～ 同年6月30日)に係 る四半期報告書	令和3年4月1日～ 同年6月30日の第3 四半期連結会計期 間	四半期連結 貸借対照表	連結純資産額が 3,034,207千円である ところを 4,236,677千円と記載	売上の前倒しに よる売掛金の過 大計上及び当四 半期前の売上の 架空計上
		第31期(令和2年10 月1日～令和3年9 月30日)に係る有価 証券報告書	令和2年10月1日～ 令和3年9月30日の 連結会計期間	連結 貸借対照表	連結純資産額が 3,228,406千円である ところを 4,390,901千円と記載	売上の前倒しに よる売掛金の過 大計上及び当期 前の売上の架空 計上
3-5	(注)金額は千円未満切捨てである。					
	【課徴金額】3,000万円					

4. (参考)確定又は係属中の課徴金納付命令取消訴訟

(令和5年4月～令和6年3月)

番号	課徴金納付命令勧告		課徴金納付命令		原告	訴訟の状況
	勧告実施年月日	勧告事案名	決定年月日	事件名		
1	平成25年 11月1日	ウェッジホールディングス株式に係る偽計に対する課徴金納付命令の勧告について (平成25年度版年次公表P93、94参照)	平成29年 4月11日、 平成30年 1月16日 (更正決定)	(株)ウェッジホールディングス株式に係る偽計	個人	令和5年9月22日第一審判決請求棄却[東京地裁] 控訴審係属中[東京高裁]
2	平成26年 12月5日	Areion Asset Management Company Limitedによる相場操縦に対する課徴金納付命令の勧告について (平成26年度版年次公表P80、81参照)	平成30年 6月11日	日東電工(株)株式に係る相場操縦	Areion Asset Management Company Limited (アレイオン・アセット・マネジメント・カンパニー・リミテッド)	第一審係属中[東京地裁]
3	令和2年 1月28日	ビート・ホールディングス・リミテッド株式に係る相場操縦に対する課徴金納付命令の勧告について (令和元年度版年次公表 P207参照)	令和3年 3月4日	ビート・ホールディングス・リミテッド株式に係る相場操縦	個人	令和6年1月30日第一審判決請求棄却[東京地裁]【確定】
4	令和2年 9月11日	さいか屋株式に係る相場操縦に対する課徴金納付命令の勧告について (令和2年度版年次公表 P180参照)	令和3年 10月7日	(株)さいか屋株式に係る安定操作	個人	令和5年12月12日第一審判決請求棄却[東京地裁] 控訴審係属中[東京高裁]

※年次公表とは、『証券取引等監視委員会の活動状況』を指す。

第1節

第2節

第3節

第4節

3-5

第6節

第7節

第8節

第9節

第10節

第11節

3-6 裁判所への申立て実施状況

1. 申立て実施件数一覧表

年度	平成22 ～令和元	令和2	令和3	令和4	令和5	合計
合計	25	1	1	2	1	30
無登録業者等	24	1	1	2	1	29
無届募集	1	0	0	1	1	3

2. 無登録業者・無届募集等に対する裁判所への禁止命令等の申立て実績

番号	被申立人	申立日 (申立てを行った 裁判所)	申立ての内容	発令日
1	S DIVISION HOLDINGS INC.及び株式会社STEPCAPITALMANAGEMENT並びにその役員1名	令和5年 6月28日 (大阪地裁)	<p>○ 無届募集(外国社債及び社債)及び無登録営業(外国社債の募集又は私募の取扱い等)の禁止</p> <p>S DIVISION HOLDINGS INC.(以下「SDH社」という。)は、平成29年7月5日に設立されたフィリピン共和国に所在する外国法人であり、SDH社の会長であるAが運営するS DIVISION HOLDINGS INC.グループ(以下「SDH社グループ」という。)を総括している。</p> <p>SDH社グループには、フィリピン共和国内において、レンディング事業、ファイナンス事業、ビジネス・プロセス・アウトソーシング事業等を行う現地法人が事業ごとに存在するほか、当該事業に関する日本側の窓口として、Aが代表者を務める株式会社STEPCAPITALMANAGEMENT(以下「キャピタル社」といい、SDH社及びAと併せて「当社ら」という。)等が存在している。</p> <p>こうした中、SDH社及びAは、下記(1)のとおり、有価証券届出書を提出することなく外国社債の募集を行い、届出の効力発生前にこれを取得させている。また、キャピタル社及びAは、下記(2)のとおり、有価証券届出書を提出することなく社債の募集を行い、届出の効力発生前にこれを取得させているほか、下記(3)のとおり、金商法第29条所定の登録を受けずに、外国社債の募集又は私募の取扱いを業として行っている。</p> <p>(1) 外国社債の無届募集 SDH社及びAは、SDH社グループのフィリピン共和国内におけるレンディング事業等の運転資金に充てるため、令和3年6月以降、外国社債を発行し、Aを中心に、複数の代理店等により募集を行っているが、このうち、少なくとも令和4年7月、同年8月及び同年9月発行分の外国社債については、50名以上の者に対し、有価証券届出書を提出することなく募集を行っており、その発行価額の総額が1億円以上となっている。</p> <p>SDH社及びAは、令和3年6月から令和4年9月までの間に、少なくとも延べ2,340名の一般投資家に対し、150億円を超える外国社債を購入させている。</p> <p>SDH社及びAの上記行為のうち少なくとも令和4年7月、同年8月及び同年9月発行分の外国社債の募集(約56億円)は、有価証券届出書を提出することなく有価証券の募集を行ったものとして金商法第4条第1項に違反するとともに、同項の規定による届出</p>	令和5年 11月1日 (大阪地裁)

<p>1 つづき</p>			<p>の効力発生前にこれを取得させたものとして金商法第15条第1項に違反する。</p> <p>(2) 社債の無届募集 キャピタル社及びAは、SDH社グループのフィリピン共和国内におけるレンディング事業等の運転資金に充てるため、平成28年10月以降、継続的に社債を発行し、Aを中心に、複数の代理店等により募集を行っているが、このうち少なくとも令和3年9月及び12月発行分の社債については、50名以上の者に対し、有価証券届出書を提出することなく募集を行っており、その発行価額の総額が1億円以上となっている。 キャピタル社及びAは、平成28年10月から令和4年11月までの間に、少なくとも延べ2,001名の一般投資家に対し、52億円を超える社債を購入させている。 キャピタル社及びAの上記行為のうち少なくとも令和3年9月及び12月発行分の社債の募集(約4.6億円)は、有価証券届出書を提出することなく有価証券の募集を行ったものとして金商法第4条第1項に違反するとともに、同項の規定による届出の効力発生前にこれを取得させたものとして金商法第15条第1項に違反する。</p> <p>(3) 外国社債の募集又は私募の取扱い キャピタル社及びAは、SDH社が発行する外国社債につき、多数の一般投資家を相手方として、反復継続して、対面等の方法により、SDH社グループの事業内容や商品概要のほか、当該商品はリスクが少なく、メリットが大きいといった説明を行うなどして、取得勧誘を行っている。 キャピタル社及びAの上記行為は、外国社債の募集又は私募の取扱いを業として行うものとして、金商法第28条第1項第1号に規定する「第一種金融商品取引業」に該当し、無登録でこれを行うことは、金商法第29条に違反する。 また、キャピタル社及びAは、今後も資金調達をする必要がある等の事情があることに加え、SDH社グループのキャピタル社以外の内国法人においても社債を発行しており、外国社債の取得勧誘に係る枠組みを容易に利用可能であることなどを踏まえると、社債の募集又は私募の取扱いを業として行うおそれがある。</p> <p>当社は、上記金商法違反行為を今後も継続して行う蓋然性が高いことから、これを可及的速やかに禁止・停止させる必要がある。</p>	
------------------	--	--	---	--

第1節
第2節
第3節
第4節
第5節
3-6
第7節
第8節
第9節
第10節
第11節

3-7 犯則事件の調査・告発等

1. 犯則事件の調査・告発実績

令和5年度の不公正取引等に対する告発事案の概要は以下のとおりである。

(1) 株式会社アイ・アールジャパンホールディングス株券に係る取引推奨事件の告発について

本件は、株式会社アイ・アールジャパンホールディングス(以下「アイ・アールジャパンホールディングス」という。)の代表取締役副社長兼最高執行責任者であった犯則嫌疑者が、同社の連結業績予想値の下方修正の事実を職務に関し知り、あらかじめ同社の株券を売り付けさせて損失の発生を回避させる目的をもって、その事実の公表前に、2名に対し、同社の株券の売付けを勧めた取引推奨事件である。

【調査の実施状況及び告発の状況】

証券監視委は、本件が、金商法に違反する(第167条の2第1項等 取引推奨の禁止)として、必要な調査を行い、令和5年6月6日、犯則嫌疑者1名を東京地方検察庁検察官に告発した。

【告発の対象となった犯則事実】

犯則嫌疑者は、東京証券取引所が開設する有価証券市場に株券を上場していたアイ・アールジャパンホールディングスの代表取締役副社長兼最高執行責任者を務めていたものであるが、令和3年3月下旬頃、その職務に関し、アイ・アールジャパンホールディングスが新たに算出した令和2年4月1日から令和3年3月31日までの事業年度におけるアイ・アールジャパンホールディングスが属する企業集団の売上高の予想値について、アイ・アールジャパンホールディングスが公表していた予想値に比較して減少し、投資者の投資判断に及ぼす影響が重要なものとして内閣府令で定める基準に該当する差異が生じた旨のアイ・アールジャパンホールディングスの業務等に関する重要事実を知り、あらかじめアイ・アールジャパンホールディングスの株券を売り付けさせて損失の発生を回避させる目的をもって

第1 前記重要事実の公表前である同年4月上旬頃から同月中旬頃までの間、Aに対し、複数回にわたり、アイ・アールジャパンホールディングスの株券の売付けを勧めたものであり、これにより売付けを勧められた同人が、法定の除外事由がないのに、前記重要事実の公表前である同月中旬頃、証券会社を介し、東京証券取引所において、アイ・アールジャパンホールディングスの株券合計約9,000株を代金合計約1億4,800万円で売り付け

第2 前記重要事実の公表前である同月中旬頃、Bに対し、複数回にわたり、アイ・アールジャパンホールディングスの株券の売付けを勧めたものであり、これにより売付けを勧められた同人が、法定の除外事由がないのに、前記重要事実の公表前である同月中旬頃、証券会社を介し、東京証券取引所において、アイ・アールジャパンホールディングスの株券合計2,000株を代金合計約3,200万円で売り付けたものである。

【告発後の経緯】

令和5年6月7日、犯則嫌疑者が起訴された。

同年10月5日、東京地方裁判所は、以下のような理由から、被告人に懲役1年6月（執行猶予3年）を言い渡し、同判決は確定した。

- ・ 上場会社の代表取締役副社長等を務めていた被告人は、同社が属する企業集団の売上高の予想値が、直前に発表したものより減少することを知り、確実に損失の発生を回避させようと、上記予想値の発表までに、被推奨者らに対して繰り返し売却を勧めるなどしており、被推奨者らは同社の株式を売り付け、それぞれ損失を回避したのであって、金融商品市場の公正性・健全性や、それらに対する投資家の信頼を害する悪質な犯行といえる。
- ・ 被告人が勧めて同社の株式を取得させていた被推奨者らの損失を回避したいという身勝手な動機に基づく安易な犯行であり、上場会社の役員という責任ある立場の自覚を欠いていたと言わざるを得ない。被告人の刑事責任は軽く見ることはできない。
- ・ 他方で、被告人が事実を認めて反省の態度を示し、二度と同様の行為はしない旨述べていること、既に上場会社の役員を辞任していること、見るべき前科もないことなどの酌むべき事情も認められる。

(2) 株式会社プロルート丸光に係る虚偽有価証券報告書提出事件

本件は、犯則嫌疑者5名が共謀の上、上場会社である犯則嫌疑法人株式会社プロルート丸光（以下「犯則嫌疑法人」という。）の業務に関し、営業損益等が赤字であったにもかかわらず、架空売上を計上する方法により、黒字であったなどと記載した連結損益計算書を掲載することで、重要な事項につき虚偽の記載のある有価証券報告書を提出した事件である。

【調査の実施状況及び告発の状況】

証券監視委は、本件が、金商法に違反する（第197条第1項第1号等 重要な事項につき虚偽の記載のある有価証券報告書の提出）として、必要な調査を行い、令和5年10月31日、

犯則嫌疑法人1社及び犯則嫌疑者5名を東京地方検察庁検察官に告発した。

【告発の対象となった犯則事実】

犯則嫌疑法人は、大阪市中央区に本店を置き、子供服、男子服等の製造及び販売業等を目的とする会社であって、その発行する株券を株式会社東京証券取引所が開設するJASDAQ市場に上場していたもの、犯則嫌疑者Aは、X社の代表取締役であったもの、犯則嫌疑者Bは、犯則嫌疑法人の取締役会長としてその業務全般を統括管理していたもの、犯則嫌疑者Cは、犯則嫌疑法人の代表取締役としてその業務全般を統括管理していたもの、犯則嫌疑者D及び同Eは、犯則嫌疑法人の株主であったものであるが、犯則嫌疑者5名は、共謀の上、犯則嫌疑法人の業務に関し、令和3年6月17日、前記本店事務所に設置された入出力装置から、開示用電子情報処理組織を使用して、内閣府の使用に係る電子計算機に備えられたファイルに記録させる方法により、近畿財務局において、近畿財務局長に対し、犯則嫌疑法人の令和2年3月21日から令和3年3月20日までの連結会計年度につき、営業損失が6,981万4,000円(1,000円未満切捨て。以下同じ。)、経常損失が8,552万7,000円、税金等調整前当期純損失が9,563万2,000円であったにもかかわらず、架空売上を計上する方法により、営業利益を6,377万3,000円、経常利益を5,405万9,000円、税金等調整前当期純利益を4,395万5,000円と記載した虚偽の連結損益計算書を掲載した有価証券報告書を提出し、もって重要な事項につき虚偽の記載のある有価証券報告書を提出したものである。

【告発後の経緯】

令和5年11月1日、犯則嫌疑法人並びに犯則嫌疑者A、B、C、D及びEが起訴され、現在、東京地方裁判所において公判係属中である(令和6年3月31日現在)。

(3) 株式会社プロルート丸光株券に係る風説の流布及び偽計事件

本件は、株式会社プロルート丸光(以下「プロルート丸光」という。)の筆頭株主法人の代表者ら犯則嫌疑者3名が共謀の上、プロルート丸光の株価の上昇を図る目的をもって、プロルート丸光役職員をして、虚偽の内容を含む株式交換契約締結に関する公表を行わせた風説の流布及び偽計事件である。

【調査の実施状況及び告発の状況】

証券監視委は、本件が、金商法に違反する(第158条(令和元年法律第28号による改正前のもの)等 風説の流布、偽計、暴行又は脅迫の禁止)として、必要な調査を行い、令和5年11月20日、犯則嫌疑者3名を東京地方検察庁検察官に告発した。

第1節
第2節
第3節
第4節
第5節
第6節
3-7
第8節
第9節
第10節
第11節

【告発の対象となった犯則事実】

犯則嫌疑者Aは、株式会社東京証券取引所が開設するJASDAQ市場に上場していたプロルート丸光の筆頭株主であったX社の代表取締役であったもの、犯則嫌疑者Bは、Y社株主であったもの、犯則嫌疑者Cは、Y社株主兼代表取締役であったものであるが、犯則嫌疑者3名は、共謀の上、プロルート丸光の株式の株価の上昇を図る目的をもって、真実は、Y社は、何ら事業を行っておらず、以後事業を行う予定もなく、Y社の株式価値及び株式交換の株式交換比率は、虚偽の事業計画に基づきY社の企業価値をあえて過大に評価して決定したものであったにもかかわらず、プロルート丸光役職員をして、令和元年12月18日、TDnetにより、プロルート丸光が、同日にY社との間でY社を株式交換により完全子会社とする株式交換契約を締結した旨公表するに際し、「Y社は、コンサートグッズを製造及び販売できる権利を製造者に許諾し、その対価として商品販売額の一定額をロイヤリティとして受領する事業を主たる事業としており、その将来収益に高い信頼性があり、第三者機関が令和2年12月期から令和6年12月期のY社の事業計画に基づき算出した企業価値を踏まえ、Y社の1株当たりの株式価値を16万8,200円とすることが妥当と判断し、株式交換比率につき、プロルート丸光1,450株に対しY社1株とした。」旨の虚偽の内容を含む公表を行わせ、もって、有価証券の相場の変動を図る目的をもって、風説を流布するとともに偽計を用いたものである。

【告発後の経緯】

令和5年11月21日、犯則嫌疑者A、B及びCが起訴され、現在、東京地方裁判所において公判係属中である(令和6年3月31日現在)。

(4) 株式会社ニチリョク株券に係る相場操縦事件

本件は、犯則嫌疑者が、株式会社ニチリョク(以下、「ニチリョク」という。)株券の株価の高位形成を図ろうと企て、多数の異名義口座を用いて、多数回にわたる仮装売買のほか、馴合売買を行い、また、多数回にわたる買い上がり買付けなどを行った相場操縦事件である。

【調査の実施状況及び告発の状況】

証券監視委は、本件が、金商法に違反する(第159条第1項第1号等 相場操縦行為等の禁止)として、必要な調査を行い、令和6年2月13日、犯則嫌疑者1名を大阪地方検察庁検察官に告発した。

【告発の対象となった犯則事実】

第1節
第2節
第3節
第4節
第5節
第6節
3-7
第8節
第9節
第10節
第11節

犯則嫌疑者は、東京証券取引所が開設する有価証券市場に上場されているニチリヨクが発行した株券について、その株価の高値形成を図ろうと企て、

第1 同株券の売買を誘引する目的をもって、令和2年10月26日から同月28日までの間、3取引日にわたり、同市場において、Aほか1名義で、証券会社1社を介し、連続した高指値注文を行って高値を買い上げるなどの方法により、同株券合計1万7,100株を買い付け、もって同株券の売買が繁盛であると誤解させ、かつ、同市場における同株券の相場を変動させるべき一連の株券売買をするとともに、同株券の売買が繁盛に行われていると他人に誤解させるなど同株券の売買の状況に関し他人に誤解を生じさせる目的をもって、同期間中、2取引日にわたり、同市場において、同株券合計2,500株について、証券会社2社を介し、Bほか3名義で売り付けると同時に別途買い付け、もって権利の移転を目的としない仮装の売買をし、同株券の株価を1,047円から1,250円まで上昇させ

第2 同株券の売買を誘引する目的をもって、同年11月16日から同年12月7日までの間のうち、15取引日にわたり、同市場において、Cほか3名義で、証券会社3社を介し、連続した高指値注文を行って高値を買い上げるなどの方法により、同株券合計11万2,100株を買い付け、さらに、同期間中、3取引日にわたり、Dほか1名義で、証券会社2社を介し、前同様の方法により、同株券合計2,300株の買付けの委託を行い、もって同株券の売買が繁盛であると誤解させ、かつ、同市場における同株券の相場を変動させるべき一連の株券売買及びその委託をするとともに、同株券の売買が繁盛に行われていると他人に誤解させるなど同株券の売買の状況に関し他人に誤解を生じさせる目的をもって、同期間中、10取引日にわたり、同市場において、同株券合計3万2,000株について、証券会社3社を介し、Eほか3名義で売り付けると同時に別途買い付け、もって権利の移転を目的としない仮装の売買をし、同株券の株価を942円から1,300円まで上昇させ

第3 同株券の売買を誘引する目的をもって、同月22日から同月30日までの間、7取引日にわたり、同市場において、Fほか4名義で、証券会社3社を介し、連続した高指値注文を行って高値を買い上げるなどの方法により、同株券合計4万3,800株を買い付け、もって同株券の売買が繁盛であると誤解させ、かつ、同市場における同株券の相場を変動させるべき一連の株券売買をするとともに、同株券の売買が繁盛に行われていると他人に誤解させるなど同株券の売買の状況に関し他人に誤解を生じさせる目的をもって、同期間中、5取引日にわたり、同市場において、同株券合計1万1,100株について、証券会社3社を介し、Cほか4名義で売り付けると同時に別途買い付け、もって権利の移転を目的としない仮装の売買をし、さらに、同月24日、同市場において、同株券1万株について、証券会社1社を介し、C名義で売り付けると同時期に、これと同価格において、Gが、証券会社1社を介し、G名義で買い付けることをあらかじめ同人と通謀の上、当該売付けをし、同

株券の株価を1,200円から1,340円まで上昇させたものである。

【告発後の経緯】

令和6年2月14日、犯則嫌疑者が起訴され、現在、大阪地方裁判所において公判係属中である(同年3月31日現在)。

第1節

第2節

第3節

第4節

第5節

第6節

3-7

第8節

第9節

第10節

第11節

2. 過去の告発事案に係る判決等の概要

令和4年度までに告発した過去の告発事案について、令和5年4月から令和6年3月までに判決等が出されたものの概要は以下のとおりである。

(1) 東都水産株式会社株券に係る内部者取引事件

【令和4年12月1日告発、令和5年6月13日判決(函館地裁)】

令和5年6月13日、函館地方裁判所は、以下のような理由から、被告会社に罰金100万円、被告人に懲役1年6月(執行猶予3年)、東都水産株式会社の株式8,000株没収(被告会社及び被告人)の判決を言い渡し、同判決は確定した。

- ・ 被告人は、買い付けた株式を売却して利益を得るのを主目的としていたわけではないが、内部者であることを自覚しながら、軽率な判断で株式の買付けに及んでおり、このような意思決定については相応の非難を免れない。
- ・ 被告人の刑事責任は軽視できず、被告会社も相応の刑事責任を負うべきである。
- ・ 他方で、被告人が、本件発覚後、直ちに証券取引等監視委員会に自主申告した上、被告会社を含め関係各社の役員等から退いており、公判廷でも事実を認めて反省の弁を述べていること、被告会社及び被告人に前科前歴がないことなどの酌むべき事情も認められる。

(2) 総合メディカルホールディングス株式会社株券及び株式会社スペースバリューホールディングス株券に係る内部者取引事件

【令和5年3月3日告発、同年6月16日判決(東京地裁)】

令和5年6月16日、東京地方裁判所は、以下のような理由から、被告人に懲役2年(執行猶予3年)及び罰金200万円、追徴金3,604万9,300円の判決を言い渡し、同判決は確定した。

- ・ 被告人は、ばれることはないだろうなどと考えて、自ら第1の犯行(総合メディカルホールディングス株式会社株券に係る内部者取引)に及び、これが露見しなかったことから、再び規模を拡大して第2の犯行(株式会社スペースバリューホールディングス株券に係る内部者取引)に及んだものであるが、余りに安易な犯行といわざるを得ない。
- ・ 取引規模は小さくなく、金融商品市場の公正性・健全性やそれらに対する投資家の信頼を損なう犯行である。被告人の刑事責任は相応に重いといえる。
- ・ 他方で、被告人が犯行を認めて反省の態度を示しており、既に勤務先会社を解雇され、従前の地位を失っていること、前科はないことなどの酌むべき事情も認められる。

(3) テラ株式会社株式に係る偽計事件

【令和4年3月16日告発、令和5年10月6日判決(東京高裁)】

令和5年3月24日、東京地方裁判所は、被告人に懲役3年(執行猶予5年)の判決を言い渡したのに対し、被告人は控訴していた。

同年10月6日、東京高等裁判所は、原判決に法令適用の誤り、事実誤認及び量刑不当はないとして、控訴を棄却し、同判決は確定した。

(4) 株式会社ストリーム株券に係る相場操縦事件(2)

【平成29年11月27日告発、令和5年11月20日判決(最高裁)】

令和2年3月31日、東京地方裁判所は、被告人に懲役3年(執行猶予5年)及び罰金4,000万円、追徴金3億7,280万1,332円の判決を言い渡したのに対し、同被告人は控訴していた。

令和3年3月18日、東京高等裁判所は、原判決に事実誤認及び訴訟手続きの法令違反、追徴金に関する法令適用の誤りはないとして、同被告人の控訴を棄却した。

令和5年11月20日、最高裁判所は、上告趣意のうち、判例違反をいう点は、事案を異にする判例を引用するものであって、本件に適切でないか、実質は事実誤認の主張であり、その余は、憲法違反をいう点を含め、実質は単なる法令違反、事実誤認、量刑不当の主張であって、刑訴法405条の上告理由に当たらないとして、同被告人の上告を棄却し、同判決は確定した。

(5) 株式会社Aiming株券に係る内部者取引事件(1)

【令和4年12月6日告発、令和5年6月8日及び令和6年2月20日判決(東京地裁)】

東京地方裁判所は、以下の理由から、令和5年6月8日、被告人Aに懲役3年(執行猶予5年)及び罰金400万円、追徴金1億7,657万4,930円の判決を、また、令和6年2月20日、被告人Bに懲役2年6月(執行猶予4年)及び罰金300万円、追徴金5,855万9,300円の判決をそれぞれ言い渡し、両判決は確定した。(被告人Aについては、後記(7)の事件と併せて審理)

- ・ 被告人Aについて、取引規模は相当程度で、金融商品市場の公正性や健全性に対して悪影響を与えるものといえ、犯行態様は悪質である。
- ・ 被告人Aは、将来の生活に関する不安や友人との人間関係等から本件各犯行に及んだ旨述べるが、短絡的な犯行であって動機に酌むべき事情があるとはいえない。同種犯行を繰り返していることからみて責任非難の程度は重いというほかなく、被告人の刑事責任は軽視できない。
- ・ 他方で、被告人Aは事実を認めて反省の態度を示し二度とこのような犯罪を犯さない旨誓っていること、前科がないことなど、被告人Aに有利に考え得る事情がある。

- ・ 被告人Bについて、取引規模は相当程度に大きく、当該株券の売却により多額の利益を得ている。金融商品市場の公正性や健全性に対して与えた影響は軽視できず、悪質な犯行である。
- ・ 被告人Bは、生活に関する不安等から本件犯行に及んだ旨述べるが、自らも被告人Aに対して本件各重要事実に関する状況等を質問するなどしながら、インサイダー取引により利益を得ることを考えて本件犯行に及んでおり、その利欲的・短絡的な動機等に酌むべき点は見出せない。また、周囲の者に対しても本件各重要事実の公表前に本件上場会社の株取引を積極的に勧めるなどしており、金融商品市場の公正性等に対する意識が希薄であったといわざるを得ない。
- ・ 他方で、被告人Bは事実を認め、反省の言葉を述べていることや、前科前歴がないこと等の事情も認められる。

(6) 株式会社Aiming株券に係る内部者取引事件(2)

【令和4年12月6日告発、令和5年7月7日判決(東京地裁)、同年12月19日判決(東京高裁)】

令和5年7月7日、東京地方裁判所は、以下のような理由から、被告人に懲役2年6月(執行猶予4年)及び罰金200万円、追徴金1億7,122万9,870円の判決を言い渡した。(後記(8)の事件と併せて審理)

- ・ 被告人は、進行中のゲームの共同開発に関する情報にアクセスできる権限を与えられていたところ、被告人はその権限を利用して重要事実に関する情報を閲覧し、その後それぞれの株式の買付けを行ったというのであって、これは株式市場の公正性や健全性ひいては投資家の信頼を損なうものであり、その買付け規模に照らしても犯行態様は悪質である。
- ・ 被告人が上記情報を閲覧した状況や、その後株式の買付けを行うに至った経緯において、自ら積極的に関係資料の閲覧をしていることなどからすれば、特に酌むべき事情があったとは認められない。
- ・ 他方で、被告人が事実を認め、市場の公正性や健全性を損なう行為を行ったことについては反省していると述べていること、前科がないことなどの酌むべき事情も認められる。

これに対し、同被告人は控訴し、同年12月19日、東京高等裁判所は、原判決に量刑不当はないとして、同被告人の控訴を棄却した。

なお、同被告人は上告し、最高裁判所において公判係属中である(令和6年3月31日現在)。

(7) 株式会社エイチーム株券に係る内部者取引事件(1)

【令和4年12月26日告発、令和5年6月8日判決(東京地裁)】

令和5年6月8日、東京地方裁判所は、以下のような理由から、被告人に懲役3年(執行猶予5年)及び罰金400万円、追徴金1億7,657万4,930円の判決を言い渡し、同判決は確定した。(前記(5)の事件と併せて審理)

- ・ 取引規模は相当程度で、金融商品市場の公正性や健全性に対して悪影響を与えるものといえ、犯行態様は悪質である。
- ・ 被告人は、将来の生活に関する不安や友人との人間関係等から本件各犯行に及んだ旨述べるが、短絡的な犯行であって動機に酌むべき事情があるとはいえない。同種犯行を繰り返していることからみて責任非難の程度は重いというほかなく、被告人の刑事責任は軽視できない。
- ・ 他方で、被告人は事実を認めて反省の態度を示し二度とこのような犯罪を犯さない旨誓っていること、前科がないことなど、被告人に有利に考え得る事情がある。

(8) 株式会社エイチーム株券に係る内部者取引事件(2)

【令和4年12月26日告発、令和5年7月7日判決(東京地裁)、同年12月19日判決(東京高裁)】

前記(6)の事件と併せて審理され、最高裁判所において公判係属中である(令和6年3月31日現在)。

第1節

第2節

第3節

第4節

第5節

第6節

3-7

第8節

第9節

第10節

第11節

3. 告発実施状況

(1) 告発件数等一覧表

年度 区分	平成4～30	令和元	令和2	令和3	令和4	令和5	合計
告発 件数	200	3	2	8	8	4	225
告発 人数	560	9	3	24	17	11	624

(2) 告発事件の概要一覧表(平成29年11月～令和6年3月)

事件	告発 年月日	関係条文	事件の概要	判決
191	平成29年 11月27日	金商法第 159条第1 項第1号等 (相場操縦)	<p>㈱ストリーム株券の株価の高値形成を 図ろうと企て、連続した買い上がり買付 け及び下値支え買い注文等の方法で株 価の変動操作を行うとともに、仮装売買 及び馴合売買を行った。</p> <p>(嫌疑者)会社役員(2名) 無職 投資業</p>	<p>令和2年3月31日(東京地裁) 会社役員 懲役3年(執行猶予5年) 罰金4,000万円 追徴金3億7,280万1,332円</p> <p>令和3年3月18日(東京高裁) 会社役員 控訴棄却</p> <p>令和5年11月20日(最高裁) 会社役員 上告棄却 (確定)</p>
192	平成30年 1月25日	金商法第 166条第1 項第1号等 (内部者取引)	<p>東芝テック㈱が特別損失を計上すること により業務遂行の過程で生じた損害が 発生した旨の同社の業務等に関する重 要事実を知り、同事実の公表前に、同 社株券を売り付けた。</p> <p>(嫌疑者)当該会社社員 医師</p>	<p>平成30年6月8日(東京地裁) 当該会社社員 懲役2年(執行猶予4年) 罰金200万円 医師 懲役1年6月 (執行猶予3年) 罰金200万円 上記被告人2名から連帯して追徴金7,178 万円 (いずれも確定)</p>
193	平成30年 6月18日	金商法第 166条第1 項第1号 同法第167 条の2第1 項等 (内部者取引)	<p>スミダコーポレーション㈱が1株あたりの 期末配当額を従前の予想値よりも増額 する旨の同社の業務等に関する重要事 実を知り、同事実の公表前に同社株券 を買い付けるとともに、利益を得させる 目的をもって関係者に取引を推奨し、関 係者が同社株券を買い付けた。</p> <p>(嫌疑者)当該会社社外取締役</p>	<p>平成30年11月6日(東京地裁) 懲役2年6月(執行猶予5年) 罰金200万円 追徴金1億540万300円 (確定)</p>

事件	告発年月日	関係条文	事件の概要	判決
194	平成30年10月30日	金商法第167条第1項第6号 同法第167条の2第2項等 (内部者取引)	(株)アサツーディ・ケイ株券について、公開買付けの実施に関する事実を知り、同事実の公表前に同社株券を買い付けるとともに、利益を得させる目的をもって知人に取引を推奨し、さらに、同事実を伝達し、知人が同事実の公表前に同社株券を買い付けた。 (嫌疑者)当該会社執行役員	平成31年2月27日(東京地裁) 懲役2年(執行猶予4年) 罰金200万円 追徴金9,612万1,000円 令和元年9月12日(東京高裁) 控訴棄却 令和2年3月30日(最高裁) 上告棄却 (確定)
195	平成30年11月13日	金商法第166条第1項第1号等 (内部者取引)	(株)ロジコム株券について、第三者割当増資を行うことを決定した旨及び(株)ダヴィンチ・ホールディングスとの業務提携を実施する旨の同社の業務等に関する重要事実を知り、同事実の公表前に同社株券を買い付けた。 (嫌疑者)当該会社代表取締役	平成31年2月26日(東京地裁) 懲役2年6月(執行猶予4年) 罰金200万円 当該会社株券1万8,600株没収 追徴金2,547万円 (確定)
196	平成30年11月13日	金商法第167条の2第1項 同法第166条第3項等 (内部者取引)	(株)ロジコム株券について、第三者割当増資を行うことを決定した旨及び(株)ダヴィンチ・ホールディングスとの業務提携を実施する旨の同社の業務等に関する重要事実を知り、同事実の公表前に利益を得させる目的をもって同事実を伝達し、伝達を受けた者が同社株券を買い付けた。 (嫌疑者)当該会社社外取締役 会社役員	令和元年7月26日(東京地裁) 当該会社社外取締役 懲役1年6月(執行猶予3年) 会社役員 懲役1年6月(執行猶予3年) 罰金200万円 当該会社株券1万2,000株没収 追徴金1,715万5,000円 (いずれも確定)
197	平成30年12月10日	金商法第197条第1項第1号等 (虚偽の有価証券報告書の提出)	日産自動車(株)は、役員が受ける報酬等の対価の一部を隠ぺいして、実際よりも少ない額を「役員ごとの連結報酬等の総額等」欄に記載し、重要な事項につき虚偽のある有価証券報告書を提出した。 (嫌疑者)当該会社 当該会社代表取締役会長 当該会社代表取締役	令和4年3月3日(東京地裁) 当該会社 罰金2億円 (確定) 当該会社代表取締役 懲役6月(執行猶予3年) 公判係属中(東京高裁)

第1節

第2節

第3節

第4節

第5節

第6節

3-7

第8節

第9節

第10節

第11節

事件	告発年月日	関係条文	事件の概要	判決
第1節 第2節 第3節 第4節	198 平成30年 12月18日	金商法第167条第3項 同法第167条の2第2項等 (内部者取引)	(株)ダルトン株券について、公開買付けの実施に関する事実の伝達を受け、同事実の公表前に、利益を得させる目的をもって同事実を伝達し、伝達を受けた者が同社株券を買い付けた。 (嫌疑者)無職 証券会社社員	令和元年5月13日(大阪地裁) 無職 懲役2年(執行猶予3年) 罰金200万円 追徴金6,866万7,500円 令和2年6月8日(大阪地裁) 証券会社社員 懲役2年(執行猶予3年) 罰金200万円 令和2年12月18日(大阪高裁) 証券会社社員 控訴棄却 令和4年2月25日(最高裁) 証券会社社員 上告棄却 (いずれも確定)
第5節 第6節	199 平成31年 1月10日	金商法第197条第1項第1号等 (虚偽の有価証券報告書の提出)	日産自動車(株)は、役員が受ける報酬等の対価の一部を隠ぺいして、実際よりも少ない額を「役員ごとの連結報酬等の総額等」欄に記載し、重要な事項につき虚偽のある有価証券報告書を提出した。 (嫌疑者)当該会社 当該会社代表取締役会長 当該会社代表取締役	令和4年3月3日(東京地裁) 当該会社 罰金2億円 (確定) 当該会社代表取締役 懲役6月(執行猶予3年) 公判係属中(東京高裁)
3-7 第8節 第9節 第10節 第11節	200 平成31年 3月20日	金商法第197条第1項第1号等 (虚偽の有価証券報告書の提出)	(株)ソルガム・ジャパン・ホールディングスは、営業キャッシュ・フローを黒字に偽装する方法により、虚偽の記載のある連結キャッシュ・フロー計算書を掲載した有価証券報告書を提出した。 (嫌疑者)当該会社 当該会社実質的経営者 当該会社代表取締役 当該会社取締役管理部長	令和元年8月6日(東京地裁) 当該会社 罰金1,000万円 当該会社実質的経営者 懲役2年(執行猶予3年) 当該会社代表取締役 懲役1年6月(執行猶予3年) 当該会社取締役管理部長 懲役1年6月(執行猶予3年) (いずれも確定)
	201 令和元年 7月9日	金商法第39条第1項第2号等 (損失補填)	東郷証券(株)は、取引所為替証拠金取引について生じた顧客の損失を、和解契約による現金の提供等により損失補填した。 (嫌疑者)当該会社 当該会社取締役(当該会社実質的経営者) 当該会社代表取締役管理本部長 当該会社顧問	令和2年2月12日(東京地裁) 当該会社取締役 懲役3年(執行猶予5年) 当該会社顧問 懲役1年6月(執行猶予3年) 令和2年3月30日(東京地裁) 当該会社 罰金3,000万円 当該会社代表取締役管理本部長 懲役1年2月(執行猶予3年) (いずれも確定)

事件	告発年月日	関係条文	事件の概要	判決
202	令和元年 8月13日	金商法第 197条第1 項第1号等 (虚偽の有 価証券報告 書の提出)	すてきナイスグループ(株)は、架空売上を計上する方法により、虚偽の記載のある連結損益計算書を掲載した有価証券報告書を提出した。 (嫌疑者)当該会社 当該会社代表取締役会長 当該会社代表取締役社長	令和3年3月12日(横浜地裁) 当該会社 罰金1,000万円 (確定) 当該会社代表取締役会長 懲役2年6月(執行猶予4年) 当該会社社代表取締役社長 懲役1年6月(執行猶予3年) 令和4年12月1日(東京高裁) いずれも原判決破棄 横浜地裁に差戻し いずれも公判係属中(横浜地裁)
203	令和元年 11月1日	金商法第 167の2第1 項 同法第167 条第3項等 (内部者取引)	(株)パルマ株券について、同社の発行する株式を引き受ける者の募集を行うことについての決定をした旨の同社の業務等に関する重要事実を知り、同事実の公表前に利益を得させる目的をもって同事実を伝達し、伝達を受けた者が同社株券を買付けた。 (嫌疑者)当該会社管理部次長 会社員	令和2年2月27日(東京地裁) 当該会社管理部次長 懲役1年6月(執行猶予3年) 会社員 懲役1年6月(執行猶予3年) 罰金200万円 当該会社 株券4,800株没収 追徴金1,503万円 (いずれも確定)
204	令和2年 12月22日	金商法第 167の2第1 項 等 (取引推奨)	(株)ドンキホーテホールディングス株券について、公開買付けを行うことについての決定をした旨及び同社が子会社の異動を伴うユニー株式会社の株券を取得することについての決定をした旨の重要事実を知り、同事実の公表前に利益を得させる目的をもって知人に取引を推奨し、知人が同事実の公表前に同社株券を買付けた。 (嫌疑者)当該会社代表取締役	令和3年4月27日(東京地裁) 当該会社代表取締役 懲役2年(執行猶予4年) (確定)
205	令和3年 3月26日	金商法第 159条第3 項等 (安定操作)	(株)ニチダイ株券の株価を信用取引に係る委託保証金の率の引上げ等の措置が解除あるいは回避される価格以下に維持しようと企て、大量の売り注文を入れて上値を抑えるなどにより違法な安定操作を行った。 (嫌疑者)会社役員(2名)	令和4年4月22日(大阪地裁) 会社役員 懲役1年6月(執行猶予3年) 罰金500万円 追徴金1億8,657万5,600円 (確定)

第1節

第2節

第3節

第4節

第5節

第6節

3-7

第8節

第9節

第10節

第11節

事件	告発年月日	関係条文	事件の概要	判決
206	令和3年6月30日	金商法第167条の2第1項 同法第166条第3項等 (内部者取引)	ジェイリース㈱の業務提携交渉先の会社役員がジェイリース㈱と他社の業務提携に係る重要事実を当該交渉に関して知り、利益を得させる目的をもって、その公表前に知人に伝達し、当該知人がその公表前に同社株券を買付けた。 (嫌疑者)会社役員 会社員	令和4年3月25日(福岡地裁) 会社役員 懲役2年(執行猶予4年) 会社員 懲役2年6月(執行猶予4年) 罰金300万円 追徴金4,680万2,200円 令和4年9月2日(福岡高裁) 会社役員 控訴棄却 会社員 控訴棄却 令和4年12月28日(最高裁) 会社役員 上告棄却 会社員 上告棄却 (いずれも確定)
207	令和3年7月12日	金商法第158条等 (偽計)	㈱Nutsの実質的経営者らが、同社の株価の維持上昇を図り、その発行した新株予約権の行使促進等のため、同社の売上高を偽装した上、売上高について虚偽の事実を公表した。 (嫌疑者)当該会社 会社役員 当該会社代表取締役 金融コンサルタント 会社員	令和3年11月30日(東京地裁) 当該会社代表取締役 懲役2年(執行猶予3年) 令和3年12月7日(東京地裁) 会社役員 懲役2年2月(執行猶予3年) 会社員 懲役2年(執行猶予3年) 令和3年12月22日(東京地裁) 金融コンサルタント 懲役2年(執行猶予3年) (いずれも確定)
208	令和4年2月14日	金商法第166条第1項第1号等 (内部者取引)	アサヒ衛陶㈱の代表取締役社長が、同社の業務提携に係る重要事実を知り、同重要事実を伝達した上で、その公表前に伝達を受けた者と共謀して同社株券を買付けるとともに、伝達を受けた者が、自己名義等でも、その公表前に同社株券を買付けた。 (嫌疑者)当該会社代表取締役社長 ホライズン㈱ 上中商事㈱ 同社代表取締役	令和4年9月15日(大阪地裁) ホライズン㈱ 罰金300万円 追徴金4,498万5,000円 (上中商事㈱代表取締役と連帯) 上中商事㈱ 罰金300万円 追徴金3,649万1,000円 (同社代表取締役と連帯) 同社代表取締役 懲役2年(執行猶予3年) 罰金200万円 追徴金1億3,153万2,000円 (うち4,498万5,000円をホライズン㈱と連帯し、うち3,649万1,000円を上中商事㈱と連帯) 令和4年10月6日(大阪地裁) 当該会社代表取締役社長 懲役2年(執行猶予3年) 罰金200万円 追徴金1,039万4,000円 (いずれも確定)

事件	告発年月日	関係条文	事件の概要	判決
209	令和4年 2月24日	金 商 法 第 166 条 第 3 項等 (内部者取引)	テラ(株)が新型コロナウイルス感染症の 治療法の開発研究に係る業務提携をす る旨の重要事実の伝達を受けた者が、 その公表前に、テラ(株)の株券を買い付 けた。 (嫌疑者)会社役員	令和4年7月7日(東京地裁) 会社役員 懲役1年6月(執行猶予3年) 罰金200万円 預託金債権のうち416万3,504円没収 追徴金672万3,746円 (確定)
210	令和4年 2月24日	金 商 法 第 166 条 第 3 項等 (内部者取引)	テラ(株)が新型コロナウイルス感染症の 治療法の開発研究に係る業務提携をす る旨の重要事実の伝達を受けた者が、 その公表前に、テラ(株)の株券を買い付 けた。 (嫌疑者)会社役員	令和4年9月9日(東京地裁) 会社役員 懲役2年6月(執行猶予4年) 罰金200万円 追徴金5,627万8,200円 (確定)
211	令和4年 2月24日	金 商 法 第 166 条 第 3 項等 (内部者取引)	テラ(株)における新型コロナウイルス感染 症の治療法の開発に関する重要事実 の伝達を受けた者が、その公表前に、 テラ(株)の株券を買い付けた。 (嫌疑者)内田建設(株) 同社代表取締役	令和4年7月4日(東京地裁) 内田建設(株) 罰金100万円 同社代表取締役 懲役1年6月(執行猶予3年) 罰金100万円 上記被告人2名から以下を没収 当該会社株式23株 預託金返還請求権のうち102万6,230円 上記被告人2名から連帯して 追徴金2,524万2,710円 (いずれも確定)
212	令和4年 3月16日	金 商 法 第 158条等 (偽計)	テラ(株)の第三者割当増資の割当予定先 会社の取締役が、当該増資に関し、払 込みに要する資金を調達できる具体的 な見込みがないにもかかわらず、他の 会社からの借入による資金調達が可能 である旨装い、これを信じたテラ(株)をし て、虚偽の内容を含む公表を行わせた。 (嫌疑者)割当先取締役	令和5年3月24日(東京地裁) 割当先取締役 懲役3年(執行猶予5年) 令和5年10月6日(東京高裁) 割当先取締役 控訴棄却 (確定)

第
1
節

第
2
節

第
3
節

第
4
節

第
5
節

第
6
節

3-7

第
8
節

第
9
節

第
10
節

第
11
節

事件	告発年月日	関係条文	事件の概要	判決
213	令和4年 3月23日	金商法第 159条第3 項等 (安定操作)	SMBC日興証券(株)が扱う「ブロックオフ ー」取引において、売買価格の基準とな る取引当日の終値等が前日の終値に 比して大幅に下落することを回避するた め、違法な安定操作に該当する株式の 売買等を行った。 (嫌疑者)当該証券会社 当該証券会社本部長 当該証券会社副本部長(2名) 当該証券会社社員(4名)	令和5年2月13日(東京地裁) 当該証券会社 罰金7億円 追徴金44億7,114万2,420円 (注)214号事件と一括審理 当該証券会社副本部長(1名) 懲役1年6月(執行猶予3年) (いずれも確定) 当該証券会社本部長 当該証券会社副本部長(1名) 当該証券会社社員(2名) いずれも公判係属中(東京地裁)
214	令和4年 4月12日	金商法第 159条第3 項等 (安定操作)	SMBC日興証券(株)が扱う「ブロックオフ ー」取引において、売買価格の基準とな る取引当日の終値等が前日の終値に 比して大幅に下落することを回避するた め、違法な安定操作に該当する株式の 売買等を行った。 (嫌疑者)当該証券会社 当該証券会社副社長 当該証券会社社員(3名)	令和5年2月13日(東京地裁) 当該証券会社 罰金7億円 追徴金44億7,114万2,420円 (注)213号事件と一括審理 (確定) 当該証券会社副社長 当該証券会社社員(1名) いずれも公判係属中(東京地裁)
215	令和4年 6月3日	金商法第 167条の2 第2項 同法第167 条第1項等 (内部者取引)	ソフトブレイン(株)の株券について、公開 買付けの実施に関する事実を知り、同 事実の公表前に、知人らに、利益を得さ せる目的をもって、同事実を伝達し、伝 達を受けた当該知人らが、その公表前 に同社株券を買い付けたほか、別の知 人と共謀の上、その公表前に同社株券 を買い付けた。 (嫌疑者)当該会社内部監査室長 会社役員 接客業 税理士	令和4年6月22日(東京簡裁) 接客業 罰金100万円 追徴金884万3,400円 (略式命令) 令和4年10月24日(東京地裁) 税理士 懲役1年6月(執行猶予3年) 追徴金1,212万8,485円 令和4年12月9日(東京地裁) 当該会社内部監査室長 懲役3年(執行猶予4年) 罰金300万円 追徴金3,225万2,400円 令和4年12月27日(東京地裁) 会社役員 懲役2年(執行猶予3年) 罰金200万円 追徴金1,738万円 (いずれも確定)

事件	告発年月日	関係条文	事件の概要	判決
216	令和4年 12月1日	金商法第 167条第1 項 同法第167 条の2第2 項等 (内部者取引)	東都水産(株)の社外取締役が、公開買付けの実施に関する事実を知り、同事実の公表前に、同社株券を買い付けるとともに、利益を得させる目的をもって、その公表前に知人に同事実を伝達し、伝達を受けた当該知人が、その公表前に同社株券を買い付けた。 (嫌疑者)三印三浦水産(株) 同社代表取締役専務(当該会社社外取締役)	令和5年6月13日(函館地裁) 三印三浦水産(株) 罰金100万円 同社代表取締役専務 懲役1年6月(執行猶予3年) 上記被告人2名から以下を没収 当該会社株式8,000株 (いずれも確定)
217	令和4年 12月6日	金商法第 166条第1 項 同法第167 条の2第1 項等 (内部者取引)	(株)Aimingの運営、業務又は財産に関する重要な事実であって投資者の投資判断に著しい影響を及ぼす重要事実等を知り、同重要事実等の公表前に、同社株券を買い付けるとともに、利益を得させる目的をもって、その公表前に知人に同重要事実等を伝達し、伝達を受けた当該知人が、その公表前に同社株券を買い付けた。 (嫌疑者)会社員 当該会社員の知人	令和5年6月8日(東京地裁) 会社員 懲役3年(執行猶予5年) 罰金400万円 追徴金1億7,657万4,930円 (注)219号事件と一括審理 令和6年2月20日(東京地裁) 当該会社員の知人 懲役2年6月(執行猶予4年) 罰金300万円 追徴金5,855万9,300円 (いずれも確定)
218	令和4年 12月6日	金商法第 166条第1 項第5号等 (内部者取引)	(株)Aimingの運営、業務又は財産に関する重要な事実であって投資者の投資判断に著しい影響を及ぼす重要事実等を知り、同重要事実等の公表前に、同社株券を買い付けた。 (嫌疑者)会社員	令和5年7月7日(東京地裁) 会社員 懲役2年6月(執行猶予4年) 罰金200万円 追徴金1億7,122万9,870円 令和5年12月19日(東京高裁) 会社員 控訴棄却 公判係属中(最高裁) (注)220号事件と一括審理
219	令和4年 12月26日	金商法第 166条第1 項 同法第167 条の2第1 項等 (内部者取引)	(株)エイチームの運営、業務又は財産に関する重要な事実であって投資者の投資判断に著しい影響を及ぼす重要事実等を知り、同重要事実等の公表前に、同社株券を買い付けるとともに、利益を得させる目的をもって、その公表前に知人に同重要事実等を伝達し、伝達を受けた当該知人が、その公表前に同社株券を買い付けた。 (嫌疑者)会社員	令和5年6月8日(東京地裁) 会社員 懲役3年(執行猶予5年) 罰金400万円 追徴金1億7,657万4,930円 (注)217号事件と一括審理 (確定)

第1節

第2節

第3節

第4節

第5節

第6節

3-7

第8節

第9節

第10節

第11節

事件	告発年月日	関係条文	事件の概要	判決
220	令和4年12月26日	金商法第166条第1項第5号等(内部者取引)	(株)エイチームの運営、業務又は財産に関する重要な事実であって投資者の投資判断に著しい影響を及ぼす重要事実等を知り、同重要事実等の公表前に、同社株券を買い付けた。 (嫌疑者)会社員	令和5年7月7日(東京地裁) 会社員 懲役2年6月(執行猶予4年) 罰金200万円 追徴金1億7,122万9,870円 令和5年12月19日(東京高裁) 会社員 控訴棄却 公判係属中(最高裁) (注)218号事件と一括審理
221	令和5年3月3日	金商法第167条第1項第1号等(内部者取引)	総合メディカルホールディングス(株)株券及び(株)スペースバリューホールディングス株券に係る公開買付けの実施に関する事実を知り、同事実の公表前に同社株券を買い付けた。 (嫌疑者)会社員	令和5年6月16日(東京地裁) 会社員 懲役2年(執行猶予3年) 罰金200万円 追徴金3,604万9,300円 (確定)
222	令和5年6月6日	金商法第167条の2第1項等(取引推奨)	(株)アイ・アールジャパンホールディングスの連結業績予想値の下方修正の事実を職務に関し知り、あらかじめ同社の株券を売り付けさせて損失の発生を回避させる目的をもって、その事実の公表前に、2名に対し、同社の株券の売付けを勧めた。 (嫌疑者)会社役員	令和5年10月5日(東京地裁) 会社役員 懲役1年6月(執行猶予3年) (確定)
223	令和5年10月31日	金商法第197条第1項第1号等(虚偽の有価証券報告書の提出)	(株)プロルート丸光は、営業損益等が赤字であったにもかかわらず、架空売上を計上する方法により、黒字であったなどと記載した虚偽の連結損益計算書を掲載した有価証券報告書を提出した。 (嫌疑者)当該会社 会社役員(5名)	公判係属中(東京地裁)
224	令和5年11月20日	金商法第158条等(風説の流布、偽計)	筆頭株主法人の代表者らが、(株)プロルート丸光の株価の上昇を図る目的をもって、虚偽の内容を含む株式交換契約締結に関する公表を行わせた。 (嫌疑者)会社役員(3名)	公判係属中(東京地裁)

事件	告発 年月日	関係条文	事件の概要	判決
225	令和6年 2月13日	金商法第 159条第1 項第1号等 (相場操縦)	(株)ニチリヨク株券の株価の高値形成を 図ろうと企て、多数の異名義口座を用い て、多数回にわたる仮装売買のほか、 馴合売買を行い、また、多数回にわたる 買い上がり買付けなどを行った。 (嫌疑者)コンサルタント業	公判係属中(大阪地裁)

※関係条文、肩書きは、犯則行為時点のもの。

第1節

第2節

第3節

第4節

第5節

第6節

3-7

第8節

第9節

第10節

第11節

3-8 建議実施状況等

1. 建議実施状況一覧表

(単位:件)

年度	平成 4～30	令和 元	令和 2	令和 3	令和 4	令和 5	合計
件数	26	0	0	0	1	0	27

2. 建議案件の概要一覧表

建議 年月日	建議の内容	措置の状況
平成6年 6月14日	重要な事項につき虚偽記載のある有価証券報告書の提出の嫌疑に係る犯則事件の調査の結果、店頭売買有価証券の登録審査について問題点が認められたので、日本証券業協会の店頭売買有価証券の登録に関する規則等について、会員証券会社等による厳正かつ深度ある登録審査を確保し、投資者保護に十全を期する観点から、必要かつ適切な措置を講ずるよう建議した。	日本証券業協会は、登録審査に関し、①証券会社と公認会計士等との十分な連携、②審査項目の見直し、③申請会員と協会の連携等の改善策を講じている。
平成9年 12月24日	大手証券会社による損失補てん事件について、犯則事件の調査等を行った結果、法令遵守のための内部管理に関して問題点が認められたので、委託注文と自己の計算による取引の区分の制度化等、法令遵守のための内部管理体制の充実・強化の観点から、必要かつ適切な措置を講ずるよう建議した。	各証券取引所では、株式の売買等について、証券会社に対して自己・委託の別の入力を義務付ける措置を講じ、実施済である。
平成11年 12月21日	日本長期信用銀行及び日本債券信用銀行の有価証券報告書の虚偽記載に関し、犯則事件の調査を行った結果、銀行が提出する財務諸表について問題点が認められたので、銀行・信託業等における担保資産の開示、関連当事者との取引の十分な開示の観点から、必要かつ適切な措置を講ずるよう建議した。	大蔵省は、ガイドラインを改正し、銀行業等を営む会社の財務諸表における担保資産の注記を義務付けるとともに、全銀協等は、会員に関連当事者との取引の開示を徹底することを通知した。
平成12年 3月24日	証券会社の検査を行った結果、証券投資信託の償還乗換えの際の優遇措置の未利用取引、同一外貨建て商品間の売買に係る不適正な取扱いという営業姿勢に関する問題点が認められたので、顧客に対する誠実かつ公正な業務の執行の観点から、必要かつ適切な措置を講ずるよう建議した。	金融監督庁は、日本証券業協会に対し会員に不適正な投資勧誘について周知・指導の徹底を要請する旨の文書を発出するとともに、財務局ほか関係先にも通知した。

<p>平成15年 4月22日</p>	<p>証券会社の検査を行った結果、①発行会社の既発債の市場における流通利回りが大幅に上昇している状況下における普通社債の個人投資家向けの募集の取扱い、②対象株式の株価が大幅に下落している状況下における他社株券償還特約付社債券の個人投資家向けの売出しに関して証券会社の営業姿勢に問題点が認められたので、これらを取得する個人投資家を保護するためのルールの整備を建議した。</p>	<p>金融庁は、行為規制府令を改正し、証券会社の業務の状況につき是正を加えることが必要な場合として、「募集期間中または売出期間中に生じた投資判断に影響を及ぼす重要な事象について、個人の顧客に対して説明を行っていない状況」を追加するとともに、事務ガイドラインに具体的なケースを規定した。</p>
<p>平成15年 6月30日</p>	<p>証券会社の検査を行った結果、インターネット取引を取り扱う複数の証券会社の検査において、①証券会社が、インターネット取引において、不十分な売買審査体制の下で、買い上がり買付けと自己対当取引を繰り返す等の作為的相場形成となる顧客の注文を継続的に受託している行為、②証券会社が、インターネット取引において、個人顧客が空売りの価格規制を潜脱する目的で行ったと認められる短時間に連続する複数回の信用売り注文を受託し、これを発注している行為、③証券会社が、インターネット取引において、顧客の注文が本人になりすましている疑いがある取引であるにもかかわらず、これを受託している行為が認められたので、市場の公正性を確保するため、インターネット取引を取り扱う証券会社の売買審査体制や顧客管理体制の適正性を確保させるための適切な措置を講ずるよう建議した。</p>	<p>金融庁は、行為規制府令を改正し、証券会社の業務の状況につき是正を加えることが必要な場合として、「実勢を反映しない作為的相場を形成させるべき一連の有価証券の売買取引の受託等に関して、当該取引を防止するための売買管理が十分でない」と認められる状況」を追加するとともに、この「売買管理」について事務ガイドラインに具体的に規定した。また、顧客による空売り規制の潜脱行為を防止するための管理の徹底や、本人確認の徹底についても事務ガイドラインに具体的に規定した。</p>
<p>平成15年 12月16日</p>	<p>証券会社の検査を行った結果、①証券会社が、当該証券会社に所属しないアナリストとの間で、投資者への勧誘等に際し使用するためのアナリスト・レポートの作成に係る契約を締結したが、当該アナリストは、当該契約に基づき作成する個別の発行体に関するアナリスト・レポートに、当該発行体に係る株式について新規に買い推奨を示すレーティングを付した場合に、同レポートの投資者への公表前に当該株式の買付けを行い、公表後に売付けを行うといった行為を繰り返しており、証券会社のアナリスト・レポート及びアナリストに係る管理が十分なものとは認められない状況、②証券会社が、情報提供会社に対し、銘柄を指定した上、対価を支払ってアナリスト・レポートの作成を依頼したが、同レポートがそのような事情の下で作成されたことを同レポートに表示することなく投資者に対し公表している状況が認められたので、投資者保護及び市場の公正性、透明性を高める観点から、アナリスト・レポート及びこれを作成したアナリストに</p>	<p>日本証券業協会は、「アナリスト・レポートの取扱い等について」(理事会決議)を改正し、証券会社が、契約等に基づき外部アナリストが執筆したアナリスト・レポートを使用する場合には、外部アナリストの有価証券の売買等に関し、外部アナリストの公正かつ適正な業務の遂行が確保されるための措置が講じられていることの確認や、対価の支払い又は銘柄の指定等をして外部アナリストにアナリスト・レポートの作成を依頼した場合には、そ</p>

第1節
第2節
第3節
第4節
第5節
第6節
第7節
3-8
第9節
第10節
第11節

	<p>対する適切な管理体制を構築させるため必要かつ適切な措置を講ずるよう建議した。</p>	<p>の旨を顧客に通知又はアナリスト・レポートに表示することなどを追加した。</p>
<p>第1節 第2節 第3節 第4節 第5節</p>	<p>平成17年11月29日</p> <p>相場操縦の一手法として、市場の株価を誘導するために、約定させる意思がないにもかかわらず、市場に注文を出して売買を申込み、約定する前に取り消す、いわゆる「見せ玉」等が認められた。</p> <p>相場操縦の禁止について規定する証取法第159条第2項第1号は、顧客による「見せ玉」等売買の申込み行為を規制の対象としているが、相場操縦に対する課徴金について規定する同法第174条は、売買等が成立している取引のみを規制の対象としており、「見せ玉」等売買の申込み行為は売買等が成立していないことから、課徴金制度が適用されない。したがって、相場操縦等の不公正取引規制の実効性を確保するための課徴金制度においても「見せ玉」等売買の申込み行為を適用対象とするよう建議した。</p>	<p>取引誘引目的で行われる証券会社への売買等の委託(媒介、取次ぎ又は代理の申込み)の内、売買等が成立していないもの(いわゆる「見せ玉」等)についても、新たに課徴金の対象とすることを内容とする改正が盛り込まれた「証券取引法等の一部を改正する法律」が平成18年6月7日成立した(同法の当該部分は同年7月4日から施行された。)</p>
<p>第6節 第7節 3-8 第9節</p>	<p>平成17年11月29日</p> <p>証券会社の顧客が「見せ玉」等売買の申込み行為を行った場合、証取法第159条第2項第1号にいう売買等の委託に該当し、処罰の対象となるにもかかわらず、証券取引所の取引参加者である証券会社が自己の計算で「見せ玉」等売買の申込み行為を行った場合には、売買等にも売買等の委託にも該当しないことから、同号による禁止の対象とされていない。</p> <p>「見せ玉」等売買の申込み行為による相場操縦につき、証券会社とその顧客において、当罰性には何ら差異がないことから、証券会社の自己の計算における「見せ玉」等売買の申込み行為をも、同号における禁止規定の対象とするとともに、同法第197条第1項第7号において規定する刑事罰の対象とし、併せて同法第174条に規定する課徴金の対象にもするよう建議した。</p>	<p>取引誘引目的で行われる証券会社の自己の計算による「見せ玉」等売買の申込みについて、新たに相場操縦行為として禁止するとともに、刑事罰及び課徴金の対象とすることを内容とする改正が盛り込まれた「証券取引法等の一部を改正する法律」が平成18年6月7日成立した(同法の当該部分は同年7月4日から施行された。)</p>
<p>第10節 第11節</p>	<p>平成17年11月29日</p> <p>金融審議会金融分科会第一部会(中間整理)によると、業務範囲に関して、「投資サービス法においては、本来業務として、投資商品として位置付けられる幅広い金融商品に係る販売・勧誘やこれに関する資産運用・助言、資産管理を、一体として規制すべきである。この際、現行法の下においては、例えば、現在、証券業と証券投資一任業を兼業するためには、証券業の登録、投資顧問業との兼業の届出、投資助言業の登録、一任の認可、証券業との兼業の認可といった手続が必要となるほか、兼業に伴う弊害防止措置についても証取法と投資顧問業法にそれぞれ規定が置かれているなど、縦割りの法律が健全な兼業を妨げているといった指摘があることに留意が必要である。」と指摘されている。</p> <p>当委員会による証券会社に対する検査の結果を踏まえると、現在も、取引一任勘定取引により顧客が不当な手数料の支払いを強いられるような状況が散見されるところである。このため、投資サービス法における業務範囲の見直しに当たって、幅広い金融商品に係る販売・勧誘やこれに関する資産運用・助言、資産管理を一体として規制することと</p>	<p>投資一任契約に係る業務に関する各種行為規制、証券業と投資一任契約に係る業務を同時に行うことに関する弊害防止措置など、所要の規制を課すことを内容とする改正が盛り込まれた「証券取引法等の一部を改正する法律」が平成18年6月7日成立した(同法の当該部分は平成19年9月30日から施行された。)</p>

	<p>なり、それに伴い取引一任勘定取引契約の禁止の扱いも見直される場合には、投資者保護に支障を来たさないよう証券会社が顧客の利益を損なうことを防止するため、現行の投資顧問業法における投資一任契約に係る規制も踏まえ、必要かつ適切な措置を講ずるよう建議した。</p>	
<p>平成18年 4月14日</p>	<p>上場会社が株式や新株予約権付社債(以下「株式等」という。)を発行しようとする際、主幹事証券会社又はその関連会社が、発行体による当該株式等の発行に係る情報(以下「発行情報」という。)の公表前に、国内外の機関投資家に対して当該株式等に係る需要動向の調査(以下「プレ・ヒアリング」という。)を行うことがある。このようなプレ・ヒアリングの過程で発行情報を入手した海外の投資家が、発行情報の公表前に、当該株式等の発行体に係る上場普通株式を売り付けている事例が認められた。</p> <p>当委員会では、このような事例が認められた場合、内部者取引を行ったものと認められる海外投資家に関して、海外当局に対する調査依頼を行っており、これを受けて、海外当局において当該投資家に対する処分が行われるに至っている。</p> <p>他方で、証券会社の検査の結果、①プレ・ヒアリングの過程で発行情報を外部に伝達することに関して手続規程を整備していない②発行情報を外部に伝達する際に、その対象者に対し、伝達される発行情報が公表前の重要事実該当することを伝達するなどの適切な注意喚起を行っていないことが疑われる③プレ・ヒアリングをいつ、誰に対して、どのような方法で実施し、その過程でどのような発行情報を外部の者に伝達したかについて記録を残していない会社が存することが認められた。このような情報管理体制を放置することは内部者取引を誘発しかねない。</p> <p>については、証券会社がプレ・ヒアリング等において公表前の発行情報等を外部に伝達する行為により内部者取引が誘発されることを防止し、もって証券取引の公正を確保するため適切な措置を講ずるよう建議した。</p>	<p>金融庁は、行為規制府令を改正し、プレ・ヒアリングにおける情報提供行為を禁止するとともに(平成18年11月1日施行)、日本証券業協会においても「協会会員におけるプレ・ヒアリングの適正な取扱いについて」(理事会決議)を制定し、具体的な取扱いが規定された(平成19年1月4日施行)。</p>
<p>平成18年 4月21日</p>	<p>上場会社が重要な事項につき虚偽の記載のある有価証券報告書を提出していた犯則事件に関し、当該上場会社の会計監査を担当した監査法人の公認会計士が、当該犯則行為に深く関与していた事例が複数認められた。</p> <p>当委員会は、これらの事例について、当該上場会社及び同社の役員に加え当該公認会計士についても共同正犯(刑法第60条)として証取法第226条の規定に基づき告発した。</p> <p>一方で、現行の証券取引法には、虚偽有価証券報告書を提出した上場会社の役員らと共謀した公認会計士が所属する監査法人の刑事責任を追及できる規定はないなど、上記公認会計士が所属していた監査法人に対しては、刑事責任を追及することは困難である。</p> <p>しかし、当該上場会社との監査契約の当事者は監査法人であり、また、監査法人は、所属する公認会計士による業務の公正かつ的確な遂行のため、業務管理体制を整備しなければならない立場にある。</p>	<p>平成18年12月22日の金融審議会公認会計士制度部会報告において、「(行政処分の)処分類型の多様化を図っていくことが適当である。」とした一方、刑事罰の導入については、「非違の抑止等の観点から、監査法人に対する刑事罰を導入する可能性が否定されるべきではなく一つの検討課題であるが、非違事例等に対しては、課徴金制度の導入をはじめとする行政的な手法の多様化等により対応することをまず求めていくこと</p>

第1節
第2節
第3節
第4節
第5節
第6節
第7節
3-8
第9節
第10節
第11節

第1節	<p>公認会計士法上、監査法人の社員が虚偽又は不当な証明をした場合に、監査法人に対して行政処分を行うことが可能であり、また監査法人の社員は民事上の責任も負うこととされているが、監査法人による厳正な監査を確保していく観点から、民事・行政責任のほか刑事責任を含めた監査法人の責任のあり方について総合的に検討を行い、必要かつ適切な措置を講ずるよう建議した。</p>	<p>が考えられる」と示されており、今後とも引き続き十分な検討を行っていくこととされた。</p> <p>また、公認会計士・監査法人に対し違反行為を適切に抑止する観点から、利得相当額を基準とする課徴金を賦課する内容等が盛り込まれた「公認会計士法の一部を改正する法律」が平成19年6月20日成立した(平成20年4月1日施行)。</p>	
第2節			
第3節			
第4節			
第5節	平成19年2月16日	<p>証券会社の検査の結果、①主幹事会社が、新規上場・公募増資を予定している発行体の業績の見通しについて適切な審査を行っていないものと認められる事例、②主幹事会社が、上場会社による公募増資において発行体の財政状態、経営成績等について何ら引受審査を行っていない事例が認められた。</p> <p>株券等の募集・売出しに際して引受けを行おうとする証券会社には、発行体の財政状態、経営成績、業績の見通し等の厳正な審査を通じて、投資者が当該募集・売出しについて適切な投資判断をなし得る状況を確保するとともに、投資者が不測の損害を被ることを未然に防止する役割が期待されているところ、証券会社がこのような引受審査を適切かつ十分に実施することが確保されるよう建議した。</p>	<p>金融庁は有価証券の元引受を行う証券会社が、当該有価証券の発行者の財政状態、経営成績その他引受けの適否の判断に資する事項について、適切な審査を行うべき旨を規定する内容が盛り込まれた「金商業等府令」を制定した(平成19年9月30日施行)。</p>
第6節			
第7節			
3-8			
第9節	平成19年2月16日	<p>証券会社の検査の結果、証券会社のトレーダーが、東京証券取引所における東証株価指数先物取引のある限月の売買取引(以下「本件TOPIX先物取引」という。)において、同一委託者による同一指数での買付注文と売付注文とを対当させることにより、権利の移転を目的としない取引を大量かつ反復継続的に成立させ(以下、このようにして成立した取引を「本件仮装取引」という。)、その結果、当日の本件TOPIX先物取引の約定指数の出来高加重平均値(いわゆる「市場VWAP」)を当該トレーダーに有利な方向に変動させるとともに、当日公表された本件TOPIX先物取引の出来高が、本件仮装取引に対応する枚数分増加するという事態を生じさせていた事例が認められた。</p> <p>市場VWAPは、取引関係者において広く参照されている数値であり、当該数値を実勢を反映しない数値とする取引は、当該数値に基づいて行われる市場内・外における他の取引の内容を歪めさせ得るものである。また、仮装取引により、その対象とされた取引の出来高を現実の需給に基づかない取引によって増加させる行為は、出来高を参照しつつ投資判断を行う市場関係者の投資判断を誤らせ得るものである。</p> <p>については、証券会社が市場VWAP、あるいは、出来高といった市場指標を実勢を反映しないものに歪めさせる取引を</p>	<p>金融庁は証券会社が市場VWAP、あるいは、出来高といった市場指標を変動させる目的で仮装取引を行うこと、及び、これらの取引を受託することを禁止・規制するべき旨を規定する内容が盛り込まれた「金商業等府令」を制定した(平成19年9月30日施行)。</p>
第10節			
第11節			

	<p>行うこと及び証券会社がこれらの取引を受託することが規制されるよう建議した。</p>	
平成19年 2月16日	<p>平成18年証券取引法改正においては、罰則の見直しが行われ、虚偽有価証券報告書等の提出(第24条第1項ほか)、不公正取引(第157条)、風説の流布・偽計等(第158条)、及び相場操縦行為等(第159条)に係る懲役刑が5年以下から10年以下に引き上げられている。</p> <p>これに伴い、これらの罪に係る公訴時効については、刑事訴訟法第250条の規定によって5年から7年へと延長されている。</p> <p>一方、証券取引法第188条に定める証券会社等の業務に関する書類(以下「法定帳簿」という。)については、保存期間も含め具体的には証券会社に関する内閣府令第60条に規定されているところであるが、そのうち注文伝票については保存期間が5年とされているところであり、5年から7年へと延長された公訴時効に対応したものとなっていない。</p> <p>そのため、法定帳簿の保存期間につき、公訴時効の延長も勘案しつつ、適切に見直すよう建議した。</p>	<p>金融庁は虚偽の有価証券報告書等の提出等の罪について、公訴時効が延長されたことに伴い、注文伝票の保存期間(5年)と公訴時効(最大7年)との整合性が図られる内容が盛り込まれた「金商業等府令」を制定した(平成19年9月30日施行)。</p>
平成21年 4月24日	<p>外国為替証拠金取引を取り扱う金商業者に対する重点検査の結果、カバー取引先への預託によって顧客からの保証金が管理される場合でありながら、顧客からの保証金の額を把握しておらず、自己の固有財産と顧客の財産を適切に区分管理していない事例が多く認められた。</p> <p>これらの中には、①顧客から預託を受けた保証金が、カバー取引先から引き出され、不当に流用されていた、②カバー取引先に預託していた顧客の保証金を基に行う自己勘定取引を繰り返した結果、外国為替相場の急変により損失を拡大させ破綻し、顧客に損害を被らせた、といった事例が認められた。</p> <p>したがって、外国為替証拠金取引を取り扱う金商業者の区分管理について、保証金が金銭である場合の管理方法を金銭信託に限る等、適切な措置を講ずるよう建議した。</p>	<p>金融庁は、「金商業等府令」を改正し、外国為替証拠金取引の区分管理の方法を金銭信託に一本化する旨を規定した(平成21年8月1日施行)。</p>
平成21年 4月24日	<p>ロスカットルールとは、保証金に対して損失が一定割合以上となった際には、自動的に反対取引により決済するルールであるが、当該ルールが機能しない場合には、顧客に不測の損害を与えるばかりか、業者の財務体質を悪化させ、最悪の場合には業者が破綻して顧客全体にも著しい損害を与えかねないような問題を含むことから、外国為替証拠金取引に係るロスカットルールの適切な運用は極めて重要である。</p> <p>外国為替証拠金取引を取り扱う金商業者に対する重点検査の結果、①ロスカットルールを設けていなかったことから、顧客の損失を拡大させた、②外国為替証拠金取引に係る約款上、ロスカットルールを定めていたにもかかわらず、顧客の要請に応じて追加保証金の入金を猶予していた、といった事例が認められた。</p> <p>したがって、外国為替証拠金取引を取り扱う金商業者に対し、ロスカットルールの制定を義務付ける等、適切な措置を講ずるよう建議した。</p>	<p>金融庁は、「金商業等府令」を改正し、金商業者に外国為替証拠金取引に係るロスカット・ルールの整備・遵守を義務付ける旨を規定した(平成21年8月1日施行)。</p>

第1節
第2節
第3節
第4節
第5節
第6節
第7節
3-8
第9節
第10節
第11節

<p>第1節 第2節 第3節 第4節 第5節 第6節 第7節 3-8 第9節 第10節 第11節</p>	<p>平成21年 4月24日</p> <p>平成21年 4月24日</p> <p>平成22年 10月19日</p>	<p>外国為替証拠金取引を取り扱う金商業者においては、顧客がその入金した保証金を上回る多額の取引を行うことができるという外国為替証拠金取引の特性等から、適切なりスク管理態勢の構築が極めて重要である。</p> <p>外国為替証拠金取引を取り扱う金商業者に対する重点検査の結果、為替相場の急変時に適切な対応が取られていない事例が認められた。</p> <p>現行法上、外国為替証拠金取引の保証金についての規制はなく、外国為替証拠金取引を取り扱う金商業者が自由にレバレッジを設計しているところであるが、いわゆる高レバレッジの商品については、僅かな為替変動であっても保証金不足が生じ、顧客に不測の損害を与えるばかりか、業者の財務体質を悪化させるおそれがある。</p> <p>したがって、外国為替証拠金取引を取り扱う金商業者に対し、為替変動を勘案した水準の保証金の預託を受けることを義務付ける等、適切な措置を講ずるよう建議した。</p> <p>金融商品取引業の登録にあたり、その適格性を判断するためには、登録申請時に提出する書類は極めて重要である。</p> <p>外国為替証拠金取引を取り扱う金商業者に対する重点検査の結果、虚偽の記載をした最終の貸借対照表及び損益計算書を作成したほか、純財産額を算出した書面及び自己資本規制比率を算出した書面についても虚偽の記載をし、登録拒否要件に該当しないものとして登録申請を行い、登録を受けていた事例が認められた。</p> <p>したがって、金融商品取引業の登録にあたり、申請書類に記載された純財産額及び自己資本規制比率等の数値が虚偽でないことを裏付ける疎明資料等を提供させる等、適切な措置を講ずるよう建議した。</p> <p>集団投資スキーム(以下「ファンド」という。)の出資持分の販売を行う業者(以下「販売業者」という。)に対する集中的な検査において、出資又は拠出を受けた金銭(以下「出資金」という。)を主として有価証券又はデリバティブ取引に対する投資以外の事業に投資するファンド(以下「事業型ファンド」という。)について、</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 出資金とファンドの運用業者の固有財産を同一の口座で混在させているもの、 ② 出資金をファンドの運用業者の運転資金等に流用するもの、 <p>など、ファンドの運用業者において分別管理を適切に行っていないにもかかわらず、販売業者がファンドの出資持分の販売・勧誘を行っている状況が多く認められた。その中には、出資金の流用により投資者に被害が生じている事例も認められている。</p> <p>また、このような状況の下においては、投資者に対して、重要な投資判断材料であるファンドの運用業者の具体的な分別管理の内容について、十分な情報提供がなされていない。</p> <p>したがって、こうした状況に鑑みれば、事業型ファンドに係る投資者保護の一層の徹底を図るため、出資金の分別管</p>	<p>金融庁は、「金商業等府令」を改正し、1日の為替の価格変動をカバーできる水準を証拠金として確保することを基本として、個人顧客を相手方とする外国為替証拠金取引等について、取引所取引・店頭取引共通の規制として、想定元本の4%以上の証拠金の預託を受けずに業者が取引を行うことを禁止する旨を規定した(平成22年8月1日施行)。</p> <p>金融庁は、「金融商品取引業者等向けの総合的な監督指針」を改正し、新規に第一種金融商品取引業の登録申請を受けた場合の留意事項として、登録拒否要件等に該当しないかを確認するため、疎明資料の提出を求める旨を明確化した(平成21年8月1日発出)。</p> <p>金融庁は、「金商業等府令」を改正し、事業型ファンドに係る出資持分の販売に関する契約締結前交付書面の記載事項に次の内容を追加した(平成23年4月1日施行)。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① ファンド毎の出資金の具体的な預託先、支店名、口座名義及び口座番号等。 ② 分別管理の実施状況及びその確認を行った方法。
--	---	---	--

	<p>理の徹底及び投資者に対する重要な投資判断材料の提供の観点から、事業型ファンド販売の契約締結前交付書面における分別管理に関する記載事項を拡充するよう建議した。</p>	
<p>平成23年 2月8日</p>	<p>投資助言・代理業者に対する集中的な検査において、</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 投資助言・代理業者自らが無登録業務を行っている状況 ② 無登録業者に対する名義貸し等 ③ 顧客に対する情報提供が不適切な状況(著しく事実に相違する表示のある広告、契約締結前交付書面の未交付等) ④ 基本的な帳簿書類の作成・管理が不適切な状況(法定帳簿の未作成・未保存、虚偽内容を記載した事業報告書の提出等) <p>など、多数の法令違反事例や不適切事例が認められた。</p> <p>これらの発生原因をみると、ほとんどすべての事例において、役職員の基本的な法令の知識や法令遵守意識の著しい欠如等により、自己の営業上の利益のみを優先した業務運営が行われているという状況が認められた。</p> <p>こうした状況に鑑みれば、投資助言・代理業者に係る投資者保護の一層の徹底を図るため、投資助言・代理業に関する基本的な法令の知識や法令遵守意識が欠如しているなど業務を適確に遂行するに足りる役職員が確保されていない場合に登録を拒否できるよう、他の業種と同様に、投資助言・代理業の登録拒否事由に人的構成要件を追加するよう建議した。</p> <p>なお、平成22年12月14日の犯罪対策閣僚会議に報告された暴力団取締り等総合対策に関するワーキングチームによる「企業活動からの暴力団排除の取組について」において、各府省は業の主体から暴力団等を排除する対策の充実に努めることとされているところ、登録拒否事由に人的構成要件を追加することにより、投資助言・代理業者についても、こうした対策の充実が図られるものと考えられる。</p>	<p>金融庁は、投資助言・代理業者の登録申請に当たり、業務を適確に遂行するに足りる役職員が確保されていない場合に登録を拒否できるよう、投資助言・代理業の登録拒否事由に人的構成要件を追加する金商法の改正(改正法公布後1年以内に施行)を含む「資本市場及び金融業の基盤強化のための金融商品取引法等の一部を改正する法律」案を国会に提出した。同法は、平成23年5月25日に公布された(同法の該当部分は平成24年4月1日から施行された。)</p>
<p>平成23年 12月20日</p>	<p>不公正取引事案の調査において、「金商業者等」に該当しない者が、顧客等の計算において不公正取引を行った疑いがある事例が認められた。</p> <p>現行の制度では、顧客等の計算において不公正取引を行った者(以下「違反者」という。)に係る課徴金については、課徴金の計算規定の適用が、違反者が金商法の「金商業者等」である場合に限られていることから、違反者が対価を得ているにもかかわらず課徴金を課すことができない。</p> <p>したがって、違反行為の抑止の観点から、「金商業者等」に該当しない者が、他人の計算において不公正取引を行い、対価を得ている場合においても、課徴金を課すことができるようにする必要がある。</p>	<p>金融庁は、「金商業者等」に該当しない者が、他人の計算において不公正取引を行い、対価を得ている場合においても、課徴金を課すことができることとする金商法の改正(改正法公布後1年以内に施行)を含む「金融商品取引法等の一部を改正する法律」案を国会に提出した。同法は、平成24年9月12日に公布された(同法の該当部分は平成25年9月6日から施行された。)</p>

第1節
第2節
第3節
第4節
第5節
第6節
第7節
3-8
第9節
第10節
第11節

第1節

第2節

第3節

第4節

第5節

第6節

第7節

3-8

第9節

第10節

第11節

<p>平成25年 3月29日</p>	<p>信用格付業者に対する検査において、社内で決定・付与された信用格付を提供し又は閲覧に供する行為(以下「公表等」という。)を行う際に、誤って異なる信用格付を公表等している事例が認められた。これは、信用格付を利用する投資者の投資判断を歪める状況を生み出すとともに、信用格付業者に対する信用失墜にもつながる重大な問題である。</p> <p>このように、信用格付業者においては、信用格付の付与に係る業務を的確に実施することが求められると同時に、付与した信用格付の公表等を的確に行うことも重要な業務であり、その公表等にあたっては当然に正確性が求められるものである。しかし、現行の制度では、信用格付業者に対して、信用格付の公表等に係る正確性の確保を直接求める制度になっていない。</p> <p>したがって、信用格付を利用する投資者の保護及び金融・資本市場において重要な役割を担う信用格付業者の信頼性確保の観点から、信用格付業者が信用格付の公表等を行う際にその正確性の確保を直接求める制度の整備を行う必要がある。</p>	<p>金融庁は、「金商業等府令」を改正し、信用格付業者が整備を求められる業務管理体制の一環として、信用格付の公表等に係る正確性を確保するための体制を規定した(平成25年9月2日施行)。</p>
<p>平成26年 4月18日</p>	<p>集団投資スキーム(以下「ファンド」という。)のうち適格機関投資家等(1名以上の適格機関投資家及び49名以下の適格機関投資家以外の者)を出資者とするもの(いわゆる「プロ向けファンド」)の販売・投資運用を行う特例業務届出者については、これまでの検査において、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・顧客に対する虚偽の告知 ・適格機関投資家等特例業務の要件を満たさずに行った登録が必要となるファンドの販売・投資運用 ・出資金の流用・使途不明 <p>など、多数の金商法違反事例や一般投資家に被害が生じている悪質な事例が認められた。</p> <p>また、その中には、出資金を毀損させている状態の中、その後も金商法違反行為を行う蓋然性が高く、裁判所への禁止・停止命令の申立てに至ったものもある。</p> <p>したがって、こうした状況に鑑みれば、ファンドに係る投資者保護の一層の徹底を図る観点から、適格機関投資家等特例業務に関する特例について、出資者に係る要件を厳格化する等、一般投資家の被害の発生等を防止するための適切な措置を講ずる必要がある。</p>	<p>金融庁は、プロ向けファンドの販売・運用を行う者に係る欠格事由の導入、契約締結前の書面公布や適合性原則の遵守等の行為規制の導入、問題業者への監督上の処分や罰則の引上げ、プロ向けファンドへの出資者の範囲の見直し等を含む「金融商品取引法の一部を改正する法律」案を国会に提出した。同法は、平成27年6月3日に公布、平成28年3月1日から施行された。</p>
<p>平成30年 12月7日</p>	<p>金銭の貸付を出資対象事業とする集団投資スキーム持分(以下「貸付型ファンド」という。)を販売する業者に対する検査において、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資金使途等についての虚偽表示 ・貸付先、担保等についての誤解表示 ・貸付先がファンドからの借入を返済することが困難な財務の状況にあることを認識しながら募集を継続 <p>など、多数の金商法違反事例や投資者被害が生じている悪質な事例が認められた。</p> <p>これらの事例が生じた背景には、貸付型ファンドを販売する業者の法令等遵守態勢が不十分であったことに加え、貸付型ファンドの投資家(資金の出し手)に対し、貸付先(資金の借り手)に関する情報が十分に提供されていないこともあ</p>	<p>金融庁は、貸金業法に係る法令適用事前確認手続における回答書において、ファンド事業者が、匿名化・複数化とは別の方策(①借り手が法人であり、②事業スキームは商法上の匿名組合契約によるものとし、③投資家と借り手が接触を禁止する措置を図っている場合)により、いわゆる融資型クラウドファンディングを行う場</p>

	<p>る。当該情報は、投資家が出資金の回収可能性を判断する上で重要な情報であるものの、貸金業登録に係る制度の運用上との関係から、現状では貸付先の特定につながる情報の明示を控えた運用となっている。</p> <p>(注)投資家の貸金業登録の要否を判断する上で、借り手を特定することができる情報が明示されないこと(匿名化)と、複数の借り手に対して資金を供給するスキームであること(複数化)が考慮の一要素とされている。</p> <p>したがって、こうした投資家への情報提供の状況に鑑みれば、貸付型ファンドに係る投資者保護の一層の徹底を図る観点から、投資家がより適切な投資判断を行うための情報提供や説明内容の拡充などの適切な措置を講ずる必要がある。</p> <p>(参考)「規制改革実施計画」(平成30年6月15日閣議決定)においても、「匿名化・複数化」と併存する運用上の新たな方策の検討等が掲げられている。</p>	<p>合には、投資家の行為については、貸金業法第2条第1項に規定する金銭の貸付けには該当せず、当該投資家は、同項に規定する貸金業者に該当しないものとする旨の回答を行い(平成31年3月18日)、投資家に対し貸付先に係る情報提供が可能であることが明確化された。また、日本貸金業協会と第二種金融商品取引業協会においては、令和元年5月、貸付型ファンドにおける情報提供等の実務対応の留意点等について「貸付型ファンドに関するQ&A」を公表した。</p>
<p>平成31年 2月26日</p>	<p>高度情報化の進展に伴い、近年コンピュータを利用した犯罪行為が増加を続けており、こうした事態に適切に対処するため、犯則調査においても、電磁的記録等の証拠収集・分析を行う必要性が高まっている。</p> <p>しかし、金商法には、刑事訴訟法、国税通則法等と同様の電磁的記録に係る差押えの規定が導入されていない。</p> <p>こうした状況に鑑みれば、適時・的確な証拠収集・分析手続を可能とする観点から、金商法に必要な規定を整備する等、適切な措置を講ずる必要がある。</p>	<p>金融庁は、一定の電磁的記録に関する差押えその他の電磁的記録に係る証拠収集手続等を整備することとする金商法の改正を含む「情報通信技術の進展に伴う金融取引の多様化に対応するための資金決済に関する法律等の一部を改正する法律」案を国会に提出した。同法は、令和元年6月7日に公布、令和2年5月1日から施行された。</p>
<p>令和4年 6月21日</p>	<p>合同会社制度は、本来、創業段階のベンチャー企業など少人数による事業を行うための会社に適した会社類型として創設されており、不特定多数の者に社員権を取得させることを念頭に置かれたものではない。</p> <p>しかし、近年、事業実態が不透明な合同会社が、その業務を必ずしも把握していない多数の従業員(使用人)を通じて、多数の投資家に対し、当該合同会社の社員権に対する出資と称して、不適切な投資勧誘を行っているという外部からの相談や苦情が多数寄せられており、証券監視委の調査の過程においても、そのような不適切な投資勧誘が認められている。</p> <p>(注)勧誘は、電話やインターネット、投資セミナー等様々な手段が用いられており、投資者の年齢層も高齢者から若年層まで幅広くなっている。高利回りを謳った勧誘に応じた結果、当該勧誘者と連絡が取れなくなる事例、勧誘時に謳われていた利回りで運用されず、投資した資金自体も回収されない事例などが認められるほか、投資対象や</p>	<p>金融庁は、合同会社等の従業員(使用人)による社員権の取得勧誘の適正化を図るため、「金融商品取引法第二条に規定する定義に関する内閣府令の一部を改正する内閣府令」を公布した(令和4年9月12日公布、同年10月3日施行)。</p>

第1節
第2節
第3節
第4節
第5節
第6節
第7節
3-8
第9節
第10節
第11節

第1節

第2節

第3節

第4節

第5節

第6節

第7節

3-8

第9節

第10節

第11節

契約内容を理解しないまま契約した旨の相談も多数寄せられている。

証券監視委では、金融商品取引法違反の疑いがある場合、金融商品取引法第187条の規定に基づく調査を行い、同法により金融商品取引業の登録が必要な行為が認められた場合等同法違反が認められ、同法第192条所定の要件を充たす場合には、同条の規定に基づく裁判所への禁止命令等の申立てを行っている。

しかしながら、現行制度では、特定の場合を除き、合同会社の従業員(使用人)による当該合同会社の社員権の取得勧誘は金融商品取引業に該当しないこととなっており、証券監視委の調査権限が及ばず、顧客に説明したとおりの事業が実施されていない疑いがある場合や、適合性の観点で不適切な投資勧誘行為が行われている場合でも、裁判所への停止命令等の申立てを行うことができない状況となっている。

こうした投資者被害の懸念がある事案が認められている状況に鑑みれば、投資者保護を徹底する観点から、合同会社の業務執行社員以外の者(従業員や使用人)による当該合同会社の社員権の取得勧誘について、金融商品取引業の登録が必要な範囲を拡大するなどの適切な措置を講ずる必要がある。

3-9 海外当局との連携

1. 証券監視委による主な摘発等の事例

<課徴金納付命令勧告>

勧告日 (課徴金納付命令決定日)	勧告対象者	違反行為	銘柄名	連携した 主な海外当局
平成27年6月19日 (平成27年7月30日)	株式会社アゴーラ・ホスピ タリティー・グループ	有価証券報 告書等の虚 偽記載	(株)アゴーラ・ホスピ タリティー・グルー プ	—
平成27年6月19日 (平成27年10月8日)	個人	内部者取引	(株)極楽湯	台湾金融監督管理委 員会 (FSC)
平成27年10月23日 (平成28年3月17日)	個人	内部者取引	(株)ゲームオン	韓国金融委員会 (FSC) 韓国金融監督院 (FSS)
平成28年1月29日 (平成28年3月4日)	Evo Investment Advisors Ltd.	相場操縦	(株)ディー・ディー・ エス	米国証券取引委員会 (SEC)
平成28年3月4日 (平成28年5月23日)	Blue Sky Capital Management Pty Ltd	相場操縦	(株)ミクシィ	オーストラリア証券投 資委員会 (ASIC)
平成28年6月15日 (平成28年12月12日)	個人	内部者取引	(株)ゲームオン	韓国金融委員会 (FSC) 韓国金融監督院 (FSS)
平成29年3月17日 (平成30年1月25日)	Caspian Trading Ltd. (Celera Global Ltd.)	相場操縦	(株)江崎グリコ等 合計4銘柄	—
平成29年3月22日 (平成29年6月15日)	Prospect Asset Management, Inc.	内部者取引	(株)トライステージ	米国証券取引委員会 (SEC)
平成29年6月30日 (平成29年9月14日)	個人	内部者取引	サン電子(株)	イスラエル証券庁 (ISA) 英国金融行為規制機 構 (FCA)
平成30年6月26日 (令和2年6月11日)	個人	相場操縦	(株)ココカラファイン	中国証券監督管理委 員会 (CSRC)
令和3年11月5日 (令和4年12月12日)	Evolution Trading Ltd	相場操縦	ヤマハ(株)	英領バージン諸島金 融サービス委員会 (FSC)、中国証券監 督管理委員会 (CSRC)、香港証券先 物委員会 (SFC)、シン ガポール金融管理局 (MAS)
令和3年12月17日 (令和4年4月26日)	個人	内部者取引	(株)リミックスポイン ト	台湾金融監督管理委 員会 (FSC)
令和5年9月8日 (審判手続中)	個人	内部者取引	(株)ZOZO	中国証券監督管理委 員会 (CSRC)
令和5年12月8日 (審判手続中)	個人	相場操縦	大太平洋金属(株)等 合計2銘柄	中国証券監督管理委 員会 (CSRC)、デンマ ーク金融監督庁 (FSA)、カナダ・オンタ リオ証券委員会 (OSC)、カナダ・ブリ ティッシュコロンビア 証券委員会 (BCSC)、 香港証券先物委員会

第
1
節

第
2
節

第
3
節

第
4
節

第
5
節

第
6
節

第
7
節

第
8
節

3-9

第
10
節

第
11
節

				(SFC)、英国金融行為規制機構(FCA)、ハンガリー国立銀行(MNB)、英領ケイマン諸島金融庁(CIMA)
第1節	令和6年3月26日 (審判手続前)	Quadeye Trading LLC	偽計	野村不動産マスターファンド投資法人等 合計6銘柄
第2節				米国証券取引委員会(SEC)、英国金融行為規制機構(FCA)、英領ケイマン諸島金融庁(CIMA)

<行政処分勧告>

勧告日 (行政処分日)	勧告対象者	違反行為	連携した 主な海外当局
平成25年4月26日 (平成25年4月26日)	MRI INTERNATIONAL, INC	<ul style="list-style-type: none"> 顧客からの出資金を他の顧客に対する配当金及び償還金の支払いに流用する行為等 金融商品取引契約の締結又はその勧誘に関して、顧客に対し虚偽のことを告げる行為 虚偽の内容の事業報告書を作成し、関東財務局長に提出する行為 報告徴取命令に対する虚偽の報告 	米国証券取引委員会(SEC)
令和3年1月29日 (令和3年2月3日)	あいグローバル・アセット・マネジメント株式会社	<ul style="list-style-type: none"> 投資信託の受益者のために善良な管理者の注意をもって投資運用業を行っていない状況 	英領ケイマン諸島金融庁(CIMA)、香港証券先物委員会(SFC)、ラブアン金融庁(LFSA)

<裁判所の禁止・停止命令の申立て及び調査結果の公表>

申立日 及び公表日 (発令日)	対象者	違反行為及びその対応	連携した 主な海外当局
平成26年6月6日 (平成26年6月23日)	株式会社UAG及びその役員等2名 (禁止・停止命令の申立て)	<ul style="list-style-type: none"> 株式会社UAG(適格機関投資家等特例業務届出者)による無登録での集団投資スキーム持分の募集又は私募の取扱い 証券監視委は、大阪地方裁判所に対し、当該行為の禁止及び停止を命ずるよう申立てを実施 	香港証券先物委員会(SFC)
平成26年7月3日 (平成26年7月28日)	株式会社Grant及びその役員等3名 (禁止・停止命令の申立て)	<ul style="list-style-type: none"> 株式会社Grant及びその役員等3名(金融商品取引業の登録はない)による無登録で海外ファンド等の募集又は私募の取扱い 証券監視委は、大阪地方裁判所に対し、当該行為の禁止及び停止を命ずるよう申立てを実施 	香港証券先物委員会(SFC)
平成26年9月12日 (平成26年10月22日)	株式会社ESPLUS及びその役員1名 (禁止・停止命令の申立て)	<ul style="list-style-type: none"> 株式会社ESPLUS(金融商品取引業の登録等はない)及びその役員1名による無登録での集団投資スキーム持分の募集又は私募の取扱い 証券監視委は、名古屋地方裁判所に対し、当該行為の禁止及び停止を命ずるよう申立てを実施 	香港証券先物委員会(SFC)

平成27年1月30日	株式会社Money Management Strength (調査結果の公表)	<ul style="list-style-type: none"> 株式会社Money Management Strength (適格機関投資家等特例業務届出者)による顧客に対し虚偽のことを告げる行為及び第二種金融商品取引業に係る無登録営業 証券監視委は、当社に対する調査の結果を公表 	米国証券取引委員会 (SEC)
令和3年9月17日 (令和3年12月8日)	SKY PREMIUM INTERNATIONAL PTE. LTD. (スカイプレミアムインターナショナル社)及びその役員1名 (禁止・停止命令の申立て)	<ul style="list-style-type: none"> SKY PREMIUM INTERNATIONAL PTE. LTD. 及びその役員1名(金融商品取引業の登録等はない)による無登録での投資一任契約の締結の媒介 証券監視委は、東京地方裁判所に対し、当該行為の禁止及び停止を命ずるよう申立てを実施 	シンガポール金融管理局 (MAS) チェコ国立銀行 (CNB) 香港証券先物委員会 (SFC)

< 告発 >

告発日	事件名
平成27年3月24日	株式会社トーマンエレクトロニクス株券に係る内部者取引事件
平成27年6月2日	株式会社ジアース株券に係る内部者取引事件
平成27年6月15日 平成27年7月3日	石山Gateway Holdings株式会社に係る偽計事件及び虚偽有価証券報告書提出事件
平成27年10月23日	オリンパス株式会社に係る虚偽有価証券報告書提出事件(4)
平成28年12月7日	スターホールディングス株式会社株券に係る内部者取引事件
平成29年3月6日 平成29年3月27日	アーツ証券株式会社ほかによる診療報酬債権等流動化債券(レセプト債)に係る偽計事件(1)(2)
平成29年11月21日 平成29年11月27日	株式会社ストリーム株券に係る相場操縦事件(1)(2)
平成31年3月20日	株式会社ソルガム・ジャパン・ホールディングス社に係る虚偽有価証券報告書提出事件
令和3年7月12日	株式会社 Nuts に係る偽計事件
令和4年2月14日	アサヒ衛陶株式会社株券に係る内部者取引事件
令和4年2月24日	テラ株式会社株券に係る内部者取引事件(1)(2)(3)

連携した主な海外当局: シンガポール金融管理局(MAS)、米国証券取引委員会(SEC)等

第1節
第2節
第3節
第4節
第5節
第6節
第7節
第8節
3-9
第10節
第11節

2. 海外当局による摘発事例

<海外当局による処分>

発表日	摘発した海外当局	被処分者(処分)	銘柄名	違反行為
平成16年10月21日	シンガポール金融管理局(MAS)	シンガポール政府投資公社の従業員(制裁金)	(株)三井住友フィナンシャルグループ	内部者取引
平成18年8月1日	英国金融サービス機構(FSA)	英国ヘッジファンドのGLG Partners LP及びその元役員(制裁金)	(株)三井住友フィナンシャルグループ	内部者取引
平成18年12月13日	香港証券先物委員会(SFC)	クレディ・スイス(香港)リミテッドのトレーダー(懲戒処分)	住友軽金属工業(株)	内部者取引
平成23年9月15日	香港証券先物委員会(SFC)	香港の投資運用会社のオアシスマネジメントLLC及びその最高運用責任者(戒告処分、制裁金)	(株)日本航空	相場操縦、不正行為

<海外裁判所の判決>

判決日	原告	判決内容(処分)	違反行為
平成26年10月3日	米国証券取引委員会(SEC)	MRI INTERNATIONAL, INC及び同社代表の違反行為の認定(H27.1.27 不当利得返還、制裁金について言渡)	詐欺
平成30年11月27日	米国司法省(DOJ)	MRI INTERNATIONAL, INC代表への有罪判決(R1.5.23 量刑言渡)	詐欺
令和4年1月5日	米国司法省(DOJ)	MRI INTERNATIONAL, INC日本支店代表及び日本支店ゼネラルマネージャーに係る司法取引手続申立て(R4.4.5 量刑言渡)	詐欺

3-10 講演会等の開催状況

—市場参加者との対話、市場への情報発信強化の取組み—

(1) 講演会等

開催日	対象先	テーマ	
令和5年	4月5日	会計教育研修機構	金融商品取引法及び証券取引等監視委員会の活動状況～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
	4月12日	東海財務局	中期活動方針(第11期:2023年～2025年)～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
	4月13日	一橋大学大学院グローバル金融規制研究フォーラム	中期活動方針(第11期:2023年～2025年)～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
	4月19日	九州財務局、福岡財務支局及び沖縄総合事務局	中期活動方針(第11期:2023年～2025年)～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
	4月20日	関東財務局	中期活動方針(第11期:2023年～2025年)～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
	5月18日	近畿財務局	中期活動方針(第11期:2023年～2025年)～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
	5月24日	北海道財務局、東北財務局及び北陸財務局	中期活動方針(第11期:2023年～2025年)～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
	5月25日	日本投資顧問業協会	中期活動方針(第11期:2023年～2025年)～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
	5月31日	中国財務局及び四国財務局	中期活動方針(第11期:2023年～2025年)～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
	6月1日	日本内部監査協会	中期活動方針(第11期:2023年～2025年)～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
	6月7日	日本公認会計士協会	中期活動方針(第11期:2023年～2025年)～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
	6月8日	消費者教育支援センター	中期活動方針(第11期:2023年～2025年)～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
	6月14日	投資信託協会	中期活動方針(第11期:2023年～2025年)～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
	6月15日	第二種金融商品取引業協会	中期活動方針(第11期:2023年～2025年)～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
	6月21日	日本取引所自主規制法人等	中期活動方針(第11期:2023年～2025年)～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
	6月22日	日本証券業協会	中期活動方針(第11期:2023年～2025年)～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
8月1日	日本証券業協会	財務の健全性等に必要なリスク管理態勢について	

第1節

第2節

第3節

第4節

第5節

第6節

第7節

第8節

第9節

3-10

第11節

第1節	8月23日	日本監査役協会	中期活動方針(第11期:2023年~2025年)~時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために~
第2節	9月13日	日本証券アナリスト協会	中期活動方針(第11期:2023年~2025年)~時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために~
第3節	9月13日	Nasdaq Surveillance Conference 2023	HARNESSING THE POWER OF MARKET SURVEILLANCE: A PERSPECTIVE FROM THE SESC JAPAN
第4節	9月27日	日本弁護士連合会 司法制度調査会	中期活動方針(第11期:2023年~2025年)~時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために~
第5節	10月2日	日本証券業協会	最近における証券取引等監視委員会の検査状況について
第6節	10月2日	日本証券業協会	内部管理態勢整備の留意点
第7節	10月11日	第14回 ACFE JAPAN カンファレンス	市場の公正性・透明性の確保と投資者保護の実現に向けて
第8節	10月26日	第二種金融商品取引業協会	「令和5事務年度 証券モニタリング基本方針」と最近の指摘事例について
第9節	10月27日	第一東京弁護士会 総合法律研究所 会社法研究部会	中期活動方針(第11期:2023年~2025年)~時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために~
第10節	10月30日	日本投資顧問業協会	最近における証券取引等監視委員会の検査状況について
第11節	11月8日	日本取引所自主規制法人	最近の証券取引等監視委員会の検査指摘事例について
3-10	11月15日	日本不動産鑑定士協会連合会	証券検査を巡る最近の動向について
第12節	11月27日	金融先物取引業協会	最近における証券取引等監視委員会の検査状況について
第13節	11月27日	日本取引所自主規制法人	最近における証券取引等監視委員会の検査状況について
第14節	12月5日	国際銀行協会	STRATEGY & POLICY 2023-2025 AND MONITORING PRIORITIES FOR SECURITIES BUSINESSES (JULY 2023 - JUNE 2024)
令和6年	1月26日	日本証券経済研究所	高速取引の動向~取引特性やスピード競争の現状について
	1月31日	投資信託協会	金融分野のサイバーセキュリティについて
	2月5日	日本証券業協会	内部管理態勢整備の留意点
	2月5日	日本証券業協会	システムリスク管理態勢について

2月15日	日本取引所自主規制法人 上場会社セミナー	資本市場の公正性・透明性と上場会社経営者の役割
2月22日	第二種金融商品取引業協会	サイバー脅威と金融に求められるサイバーセキュリティ
2月26日	投資信託協会	最近における証券取引等監視委員会の検査状況について
2月28日	金融先物取引業協会	最近における証券取引等監視委員会の検査状況について
3月13日	会計教育研修機構	金融商品取引法及び証券取引等監視委員会の活動状況 ～時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために～
3月28日	国際銀行協会	最近における証券取引等監視委員会の検査状況について

第1節

第2節

第3節

第4節

第5節

第6節

第7節

第8節

第9節

3-10

第11節

(2) 意見交換会

開催日	対象先	テーマ	
【対象:自主規制機関等(14件)】			
(金融商品取引所及び自主規制法人)			
令和5年	6月6日	日本取引所自主規制法人	市場規律の強化に向けた意見交換
	10月3日	日本取引所自主規制法人	活動状況を踏まえた意見交換
	11月30日	日本取引所自主規制法人	市場規律の強化に向けた意見交換
	12月12日	札幌証券取引所	活動状況を踏まえた意見交換
令和6年	1月16日	福岡証券取引所	活動状況を踏まえた意見交換
	2月6日	名古屋証券取引所	活動状況を踏まえた意見交換
(金融商品取引業協会等)			
令和5年	8月25日	証券・金融商品あっせん相談センター	活動状況を踏まえた意見交換
	9月5日	日本証券業協会	活動状況を踏まえた意見交換
	9月15日	金融先物取引業協会	活動状況を踏まえた意見交換
	10月17日	投資信託協会	活動状況を踏まえた意見交換
	10月17日	日本投資顧問業協会	活動状況を踏まえた意見交換
	10月24日	第二種金融商品取引業協会	活動状況を踏まえた意見交換
	10月31日	証券保管振替機構	活動状況を踏まえた意見交換
令和6年	1月29日	日本証券業協会	市場規律の強化に向けた意見交換

第1節

第2節

第3節

第4節

第5節

第6節

第7節

第8節

第9節

3-10

第11節

3-11 各種広報媒体への寄稿

ー市場参加者との対話、市場への情報発信強化の取組みー

掲載日		媒体	テーマ
令和5年	4月3日	日本取引所グループ メールマガジン	株式会社N・フィールド社員から伝達を受けた者による内部者取引及び当該社員による公開買付けの実施に関する事実に係る伝達行為に対する課徴金納付命令の勧告について Mt.light (MTL)の代表者1名による金融商品取引法違反行為に係る裁判所への禁止及び停止命令発出の申立てについて 総合メディカルホールディングス株式会社株券及び株式会社スペースバリューホールディングス株券に係る内部者取引事件の告発について
	4月24日	日本取引所グループ メールマガジン	JESCOホールディングス株式ほか1銘柄に係る相場操縦に対する課徴金納付命令の勧告について 株式会社BuySell Technologiesとの契約締結交渉者の代理人による内部者取引違反行為及び取引推奨違反行為に対する課徴金納付命令の勧告について
	7月3日	日本取引所グループ メールマガジン	株式会社東京衡機における有価証券報告書等の虚偽記載に係る課徴金納付命令勧告について 株式会社ユニオン証券アドバイザーズに対する検査結果に基づく勧告について ロンナル・フォレックス株式会社に対する検査結果に基づく勧告について 株式会社旅工房における有価証券報告書等の虚偽記載に係る課徴金納付命令勧告について 株式会社アイ・アールジャパンホールディングス株券に係る取引推奨事件の告発について
	7月15日	会計・監査ジャーナル	時代の変化に対応し、信頼される公正・透明な市場のために
	7月31日	消費者法ニュース	証券取引等監視委員会による無登録業者等に対する取組みについて
	8月7日	日本取引所グループ メールマガジン	ちばぎん証券株式会社、株式会社千葉銀行及び株式会社武蔵野銀行に対する検査結果に基づく勧告について 証券取引等監視委員会の活動状況の公表について 東都水産株式会社役員から伝達を受けた者による内部者取引に対する課徴金納付命令の勧告について セルソース株式会社社員による内部者取引に対する課徴金納付命令の勧告について 不正取引に関する課徴金事例集の公表について
	9月25日	日本証券業協会HP 証券業報	「証券モニタリング基本方針」及び「証券モニタリング概要・事例集」の公表について 「令和4事務年度 開示検査事例集」の公表について
	9月25日	日本取引所グループ メールマガジン	「令和5事務年度 証券モニタリング基本方針」について 株式会社ディー・ディー・エスが提出した虚偽開示書類に係る特定関与行為に対する課徴金納付命令勧告について
	10月16日	週刊経営財務	「令和4事務年度 開示検査事例集」の公表について

第1節

第2節

第3節

第4節

第5節

第6節

第7節

第8節

第9節

第10節

3-11

第1節 第2節 第3節 第4節 第5節	10月25日	日本証券業協会HP 証券業報	「金融商品取引法における課徴金事例集 ～不正取引編～」の公表について
	10月25日	月刊監査役	「令和4事務年度 開示検査事例集」の公表について
	11月13日	日本取引所グループ メールマガジン	「令和4事務年度 開示検査事例集」の公表について 株式会社ZOZO社員から伝達を受けた海外居住者による内部者取引に対する課徴金納付命令の勧告について 三木証券株式会社に対する検査結果に基づく勧告について ファルテック株式ほか1銘柄に係る相場操縦に対する課徴金納付命令の勧告について
	11月15日	会計・監査ジャーナル	「令和4事務年度 開示検査事例集」の公表について
	11月25日	月刊監査役	「金融商品取引法における課徴金事例集 ～不正取引編～」の公表について
	12月15日	会計・監査ジャーナル	「金融商品取引法における課徴金事例集 ～不正取引編～」の公表について
	令和6年	1月4日	日本取引所グループ メールマガジン
2月13日		日本取引所グループ メールマガジン	株式会社フジオフードグループ本社における有価証券報告書等の虚偽記載に係る課徴金納付命令勧告について 株式会社ストックジャパンに対する検査結果に基づく勧告について 海外に居住する個人による大平洋金属株式会社株式ほか1銘柄に係る相場操縦に対する課徴金納付命令の勧告について 株式会社アマナにおける有価証券報告書等の虚偽記載に係る課徴金納付命令勧告について

第1節
第2節
第3節
第4節
第5節
第6節
第7節
第8節
第9節
第10節

3-11

市場へのメッセージ

掲載日		テーマ
令和5年	4月18日	JESCOホールディングス株式ほか1銘柄に係る相場操縦に対する課徴金納付命令の勧告について 株式会社BuySell Technologiesとの契約締結交渉者の代理人による内部者取引違反行為及び取引推奨違反行為に対する課徴金納付命令の勧告について
	6月26日	株式会社東京衡機における有価証券報告書等の虚偽記載に係る課徴金納付命令勧告について 株式会社ユニオン証券アドバイザーズに対する検査結果に基づく勧告について ロンナル・フォレックス株式会社に対する検査結果に基づく勧告について 株式会社旅工房における有価証券報告書等の虚偽記載に係る課徴金納付命令勧告について 株式会社アイ・アールジャパンホールディングス株券に係る取引推奨事件の告発について
	8月3日	ちばざん証券株式会社、株式会社千葉銀行及び株式会社武蔵野銀行に対する検査結果に基づく勧告について 証券取引等監視委員会の活動状況の公表について 東都水産株式会社役員から伝達を受けた者による内部者取引に対する課徴金納付命令の勧告について セルソース株式会社社員による内部者取引に対する課徴金納付命令の勧告について 不正取引に関する課徴金事例集の公表について
	9月21日	「令和5事務年度 証券モニタリング基本方針」について 株式会社ディー・ディー・エスが提出した虚偽開示書類に係る特定関与行為に対する課徴金納付命令勧告について
	11月2日	「令和4事務年度 開示検査事例集」の公表について 株式会社ZOZO社員から伝達を受けた海外居住者による内部者取引に対する課徴金納付命令の勧告について 三木証券株式会社に対する検査結果に基づく勧告について ファルテック株式ほか1銘柄に係る相場操縦に対する課徴金納付命令の勧告について
	12月26日	株式会社 EduLab における有価証券報告書等の虚偽記載に係る課徴金納付命令勧告について 株式会社日本製鋼所の子会社との契約締結者2法人の各社員2名及び同子会社との契約締結者からの情報受領者による内部者取引に対する課徴金納付命令の勧告について 株式会社プロルート丸光に係る虚偽有価証券報告書提出事件の告発について S DIVISION HOLDINGS INC.及び株式会社 STEPCAPITALMANAGEMENT 並びにその役員1名による金融商品取引法違反行為に係る裁判所への禁止及び停止命令発出の申立てについて 株式会社プロルート丸光株券に係る風説の流布及び偽計事件の告発について 株式会社エイチームとの契約締結交渉者の社員から伝達を受けた者による内部者取引に対する課徴金納付命令の勧告について 株式会社 SBI 証券に対する検査結果に基づく勧告について
	令和6年	2月6日
3月28日		ITbook ホールディングス株式会社における有価証券報告書等の虚偽記載に係る課徴金納付命令勧告について 株式会社ニチリョク株券に係る相場操縦事件の告発について

第1節

第2節

第3節

第4節

第5節

第6節

第7節

第8節

第9節

第10節

3-11

掲載日		テーマ
		株式会社コンテック役員による公開買付けの実施に関する事実に係る伝達及び取引推奨行為並びに当該役員から伝達を受けた者3名による内部者取引に対する課徴金納付命令の勧告について

第1節

第2節

第3節

第4節

第5節

第6節

第7節

第8節

第9節

第10節

3-11

第4章

情報の受付について

4 情報の受付について

1. 一般投資家等からの情報の受付について

「情報提供窓口」において、皆様からの情報を幅広く受け付けています。

- 粉飾決算(架空売上・架空利益の計上等)に関する情報
- 投資者保護上の問題(著しい高利回りを明示する金融商品等)に関する情報
- 市場における不正取引(インサイダー取引、相場操縦等)に関する情報、など

※ 株式に限らず、デリバティブや債券等に関する情報についても受け付けています。

インターネットでの情報受付(証券監視委ウェブサイト内)

<https://www.fsa.go.jp/sesc/watch/>

電話での情報受付 【受付時間】 平日:午前10時～午後4時 (その他の時間帯等は留守番電話受付)

0570-00-3581(ナビダイヤル)

※ 一部のIP電話等からは 03-3581-9909

郵送での情報受付

〒100-8922 東京都千代田区霞が関3-2-1 中央合同庁舎第7号館

証券取引等監視委員会事務局 市場分析審査課 情報処理係 あて

FAXでの情報受付

FAX(高齢者・障がい者専用):03-3506-6699「証券取引等監視委員会 情報提供窓口」と明記して下さい。

2. 公益通報及び相談窓口について

公益通報者保護法に基づき、外部の労働者の方からの公益通報及び公益通報に準ずる通報(以下「公益通報等」という)を適切に処理するため、公益通報等に係る窓口を設置しています。

《通報対象》

- 金融商品取引法に規定する法令違反行為(犯則行為等も含む。)が生じ、又はまさに生じようとしている場合
- なお、通報内容は、確実な情報やご自身が実際に見聞きした個別・具体的な事実について、それが信ずるに足る相当の理由、証拠等があること など

《通報者の範囲》

- 通報者が通報対象となる事実に関係する事業者には雇用されている労働者であることなど

《通報の対象外》

- 不正の利益を得る目的、他人に損害を加える目的等の通報は対象外

(※) なお、詳細については、証券監視委ウェブサイトをご参照ください。

《公益通報等にあたってのご注意》

公益通報等をされる際には、以下の情報が必要になりますので明記願います。

- (1) 氏名(匿名を希望される場合は情報提供窓口で受け付けています)
- (2) 連絡先(住所、電話番号、メールアドレス等)
- (3) 被通報者(法令違反を行った(行おうとしている)事業者)
- (4) 通報者と被通報者の関係
- (5) 法令違反の具体的事実(法令違反行為が行われた(行われようとしている)内容、年月日、関与者、事実を知った経緯など)

通報受付窓口

※通報は、メール、郵送、FAXのいずれかの方法で受け付けています。

なお、通報にあたっては「公益通報」と明記していただくようお願いいたします。

・電子メール: koueki-tsuho.sesc@fsa.go.jp

・郵送先: 〒100-8922 東京都千代田区霞が関3-2-1 中央合同庁舎第7号館

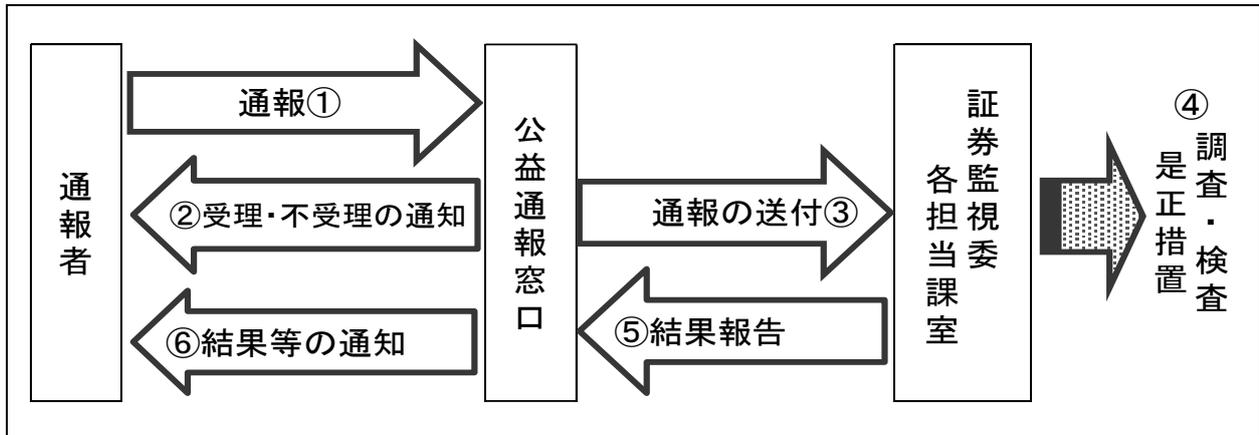
証券取引等監視委員会事務局 公益通報窓口 あて

・FAX(高齢者・障がい者専用): 03-3506-6699 「証券取引等監視委員会 公益通報」と明記して下さい。

事前の相談窓口 【受付時間】 平日:午前10時～午後4時

・03-3581-9854

《通報があった場合の手続きの流れ》



3. 年金運用ホットラインでの情報の受付について

年金運用に係る不正等に関する有用性の高い情報を収集するための専用の窓口「年金運用ホットライン」において、投資一任業者の業務運営の実態等についての情報を受け付けています。

- 投資一任業者における疑わしい運用等の情報
- 企業年金等の投資一任契約の不適切な勧誘、企業年金等への不十分な情報提供に関する情報
- 契約や説明の内容を遵守しない運用に関する情報

電子メールでの情報受付

pension-hotline@fsa.go.jp

電話での情報受付 【受付時間】 平日：午前10時～午後4時

03-3506-6627

郵送での情報受付

〒100-8922 東京都千代田区霞が関3-2-1 中央合同庁舎第7号館

証券取引等監視委員会事務局 市場分析審査課 年金運用ホットライン あて

《ご意見、情報等の連絡先》

郵 送：〒100-8922 東京都千代田区霞が関 3 - 2 - 1

証券取引等監視委員会事務局 総務課

代表電話：03-3506-6000

○本書に対するご意見 総務課調査係 内線 3024

○証券取引等監視委員会ウェブサイト

<https://www.fsa.go.jp/sesc/>

○証券取引等監視委員会 X(旧 Twitter)アカウント

https://x.com/SESC_JAPAN

情報提供窓口からのご案内

☆是非ともお寄せください！

- 粉飾決算（架空売上・架空利益の計上等）
- 投資者保護上の問題（著しい高利回りを明示する金融商品等）
- 市場における不正取引（インサイダー取引、相場操縦等）

粉飾決算

投資詐欺

金融商品の
不適切な勧誘

インサイダー
取引

相場操縦

風説の流布



証券取引等監視委員会 情報提供窓口

インターネット：<https://www.fsa.go.jp/sesc/watch/>

電話：0570-00-3581（ナビダイヤル）

（一部のIP電話等からは03-3581-9909）

FAX（高齢者、障がい者専用）：03-3506-6699

※「証券取引等監視委員会 情報提供窓口」と明記して下さい。

証券取引等監視委員会

〒100-8922 東京都千代田区霞が関3-2-1 中央合同庁舎第7号館